

茨城県笠間市

橋爪遺跡

— 道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査報告書 —

2010

笠間市教育委員会

ティケイトレード株式会社
埋蔵文化財事業部

茨城県笠間市

橋爪遺跡

—道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査報告書—

2010

笠間市教育委員会
トイケイトレード株式会社
埋蔵文化財事業部

序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が大地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は道路改良工事に伴う橋爪遺跡の発掘調査であります。この調査の結果、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代、奈良・平安時代の住居跡が検出されました。特に縄文時代中期のフ拉斯コ状土坑が密集して検出され、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。この報告書を通して郷上の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに関係者に対しまして心より感謝申し上げます。

平成 22 年 9 月

笠間市教育委員会

教育長 飯 島 勇

例 言

- 1 本書は、道路改良工事に伴う橋爪遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は笠間市教育委員会の指導の下、ティケイトレード株式会社が実施した。
- 3 遺跡の所在地・調査面積・発掘調査期間・整理調査期間は、以下の通りである。

所在地	茨城県笠間市橋爪 795 番 2 ほか
調査面積	2,454 m ²
発掘調査期間	平成 21 (2009) 年 11 月 16 日～平成 22 (2010) 年 2 月 27 日
整理調査期間	平成 21 (2009) 年 12 月 10 日～平成 22 (2010) 年 9 月 30 日
- 4 事務局および調査指導は下記の通りである。

事務局	笠間市教育委員会生涯学習課
調査指導	茨城県埋蔵文化財指導員 川崎純徳 笠間市文化財保護審議会委員 能島清光
- 5 現地調査および整理調査は、森本 崇、石井たま子、望月大輔、清水真澄が担当した。
- 6 報告書の編集は、岡安光彦の指示のもと石井、望月、清水が行なった。執筆は、以下のように分担した。

序章～3 章：石井
第 1 章第 1 節：笠間市教育委員会
縄文時代遺構：石井 縄文時代遺物：石井・望月
弥生・古墳・奈良・平安時代遺構：石井・望月・清水 弥生・古墳・奈良・平安時代遺物：清水
なお、奈良・平安時代に属する 048SI については、現地調査は笠間市教育委員会が行い、執筆は笠間市教育委員会 加藤 忠が行なった。
- 7 現場での遺構写真は、森本、石井、望月、清水が行なった。
- 8 遺物の写真撮影は、山内和夫が行なった。
- 9 遺構図は、阿部正男、室伏拓郎、平木 亘が修正・トレースを行なった。
- 10 遺物実測・トレースは、安藤節子、下田陽子、杉本満奈子、高橋利行、西垣真子、野島万里、平本、宮川たき子が行った。
- 11 理化学的分析は、株式会社加速器分析研究所に依頼し、第 4 章第 4 節に掲載した。
- 12 現地調査から整理作業に至るまで、特定非営利活動法人古代遺跡の里・文化遺産ネットワーク（赤塚次郎理事長）のご厚意により、遺構・遺物登録システム『Grigfolder』を利用し作業を進めた。
- 13 縄文土器の観察については、松丸信治氏にご協力をいただき石井が、『縄文土器大観』（小林達夫 1988・89）に基づき行った。
- 14 石材観察については、鈴木素行氏にご協力をいただき望月が行い、判別が困難であった資料については、柴田 徹氏（有限会社考古石材研究所）に石材鑑定を依頼した。
- 15 石器に関して本報告では、磨痕のみが認められる石器を「磨石」、敲打痕のみが認められる石器を「敲石」、両者ともに認められる石器を「磨石・敲石」と表記した。また、敲打による器面の剥落に伴って形成された浅い凹みは「敲打痕」として扱い、磨耗などによって生じる逆円錐形の凹みに限り「凹部」と表記した。さらにこれらを一括する場合には「磨石・敲石類」と表記した。
- 16 図示していない石器に関しても、該当する遺構の本文中に表を掲載した。
- 17 古墳時代の遺物観察については、内山敏行氏にご協力をいただき清水が行なった。
- 18 奈良・平安時代の遺物観察については、土器に関しては佐々木義則氏に、鉄器に関しては津野 仁氏に、ご協力をいただき清水が行なった。
- 19 調査によって得られた資料は、笠間市教育委員会が保管・管理している。

20 調査組織は下記の通りである。

調査機関 テイケイトレード株式会社 墓蔵文化財事業部
代表取締役 荒川健司
調査統括 関安光彦
調査担当者 森本 崇
現場代理人 海野浩幸 前田卓宏
調査員 石井たま子 望月大輔 清水真澄 伊藤千洋
主任技術者 阿部正男 濑川利男

発掘調査の参加者は、下記の通りである。(敬称略・五十音順)

吉木 誠 池口泰弘 石井麻由美 石川 勉 稲見幸子 岩田時彦 海老沢 武 海老沢信雄
大山年明 岡野政雄 小瀬靖夫 小堀静江 小山司農大 小山義則 川又恵美子 飯田宝郎 栗原芳子
桑幡昌幸 斎藤幸一 坂本 國 佐久間順美 佐々木寛一 佐藤武志 佐藤としえ 塩澤 東
篠原一郎 菅谷和子 杉山直正 鈴木とし江 鈴木 浩 関 律子 田村政子 萩野雄介 鶴井みどり
豈島英則 中谷美穂 長谷川とめ子 野村正子 春木珠幸 広水一真 福島枝里子 藤田理子
正木信行 武藤瑞良 横田忠利 米川義広 若月裕志

整理作業の参加者は、下記の通りである。(敬称略・五十音順)

安藤節子 石川一枝 大野節子 小川有子 鹿島照代 鹿志村百合子 加藤嘉枝 加谷 均 古藤百合
小林完士 小松嶺学 小松綠也 斎藤陽子 塩澤 東 下田陽子 杉本満奈子 高橋利行 常盤純一
中澤 功 仲島道史 中山 茂 西垣真子 野島万里 濱田優己 平木 巨 三宅依久子 宮川たき子
水山美智子 宮伏拓郎 山内和夫 山中敏彦 横田ちづ子 吉田淳子 和田ミエ子

21 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々にご指導を賜った。記してここに感謝を申し上げます。

(敬称略・五十音順)

赤塚次郎 (愛知県埋蔵文化財センター、特定非営利活動法人古代館の里・文化遺産ネットワーク理事長)
稻田義弘 (財団法人茨城県教育財団)
内山敏行 (財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター)
佐々木義則 (ひたちなか市埋蔵文化財調査センター)
鈴木素行 (ひたちなか市埋蔵文化財調査センター)
津野 仁 (財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター)
堀木真美子 (愛知県埋蔵文化財センター)
松丸信治 (東京都大田区立郷上博物館)
村山 卓 (立正大学大学院博士課程)

凡 例

- 1 遺構番号は、遺構確認段階で任意に001番から付し、整理段階において遺構番号の末尾に遺構種別に基づいた略号を付し遺構名とした。
- 2 個別に取り上げた遺物は、調査地点内で通し番号を001番から付した。また、必要に応じ遺物を層位に基づきブロック単位で採取した。
- 3 本書、平面図・土層観察・遺物観察表・遺構一覧表に用いた略号は、以下の通りである。
SI—住居跡 SK—土坑 P—小穴 K—攢乱 BL—ブロックおよび、ブロック上げ遺物
- 4 調査区のグリッドは、X=+37544.2365、Y=+41366.5237の交点を起点とした。
- 5 平面図は完掘状況を表し、必要に応じ上端・中端線などを記入している。
- 6 本報告書中の図版の縮尺は、それぞれの図版に記したが、原則として遺構は1/60、遺物は1/3である。
- 7 遺構図版中のトーンの指示は以下の通りである。



- 8 遺物図版中のトーンの指示は以下の通りである。
 赤彩範囲 (Red box) 黒色知見範囲 (Black box)
- 9 遺物の観察表において、残存値は（ ）、推定値< >はで示した。

目 次

序

例言

凡例

目次

第 1 章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査経過.....	1

第 2 章 位置と環境

第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	4

第 3 章 調査の概要

第1節 遺跡の概要.....	6
第2節 調査の方法.....	6
第3節 基本層序.....	7

第 4 章 縄文の遺構と遺物

第1節 A1 区

住居跡	
006SI	13
袋状土坑	
012SK	15
138SK	18
土坑	
009SK・134SK	22
010SK	24

第2節 A2 区

住居跡	
149SI	25
275SI	27
袋状土坑	
054SK	30
058SK	33
064SK	35
065SK	38
078SK	48
095SK	51

102SK	52
105SK	53
156SK	57
159SK	59
190SK	61
203SK	64
230SK	66
249SK	69
256SK	71
267SK	73
274SK	75
291SK	77
302SK	78
304SK	83
306SK	85
323SK	87
土坑	
056SK	89
060SK	90
147SK	92
151SK	94
204SK	95
290SK	97
325SK	98
332SK	100
第3節 その他の遺構の遺物	102
第4節 理化学的分析	110
第5節 縄文時代まとめ	113
第5章 弥生時代の遺構と遺物	
第1節 D区	
049SI	132
236SI	134
第2節 弥生時代まとめ	137
第6章 古墳時代の遺構と遺物	
第1節 A1区	
015SI	138

第2節 A2 区	
040SI	141
第3節 古墳時代まとめ	142
第7章 奈良・平安時代の遺構と遺物	
第1節 A1 区	
003SI	143
第2節 A2 区	
031SI	145
032SI	146
033SI	148
034SI	153
035SI	153
036SI	156
037SI	159
038SI	161
039SI	163
114SI	164
198SI	166
284SI	169
第3節 D 区	
042SI	171
043SI	173
045SI	177
048SI	181
第4節 奈良・平安時代まとめ	185
抄録	
写真図版	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成 19 年 5 月 2 日、笠間市都市建設部都市建設課は、笠間市教育委員会教育長に笠間市橋爪地内に計画している合併市町村幹線道路緊急整備支援事業に伴う道路改良工事における埋蔵文化財の所在の有無とその取扱いについて照会した。開発予定地は、周知の遺跡「橋爪遺跡」が所在することから、平成 19 年 5 月 30 日付けで試掘調査が必要である旨を回答した。試掘調査は、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏に依頼し、平成 20 年 6 月 4 日、平成 21 年 2 月 5・12・13・15 日、4 月 15 日に実施し、遺跡の所在を確認した。

笠間市都市建設部都市建設課は茨城県教育委員会教育長に対して、平成 21 年 4 月 20 日付けで文化財保護法第 94 条第 1 項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、平成 21 年 6 月 23 日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は入札によりティケイトレード株式会社と委託契約を締結して調査を依頼した。笠間市教育委員会・笠間市都市建設部都市建設課・ティケイトレード株式会社は三者協議を行い、試掘調査の結果に基づき、平成 21 年 10 月 16 日付けで文化財保護法第 92 条第 1 項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会教育長へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光を指導委員として平成 21 年 11 月 16 日から平成 22 年 2 月 27 日まで、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

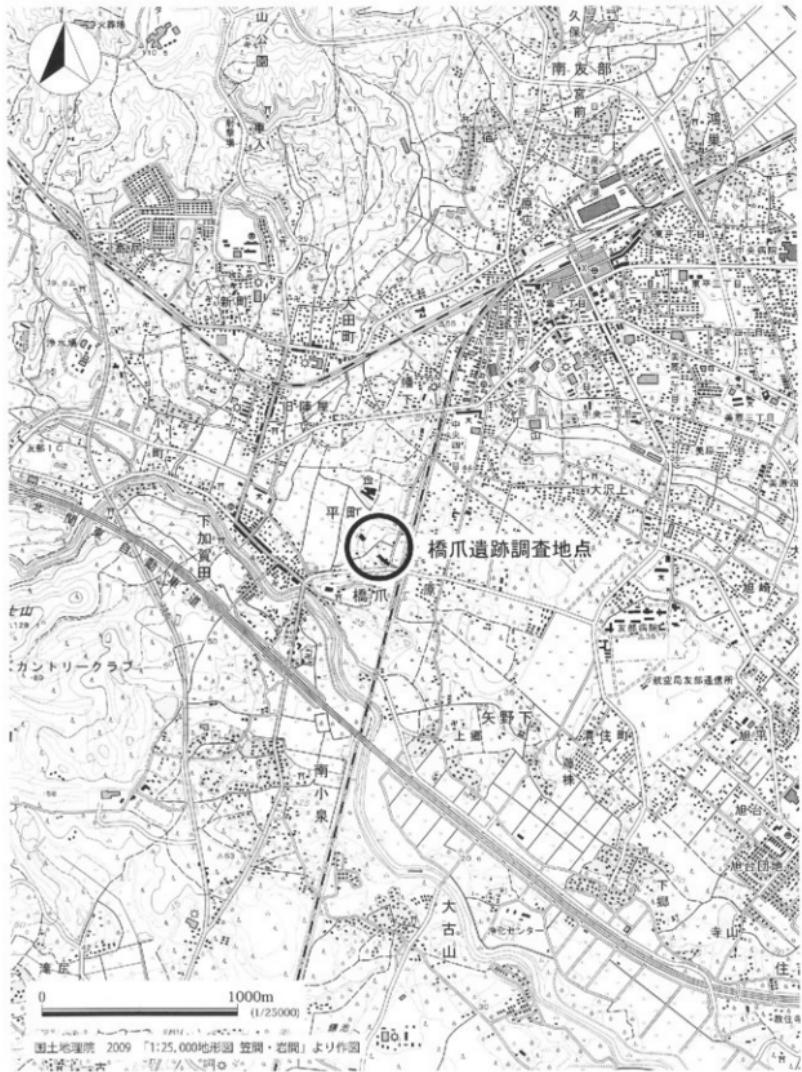
発掘調査は、平成 21（2009）年 11 月 16 日～平成 22（2010）年 2 月 27 日に実施した。調査対象となつた地点は遺物包蔵地であり、本調査の目的は、開発事業に伴う埋蔵文化財の記録保存である。

現地調査

- ・平成 21 年 11 月 16 日—重機による表土掘削作業及び人力によるプラン確認作業を開始。
- ・11 月 18 日— 表土掘削作業と併行し、A1 区の遺構調査を開始。
- ・11 月 25 日— 表上掘削及び人力によるプラン確認作業を終了。
- ・12 月 2 日— A1 区の全景写真撮影。
- ・12 月 4 日— 笠間市立佐城小学校の六年生を対象に遺跡体験教室開催。
- ・12 月 5 日— A2 区の遺構調査を開始。
- ・平成 22 年 1 月 20 日— A2 区の遺構調査と併行し、D 区の遺構調査開始。
- ・1 月 21 日— 笠間市教育委員会により D 区住居跡 048SI の調査開始。
- ・2 月 19 日— D 区の全景写真撮影。
- ・2 月 25 日— A2 区の全景写真撮影。県による監査。
- ・2 月 27 日— 現地調査完了。

整理作業

- ・平成 21 年 12 月 10 日—遺物洗浄作業開始。
- ・平成 22 年 3 月 1 日—遺構図面トレース作業開始。
- ・3 月 10 日— 遺物実測作業開始。
- ・3 月 15 日— 遺物接合作業開始。
- ・4 月 6 日— 遺物洗浄作業終了。
- ・5 月 14 日— 遺構平面図トレース・遺物接合作業終了。
- ・5 月 18 日— 遺物トレース作業開始。
- ・6 月 9 日— 遺物実測作業終了。
- ・6 月 30 日— 遺物トレース作業終了。
- ・9 月 30 日— 報告書刊行。



第1図 橋爪遺跡位置図

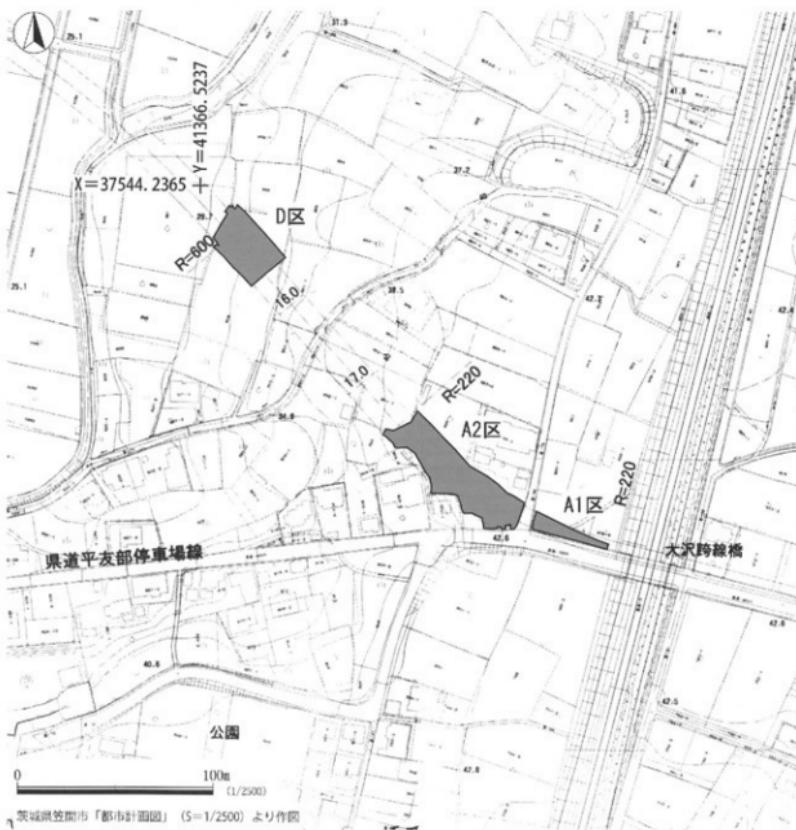
第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

橋爪遺跡は、茨城県笠間市橋爪（旧西茨城郡友部町大字橋爪）に所在している。

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部は桶木原、西部は桜川市、東部が水戸市や茨城町、南部は石岡市や小美玉市に隣接する。笠間市の北東部には八溝山地から張り出す鶴足山塊から標高 100 ~ 200m の丘陵が延び友部丘陵と称せられる。南東部、旧友部町の大部分は標高 30 ~ 40m の東茨城台地と呼ばれる台地が涸沼川に沿って大洗方面へ延びる。涸沼川は、国見山付近に水源を持ち枝折川や涸沼前川を合わせ涸沼に注いでいる。

橋爪遺跡は、涸沼川左岸の標高 32 ~ 42m に立地する。調査区は、涸沼川に平行するように傾斜地から台地上に北西から南東に長く設定され、涸沼川からの比高差は 7 ~ 17m を測る。調査前の現況は畑地である。



第2図 橋爪遺跡調査区位置図

第2節 歴史的環境

ここでは、笠間市域のうち当遺跡の所在する旧友部町域について記述する。

旧友部町域における人々の営みの痕跡は、旧石器時代までさかのぼる。本調査地点から南西へ8~11kmほど離れた洞沼川右岸に立地する、東平遺跡(15)、古峰A遺跡(18)、古峰B遺跡(19)や、本調査地点から南東へ30mほど離れた寺山遺跡(30)等で旧石器時代の遺物が確認されている。

縄文時代においては、本調査地点と同様に洞沼川と洞沼前川に挟まれた台地上の縁辺部一帯には、早期から晩期にわたり20箇所以上の遺跡が確認されている。とくに中期に該当するものが多く本調査地点周辺では、新善光寺跡(09)では中期の袋状上坑と陥し穴等が、上郷遺跡(22)からは中期の土器が多く確認されている。本調査地点からも縄文中期に該当する遺構を多く検出していることなどから縄文時代中期には調査地点周囲は人々の活動が活発であったと考えられる。

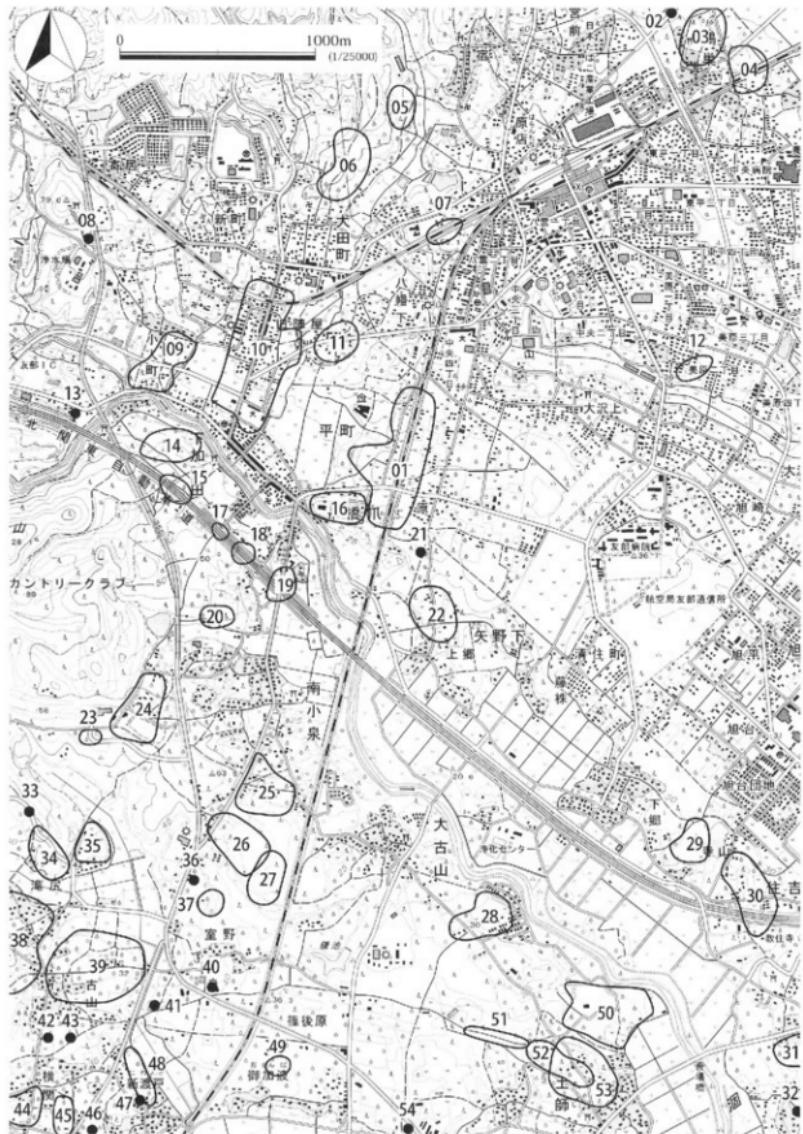
弥生時代においては、2000年に茨城県教育財團に調査された久保塚遺跡にてはじめて住居跡が確認され、その後も弥生時代後期の住居跡等が三本松遺跡、塙谷遺跡などで確認された。旧友部町域では弥生後期に集中する傾向が見られる。

古墳時代においては、台地の周辺部より住居跡が確認され、古墳は台地のやや奥からも確認されている。小原遺跡や久保塚遺跡、新善光寺跡(09)からは古墳時代前期後半の住居跡が確認されている。小原遺跡や久保塚遺跡、新善光寺跡(09)からは古墳時代前期後半の住居跡が確認されている。

奈良・平安時代において旧友部町域は、那珂郡と茨城郡の両郡にまたがっており、旧町域東部は那珂郡、西部は茨城郡に編入されていたと想定される。本遺跡より3km程北東部に位置する北平遺跡では、7世紀後葉から9世紀後葉に属する住居跡が確認されている。

表1 橋爪遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な遺跡と時代	主な遺跡と時代
01	船出遺跡	古墳地(縄文、弥生、古墳、奈良、平安)	古墳地(西元、吉備、奈良、平安、中世)
02	持田瀬古墳群	古墳地(二重)	古墳地(縄文、奈良、平安)
03	幸野遺跡	古墳地(縄文、弥生、古墳)	古墳地(縄文、奈良、平安、中世)
04	古峰A遺跡	古墳地(縄文、弥生、古墳)	古墳地(縄文、奈良、平安)
05	古峰B遺跡	古墳地(縄文、弥生、古墳)	古墳地(縄文、奈良、平安)
06	佐久平寺跡	古墳地(縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世)	古墳地(縄文)
07	二ノ字一・二	古墳(古墳地)	古墳(古墳地)
08	溝畠小字古墳	古墳(古墳地)、古墳遺跡	古墳(古墳、平安、近世)
09	新善光寺跡(09)(古跡登録)	古墳地(中世、近世)	古墳地(中世、近世)
10	刀削山遺跡	古墳地(中世、近世)、古墳遺跡(二重の古墳)	古墳地(中世、近世)
11	古峰	古墳地(中世)	古墳地(中世)
12	大木山遺跡	古墳地(古墳)	古墳地(古墳)
13	古木山遺跡	古墳地(古墳)	古墳地(古墳)
14	下ノ馬鹿山遺跡	古墳地(古墳、中世、平安)	古墳地(古墳)
15	下平遺跡	古墳地(古墳、奈良、平安、中世、平安)	古墳地(古墳、平安、中世、近世)
16	下平遺跡	古墳地(古墳)	古墳地(古墳)
17	坂の上の古墳	古墳地(古墳、近世)	古墳地(古墳)
18	古峰遺跡	古墳地(古墳、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世)	古墳地(古墳、古墳、中世、近世)
19	古峰B遺跡	古墳地(古墳、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世)	古墳地(古墳、中世)
20	三之山古墳群	古墳地(古墳)	古墳地(古墳、中世、近世)
21	三ノ字一	古墳(古墳)	古墳地(古墳)
22	下原塚	古墳地(縄文、古墳、中世、近世)	古墳地(縄文)
23	吾妻山古墳群	古墳地(古墳)	古墳地(古墳、奈良、平安、中世)
24	吾妻山遺跡	古墳地(古墳)	古墳地(古墳)
25	古木山遺跡	古墳地(古墳)	古墳地(古墳、奈良、平安、中世)
26	佐久平寺内古墳	古墳地(古墳、奈良、平安、中世)	古墳地(古墳)
27	佐久平寺跡	古墳地(中世)	古墳地(中世、奈良、平安、中世)



第3図 橋爪遺跡周辺の遺跡位置図

第3章 調査の概要

第1節 遺跡の概要

本調査地点からは、縄文時代の住居3軒、土坑153基、ピット79基、弥生時代の住居2軒、古墳時代の住居1軒、奈良・平安時代の住居24軒、時期不明の住居9軒、土坑16基、総計287基を検出した。本調査地点は、台地上から傾斜地に設定されており、A1区からD区の高低差は10m程度である。

縄文時代の遺構は、A1区で41基、A2区で191基を検出した。傾斜地の下に位置するD区からは3基を検出した。住居跡は3軒を検出したのみで、ほとんどが土坑である。上坑は、袋状土坑が集中しており46基を検出した。袋状土坑は、時期・法量による差異が認められ、なんらかの規制を持ち土坑の作製が行なわれたと推測される。縄文時代の遺物は、阿玉台Ib式土器、阿玉台IV式土器、加曾利E I～IV式土器、中嶋式土器など縄文時代中期前葉から後葉の遺物が出土した。中でも、阿玉台IV式土器、加曾利E I式土器の遺物が最も多い。フラスコ状を呈する上坑065SKからは、加曾利E I式の土器を主体として、ほぼ完形で器形が復元出来る深鉢12個体、浅鉢1個体、口縁部から頭部を意図的に欠いて、胴部から底部がほぼ完形の深鉢が5点出土した。065SKは、遺構底面より硬化面を上下2枚検出しており、遺物の殆どが上部の硬化面直上より出土した。

弥生時代の遺構は、D区において、住居跡2軒を検出した。住居跡上部は耕作土に大きく切られる。南東方向に3.50mほどの距離で隣り合って検出し、主軸方向もほぼ同じである。出土遺物は、とともに十王台式土器で、2軒の住居跡の遺物は遺構間接合がみられ、どちらの住居も弥生時代終末期と考えられる。

古墳時代の遺構は、A1区において、住居跡を1軒検出した。住居跡上部は耕作土に大きく切られる。床面直上からは、口縁部を意図的に欠いた器台や咀、小型埴などがまとめて出土した。出土遺物から古墳時代中葉の住居跡と考えられる。

奈良・平安時代の遺構は、A1区で住居跡1軒、A2区で住居跡14軒、D区で住居跡9軒を検出した。8世紀前葉から10世紀前葉にかけてのものが半である。中でも、8世紀前葉～9世紀前葉に該当する住居跡は12軒である。出土遺物は、上飾器環、須恵器環、常陸形甕、小型甕、紡錘車などである。須恵器環は、木葉下窯のものが主体を占める。

第2節 調査の方法

本調査地点は、試掘調査の成果より3地点、合計2,454m²の調査区が設定され、調査区は、南東よりA1区、A2区、D区とした。グリッドはD区北西を基点（第2図参照）として、5m四方のグリッドを設定し、東西を西側から算用数字で1～42、南北を北からアルファベットでA～AMと付した。

A1区より、重機による表土掘削後、人力により精査を行い、遺構プラン確認を行なった。その後、A1区、A2区、D区の順に遺構掘削を行った。確認された遺構の中で、遺構壁面が袋状にオーバーハングする遺構に関しては、安全上断面調査を行なった。遺構番号は、全区共通で通し番号を付し、整理段階において遺構番号の末尾に遺構種別に基づいた略号を付し遺構名とした。その際、欠番とした遺構もある。

平面図の作成はトータルステーションシステムを使用した三次元測量により行い、住居跡平面図・遺構断面図は手作業で行なった。住居跡平面図・遺構断面図はS=1/20の縮尺を基本に、必要に応じてS=1/10で作成した。写真撮影は、35mmのモノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラで行なった。

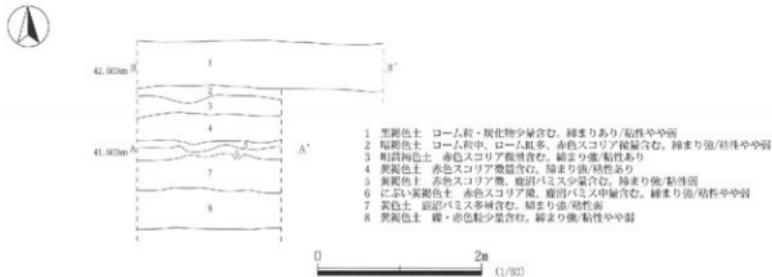
出土遺物の取り上げに関しては、基本的に遺構一括としたが、必要に応じトータルステーションシステムにより出土位置を三次元記録した後、取り上げた。また、層位に基づきブロック単位でも遺物の採取を行なった。

出土遺物は洗浄後、接合・復元作業を行い、実測図の作成を行なった。

第3節 基本層序

調査地点、A2区西側の北壁、D区西端の北壁にトレントを設定し、基本上層の堆積状況の確認を行なった（第4・5・9・10図参照）。A2区、D区のトレントとともに、ほぼ同一層の堆積が見られた。A区からD区では、現地形で10m程の高低差があり、D区では、東から西へ傾斜する堆積が見られることなどから、傾斜に沿ってこれらの層も堆積したと考えられる。

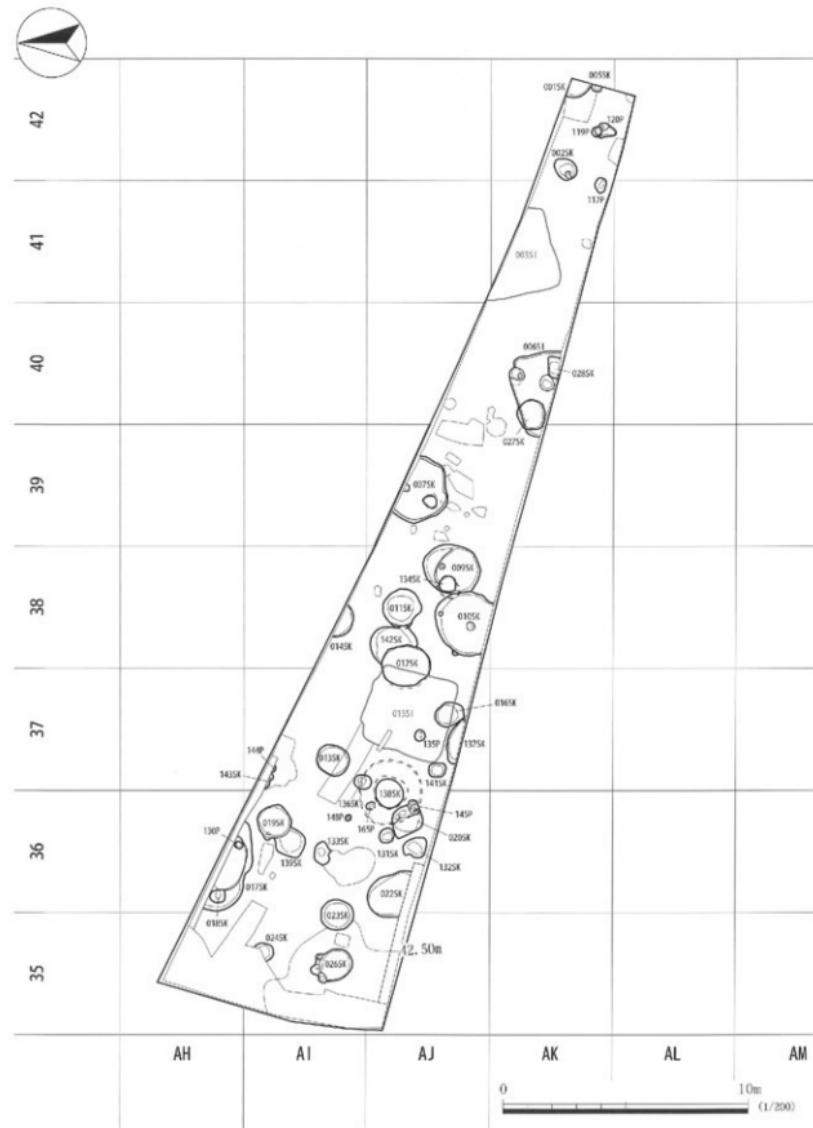
1層は黒褐色を呈し、ローム粒・炭化物を少量含む近代以降の耕作土である。2層は暗褐色を呈りローム層への漸位層である。3層は明黄褐色を呈し、赤色スコリアを微量含んでいる。ソフトローム層である。4層は黄褐色を呈し、赤色スコリアを微量含む。3層より縞まりが強く、ハードローム層である。5層は黄褐色を呈し、赤色スコリアを微量含む。6層はにぶい黄褐色を呈し、径1～2mmの鹿沼バミスを少量含む。7層は鮮やかな黄色を呈する。鹿沼バミス層である。粘性は無く水分を他の層よりも多く含む。A区では、0.40～0.41m、D区では0.46～0.47mの厚さで堆積する。8層は褐色を呈し、径2～3mmの礫を少量含む。ハードローム層である。



第4図 A2区基本層序トレント

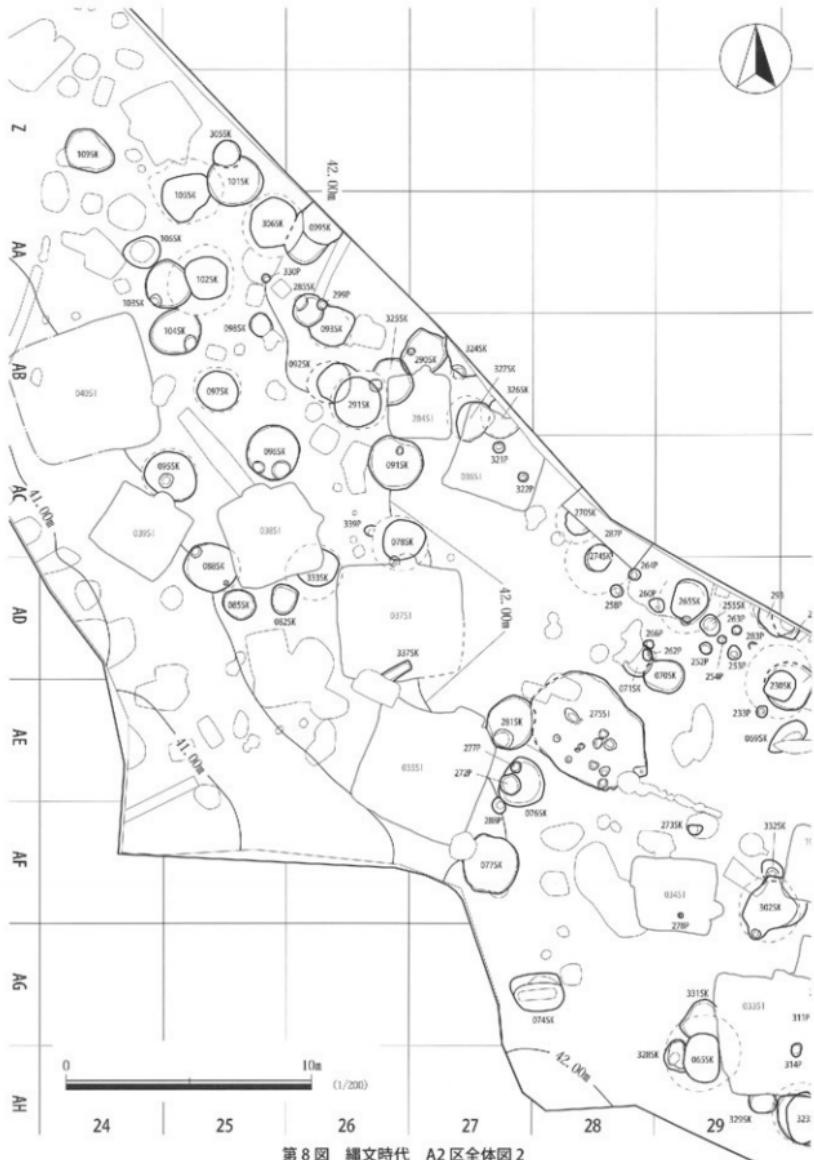


第5図 D区基本層序トレント



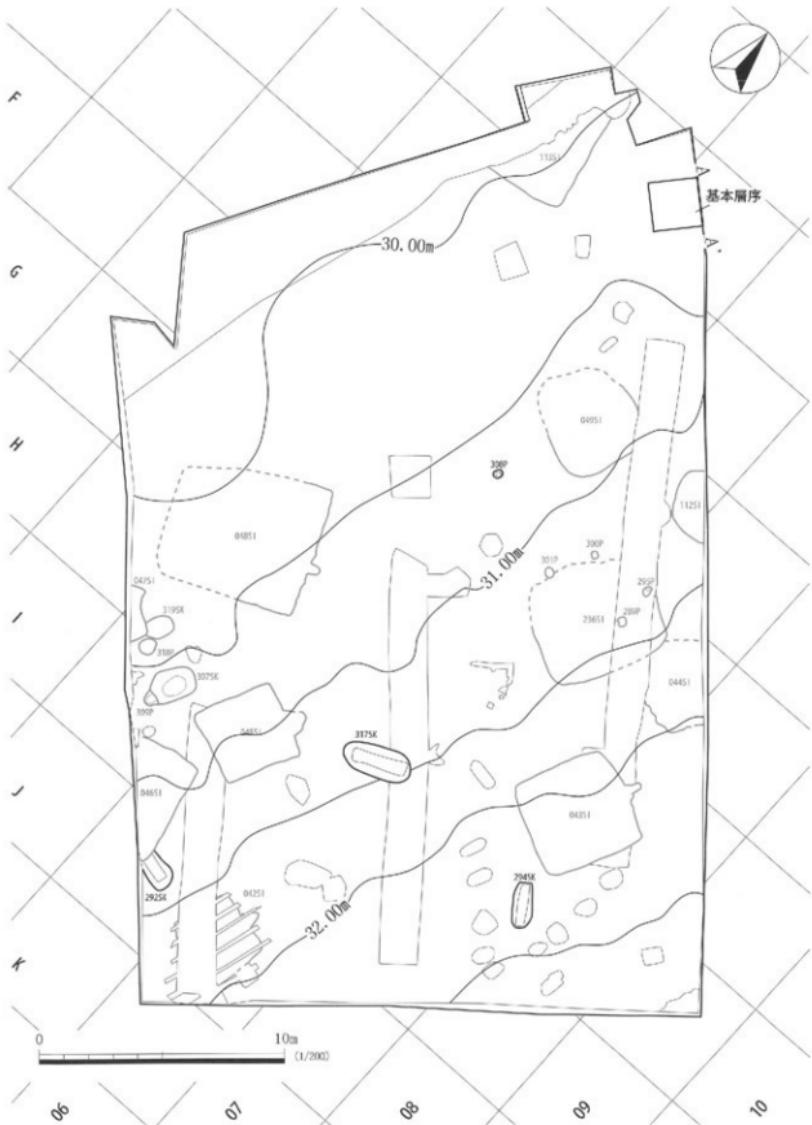
第6図 繩文時代 A1区全体図





第8図 繩文時代 A2区全体図2





第10図 繩文時代 D区全体図

第4章 繩文の遺構と遺物

第1節 A1区

住居跡

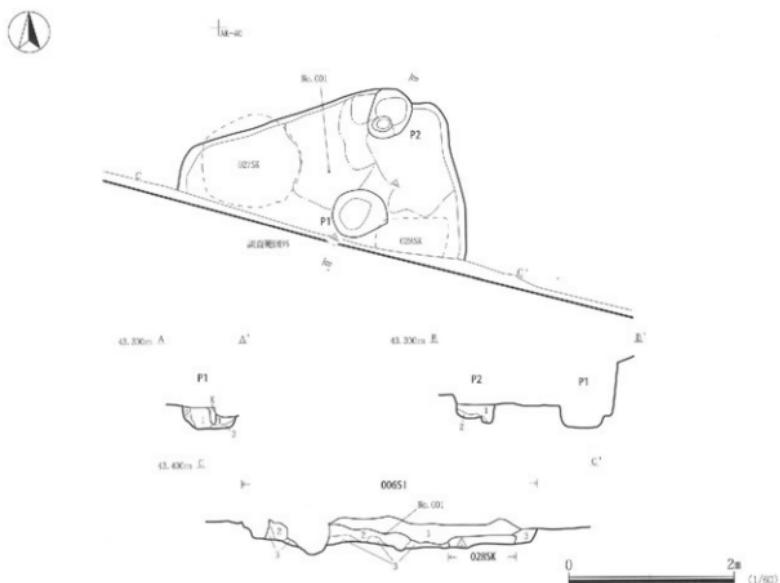
006SI (第11・12図、表2・3)

位置 A1区東、AK-39、AK-40グリッドに位置する。

重複関係 027SKの上部を切る。住居跡掘り方より028SKを検出したが、覆土が006SIの掘り方の覆土と類似する点などから006SIと同一遺構と捉えた。

規模と平面形 長軸3.17m、短軸2.18mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。

主軸方向 N-73°-Eである。



006SI:

- 1 黒褐色土 ローム粒少、ローム粘、底土粒、炭化物微量含む。縫まりやや強/粘性あり
- 2 白褐色土 ローム粒少、ローム粘、底土粒、炭化物微量含む。縫まりやや強/粘性あり
- 3 黑褐色土 ローム粒、ローム粘多量含む。縫まり弱/粘性あり

P1:

- 1 黑褐色土 ローム粒少、ローム粘、炭化物微量含む。縫まり弱/粘性あり
- 2 黑褐色土 ローム粒、ローム粘少、底土粒、炭化物微量含む。縫まりやや強/粘性あり
- 3 黑褐色土 ローム粘中、ローム粘多、炭化物微量含む。縫まりあり/粘性あり

P2:

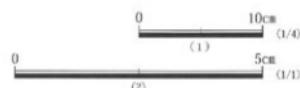
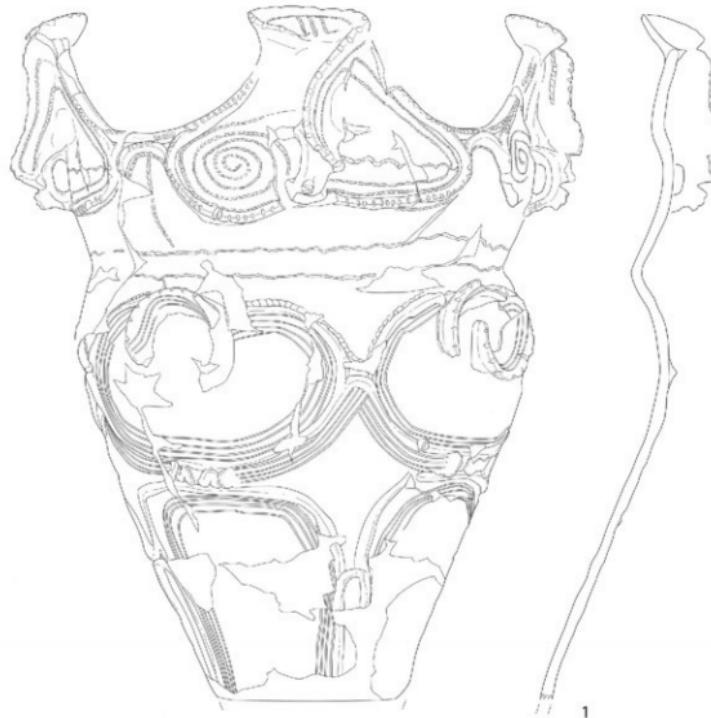
- 1 黑褐色土 ローム粒、ローム粘、底土粒、炭化物微量含む。縫まり弱/粘性あり
- 2 黑褐色土 ローム粒少、ローム粘、炭化物微量含む。縫まりやや強/粘性あり

028SK:

- 1 黑褐色土 ローム粒、ローム粘、底土粒、炭化物微量含む。縫まり強/粘性あり

※ 006SIの表面より方形のプランが確認されたため別遺構としたが006SIの掘り方の一部と考えられる。

第11図 006SI平面図・断面図



第12図 006SI出土遺物

表2 006SI出土 土器観察表

番号	器種 No.	層位	口径 (mm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	部位	文様・表面状態	時代 (GSC)	備考(接合関係)
1	006SI No.001	深鉢	341	(570)	473	口縁 ～ 腹部	波及び縦線(4回)。波頂部より幾重が延5字状に延びる。口縁部には断面が三角状の陰窓による区画が、陰窓にはモザイクが施される。区画内は夷撋文が施される。頭部は算盤による区画が施され、区画内は波線がめぐる。	阿室台 1式	胎土：金銀沢多、白色沢多。 実側面の正反、右の把手は復元。

表3 0065I出土 石器観察表

器種 番号	遺構 層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	確定 発見率	特徴	備考
2 0065I	覆土	石鏃	19	15	3	1	チャート	100%	凹基無基 側縁が近く内湾	
0065I	覆土	打製石斧	76	42	17	71	鈍放岡	100%	漸形 片刃	

壁 残存する壁高は0.17～0.20mで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。住居中央部から北東に硬化面が認められる。

ピット 2基(P1～2)を検出した。ピットは、長軸0.62～0.66m、短軸0.46～0.66mの楕円形を呈し、深さは0.22～0.26mである。P1は、覆土の堆積状況から柱穴と推定される。

覆土 3層に分層され、第2層以下が掘り方である。検出した覆土は僅かだが、第1層は、ほぼ水平に黒褐色土が堆積し、黒褐色土中には焼土粒、炭化物が均一に混入する点などから人為堆積と考えられる。

遺物 実測遺物は2点である。

1は、住居床面の中央部北から口縁部を内へ向けつぶれるように出土した。胎上に金芸母を多く含み、肩部がやや張り波状口縁を呈している。隆帯が波頂部から逆S字状に頸部へと延び、肩部には隆帶貼付けによる渦巻が施される。

2は、チャート製の石鏃である。連続的な細かい調整削離によって二等辺三角形を呈するように作り出される。基部に抉りを有し、両側縁中央部がやや内湾する。

時期 1の遺物から、縄文時代中期前葉と考えられる。

袋状土坑

0125K(第13～15図、表4・5)

位置 A1区中央部、AJ-37、AJ-38グリッドに位置する。

重複関係 142SKに北東壁を切られる。

規模と平面形 開口部は、長径1.91m、短径1.64mの楕円形、底面は長径1.96m、短径1.65mの楕円形で、深さ0.84mを測る。

壁 ややオーバーハンプする。断面形は袋状を呈する。

底 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

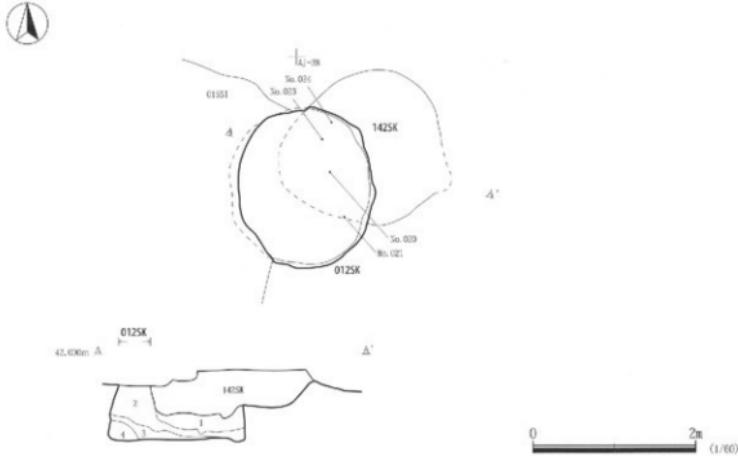
覆土 4層に分層され、人為堆積と考えられる。第1層にはローム粒などが多く混入し、142SKが遺構北壁を切る際に埋め戻しが行なわれた可能性が高い。第3・4層からは加曾利EII～III式の土器が出土した。

遺物 実測遺物は5点である。

1は、沈線を沿わせた降帯で、渦巻・楕円形区画が施される。2は、4単位の把手が施される。胴部の懸垂文間の磨り消しは完全ではない。3は、沈線による懸垂文間の磨り消しは丁寧である。

5は安山岩製の磨石・敲石である。054SK出土遺物との接合資料である。平面形は楕円形を呈する。表面の大部分に磨痕が明瞭に残る。敲打痕は表面の中央部、両側面および下端部に認められ、特に下端部の唇面の剥落が著しい。

時期 出土遺物に、加曾利EII式土器で懸垂文間の磨り消しが完全ではないものの、加曾利EIII式土器で磨り消しが丁寧なものが見られる。加曾利EII式からIII式の土器が見られることから縄文時代中期後葉と考えられる。



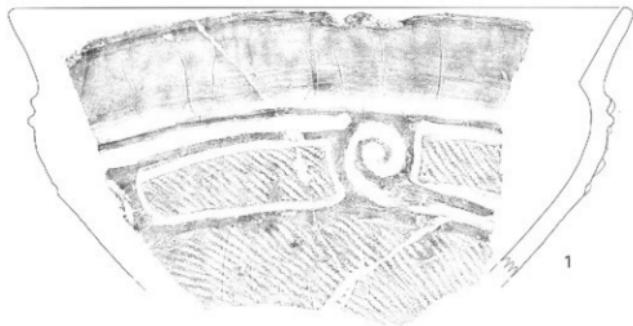
第13図 012SK平面図・断面図

表4 012SK出土 土器観察表

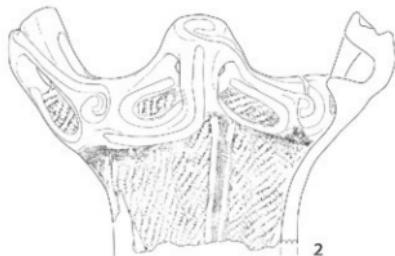
番号	遺物 No.	層位	断面	口径 (cm)	周長 (cm)	底径 (cm)	最大厚 (cm)	部位	文様、器面調査	時期 (形態)	備考(接合関係)
1	0125K	No. 020	深鉢	(380)	(167)			口縁部 ～ 底部	口縁部文下には線文が沿わせた複帶で沿巻、側内折 区画が施される。区内には契文(平健)と複位(地文)が施される。 地文複位(地文複位)。	加賀田口式 もしくは近口式	
2	0125K No. 021	深鉢	160	143				口縁部 ～ 底部	波状口縁(4mm)。波状部直下に複疊状凹文。 口縁部に波状凹文が施される。区内には契文(複位)が 施される。底部は2本一組の弦文による複疊文が施され、基底 は帶文(地文)。	加賀田口式 もしくは近口式	
3	0125K No. 023	深鉢	(272)					底部	測定口3本一起の弦文による複疊文が施される。 基底文面を割り当てる。地文複位(地文複位)。	加賀田口式	1425K活と接合
4	0125K No. 021	陶片	(89)					底部 ～ 底部	無文。燒成前に剥離した孔が複数個ある。 剥離の内外間に赤彩分離がある。		底土:白色粘多

表5 012SK出土 石器観察表

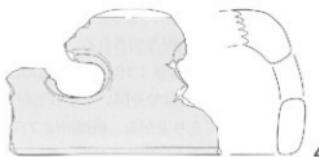
番号	遺物 No.	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	鑑定	保存率	特徴	備考
	0125K No. 020		磨石	95	40	27	81	珪紋岩	○	100%	片面中央・上下端部・片側面に敲打痕	
5	0125K No. 023		磨石・研石	(111)	69	38	(47)	安山岩	90%	片面溝痕・片面中央・両側面・上下端部に敲打痕	0545回土と接合	
0125K	覆土		剥片	30	21	5	3	黒曜石	100%			
0125K	覆土		石核?	95	65	50	227	チャート	100%	擦痕あり 磨石跡か		



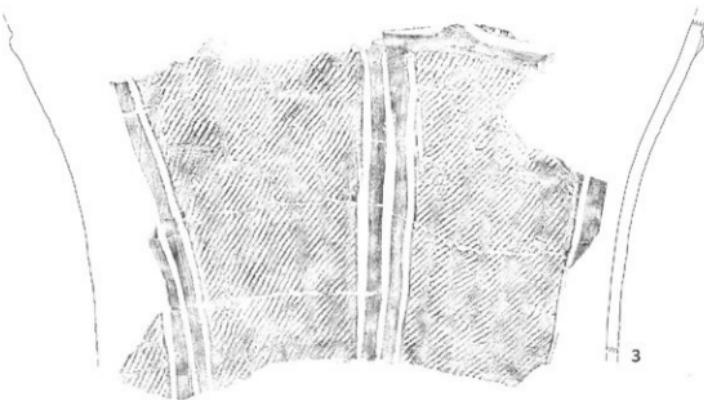
1



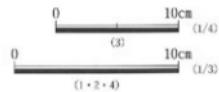
2



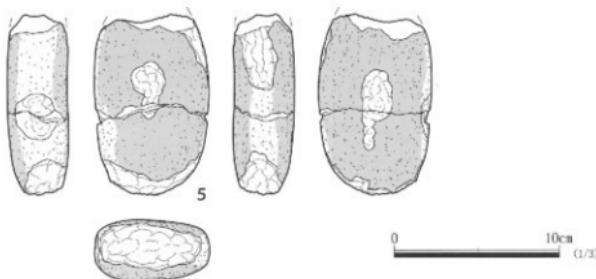
4



3



第14図 0125K 出土遺物 1



第15図 0125K 出土遺物2

138SK (第16~18図、表6・7)

位置 A1区中央西 AI-36, AJ-36, AI-37, AJ-37 グリッドに位置する。

重複関係 165P に北西壁を切られる。遺構上部に搅乱を受ける。

規模と平面形 開口部は径 1.10 ~ 1.18 m の円形、底面は径 2.74 ~ 2.59 m の円形で、深さは 1.10 m である。

壁 底面から 0.10 m 程はやや開いて立ち上がった後、開口部に向かい 13 ~ 30° の角度で傾斜し、括れ部分からは、やや内湾して立ち上がる。断面形はプラスコ状を呈する。

底 平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土 5 層に分層された。第 3 ~ 5 層は、遺構底面から袋状に広がる部分に水平に堆積しており、意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。第 1 ~ 2 層も水平に堆積することなどから第 1 層以下は人為堆積と考えられる。第 5 層は遺構底面に 0.10 ~ 0.20 m 程の厚さで堆積し、土器・石器・礫等の遺物を多く含んでいた。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。

遺物 実測遺物は 7 点である。遺物は、第 1 層下部、第 5 層から多く出土している。

1 は、遺構底面から出土している。把手が 4 箇所口唇部から洞部にかけて施される。底部は欠損している。

2 は、袋状土坑の括れの手前より底部を上にして出土した。口縁部は、水平に欠けており、本遺構から出土しなかった為、人為的に欠いたと考えられる。

3 は、遺構底部から出土しているが 1・2 とは時期が異なることなどから、本遺構から 15 m 程南東に阿玉台 Ib 式土器が出土する住居跡 006SI を検出しており、埋土に混入した遺物と推測される。

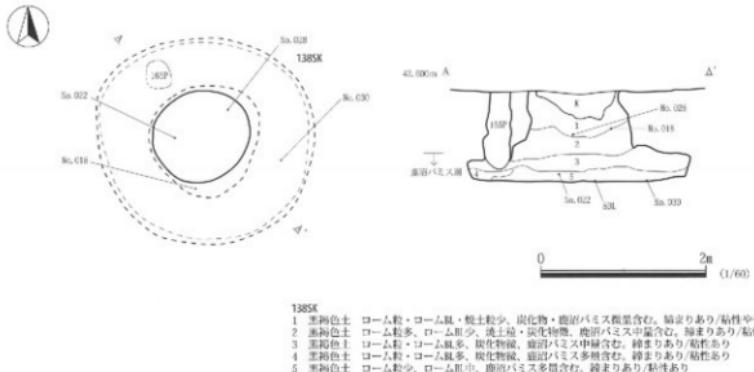
4 は石英斑岩製の磨石・敲石である。表裏両面の全面にわたって磨痕が認められ、両面と側面との間に稜線を形成している。下端部には狭小な 2 面の磨痕が残る。表裏面の中央部に微細なつぶれが認められる。

5 は閃緑岩製の石皿である。中央部が皿状に浅く凹み、その凹部内の器面は荒れている。石器裏面や側面には被熱の痕跡が残る。

6 は花崗岩製の蜂の巣石である。表裏両面に凹み部と磨面を有する。凹み部は計 17 箇所で、表裏面ともに磨面の周囲に散在する。凹み部は磨耗によって断面形が逆円錐形を呈し、上部の径は最大のもので 25 mm、深さは 12 mm を測る。磨面は皿状にわずかに凹む。

7 はデイサイト製の石棒である。先端部以外の大部分を欠損していると考えられる。上部の平坦面に明瞭な磨痕が認められる。側面の幅広な面には凹み部が表裏両面で計 8 箇所確認され、それらの周囲に磨痕が残る。7 は、遺構東側第 1 層下部より頭部を上にし正位で出土した。

時期 1 の遺物などから、縄文時代中期中葉と考えられる。



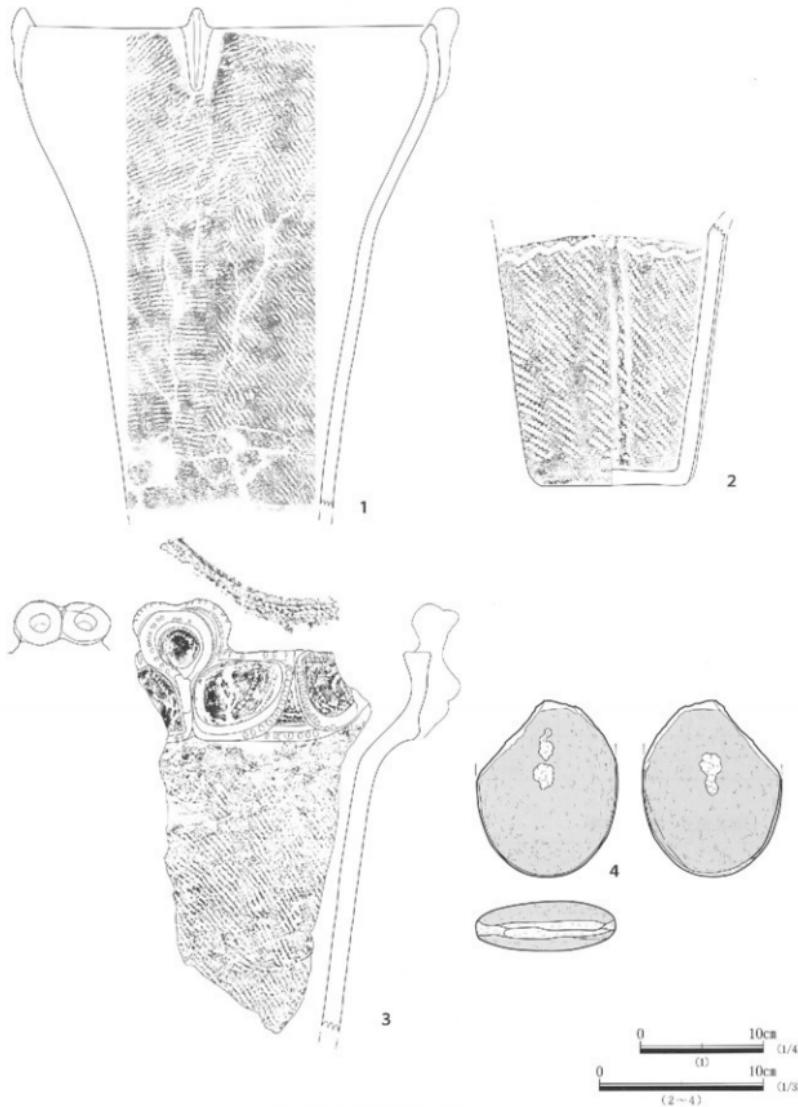
第16図 138SK 平面図・断面図

表6 138SK出土 土器観察表

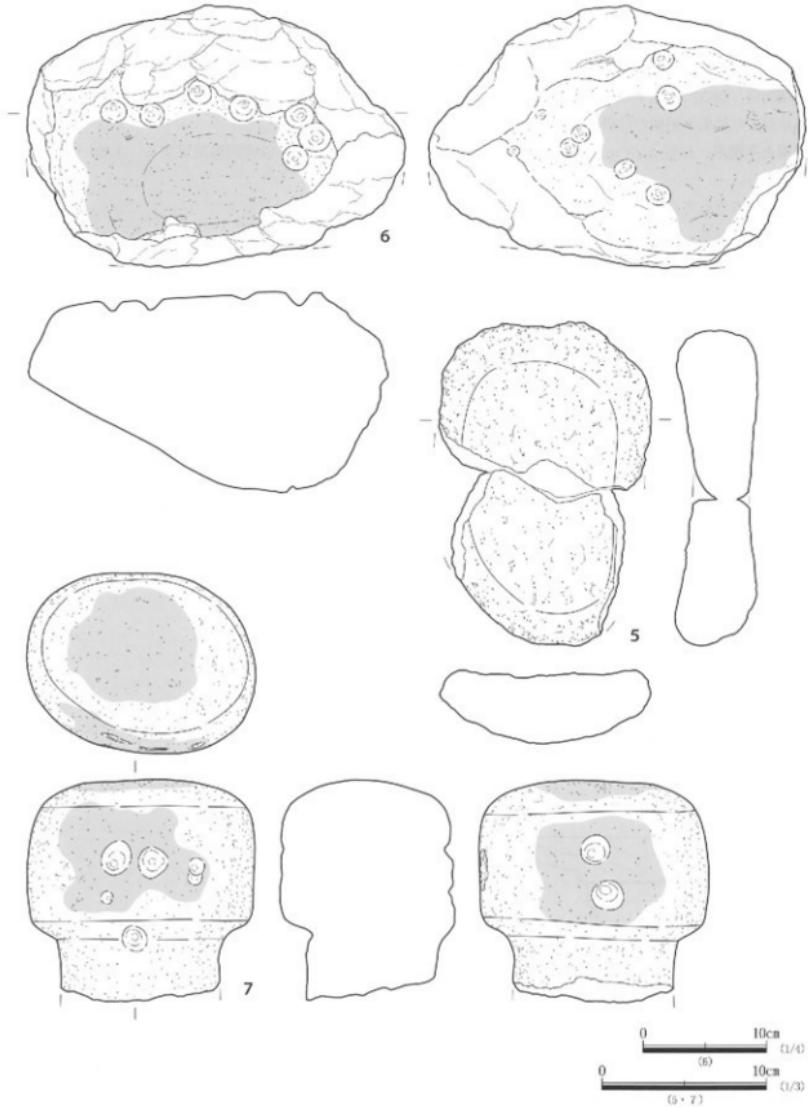
番号	遺構 No.	部位	沿種	口径 (cm)	深さ (cm)	底径 (cm)	最大厚 (cm)	部位	文様・縁部調査		時期 (形態)	備考(複合箇箇)
									文様	縁部調査		
1	138SK No. 022	深部	深鉢	326	(365)			口縁 ～ 側部	口縁部に把手が4半位付される。地文縄文(無縁口縁位)。	阿玉台IV 式		土器: 金雲母多
2	138SK No. 018	深鉢	(140)	(162)	90			側部 ～ 底部	側部に縦帶による模造文。側部に切跡が走る。底部側面 に痕あり。地文縄文(單縁口縁位)。	阿玉台IV 式		土器: 金雲母多
3	138SK No. 022	深鉢	(115)	(267)				口縁 ～ 側部	口縁部には把手が描される。口縁部縁部による区画。降華部 にキサギが描かれ。口縁部及び区画内に押引文が描かれる。 阿玉台Ib 式			土器: 金雲母多

表7 138SK出土 石器観察表

番号	遺構 No.	部位	沿種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	鑑定 鑑定率	特徴		備考
										表面	裏面	
5	138SK 88L		石鉤	200	124	50	(1716)	閃緑岩	○ 70%			
6	138SK 鹿土		鶴の巣石	215	360	184	11850	花崗岩	○ 不明	凹み部17 廉面2		
7	138SK No. 028		石棒	(137)	140	110	(2820)	デイサイト	○ 不明	肩幅3 凹み部8 被熱		
4	138SK 鹿土		鹿石・鶴石	(103)	86	31	(411)	石灰岩	70%	背面剥離 面面中央に微細なつぶれ		
	138SK 鹿土		鶴石	(81)	(94)	(60)	(335)	砂岩	40%	背面剥離 被熱		
	138SK 鹿土		台石	(159)	(123)	(57)	(1490)	花崗岩	○ 70%	被熱		



第17図 1385K出土遺物1



第18図 138SK出土遺物2

土坑

009SK・134SK (第 19 ~ 21 図、表 8・9)

位置 A1 区中央部、AJ-38、AJ-39 グリッドに位置する。

重複関係 調査時に遺構底面より小穴を検出し 134SK と付したが、遺構覆土が類似する点など、整理調査時に再検討した結果木遺構の付帯施設として捉えた。東側に擾乱を受ける。

規模と平面形 長径 2.28 m、短径 2.00 m、深さ 0.58 m を測る。平面形は梢円形を呈する。主軸 N-26° - E である。

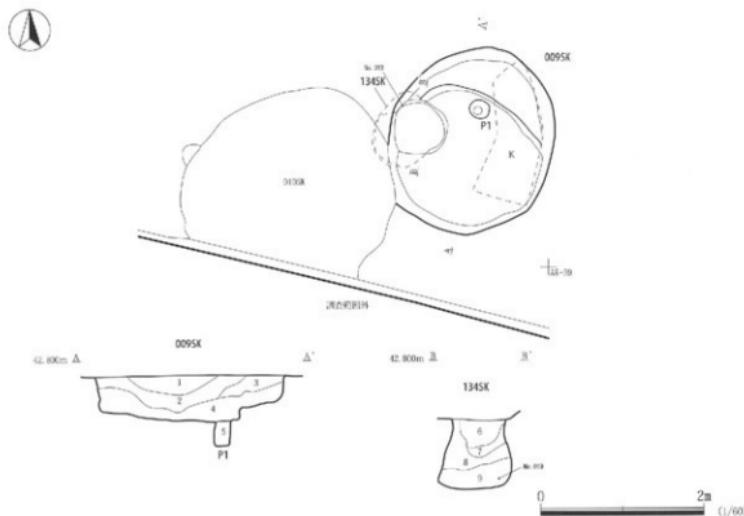
壁 ほぼ直立して立ち上り、北側壁面は、テラス状に一段高くなる。

底 平坦である。

ピット 2 基を検出した。P1 は直径 0.22 m、深さ 0.30 m の円形、134SK は、開口部は径 0.65 m の円形、底面は、長径 0.87 m、短径 0.75 m の梢円形を呈し、深さは 0.84 m で、袋状に掘る。

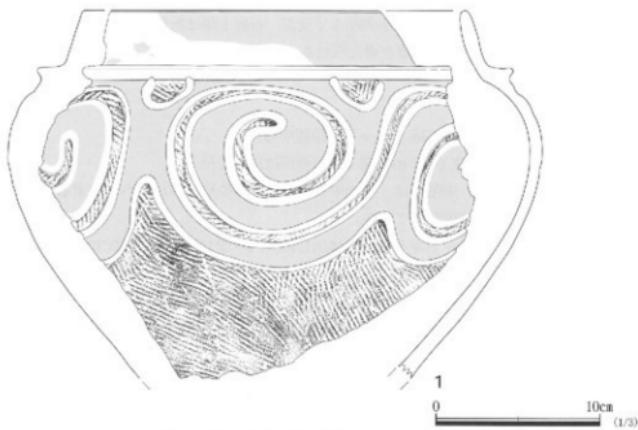
覆土 134SK を含めると、9 層に分層される。第 4・5 層以下は炭化物を含む黒褐色土である。7 層以下は縫まりが弱い。ロームブロック・鹿沼バミスの含有状況などから、第 1 ~ 3 層は自然堆積で、第 4 層以下は人為堆積と考えられる。

遺物 実測遺物は、2 点である。1 は、134SK としたピットの第 9 層から出土している。肩部が張り出し、肩部～胸部にかけて沈線による渦巻が施され、沈線の間は縄文が丁寧に磨り消される。口縁部と縄文施文部以外に

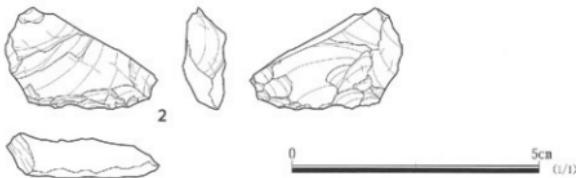


- 009SK・134SK
- 1 細泥褐色土 ローム少、ローム混少、礫土微量、炭化物少量含む。縫まりあり/粘性あり
 - 2 細泥褐色土 ローム較少、ローム混少、礫土微量、炭化物少量含む。縫まりあり/粘性あり
 - 3 細泥褐色土 ローム较少、ローム混少、炭化物少量含む。縫まり強/粘性あり
 - 4 黑褐色土 ローム少、ローム混少、炭化物少量含む。縫まり強/粘性あり
 - 5 黑褐色土 ローム较少、ローム混少、炭化物微量含む。縫まり弱/粘性あり
 - 6 黑褐色土 ローム较少、ローム混少、炭化物微量含む。縫まり少/粘性あり
 - 7 黑褐色土 ローム少、ローム混少、炭化物微量含む。縫まり弱/粘性あり
 - 8 黑褐色土 ローム少、ローム混少、炭化物微量含む。縫まり弱/粘性あり
 - 9 黑褐色土 ローム少、ローム混少、炭化物微量含む。縫まり弱/粘性あり

第 19 図 009SK・134SK 平面図・断面図



第20図 134SK出土遺物



第21図 009SK出土遺物

表8 134SK出土 土器観察表

番号	造形 形態	部位	形跡	口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	文様・器形説明	時期 (形式)	備考(接合面等)
1	134SK3a.019	新	(230)				324	口縁 ~ 底部	口縁部加文等。脚部は口縁による溝各が擦かれて、边缘の間は 擦り消されている。拡文網文(葉茎)は縮位)。内面部部は から外面部部にかけて赤彩が施されている。	加雪利E 三式	

表9 009SK出土 石器観察表

番号	造形 形態	部位	形跡	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	鑑定 道存率	特徴	備考
2	009SK	1脚	種器	(21)	31	9	(6)	チャート	50%	上部欠損	
	009SK	1脚	剥片	23	(16)	4	1	メノウ	80%	板熱	
	009SK	3脚	不明	196	52	25	311	ホルンフェルス	○	背面に磨痕	
	009SK	4脚	剥片	13	9	3	(1)	チャート	100%		

は赤彩が施される。2はチャート製の搔器である。厚手の剥片を素材とし、縁辺の一部に調整剝離を施して刃部を作出している。裏面は調整剝離が石器中央部まで及ぶ。石器上部は折損している。

時期 1の遺物から、縄文時代中期後葉と考えられる。

0105K (第22・23図、表10)

位置 A1区中央南端、AJ-38、AK-38 グリッドに位置する。

規模と平面形 径2.48m、深さ0.62mを測る。平面形は円形を呈する。

壁 ほぼ直立して立ち上るが、東壁面は、壁面中央部が東側へややオーバーハングする。

底 平坦であり、中央部が一部硬化している。

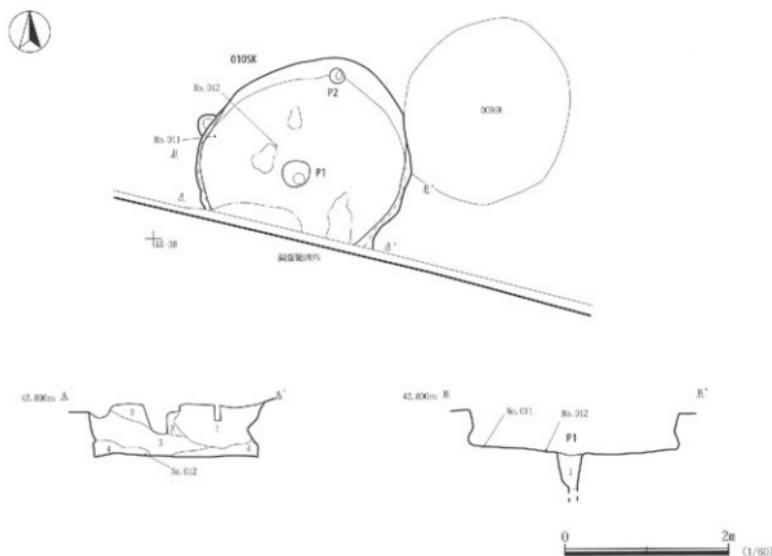
ピット 底部中央と北端からピットをそれぞれ検出した。P1・2は径0.15～0.32m、深さ1.00mの円形を呈する。

覆土 4層に分層される。第1層は、掘り返しの可能性が考えられる。第4層は、黒褐色土を呈し遺物を底面近くに多く含むことなどから人為堆積層と考えられる。

遺物 実測遺物は1点である。

1は、遺構底面直上第4層より出土した。沈線による懸垂文間に磨り消しが施される。磨り消しは丁寧である。

時期 1の遺物から、縄文時代中期後葉と考えられる。



第22図 0105K 平面図・断面図



第23図 010SK出土遺物

表10 010SK出土 土器観察表

番号 基盤 No.	部位	縦径	口径 (cm)	幅 (mm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	部位	文様・表面質感	時期 (形式)	備考 (複合關係)
1 010SK	No.011 No.012 深井	550	~	~	~	~	口縁 ~ 底部	口縁部は沈鉢を彷彿とさせる輪郭で囲み、周円形区画が彫まれ。区画 内に縦文 (10mm間隔) が施される。腹部は本一窓の火跡による横 縞文が彫られ、腰点支脚はあり消し。柱支脚文 (単脚柱用型)。	加曾利E Ⅲ式	

第2節 A2区

住居跡

149SI (第24・25図、表11)

位置 A2区北東部、AG-32、AG-33、AH-32、AH-33 グリッドに位置する。

重複関係 156SK の上部を切る。147SK に造構中央炉を、150SK に北壁を、151SK・153SK に南西部を、228P に炉の西側を切られる。

規模と平面形 長軸 5.37 m、短軸 5.06 m を測り、平面形は隅丸方形を呈すると推定される。主軸方向 N -67° - W である。

壁 残存する壁高は 0.14 ~ 0.28 m で、壁は床面から緩やかに立ち上がる。

床 不明瞭であるがほぼ平坦と思われ、硬化面は住居床面全体に確認された。周溝は住居北西部で一部検出したが、切合が著しいため全周しているかは不明である。

ピット 検出されなかった。

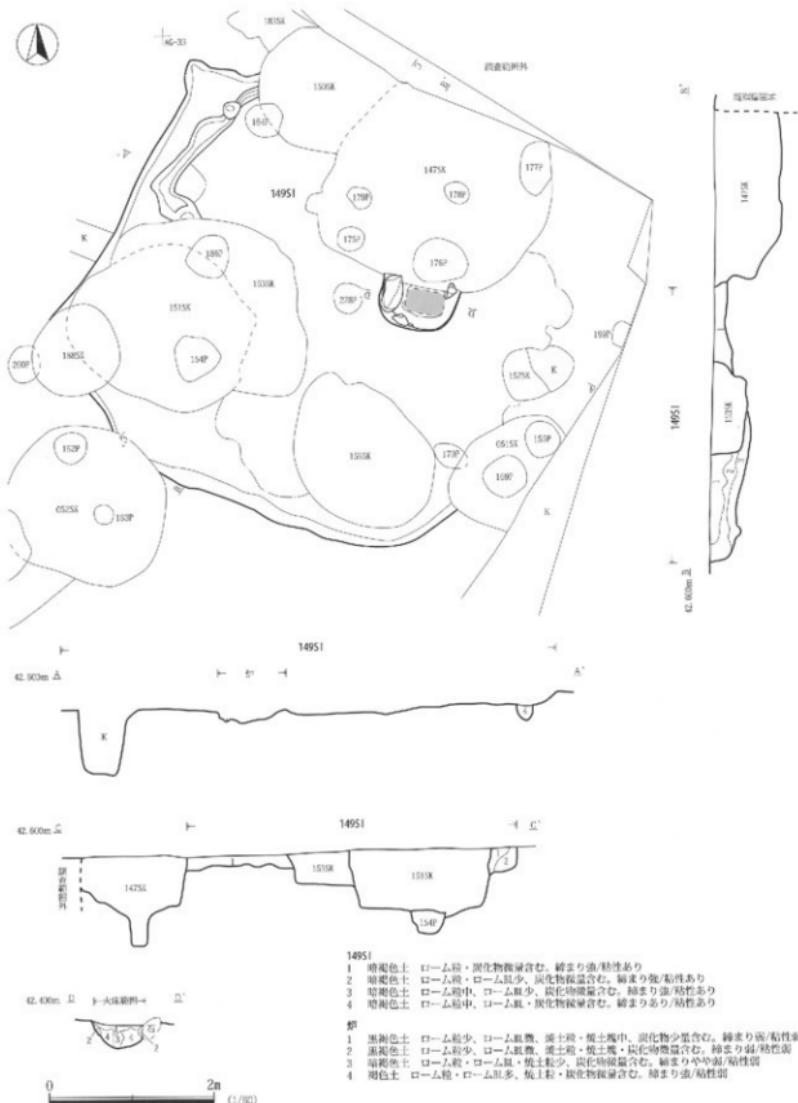
炉 住居中央部に付設されており、石圓いがである。砾は 4 点を検出した。火床面は炉全体に拡がる。検出した規模は長径 0.92m、短軸 0.52m である。炉は、4 層に分層され、第 4 層上部が火床面である。遺物は碎片のみが出土した。

覆土 4 層に分層されたが、覆土が薄く自然堆積層か人為堆積層かは不明である。掘り方は確認されなかった。住居床面等からはまとった遺物などは出土していない。

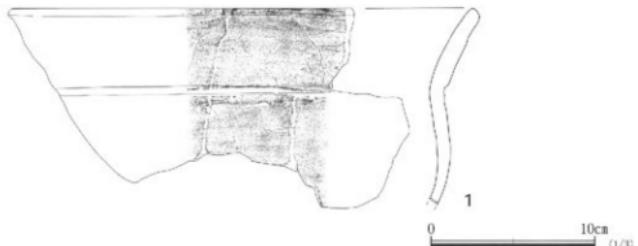
遺物 実測遺物は 1 点である。

1 は、無文の鉢である。口縁部から頸部にかけて内外面共に赤彩が施される。

時期 出土遺物には、図示していないが加曾利 E Ⅱ式もしくはⅢ式土器の破片が見られること、造構の切合などから縄文時代中期後葉と考えられる。



第24図 149SI 平面図・断面図



第25図 149SI出土遺物

表11 149SI出土 土器観察表

番号	遺物 M.	断位	縦幅	口径 (m)	器高 (m)	底径 (m)	底人柱 (m)	部位	文様・器面調査	時期 (形式)	備考(接合関係)
1	149SI	壺上 跡		(122)				口縁部 ～ 底部	無文。口縁部から底部にかけて内外面共に赤帯が施される。		147SK一括と接合。

275SI (第26・27図、表12)

位置 A2区中央、AD-28、AE-28グリッドに位置する。

重複関係 281SKに西壁上部を切られる。北西部は攪乱を受ける。

規模と平面形 規模は長軸5.40m、短軸3.51mを測り、平面形は楕円形を呈する。主軸方向はN43°Wである。

壁 残存する壁高は0.17～0.24mで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦で、造構中央部分に硬化面が認められる。

ピット 11基を検出した。P1～9・11は、径0.32～0.44mで概ね円形を呈す。深さはP1～2・6は0.90～1.20m、P3～5・7～9・11は0.18～0.38である。P10は、径0.90mの円形を呈し、深さは1.26mである。

炉 住居北西部より検出した。炉石は南側から4点検出した。

覆土 3層に分層され、第3層は掘り方である。初期流入土が認められ、自然堆積層と考えられる。

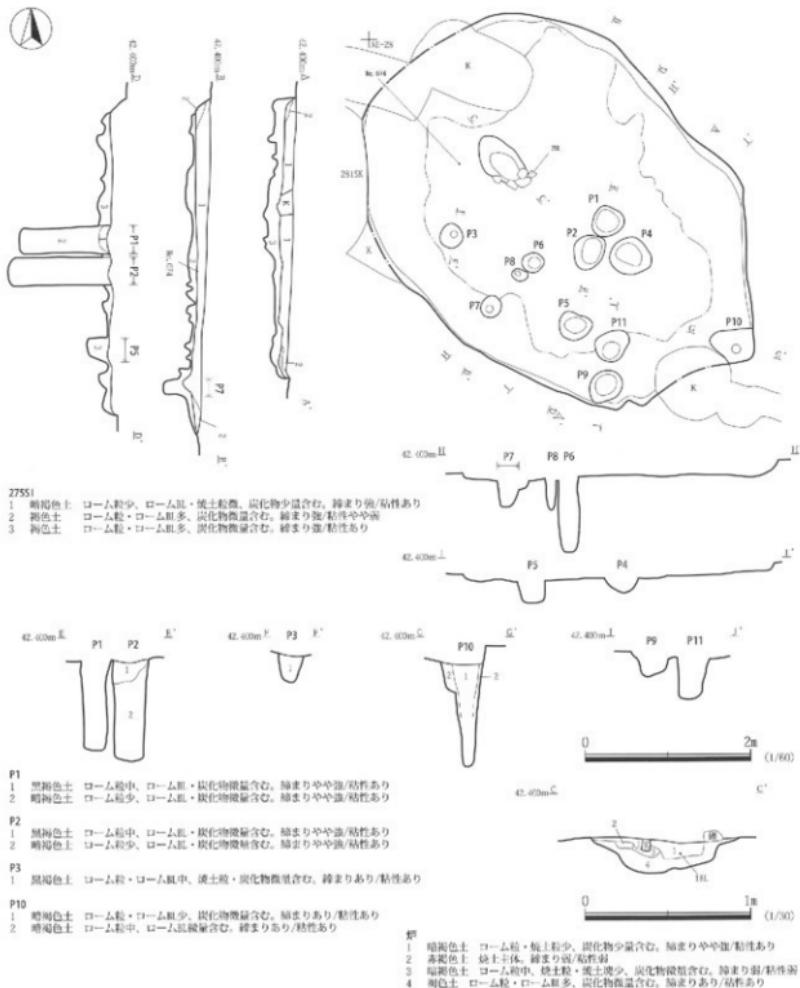
遺物 実測遺物は5点である。

1は、無文の鉢である。2・3・5は、住居床面のほかから北西へ0.30m程の位置からまとまって出土した。

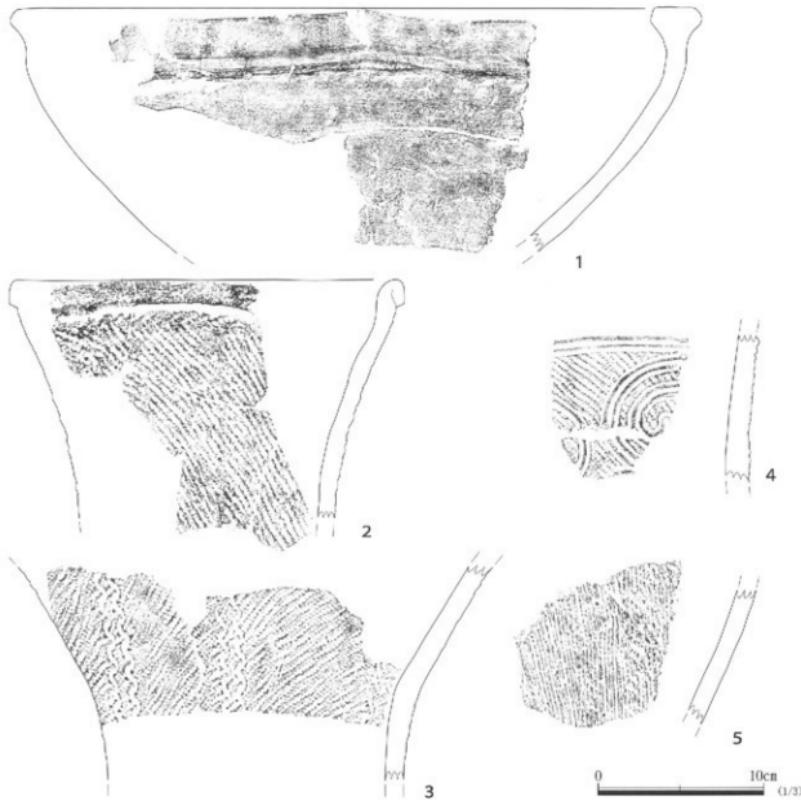
2は、口縁上端部に隆帯が貼付けられ、隆帯と胴部に繩文が施文されている。

4は、炉の東脇から出土した。沈線は、半截竹管状の施文具によって施文されたと推定される。

時期 2や4の遺物などから繩文時代中期中葉と考えられる。



第 26 図 2755I 平面図・断面図



第27図 2755I 出土遺物

表12 2755I 出土 土器観察表

番号	遺物 No.	附位	器種	口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	文様・器面質感	時期 (形式)	備考 (接合関係)
1	2755I-13L	深井	<420>	(145)				口縁 部	圓文。		
2	2755I-16.074	深井	<440>	(147)				口縁 ～ 腹部	口縁部は跡荷を貼付け、折り返している。口西部陰唇上・眞 筋に圓文(單頭或複数)が施文される。	阿玉台IV 式	
3	2755I-16.074	深井		(131)				須部 ～ 腹部	地文絵吏圓文(單頭或複数)。		
4	2755I-16.074	深井		(90)				側部	沈痕による横位火、湯巻が施される。地文圓文(單頭或複 数)。	加曾利E 1式	
5	2755I-16.074	深井		(81)				側部	美濃が施される。		

袋状土坑

054SK (第28~31図、表13)

位置 A2区南東部、AF-32、AG-32グリッドに位置する。

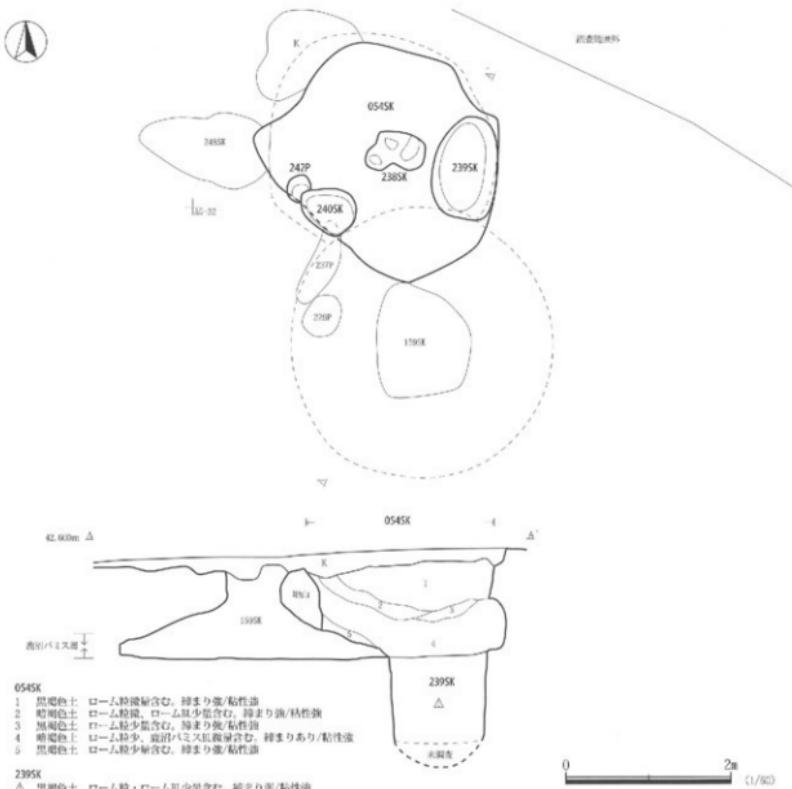
重複関係 159SKの南壁を、248SKの東壁を切る。調査時に遺構底面より小穴を検出し238SK、239SK、240SK、242Pと付したが、遺構覆土が類似する点など、整理調査時に再検討した結果本遺構の付帯施設として捉えた。

規模と平面形 開口部は長径3.77m、短径3.34mの円形、底面は長径3.44m、短径3.04mの円形で、深さは1.30mである。

壁 壁面は南壁から東壁にかけて開口部に向い弧を描きながら傾斜する。括れ部分は見られないが袋状を呈する。

床 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット 4基検出した。238SK、240SK、242Pは、長軸0.28~1.25m、短軸0.15~0.75mの梢円形で、深



第28図 054SK・239SK 平面図・断面図

さ 0.27 ~ 0.74 m である。239SK は、長軸 1.22 m、短軸 0.75 m の橢円形で、深さ 1.06 m である。

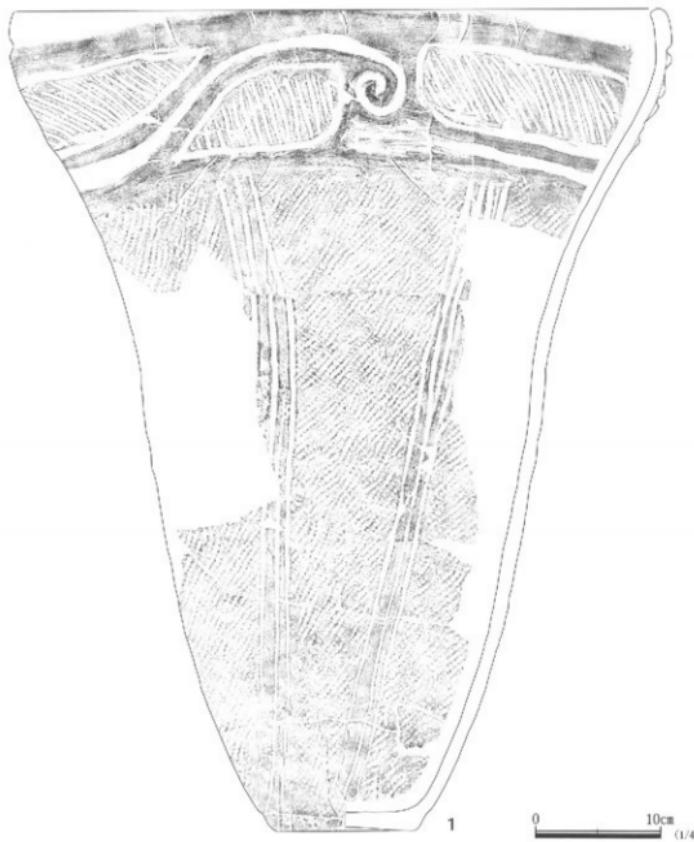
覆土 5 層に分層される。第 1 ~ 3 層は類似する。第 2・3 層は遺物を多く含み、第 2 層はロームブロックを少量含む。第 4・5 層の下層も遺物を多く含む。遺物の含有状況などから人為堆積と考えられる。239SK は単層である。遺構底面は、鹿沼バニス層直上に位置する。

遺物 実測遺物は 4 点である。

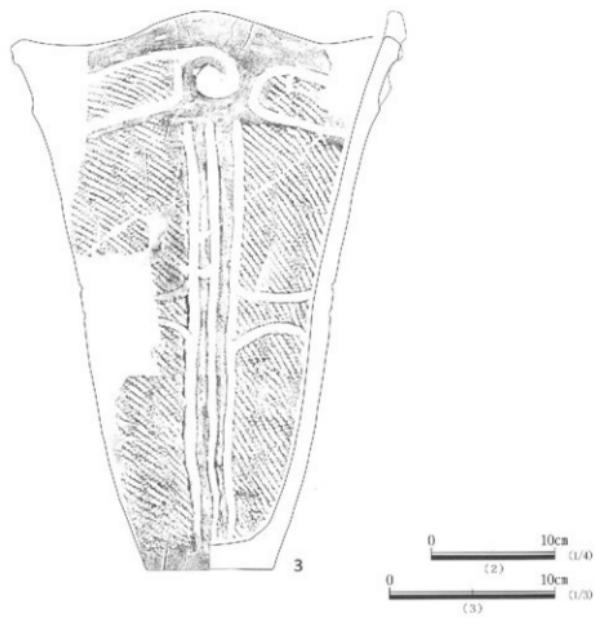
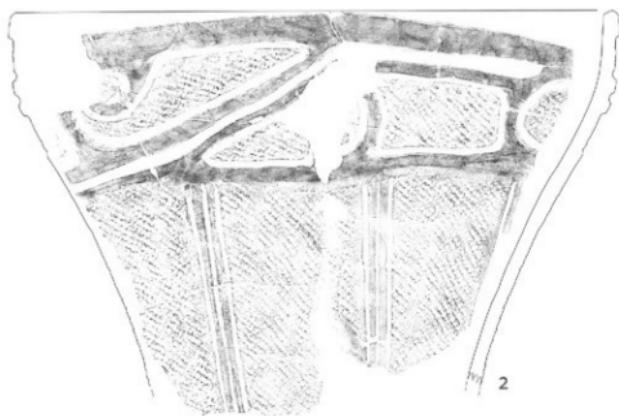
1 は、胴部は懸垂文間に磨り消しが施されるが、磨り消しは明確ではない。口縁部の区画内に縦位・斜位の沈線が描かれる。2 は、口縁部の区画内に縄文が施される。

3 は、胴部は懸垂文の間に沈線が弧を描いて横位方向に施される。4 は、胎土に金雲母を多く含む。

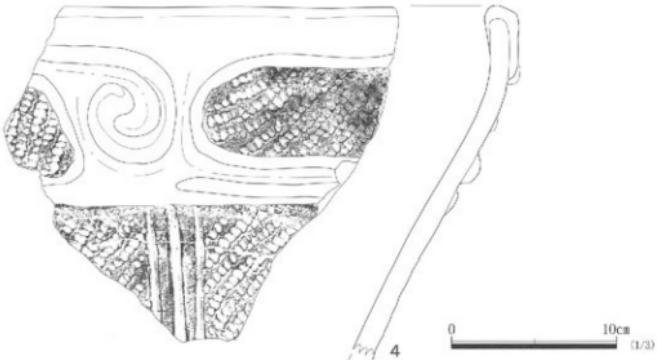
時期 出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第 29 図 054SK 出土遺物 1



第30図 054SK出土遺物2



第31図 054SK出土遺物3

表13 054SK出土 土器観察表

番号	遺物 名	層位	器種	口径 (m)	器高 (m)	底径 (m)	最大径 (m)	部位	文様・器面調査	時期 (式)	縁考(接合関係)
1 054SK	覆土	深鉢	(G23)	0.76	1.12			口縁部は口縁を施された縦巻で済巻、縫円形区画が施される。胴部は3本一組のオノ模による蒸煮文が施される。直腹文筒を施り前半は縫文縁文(三道目縁文)。	加曾利E Ⅲ式		
2 054SK	覆土	深鉢	(G44)	0.77				口縁部は口縁を施された縦巻で済巻、縫円形区画が施される。区画内縁文(平葉山形縁文・庚午)が施される。胴部は3本一組の 垂文、蒸煮文筒を施り前半は縫文縁文(三道目縁文)。	加曾利E Ⅲ式		
3 054SK	覆土	深鉢	(G44)	0.81	0.78			口縁部は口縁を施された縦巻で済巻、縫円形区画が施される。区画内縁文(平葉山形縁文)が施される。底面下に縫巻による済巻 (右直引)。縫部付近による3本一組の蒸煮文を施し縫争文筒を施す。底面縫文 (平葉山形縁文)。	加曾利E Ⅲ式もしく はⅣ式		
4 054SK	覆土	深鉢	(D24)					口縁部は沈縁を施された縦巻で済巻、縫円形区画。区画内には 縁文(平葉山形縁文)が施される。胴部は3本一組のオノ模による 蒸煮文を施し蒸煮文筒を施す。縫文縁文(平葉山形縁文)。	加曾利E Ⅲ式	底土: 金雲母多	

058SK (第32・33図、表14・15)

位置 A2区南東部、AH-30、AH-31、AI-30、AI-31グリッドに位置する。

重複関係 173SKの東壁を切る。

規模と平面形 開口部は径1.52mの円形、底面は径1.56mの円形で、深さは0.86mである。

壁 開口部に向い内側に弧を描いて傾斜する。断面形は袋状を呈する。

底 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

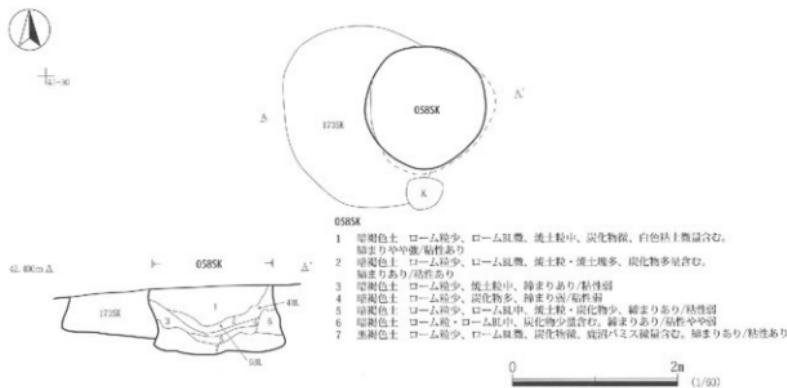
覆土 7層に分層され、第2層は焼土を、第4層は炭化物を多量に含む。第2層からは焼土を多量に検出しており、焼上層が全体に抗がる点、被熱した土器片を検出する点から遺構内で火が燃やされたと推定される。また、第6層から第7層にかけて掘り込みが見られる点から、第6層が堆積した時点での掘り込みを行ない火が燃やされたと考えられる。遺構底面は、鹿沼バミス層直上に位置する。

遺物 実測遺物は4点である。1は、口縁部に楕円形の区画が施され、胴部の縫垂文間は縫文が磨り消される点などから加曾利E III式の土器である。

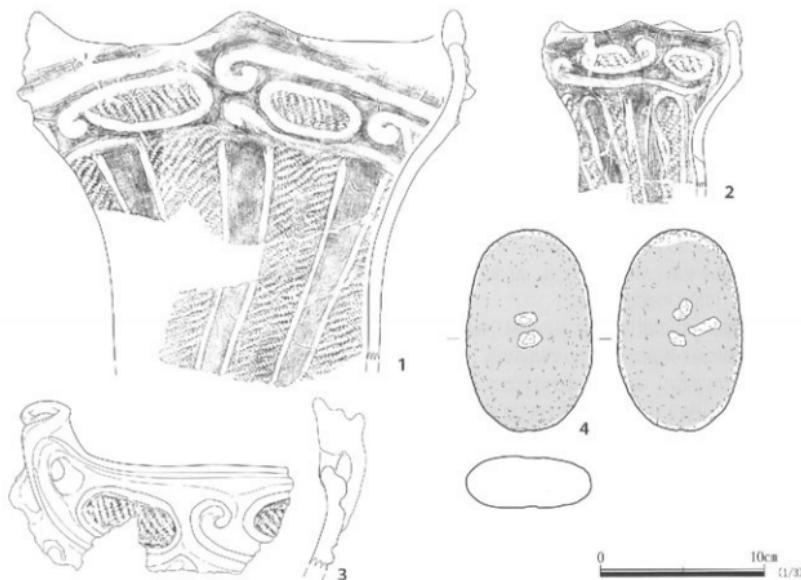
3は、012SK出土遺物第14図-2と類似することなどから加曾利E II式もしくはE III式と考えられる。

4は多孔質安山岩製の磨石・敲石である。両面の大部分に磨痕を残し、中央部につぶれが認められる。

時期 出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第32図 058SK 平面図・断面図



第33図 058SK 出土遺物

表14 058SK出土 土器観察表

番号	層位	基盤	口径 (mm)	測定 (mm)	底径 (mm)	最大厚 (mm)	部位	文様・表面調査		周囲 (形式)	備考(接合関係)
1 058SK	4III	深鉢	(280)	(215)		(280)	口縁 ～ 胴部	波状口縁(4段)。頂部隆起による凸部。口縁部内側灰 青色が施される。肩内側露文(单脚柱積文)。	加賀型灰 青式		
2 058SK	6III	深鉢	122	(102)			口縁部 ～ 胴部	波状口縁(4段)。口縁部内側灰が施される。 区画内露文(单脚柱積文)。胴部は2段の沈線による 露文を施し露文開きあり。底面露文(单脚柱積位)。	加賀型灰 青式		
3 058SK	4III	深鉢			106		口縁部	波状口縁(4段)。波状内側灰上巻状記述。 区画内露文(单脚柱積文)が施される。	古伊勢灰式 もしくは青式		

表15 058SK出土 石器観察表

番号	遺構 名	層位	石種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	鑑定	保存率	特徴	備考
1 058SK	2層	磨石・敲打	124	76	32	413	多孔質岩山河	○	100%	両面磨擦	両面中央に複雑なつぶれ	
058SK	4BL	石皿?	105	84	41	522	ガラス質黑色安 ^ナ 井 ^イ	○	100%		表面風化	
058SK	覆土	剥片	45	32	8	7	チャート		100%			
058SK	覆土	剥片	30	20	2	1	粘板岩		100%			
058SK	覆土	磨石・敲石	(71)	(83)	(16)	(381)	安山岩		50%	両面に磨痕	両面中央に敲打痕	

064SK (第34～36図、表16・17)

位置 A2区南東部、AH-30 グリッドに位置する。

重複関係 遺構上部中央は搅乱を受ける。323SKの上部を切る。323SKと当初同一遺構と捉えたが、覆土の混人物の違いや064SKの覆土第4・3層がほぼ水平に堆積することなどから別遺構とした。

規模と平面形 開口部は径 2.02～2.60 m の円形、底面は 2.20 m～2.50 m の円形で、深さは 0.67 m である。

壁 壁面は開口部に向い内側に傾斜する。断面形は袋状を呈する。

底 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

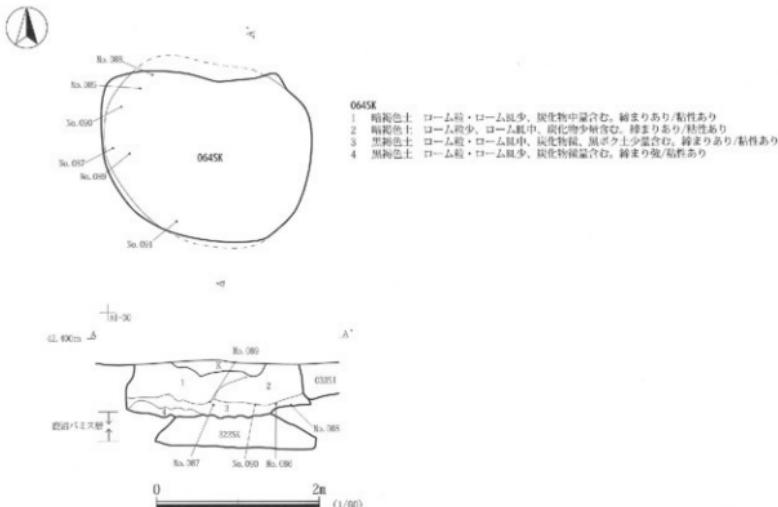
覆土 4層に分層された。第1・2層は交互に堆積している。第3・4層は黒褐色土を呈し、遺構底面袋状に広がる部分に水平に堆積しており意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。第3・4層からは逆位に設置された遺物が多く出土し、意図的に埋設したと考えられる。第1～4層は堆積状況などから人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バミス層直上に位置する。

遺物 実測遺物は7点である。遺構北西壁際の底面直上からは遺物が多く出土した。1～6は第3・4層から逆位で出土した。

1は、口縁部に波文が施される。波文は沈線により△形に連続的に描かれる。

5は、口縁部に隆脊によるクランク文が施され、胴部は沈線による文様が描かれる。沈線は、半截竹管状の施文具によって施文されたと推定される。口縁部クランク文は065SK出土遺物3や9・10と類似し、体部は文様や施文具が065SK出土遺物1・2と類似する。

6はチャート製の搔器である。分厚な横長剥片の上部を素材とする。右側縁に折断加工を施し、左側縁は背腹両面に調整剥離が認められる。刃部は下端の折断面を打面とした腹面側からの調整剥離によって作出され、刃縁



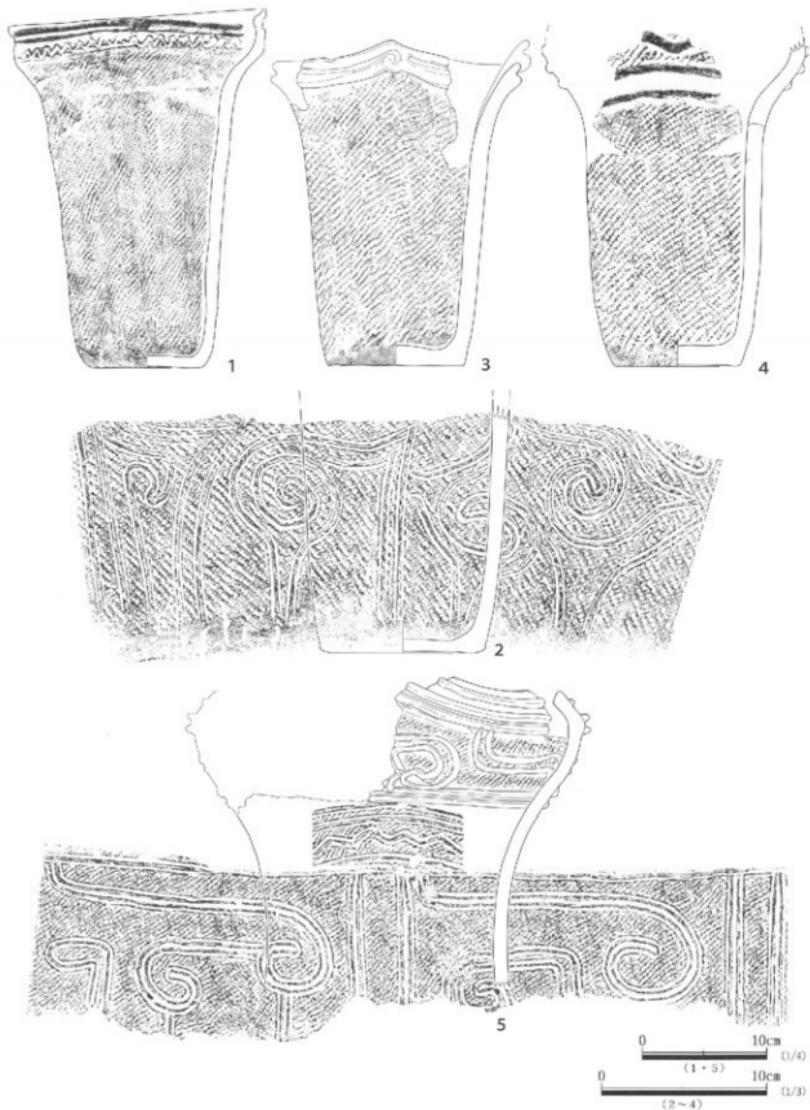
第34図 064SK 平面図・断面図

表16 064SK出土 土器観察表

番号	遺構 名	層位	断面	口径 (mm)	周長 (mm)	底径 (mm)	最大厚 (mm)	部位	文様、器面調査	助脚 (形式)	備考(接合関係)
1	064SK	So. 088	深鉢	209	294	85		口縁部 ～ 底部	口縁部は、旋削による波紋が施される。口唇部無文帯は外へ浅く延びる。		
2	064SK	So. 087	深鉢	156	90	(127)		側面 ～ 底部	側面は沈削による横文、凸脊等が強かれる。	加賀利E I 式	欠損部は丁寧に打ち欠かれている。
3	064SK (So. 081)	深鉢	(147)	200	83			口縁部 ～ 底部	波状口縁(波数不明)。口縁部無文帯が付設される。地文縦文(単線紅褐色)。	加賀利E I 式	
4	064SK	So. 089	圓鉢		(203)	76	(163)	口縁下部 ～ 底部	口縁下部は陰帶點刻による横文、波紋が施される。地文縦文(単線紅褐色)。	加賀利E I 式	
5	064SK (So. 086)	圓鉢				(315)		口縁部手前、口縁部は開口によるクラunk文、溝巣が施される。全体は沈削による横文、波紋が施される。地文縦文(単線紅褐色)。	加賀利E I 式		

表17 064SK出土 石器観察表

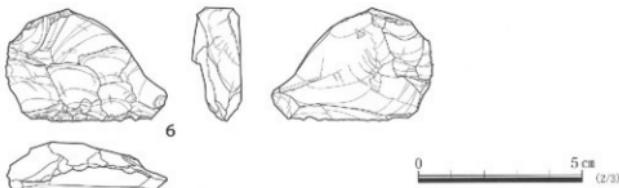
番号	遺構 名	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	鑑定	着存率	特徴	備考
6	064SK	覆土	側面	35	49	15	27	チャート	100%		
095SK	覆土	二次加工を有する剝片	58	48	15	42	チャート	100%		上端部に腹面から調整剖面	
064SK	覆土	二次加工を有する剝片	51	42	15	29	チャート	100%		左側縁に腹面から調整剖面	



第35図 064SK出土遺物1

はわずかに屈曲する。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第36図 064SK 出土遺物 2

065SK (第37~44図、表18・19)

位置 A2区南東部、AG-29、AH-29グリッドに位置する。

重複関係 328SK 東側を、331SK 南側を切る。033SIに遺構東壁上部を切られる。

規模と平面形 開口部は長径 1.98 m、短径 1.72 m の梢円形、底面は径 3.06 ~ 3.21 m の円形で、深さは 1.52 m である。

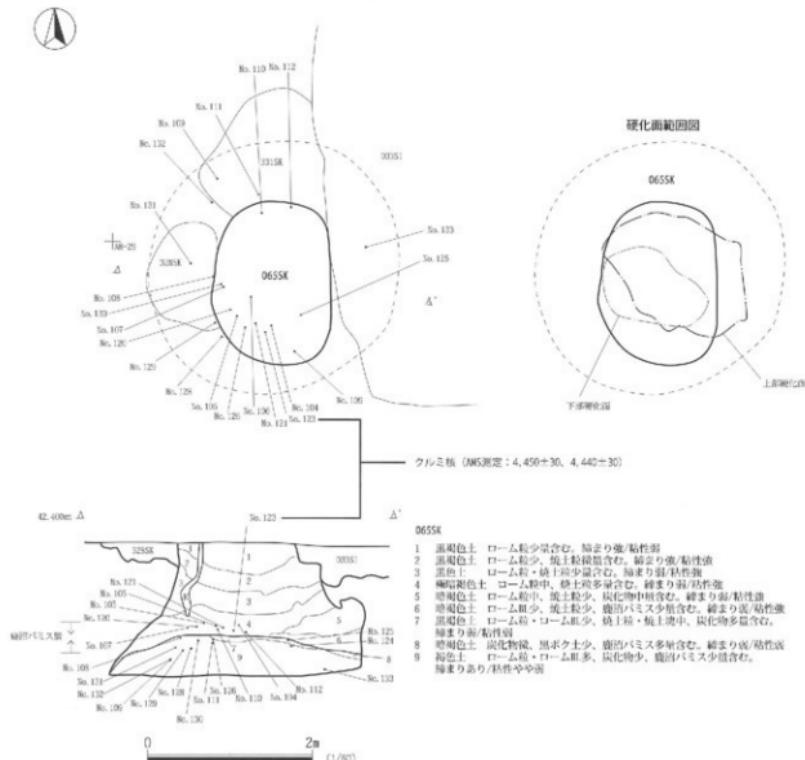
壁 開口部に向い傾斜し、断面形はフラスコ状を呈する。東側壁面は、上部を奈良・平安時代の住居跡に切られ、その影響で不定形を呈すと推定される。

底 底部からは硬化面を 2 面検出した。2 面の硬化面は平面的にはほぼ同じ箇所に存在し、開口部の直下に位置する。規模は長径 1.76 m、短径 1.64 m である。上部の硬化面は遺構中央部にかけ盛り上がり、ローム土を主体とする。硬化面上部からは土器が遺構西壁へ押し流されるように個体がまとまって出土した。上部の硬化面より 0.20 ~ 0.50 m 下位の地山直上からは 2 枚目の硬化面を検出した。下部の硬化面はほぼ平坦であり、遺物は 1 個体を検出した。

覆土 9 層に分層される。第 1 ~ 3 層は、遺構壁面の括れ部分の上に水平に堆積する。第 4 層は、極暗褐色土を呈し焼土を多く含む。遺構底面が袋状に広がる部分に入り込んで堆積しており意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。遺物を特に多く含む遺構西壁では覆土の綿まりが弱かった。第 5 ~ 6 層は、東壁の袋状に広がる部分に堆積する。第 7 ~ 8 ~ 9 層は、遺構中心部に向かい盛り上がり上面が硬化する。第 8 層は、第 7 層に比べ鹿沼バミスを多量に含む。壁面からの崩落土の可能性が高い。第 9 層は褐色土を呈しローム粒・ロームブロックを主体とし混入物は少ない。第 9 層下部からも硬化面を検出した。第 1 ~ 9 層は堆積状況、混入物を均一に含む点などから人為堆積と考えられる。上部硬化面は鹿沼バミス層中に位置し、下部の硬化面は鹿沼バミス層下層のローム層に位置する。

遺物 灰測遺物は 22 点である。1 ~ 7、9 ~ 12、15 ~ 18、21 は、硬化面の中央が高いため断面図上のドットの位置は異なるが第 7 ~ 8 ~ 9 層上部の硬化面直上から出土した。

1 は、口縁部に隆帯による把手、突帯、溝巻が施される。一部欠損するが、口縁部の把手・隆帯等は 6 単位施されると推定される。胸部には、半截竹管状工具による沈線が描かれる。



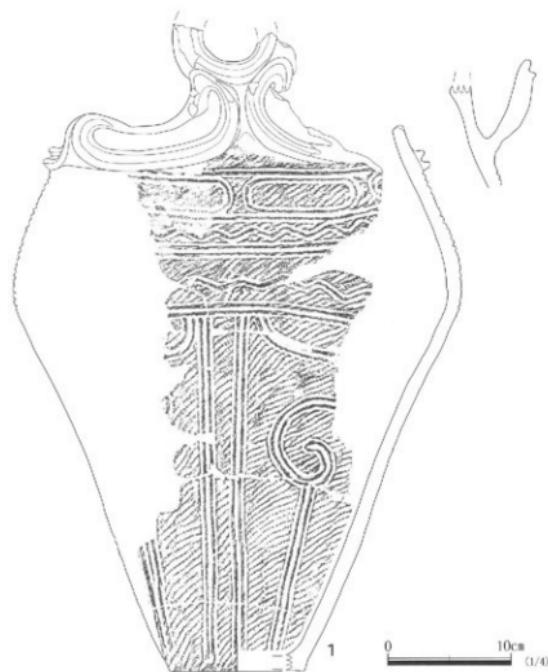
第37図 0655K 平面図・断面図

- 2は、頭部を水平に欠いており意図的に欠いたと考えられる。沈線は、半截竹管状工具による。
- 5は、口縁部は沈線が施され、体部の地文は撚糸である。頭部には、沈綫が6条施される。
- 6は、口縁部に交互刺突文が施され、いわゆる中縫式土器である。器形・文様構成などは064SK出土遺物1と類似する。しかし、口縁部の施文方法、綱目など細部は異なる。
- 7は、口線上端部に隆帯による捲曲が施され、4単位の波状口縁である。胴部は、沈線による幾何学的な文様が施される。胎土は赤みを帯び明褐色～赤褐色を呈する。
- 11、12は、口縁部に交互刺突文が施され、いわゆる中縫式土器である。12の口縁部の刺突は繩文を施文後に施されている。
- 14は、頭部より上端を欠いている。ほぼ水平に欠いており意図的に欠いたと考えられる。
- 15は、上部硬化面に横たわるように出土した。器内の土壤を水洗選別したところ炭化したオニクルミ核片を検出した。オニクルミ核片はAMS測定を行なったところ、測定結果が $4,450 \pm 30$ 、 $4,440 \pm 30$ と出た。

16は、口縁部の1箇所把手が付く。把手には隆帯により波文などが描かれる。口縁部は2組の隆帯によるクランク文が施される。

17は、遺構東端硬化面直上より逆位で出土した。器内は、土壤等は入り込んでおらず中空であった。意図的に逆位に埋設したものと推定される。口縁部は、ほぼ水平に丁寧に欠いており、意図的に欠いている。胴部上端には横位の沈線が、横位の沈線下部からは縱位の波文が施される。

20は蛇紋岩製の磨製石斧である。平面形は短冊形を呈する。刃部は片刃である。側面には裏面側からの調整



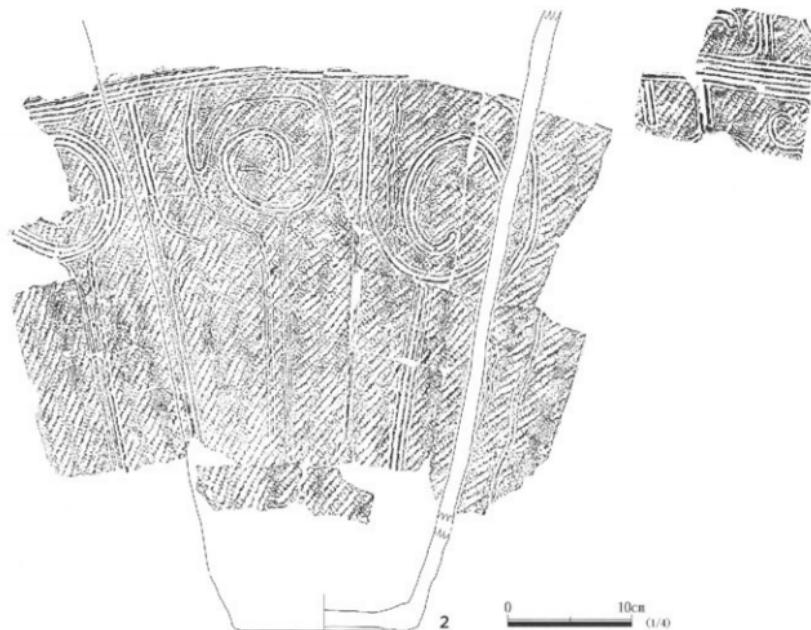
第38図 0655K 出土遺物 1

剥離痕が残る。刃縁には石器長軸に平行する擦痕と微細な刃こぼれが認められる。

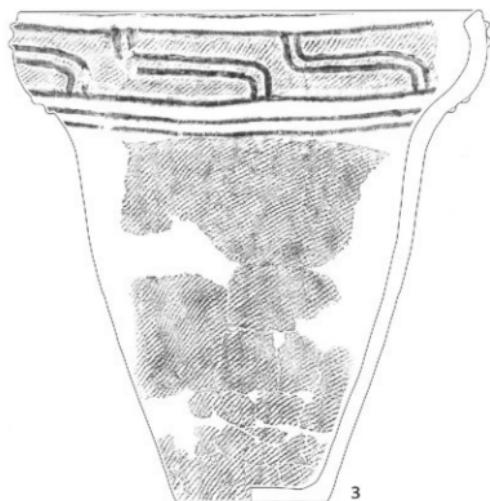
21は砂岩製の磨石・敲石である。裏面中央部の平坦面に磨痕が残る。下端部には敲打痕が認められる。石器全体に被熱によると思われる器面の荒れが確認できる。

22は安山岩製の磨石・敲石である。平面形は概ね円形を呈する。表裏面に磨痕が認められる。表面、下端部および右側面に敲打痕を残し、その器面は剥落している。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第39図 065SK出土遺物 2



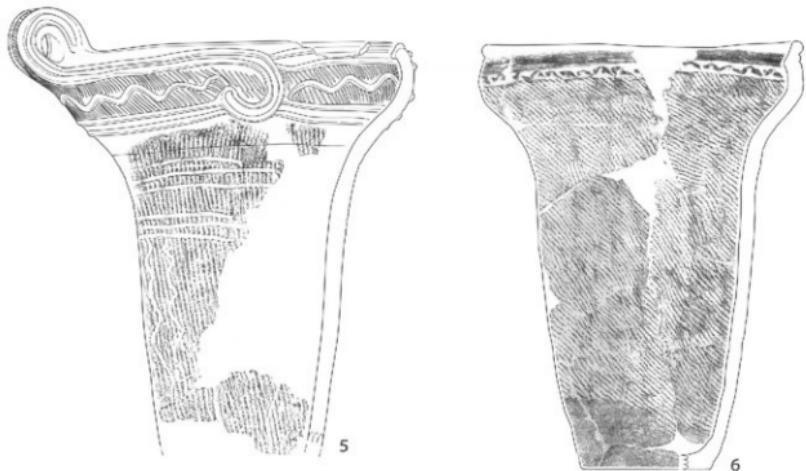
3



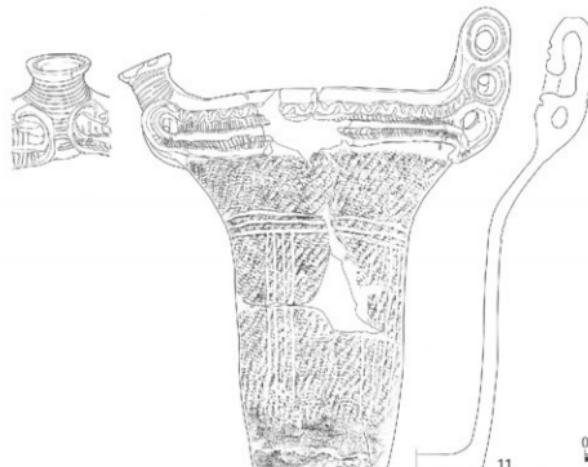
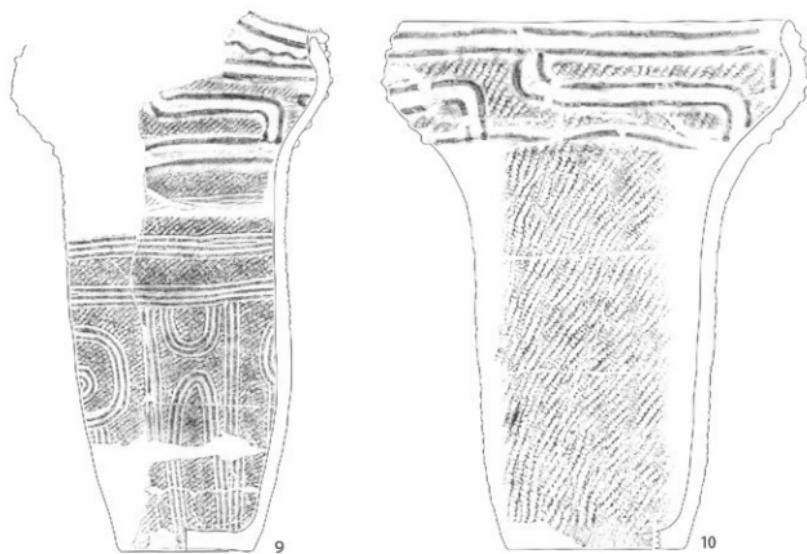
4



第40図 065SK 出土遺物 3

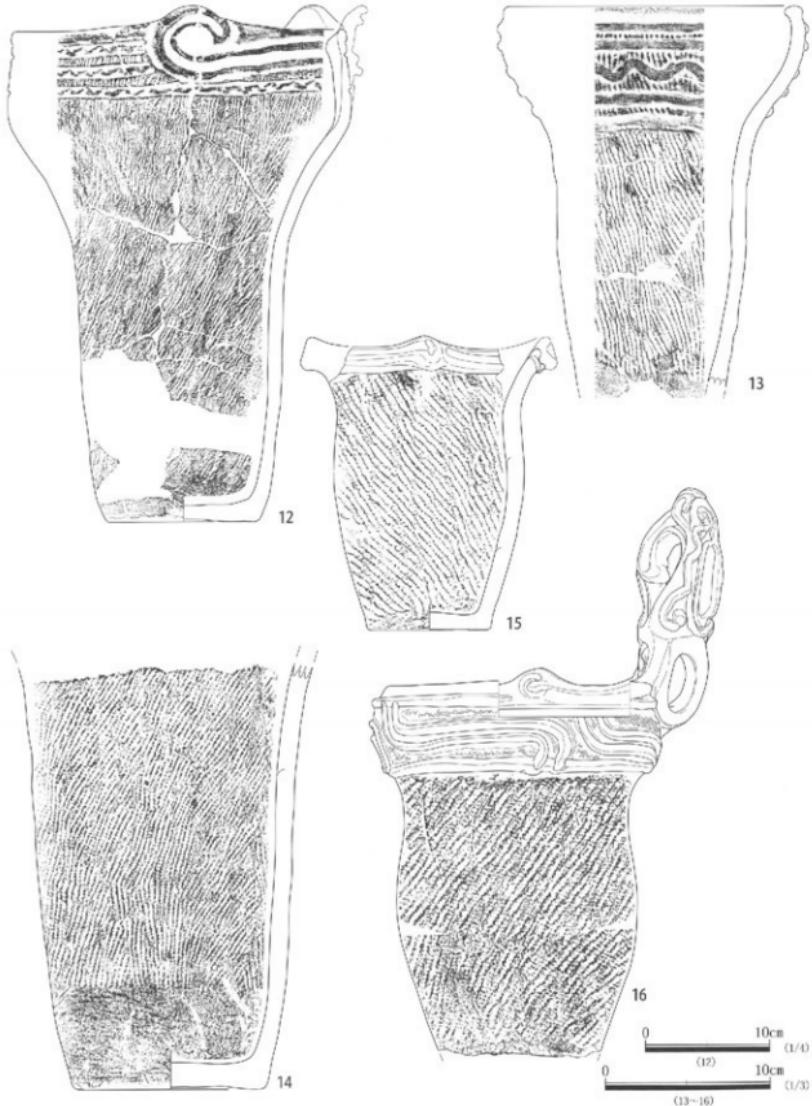


第41図 065SK出土遺物4

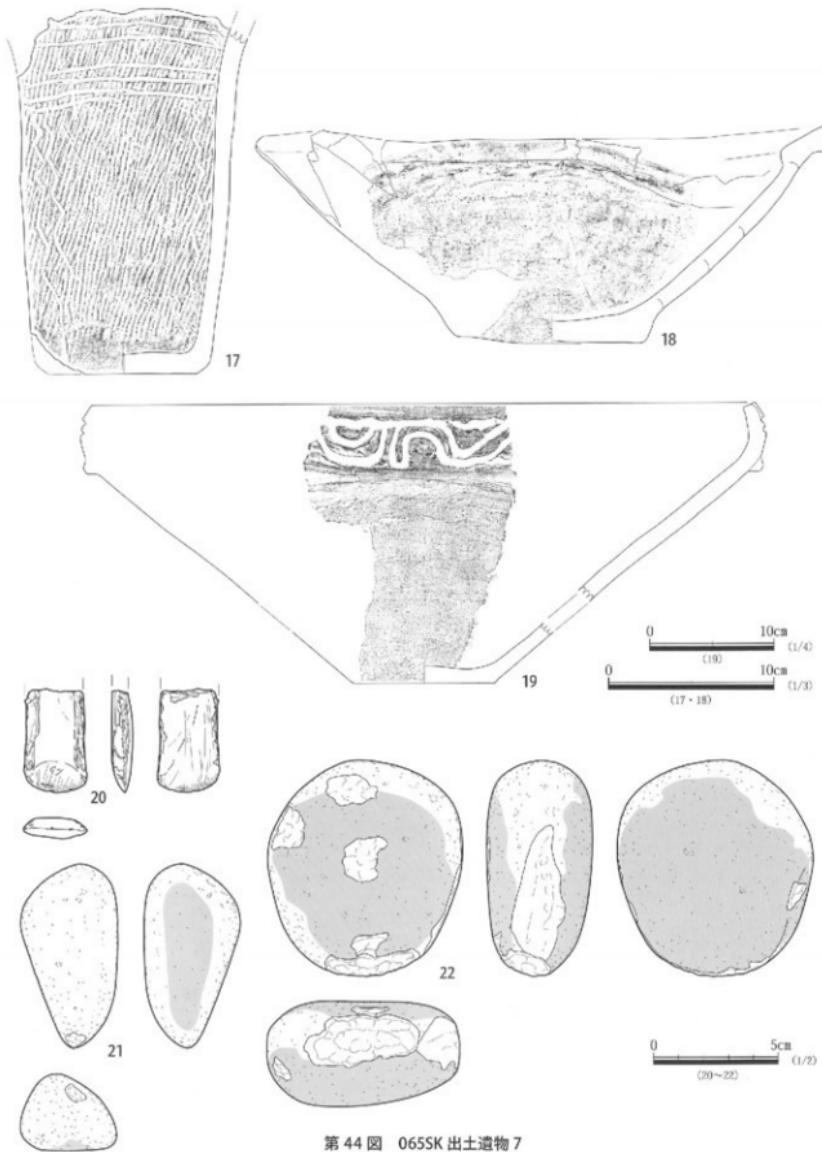


0 10cm 1/3
(9+11) 10cm 1/3
0 10cm 1/3
(10)

第42図 0655K 出土遺物 5



第43図 065SK出土遺物6



第44図 065SK出土遺物7

表 18 065SK 出土 土器觀察表

番号	通鑑 類別	層位	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	部位	文様・器面状態	時期 (形式)	備考 (複合陶体)
1 065SK No.109	深鉢	(533) (110)	(362)	口縁 ～ 底部	I型縦葉文。口縁部陥凹による把手下、突張、溝筋、口縁部横筋。 底位文、腹重文、渦巻等が施される。地文彫文(半筋鉢底)。	加曾利Ⅰ 式					
2 065SK No.111	深鉢	(510)	150	脚部 底部	脚部に沈線による無葉文、渦巻等が施される。地文彫文(單脚鉢底)。	加曾利Ⅰ 式					
3 065SK No.109-1	深鉢	(370) (405)	120	口縁	I型縫部は腰帶によるクランク文が施される。地文彫文(半筋鉢底)。	加曾利Ⅰ 式					
4 065SK No.121	深鉢	(430)	126	脚部 底部	脚部は腰帶が貼付けられ、腰帶中央には凹みが施される。脚部はやや紺み茶漆が施される。	不明					
5 065SK No.129	深鉢	330	(361)	口縁 ～ 脚部	口縁部は腰帶による無葉文、渦巻等が施される。地文彫文(半筋鉢底)。	加曾利Ⅰ 式					
6 065SK No.120	深鉢	237	352	(105)	264	～ 底部	口縁部腰帶貼付、交叉刻文文。地文彫文(单筋CR縫位)。	中峰式			
7 065SK No.104	深鉢	(250) (331)	98	口縁 ～ 底部	波状口縁(4個)、I型縫部は比縫による渦巻が施される。脚部に一部斜め文、底位文、渦巻等が施される。地文彫文(单脚CR縫位)。	大木式					
8 065SK 181	深鉢	(240)	372	(110)	(290)	口縁 ～ 底部	口縁部は腰帶貼付によるクランク文、渦巻等が施される。I型縫部腰帶下から脚部に腰帶による無葉文が施される。脚部に1本、脚部に沈線による無葉文が施される。地文彫文(单筋CR縫位)。	加曾利Ⅰ 式			
9 065SK No.126 No.128	深鉢	237	429	105	261	口縁 ～ 底部	口縁部は腰帶貼付によるクランク文、渦巻等が施される。脚部に浅縫による無葉文、底位文、渦巻等が施される。地文彫文(单筋CR縫位)。	加曾利Ⅰ 式			
10 065SK No.112	深鉢	(234)	325	(108)	(260)	口縁 ～ 底部	I型縫部腰帶による無葉文(渦巻取り消し)。口縁部は腰帶によるクランク文、模様文が施される。地文彫文(单筋CR縫位)。	加曾利Ⅰ 式			
11 065SK No.107	深鉢			口縁 ～ 底部	口縫部腰帶手すき痕、I型縫部が削変形。I型縫部腰帶による渦巻等が施される。脚部に浅縫による無葉文、底位文、渦巻等が施される。脚部には一部の先端部に腰帶による無葉文が施される。地文彫文(单筋CR縫位)。	中峰式					
12 065SK No.105	深鉢	(207)	425	120	279	口縁 ～ 底部	波状口縁(2個・非對稱)、設置部は腰帶による渦巻が施される。脚部に浅縫等が施される。脚部には一部の先端部に腰帶による無葉文が施される。地文彫文(单筋CR縫位)。	中峰式			
13 065SK 一絃	深鉢	180	(235)			口縁 ～ 脚部	I型縫部は腰帶にかけて、腰帶による無葉文、波文が施される。地文彫文(無筋CR縫位)。	加曾利Ⅰ 式			
14 065SK No.133	深鉢	(174)	(256)	117		脚部 ～ 底部	口縫から脚部を欠損する。地文彫文(单筋位)。	加曾利Ⅰ 式	欠損部はささいに欠けており、人為的に少いと看美られる。脚部のミキガリ丁寧に行なわれている。裏蓋部が少しこぼれています。		
15 065SK No.123	深鉢	(157)	(181)	74		口縫 ～ 底部	前伏(横)(頭は3-4cm)。口縫部に腰帶付。地文彫文(单筋腰帶)。底位文代わり有り。	加曾利Ⅰ 式	器内の上を水洗過刷したところ 炭化したクルミを発見した。		
16 065SK No.128	深鉢	156	(351)			口縫 ～ 底部	口縫部腰帶手すき痕、口縫部腰帶によるクランク文が施される。地文彫文(单筋CR縫位)。	加曾利Ⅰ 式			
17 065SK No.106	深鉢	(152)	(225)	95		脚部 ～ 底部	脚部に半筋に肩部の沈線が施される。脚部横筋の沈線下から、2本、脚部の沈線による無葉の波文が施される。地文(盤文)。	加曾利Ⅰ 式			
18 065SK No.110	浅鉢	(348)	133	110		口縫 ～ 底部	地文。	加曾利Ⅰ 式			
19 065SK 一絃	浅鉢	(560)	(230)	116		口縫 ～ 底部	口縫部、腰帶沿付。口縫部沈線によるモチーフが施される。				

表 19 065SK 出土 石器観察表

番号	遺構 NO.	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	断面 凍字半	特徴	備考
	065SK	3層	微小剥離を有する刮片	(23)	(12)	(5)	(1)	チャート	10%	辺に微小剥離	
	065SK	3層	刮片	(28)	(25)	(10)	(7)	石英	○	上部欠損	
	065SK	3層	刮片	(31)	(22)	(11)	(6)	石英		20%	
	065SK	1BL	磨石	(11)	(94)	47	(660)	安山岩	○	背面・片面に擦痕・被熱	
22	065SK No.104	磨石・滾石	89	79	43	441		安山岩	○	両面磨削 平面・下端部・片面に敲打痕	
20	065SK	覆土	縫製石斧	(43)	26	9	(18)	粘板岩		短形 平刃 刃縁に微小剥離 基部欠損	
21	065SK	覆土	磨石・滾石	76	40	32	129	砂岩		100% 片面磨削 下端部に敲打痕・被熱	
	065SK	覆土	磨石	65	48	46	204	頁岩		100% 全面に磨痕	
	065SK	覆土	滾石	(88)	(52)	(44)	(302)	安山岩	○	40% 端部に微細なぶれ	
	065SK	覆土	刮片	(90)	(75)	(14)	(77)	粘板岩	○	上部欠損	
	065SK	覆土	刮片	68	26	7	(12)	粘板岩		80% 上部欠損	
	065SK	覆土	微小剥離を有する刮片	48	31	7	12	粘板岩	○	右側縁に微小剥離	
	065SK	覆土	不明	80	61	25	111	砂岩	不明	器底の一部に擦痕	

078SK (第 45・46 図、表 20)

位置 A 21×中央部、AC-26、AC-27、AD-26、AD-27 グリッドに位置する。

規模と平面形 開口部は長径 1.80 m、短径 1.66 m の楕円形、底面は径 2.20 m の円形で、深さは 0.74 m である。

壁 壁面は開口部に向い内側に傾斜する。断面形はフラスコ状を呈する。

底 平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット 遺構南側底面からはピット 1 基を検出した。P1 は、径 0.38 m の円形で、深さ 0.51 m である。

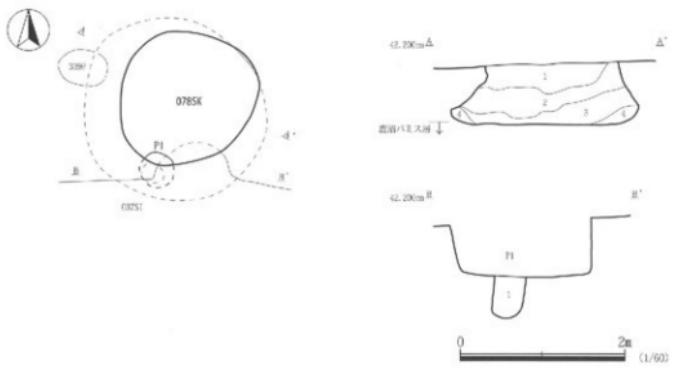
覆土 4 層に分層された。第 3・4 層は遺構底面袋状に広がる部分に南東から北西へ傾斜して堆積する。第 1・2 層も同様に傾斜して堆積する。第 1～4 層は、ローム粒、ロームブロックを均一に含むことなどから、人為堆積と考えられる。焼上・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バミス層直上に位置する。

遺物 実測遺物は 4 点である。

1 は、口縁部に交互刺突文が施されることなどからいわゆる中韓式土器と推定される。

2 は、口縁部に隆縁によるクランク文が施される。4 は、口縁部から底部まで、柳状工具による沈線で、縦位の波紋が施される。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



- 0785K
- 1 暗褐色土。ローム粒少、ローム粗面。炭化物少含む。
練まりあり/粘性あり。
 - 2 明褐色土。ローム粒・ローム粗少、炭化物微量含む。
練まりあり/粘性あり。
 - 3 黒褐色土。ローム粒・ローム粗・炭化物・泥炭バニス
微量含む。練まり張/粘性強
 - 4 明褐色土。ローム粒多、ローム粗中、泥炭バニス少含む。
練まり強/粘性やや柔
- P1
- 1 暗褐色土。ローム粒・ローム粗少。燒土粒・燒土塊・炭化物
微量含む。練まりあり/粘性あり。

第45図 0785K 平面図・断面図

表20 0785K出土 土器観察表

番号	遺構 ID.	透位	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	最大復 (cm)	部位	文様・器形測定	時差 (形式)	備考(接合面)
1	0785K	浅土	浅鉢	372	220	(120)		口縁 底部	口縁輪廓文帯。口縁部は交互輪廓文が施される。底部下は 沈縫による横凹円。済巻が施される。脈動痕無。	中神式	
2	0785K	浅土	深鉢	266				口縁 ～ 側部	波次口縁(例は1つのみ残る)。口縁等無文。底部は消 長、口縁部は側部によるクラシック文が施される。側部発帶部 付。済文縫文(革縫既縫)。	加賀村 式	
3	0785K	浅土	深鉢	240	(180)			口縁	波次口縁(2回)。底部に孔を有する。済文縫文(革縫既縫)。阿 元台N 式		
4	0785K	浅土	深鉢	208	301	124	233	口縁 ～ 底部	口縁部から底部にかけ沈縫による縦位の段文が施される。		



第46図 078SK出土遺物

095SK (第 47・48 図、表 21)

位置 A2 区中央南部、AC-24、AC-25 グリッドに位置する。

重複関係 039SI に南壁を切られる。

規模と平面形 開口部は長径 2.22 m、短径 1.85 m の楕円形、底面は長径 2.32 m、短径 2.09 m の楕円形で、深さは 0.32 ~ 0.40 m である。

壁 開口部に向い内側に傾斜し、断面形は袋状を呈する。

底 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

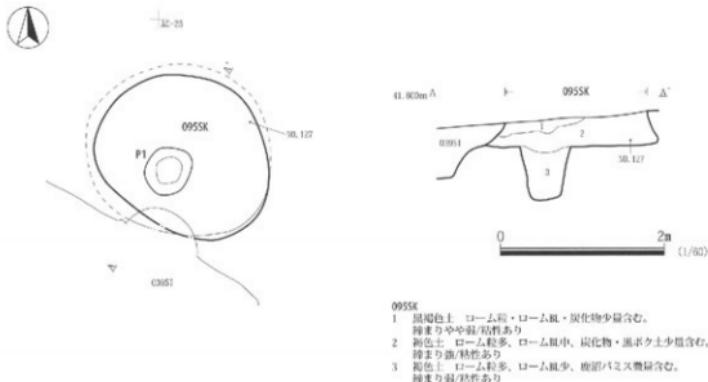
ピット 底面中央部からはピット 1 基を検出した。P1 は、径 0.52 ~ 0.64 m の円形で、深さ 0.57 m である。

覆土 3 層に分層された。第 3 層は P1 の覆土である。ローム・炭化物を均一に含み、039SI に南東部は切られるが、初期流入土は見られず、人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面北側からは深鉢 (No.127) が出土した。遺構底面は、鹿沼バニス層直上に位置する。

遺物 実測遺物は 2 点である。

1 は、遺構底面北側から出土した。胎土に金雲母を多く含む。2 は、ピット内から出土した。胴部は半截竹管状工具による沈線が施される。口縁は欠いている。

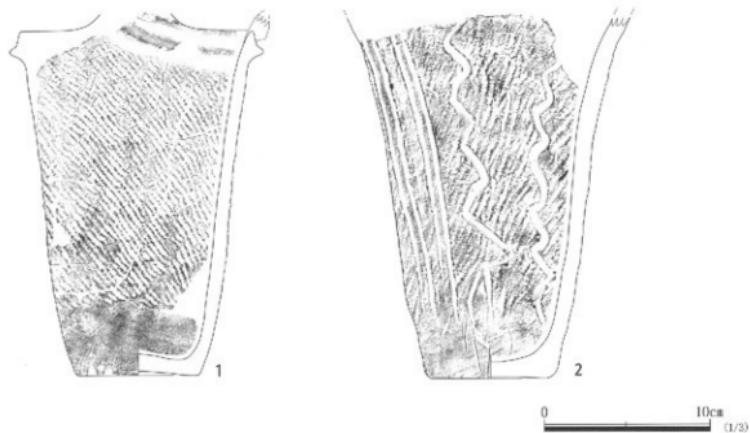
時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 47 図 095SK 平面図・断面図

表 21 095SK 出土 土器観察表

番号	造形	層位	剖面	口径 (m)	器高 (m)	底径 (m)	最大径 (m)	部位	文様・器面調査	割削 (形式)	備考 (接合関係)
1 095SK No.127	深鉢	(140)	(223)	74				剥離 底部	波状口縁か、口縁陥没跡。地文縄文 (3L横目)。	瓦玉台IV 式	胎土: 金雲母多。
2 095SK	III.	深鉢		(223)	72			剥離 ~ 底部	周縁は沈線による櫛印文が施される。地文縄文 (單部3L巻文)。	羽曾利E I式	



第48図 095SK出土遺物

102SK (第49・50図、表22)

位置 A2区北西部、AA-25 グリッドに位置する。

重複関係 103SK に西壁を切られる。遺構上面は擾乱を受ける。

規模と平面形 開口部は径 1.77 ~ 1.83 m の円形、底面は長径 2.98 m、短径 2.56 m の楕円形で、深さは 0.70 m である。

壁 壁面は開口部に向かい内側に傾斜し、断面形はフ拉斯コ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土 6 層に分層された。第 1 ~ 6 層はほぼ水平に堆積し、堆積状況などから人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バミス層中に位置する。

遺物 実測遺物は 2 点である。

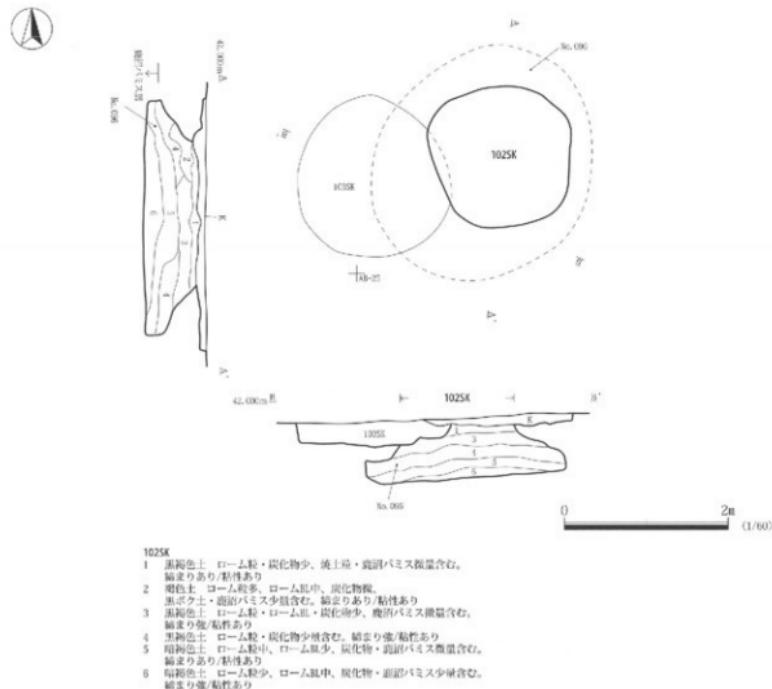
2 は、遺構底部面の北西隅から出土した。口縁部 5 箇所に隆起による突起が施される。突起の下には、隆起により横位の波文が施される。体部には、櫛状の工具による縱位の波文が施される。

図示はしていないが、いわゆる中峰式土器の頸部破片も 1 点出土している。

時期 2 や出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

表 22 102SK 出土 土器観察表

番号	遺構 M.	層位	断面	口径 (m)	器高 (m)	底径 (m)	最大径 (m)	部位	文様・器面質感	時期 (形式)	備考 (後合関係)
1	102SK	覆土	深鉢	2.57	3.59	1.32		底部	頂部伏線による凹凸。縄文圖文 (纵理位)。	前曾天王 式	
2	102SK M.096	深鉢	2.25	0.80	1.00			口縁 一部	波次 1 層 (G1P)。口縁部は断面三角状の隆起が波状に施される。底径の全縁が施される。	阿玉台形 式	底土：金賀貝多。



第49図 102SK平面図・断面図

105SK (第51・52図、表23・24)

位置 A2区北西部、Z-25、AA-25グリッドに位置する。

重複関係 101SKに東壁を切られる。遺構中央一部に搅乱を受ける。

規模と平面形 残存する開口部は長径1.92m、短径1.60mの楕円形、底面は幅2.61～2.77mの不定形で、深さは0.60～0.77mである。

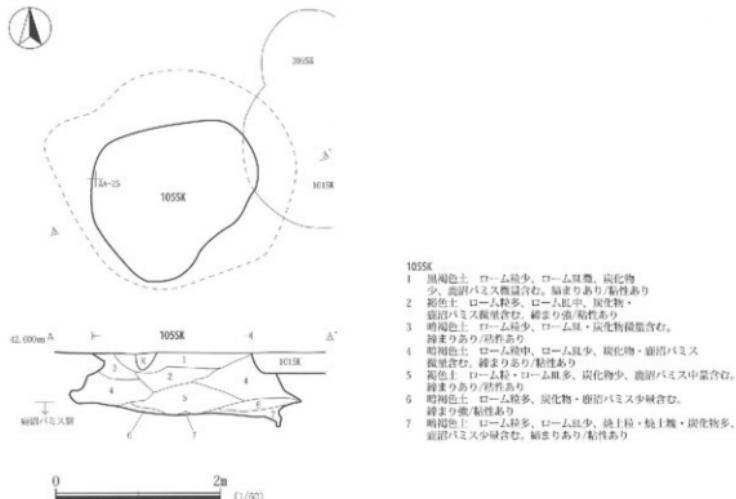
壁 開口部に向かい内側に傾斜し、断面形はプラスコ状を呈する。

底 やや東側へ傾斜し凹凸が見られる。硬化面は確認されなかった。

覆土 7層に分層された。第4・5層は底面から括れ部分に大きな単位で堆積する。第5層を入れた後に第4層



第50図 102SK出土遺物



第51図 105SK 平面図・断面図

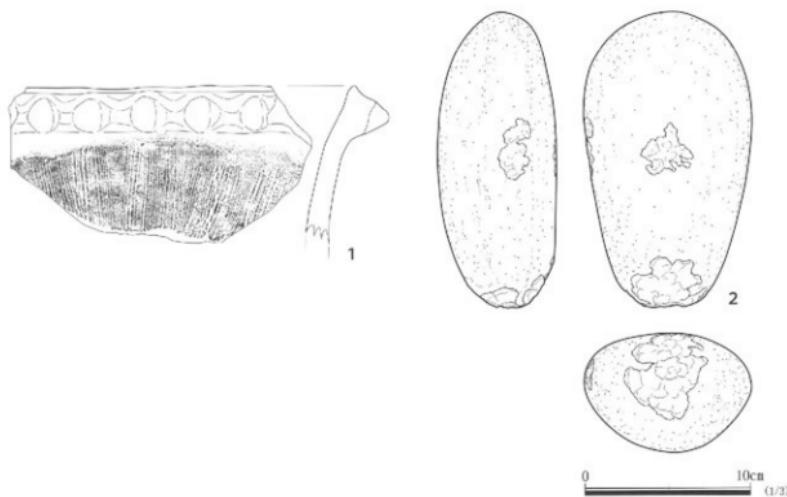
を袋状に広がる部分に入れると推定される。第7・6層は、東壁の袋状に広がる部分に入り込んで堆積しており、意図的に埋土上に遺構壁面にまで入れると推定される。第1～3層は第4～7層と覆土が類似すること、第1～7層の堆積状況や、ローム・炭化物・焼土粒の含有状況から、人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バミス層直上に位置する。

遺物 実測遺物は2点である。

1は、口縁部に隆帯が貼付けられ、隆帶には指頭圧痕が施される。胴部は条線が施される。図示はしていないが、口縁部に交互刺突が施されるいわゆる中挿式土器の破片や、胴部に半截竹管状工具による沈線で横位文・波文が描かれる加曾利E I式の土器の破片などが出土している。

2は安山岩製の敲石である。重量が2000 g以上の大形の製品である。表面の中央部、左側面の中央部および下端部に敲打痕が認められる。特に下端部の敲打痕は顕著で、器面の大きな剥落を伴っている。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第52図 105SK出土遺物

表23 105SK出土 土器観察表

番号	遺構 No.	層位	器種	口径 (cm)	周長 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	文様・施加状態	時期 (形式)	備考 (複合関係)
1	105SK	覆土	深鉢	(39)				口縁部	口縁部指痕压痕。圓形溝線。		

表24 105SK出土 石器観察表

番号	遺構 No.	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	既定 遺存率	特徴	備考
	105SK	覆土	磨石・敲石	(60)	(104)	(36)	(387)	砂岩	○ 5%	質面磨損 斧側面・下端部に敲打痕 被熱	
2	105SK	覆土	敲石	182	103	73	2230	安山岩	○ 100%	片面中央・片側面・下端部に敲打痕	
	105SK	覆土	尖製石斧	(60)	(22)	(11)	(21)	ホルンフェルス	60%	弧彎形 刃部欠損	

156SK (第 53・54 図、表 25)

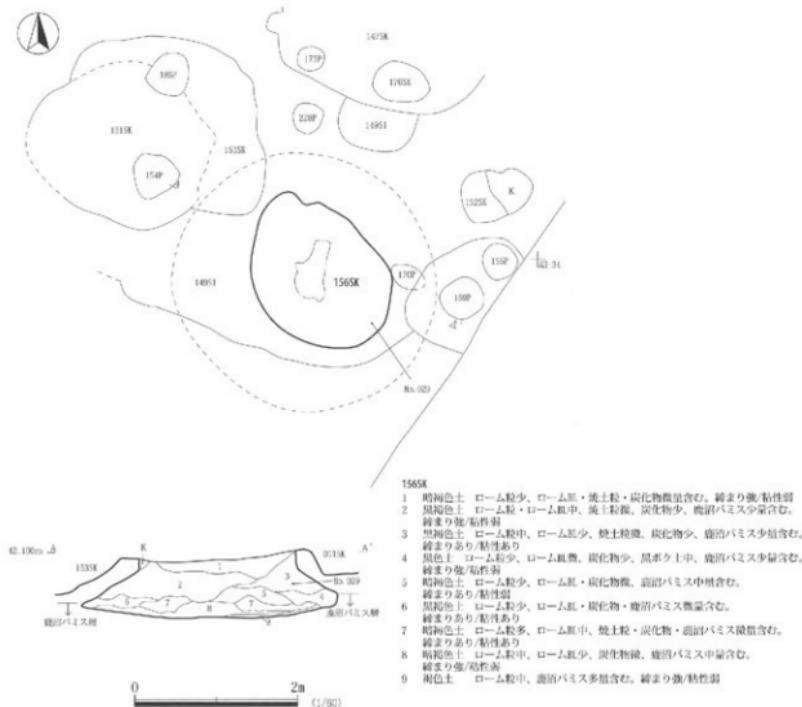
位置 A 2 区北東部隅、AG-33, AH-33 グリッドに位置する。

重複関係 149SI に構造上部を切られる。

規模と平面形 開口部は長径 2.07 m、短径 1.48 m の楕円形、底面は径 3.04 ~ 3.20 m の円形で、深さは 0.84 m である。

壁 開口部に向かい内側に平坦に傾斜する。断面形はフラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。硬化面を検出した。硬化面は開口部の直下に位置し、規模は長径 0.73 m、短径 0.32 m で、楕円形を呈する。また硬化範囲内は地山が赤変しており、雨水による酸化等が原因と考えられる。覆土が堆積する以前に一定期間上坑が開口していた可能性が考えられる。



第 53 図 156SK 平面図・断面図

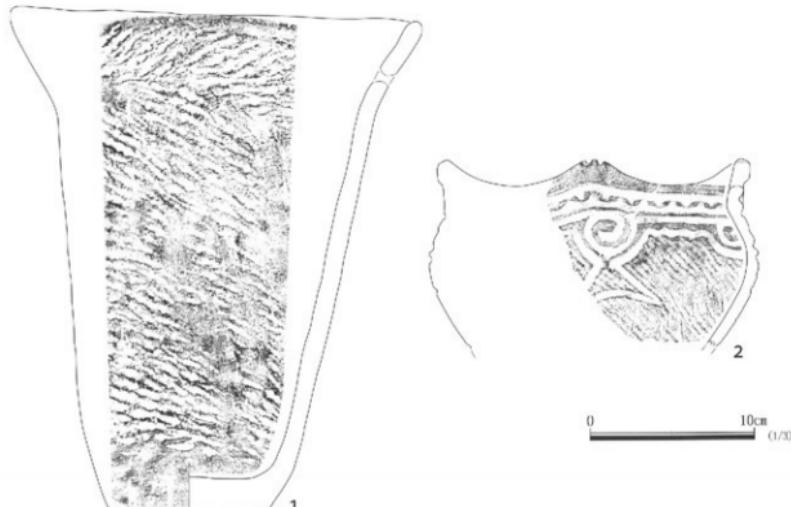
覆土 9層に分層される。第1・2層と第3層は、他の層に比べ大きな単位で相互に堆積する。第3層の遺構の括れ部分から完形に近い遺物（No.029）が出土した。第4・5層は、遺構東側遺構底面の袋状に広がる部分に堆積している。第6～9層は、遺構底面に敷きつめられる様に細かく堆積する。第1～9層は堆積状況などから人為堆積と考えられる。括れ部分第2・3層、遺構底面第9層から主に遺物が出土している。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バミス層中に位置する。

遺物 実測遺物は2点である。

1は、第3層の土坑の括れる箇所から底部を遺構壁面に引き込まれるような状態で出土した。縄文が施され、胎土には金雲母が多く含まれる。焼成後の穿孔が口縁部に1箇所穿たれる。

2は、口縁部に交互刺突文が施され、いわゆる中峠式土器である。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第54図 156SK出土遺物

表25 156SK出土 土器観察表

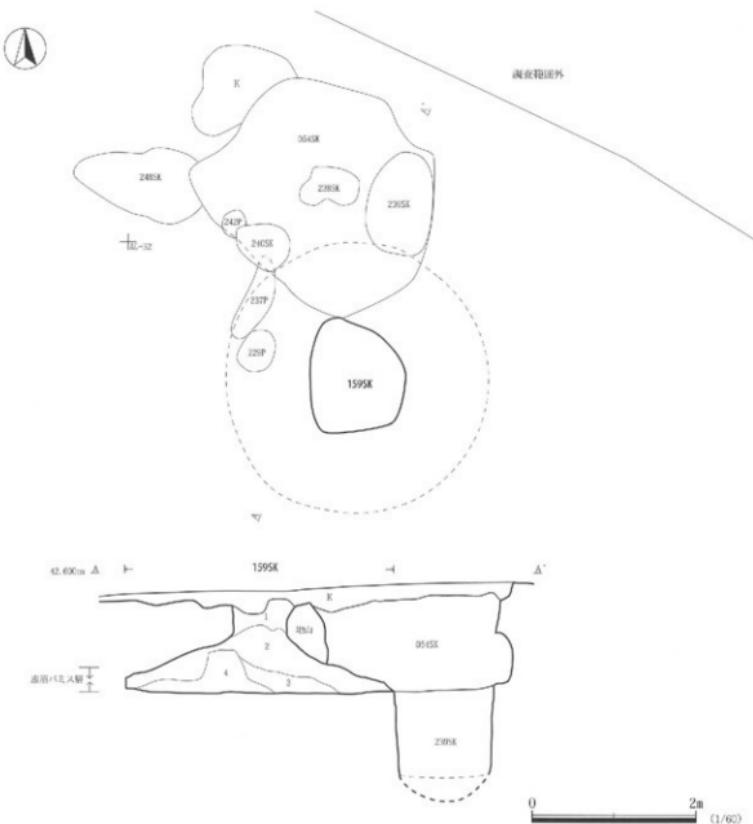
番号	遺構 No.	層位	器種	口径 (cm)	頂高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部文	文様・表面調査	時期 (形式)	備考(接合関係)
1	156SK No.029	深井	246	307	94			口縁部焼成後穿孔あり。地文縦文(無筋)。	阿玉台N 式		胎土:金雲母多。
2	156SK	覆土	深井	178	115			口縁部 波状口縁(4段)。口縁交瓦網突文。口縁~腹部に沈線で渦巻等が施される。地文縦文(半筋L型複数)。	中峠式		胎土:金雲母多。

159SK (第 55・56 図、表 26・27)

位置 A 2 区南東隅、AG-32 グリッドに位置する。

重複関係 054SK に北東壁を切られる。

規模と平面形 開口部は長径 1.28 m、短径 1.16 m の橢円形、底面は径 3.18 ~ 3.30 m の円形で、深さは 1.25 m である。



159SK
1 層別砂上 ローム粘・ローム少、炭化物微量含む、縫まりあり/粘性あり
2 利根台地土 ローム粘・ローム少、砂土多く、植物物少、褐色又コリケ中量含む。縫まり薄/粘性強
3 野間台地土 ローム粘・ローム乱巾、漿土少含む、縫まりあり/粘性強
4 野間台地土 ローム粘多、ローム乱、漿土粘少、炭化物少含む、縫まりあり/粘性強

第 55 図 159SK 平面図・断面図

壁 壁面は開口部に向い内側に傾斜し、開口部は筒状に立ち上がる。断面形はフ拉斯コ状を呈する。

底 底面は平坦である。硬面面は確認されなかった。

覆土 4層に分層された。第1層は、黒褐色土を呈する。第4層は、他の層よりも焼土・炭化物を多く含み、遺構中央で盛り上がるが、遺構底面袋状に広がる部分に堆積することなどから意図的に入れたと推定される。1～4層の堆積状況、ローム粒・焼土の含有状況から人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼バミス層直下に位置する。

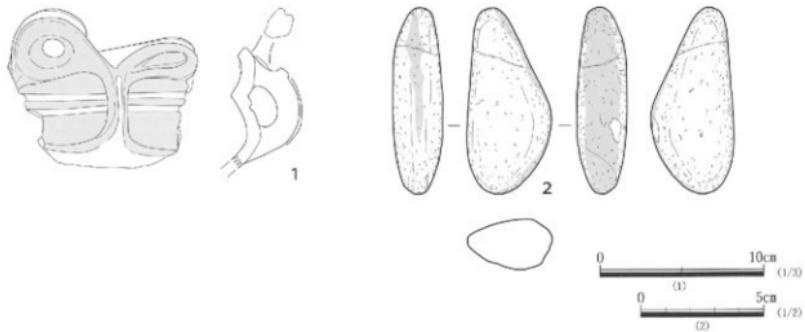
遺物 実測遺物は2点である。

1は、浅鉢と考えられる。外面に赤彩が施される。表面は全体的に平滑に仕上げられており部分的に光沢が認められる。胎土は金雲母を中量含み、色調は赤褐色～明赤褐色を呈しやや赤みを帯びる。

2はホルンフェルス製の磨石である。小形の製品で、右側面の屈曲した全面と左側面の上部に磨痕を残す。右側面の下部は磨面の傾斜角にわずかなずれが認められる。

その他、図示はしていないが、角押し文が施される阿玉台IV式の土器の口縁部の破片や、口縁部に交互刺突が施されるいわゆる中峰式土器の破片などが出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第56図 159SK 出土遺物

表 26 159SK 出土 土器観察表

番号	遺構 No.	層位	深幅	口径 (cm)	割高 (cm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	部位	文様・器表調整	時度 (形式)	備考
1	159SK-B0.053	浅鉢	(38)					口縁部	波状口縁、外面赤彩。		

表 27 159SK 出土 石器観察表

番号	遺構 No.	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	鑿立・造作手	特徴	備考
2	159SK	覆土	磨石	77	34	21	76	ホルンフェルス	○	100%	左右側面に磨痕 小形
	159SK	覆土	石核	22	27	15	10	メノウ		100%	芯面あり 不規則な打面移

190SK (第 57 ~ 59 図、表 28・29)

位置 A 2 区北東隅、AG-31 グリッドに位置する。

重複関係 032SI に遺構上面を切られる。204SK とは切り合わない。

規模と平面形 開口部は径 1.51 ~ 1.31 m の円形、底面は径 3.46 ~ 3.56 m の円形で、深さは 0.90 m である。

壁 壁面は開口部に向い内側に傾斜する。壁面は平坦である。断面形はフ拉斯コ状を呈する。

底 底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土 6 層に分層された。第 3 ~ 6 層は、遺構底面袋状に広がる部分に中央部分を高くし堆積しており意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。その中でも、第 5 層は焼土粒・焼土塊・炭化物を他の層より多く含み、遺物も多く出土している。第 1 ~ 2 層もほぼ水平に堆積することなどから、第 1 ~ 6 層は人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼バミス層直下に位置する。

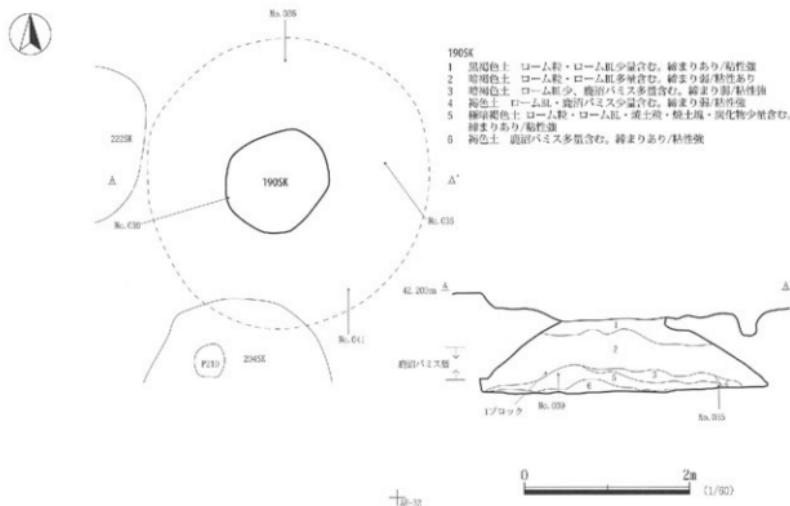
遺物 実測遺物は 9 点である。

1 は、底部を南に向けて、遺構南壁の底面と壁面に挟まれるように出土した。出土位置などから、意図的に底面と壁面の間に配置したと推測される。器内より検出した土壤を水洗選別したところ、白色粘土塊を検出した。胴部の一部が欠損するが検出時、欠損部は底面と接しており、外部からの白色粘土塊の混入の可能性は低い。

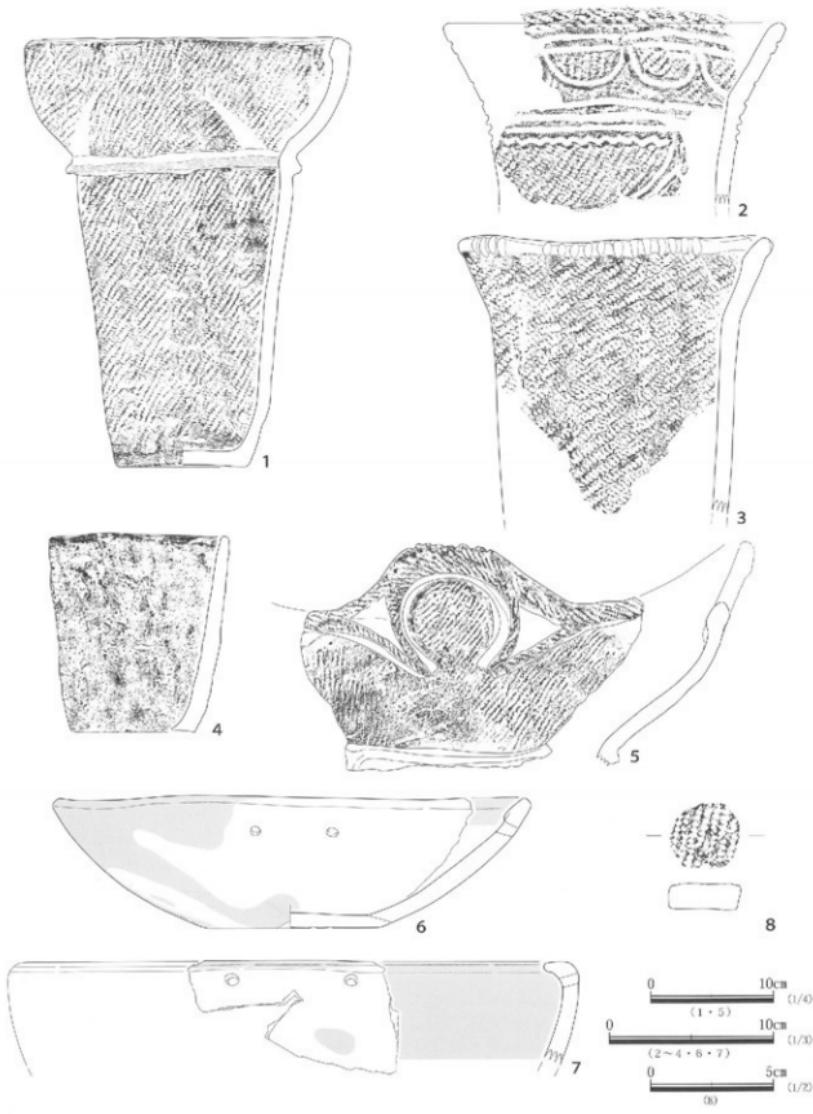
4・5 も遺構底部より出土した。また、遺構底面からは被熱した礫が複数確認された。

9 は砂岩製の敲石である。扁平な楕円盤を素材としている。下端部に敲打による器面の剥落が認められる。被熱により赤色変化している。

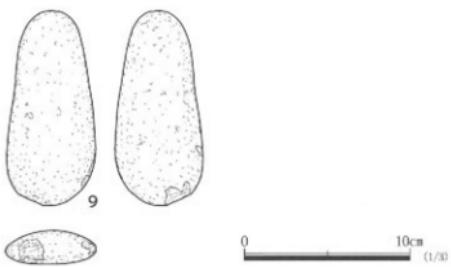
時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 57 図 190SK 平面図・断面図



第58図 1905K出土遺物1



第 59 図 190SK 出土遺物 2

表 28 190SK 出土 土器観察表

番号	遺構 名	層位	断面	口径 (cm)	腹高 (cm)	底径 (cm)	最大厚 (cm)	部位	文様・表面形態	時期 (形式)	備考 (接合箇所)
1	190SK(B6.04)	段跡	245	354	102			口縁 ～ 底部	腹面に縞文が施された跡面が貼付けられる。地文縞文（単脚 乳頭位）。	阿玉台IV 式	粘土：金膏很多。過内に土を水洗差 別すると白色化土を検出した。
2	190SK	泥土	段跡	<208	(112)			口縁 ～ 底部	口縁部は沈澱による弧状の区画。底部沈澱。地文縞文（単脚 乳頭位）。		
3	190SK	B6.	段跡	<192	(173)			口縁 ～ 底部	口縁部にナガミを有する縞溝が施される。地文縞文（単脚乳 頭位）。	阿玉台IV 式	粘土：金膏很多。
4	190SK(B6.05)	段跡	109	(123)				口縁 ～ 底部	無文。		内面一部に微化物有り。 粘土：金膏很多。
5	190SK(B6.05)	深鉢			(180)			口縁 ～ 底部	浅次口縁（痕跡不明）。口縁部から口縁にかけ縞溝が貼付けられ る。筒帶には縞文が施される。底部には縞溝が貼付けられ る。口縁部から刻形の地文縞文（単脚乳頭位）。	阿玉台IV 式	粘土：金膏很多。
6	190SK(B6.06)	段跡	(292)	82	106			口縁 ～ 底部	無文。口縁内側から外側に赤彩が施されており、外側の一部 も赤彩が施される。底部時で有り。調査時に洗成後に穿孔 が施される。	不明	洗成後に穿孔2箇所。
7	190SK	壁上	段跡	(347)	(64)			口縫	無文。内面から口縫に赤彩が施されており、外側の一部も赤 彩が施される。	阿玉台IV 式	粘土：金膏很多。 洗成後に穿孔2箇所。
8	190SK	壁上	三脚型	30	11				地文縞文（単脚乳頭位）。		

表 29 190SK 出土 石器観察表

番号	遺構 名	層位	断面	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	鑿削 面有無	特徴	備考
9	190SK	泥土	敲石	120	54	21	197	砂岩	○ 100%	下端部に敲打痕 被熱	

203SK (第 60・61 図、表 30)

位置 A 2 区東部、AH-32 グリッドに位置する。

重複関係 201SK・202P に遺構西壁を切られる。

規模と平面形 開口部は径 1.13 ~ 1.26 m の円形、底面は径 2.05 ~ 2.20 m の円形で、深さは 0.76 m である。

壁 開口部に向い内側に傾斜する。断面形はフラスコ状を呈する。

底 平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土 7 層に分層される。第 5 ~ 7 層は、遺構底面袋状に広がる部分に水平に堆積しており意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。堆積状況や、ローム粒・焼土の含有状況から人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼バミス層直上に位置する。遺構壁面括れ部分第 4 層下部、遺構底面第 6・7 層から遺物が出土している。

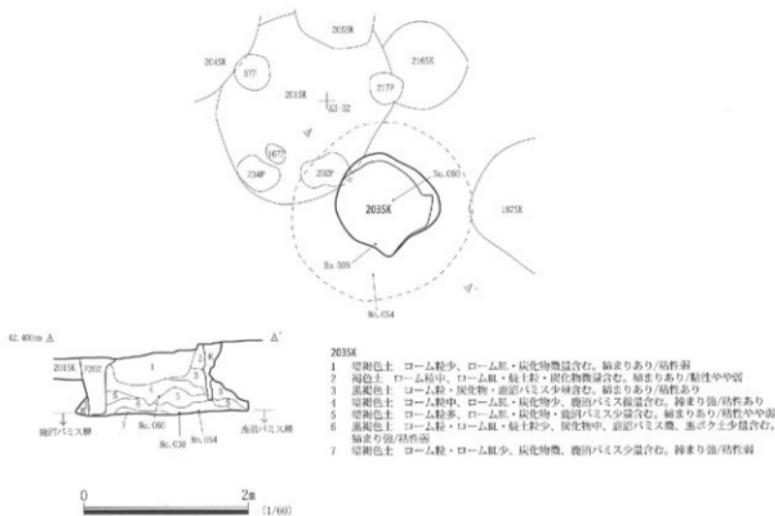
遺物 実測遺物は 4 点である。

1 は、本遺構の括れの部分のやや下第 4 層下部より口縁部を遺構中心に向け出土した。

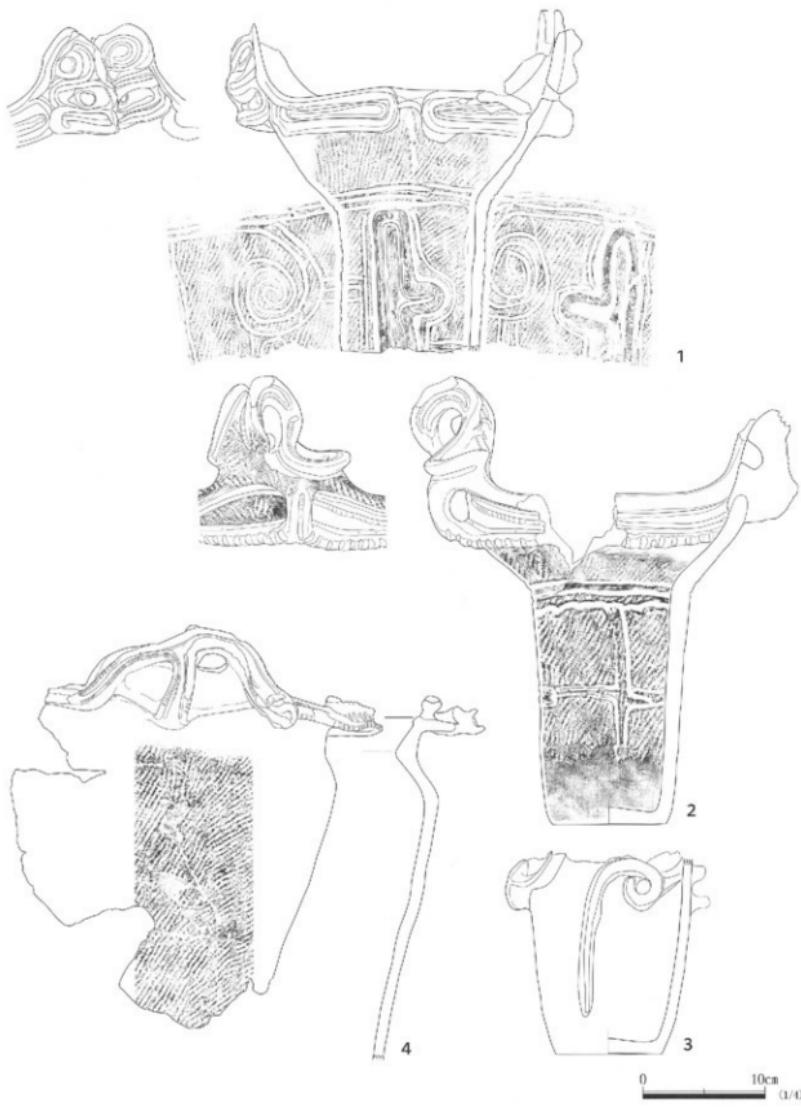
2 は、本遺構の括れ下部から底面に向かい、口縁部を底面に向け出土した。

3 は、遺構底面から出土した。1 ~ 3 の遺物の出土状況から本遺構は、大きく 2 度の遺物の廃絶が行なわれたと考えられる。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 60 図 203SK 平面図・断面図



第61図 203SK出土遺物

表 30 203SK 出土 土器観察表

番号	遺構 No.	層位	底壁	口径 (mm)	深高 (mm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	部位	文様・器面調査	時期 (形式)	備考 (兼合関係)
1	203SK No.009	深鉢	(250)	(280)				口縁 ～ 底部	底面は圓形(立窓)、底部の底面には穿孔が円周状に開けられ、二段階山腹形による底壁は内側から外側へと傾斜しながら内側は直線的で外側はカーブする。底部は直線により上部と接続し、縦纹文、横紋文が施される。底文は文字(單脚紋記述)。	阿玉台N 式	胎土：金糸母多
2	203SK No.038	西鉢	210	(368)	95	317		口縁 ～ 底部	口縁部は円形の立窓で、底部は直線的で内側は直線的で外側はカーブする。底部は内側より外側へと傾斜しながら内側は直線的で外側はカーブする。底部は直線により上部と接続し、縦文文、横紋文が施される。底文は文字(單脚紋記述)。	阿玉台N 式	胎土：金糸母中
3	203SK No.054	西鉢		(160)	87			肩部 ～ 底部	肩部は唇部による済巣が施され底部無文。	阿玉台N 式	胎土：金糸母多。底部には底方向の調整が見られる。
4	203SK 18.2m	深鉢		(335)				口縁部 ～ 底部	口縁部は唇部を施され、底部は直線的で内側は直線的で外側はカーブする。底部は直線により上部と接続し、縦文文、横紋文が施される。一部、内壁から腹部にかけ唇部が輪状に施される。		

230SK (第 62・63 図、表 31)

位置 A 2 区中央部北寄り、AD-29、AD-30、AE-29、AE-30 グリッドに位置する。

重複関係 231SK に遺構上部を切られる。

規模と平面形 残存している開口部は径 1.14 ~ 1.19 m の円形、底面は長径 3.00 m、短径 2.75 m の梢円形で、深さは 1.36 m である。

壁 壁面は開口部に向い内側に傾斜する。断面形はフラスコ状を呈する。

底 底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

蓋 土 7 層に分層された。第 1 ~ 2 層は、ほぼ水平に堆積する。第 3 ~ 5 層は類似し、遺構底面袋状に広がる部分に堆積する。第 6 層は、ローム粒・ロームブロックを主体とし、遺構底面中心に盛り上がるよう堆積する。第 7 層は焼土を多く含む。遺構底面北西からは焼土・礫を集中して検出した。焼土・礫集中部は、2 層に分層され、第 1 層は 2 ~ 5cm 程の礫を多く含む。礫は円礫が 9 割を占める。円礫は、チャートなどの石器の材質とな

表 31 230SK 出土 土器観察表

番号	遺構 No.	層位	底壁	口径 (mm)	深高 (mm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	部位	文様・器面調査	時期 (形式)	備考 (兼合関係)
1	230SK No.069-1	深鉢	(158)	(282)	(98)	(180)		口縁 ～ 底部	口縁部から底部にかけて済文(單脚紋底位)が施文される。		
2	230SK	覆土	深鉢		(129)			口縁 ～ 底部	口縁部は唇部による凸面が施され、底部には済文(單脚紋底位)が施文される。底文は文字(單脚紋記述)。		
3	230SK TBL ZBL	深鉢		(86)				口縁	口縁部は唇部による凸面が施され、底部には済文(單脚紋底位)が施文される。底文は文字(單脚紋記述)。		
4	230SK	覆土	深鉢		(219)	(105)		肩部	肩部は沈縫を施せた唇部により文様などが施される。底文。	阿玉台N 式	胎土：金糸母多。底部には底方向の調整が見られる。
5	230SK	覆土	深鉢		(79)			肩部	沈縫を沿わせた唇部による済巣が施される。沈縫による溝跡が施される。	阿玉台N 式もしく は式	胎土：金糸母多。
6	230SK	覆土	鉢					口縁	無文。内面被膜より口縁上端部で赤彩が施される。		

るものが多くみられ、被熱するものが多い。著しく磨耗していることから河原にて採取されたものと考えられる。焼土・礫集中部第1・2層からは炭化物は少量しか検出せず、焼土集中部下部の遺構底面も被熱による硬化などが見られないことなどから、焼土・円礫等は遺構内に意図的に持ち込まれた可能性が高い。第1～7層は堆積状況などから人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼バミス層直下に位置する。

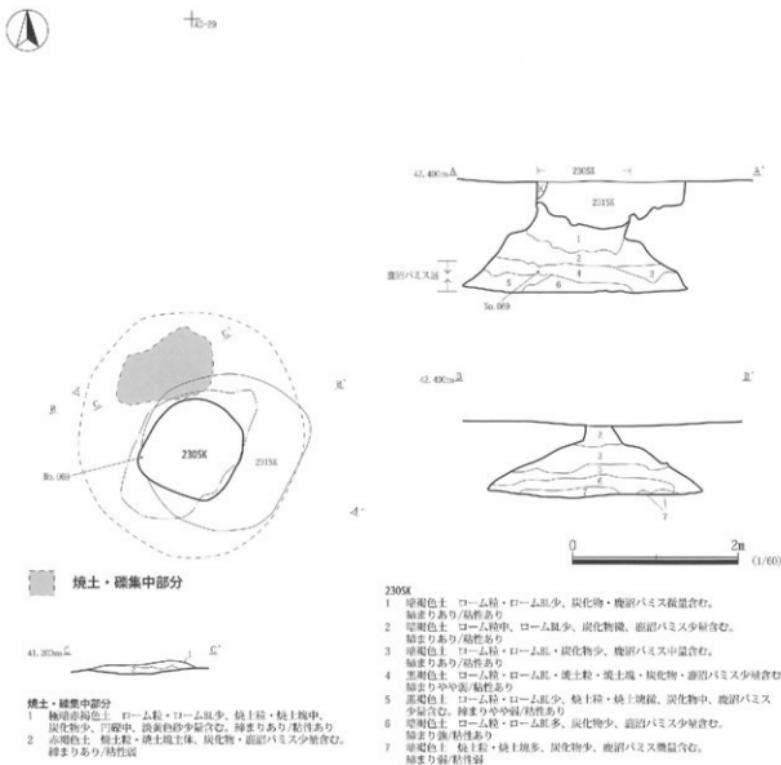
遺物 実測遺物は6点である。

2、3の胎土は黒褐色を呈し径1mm程の白色粒や赤色粒を少量含み類似し、口縁部のモチーフなども類似する。

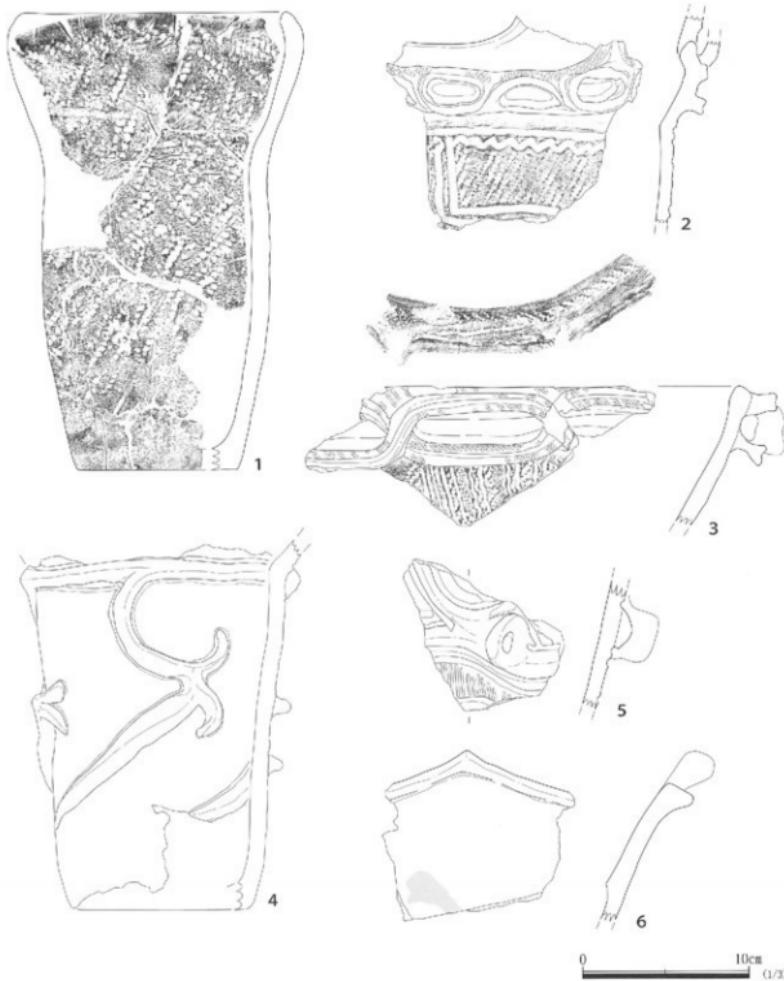
3は、口縁部に隆帯による楕円形の区画が施され、隆帶上には、口縁端部にキザミ、側面に縄文が施文される。胴部は2本一組の沈線による豊垂、縦位の波文が描かれる。

4は、沈線を治わせた隆帯により文様が施される。胴部には縱方向の調整痕が観察される。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第62図 2305K 平面図・断面図



第63図 230SK出土遺物

249SK (第 64・65 図、表 32)

位置 A 区南東部北側、AF-31 グリッドに位置する。

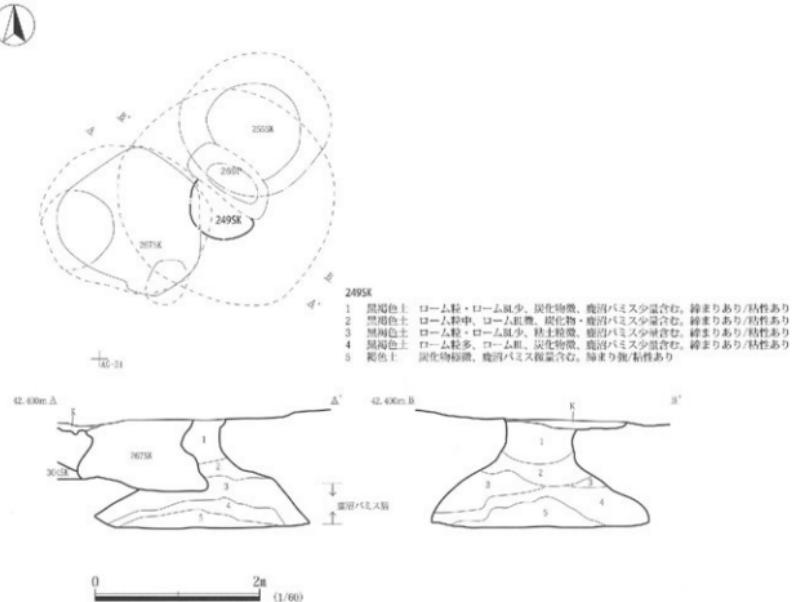
重複関係 袋状土坑 256SK に北東壁を、袋状土坑 267SK に開口部と南西壁を、269SK に開口部北東壁を切られる。

規模と平面形 残存する開口部より径 0.86 m の円形を呈すると推定される。底面は径 2.50 ~ 2.63 m の円形で、深さは 1.32 m である。

壁 開口部に向い内側に傾斜し、開口部は筒状に立ち上がる。断面形はフ拉斯コ状を呈する。

底 平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土 5 層に分層された。第 1 ~ 3 層はほぼ水平に堆積する。第 4・5 層は、遺構底面袋状に広がる部分に堆積しており、遺構中央部分がやや盛り上がるが、意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。堆積状況などから第 1 ~ 5 層は人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バミス層直下に位置する。



第 64 図 249SK 平面図・断面図

遺物 実測遺物は1点である。

1は、頸部より上を欠損している。ほぼ水平に胴部より上部を欠いており意図的に欠いたと考えられる。胴部には半截竹管状工具による沈線が施される。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第65図 2495K 出土遺物

表32 2495K 出土 土器観察表

番号	蓋幅 mm	底径 mm	口径 mm	腰高 mm	底径 mm	最大径 mm	部位	文様・断面調整	時期 (形式)	備考(複合器形)
1 2495K	一括	深鉢	(282)				測定 ～ 底部	胴部に沈線による溝巻、懸垂文が施される。地文純文(帯加 工段位)。	縄文 E1式	

256SK (第 66・67 図、表 33)

位置 A 2 区南東部北寄り、AF-31 グリッドに位置する。

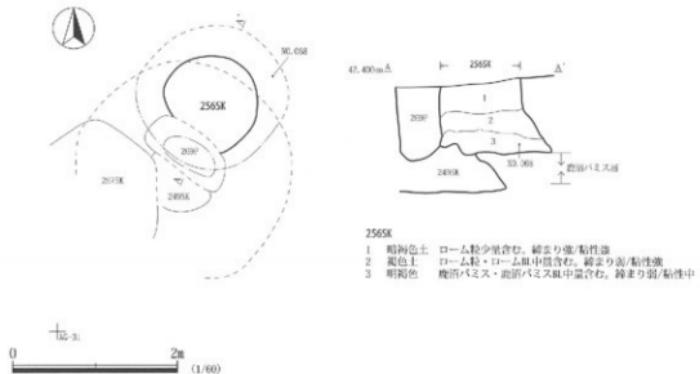
重複関係 249SK の東壁を切る。269P に遺構開口部および南西壁を切られる。

規模と平面形 トレンチ等を設定したため推定値であるが、残存する開口部より径 1.17 m の円形、底面は長径 1.70 ~ 1.75 m の円形と推定される。深さは 0.84 m である。

壁 積面は開口部に向い内側に傾斜し、フラスコ状を呈する。

底 平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土 3 層に分層された。第 1 ~ 3 層はほぼ水平に堆積する。第 3 層からはほぼ完形の遺物が出土した。遺物出土状況、ローム・鹿沼バミスの含有状況などから 1 ~ 3 層は人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バミス層直上に位置する。



第 66 図 256SK 平面図・断面図

表 33 256SK 出土 土器観察表

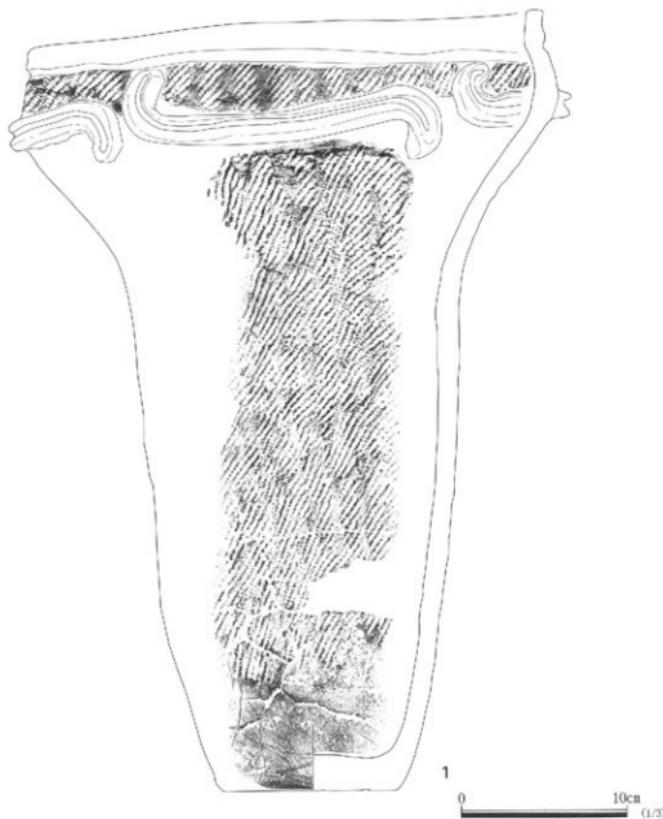
番号	遺構 ML	層位	断面	口径 (m)	周長 (m)	底径 (m)	最大高 (m)	部位	文様・済面実態	時期 (形式)	備考 (接合関係)
1	256SK	30.068	深鉢	315	473	106	343	上部 底部	口縁無文符号下は陰帯によるS字文が描される。地文範文(單 脚孔組立)。	加曾形 I式	

遺物 実測遺物は1点である。

1は、遺構底面北東壁際から出土した。口縁部から底部までほぼ完形である。口縁無文帶下には沈線が巡り、

S字状の隆帯が施される。S字状の隆帯は5単位貼付けられる。S字状の隆帯貼付け後に縄文が施文されている。

時期 縄文時代中期中葉と考えられる。



第67図 256SK 出土遺物

267SK (第 68・69 図、表 34)

位置 A 2 区南東部北側、AF-30、AF-31 グリッドに位置する。

重複関係 249SK の開口部から北東壁、280SK の北東壁、304SK の南東壁の一部を切る。

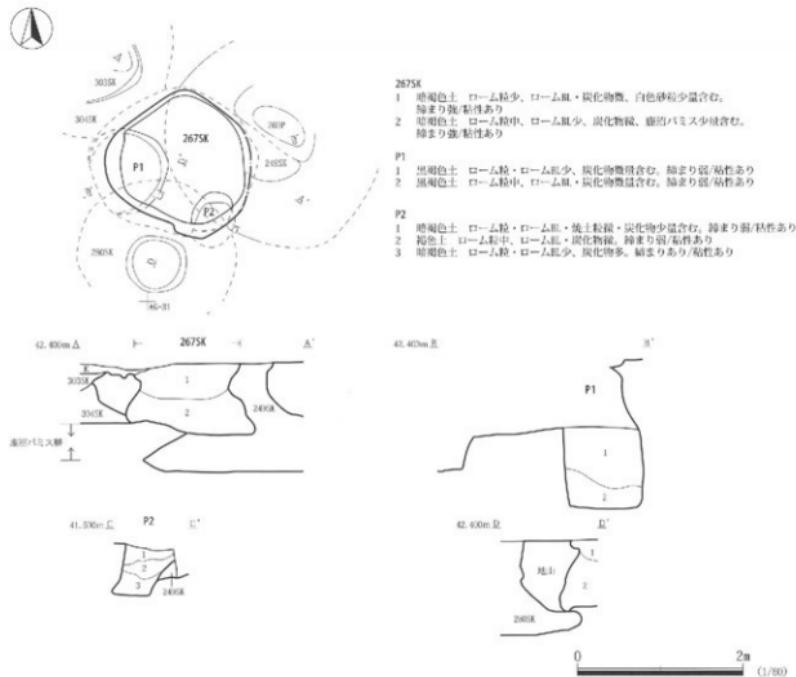
規模と平面形 開口部は径 1.70 ~ 1.80 m の円形、底面は長径 1.90 ~ 2.00 m の円形で、深さは 0.88 m である。

壁 壁面は開口部に向い内側に傾斜し、括れ部から開口部へは緩やかに外側へ立ち上がる。断面形は袋状を呈する。

底 底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット 底面からは 2 基のピットを検出した。P1 は径 0.92 ~ 1.04 m の円形で、深さ 0.50 m である。P2 は長径 0.56 m、短径 0.41 m の椭円形で、深さ 0.29 m である。

覆土 2 層に分層された。第 1・2 層はほぼ水平に堆積する。遺構底面から括れ部分にかけて第 2 層が堆積し、ローム・炭化物の含有状況などから、人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バミス層直上に位置する。

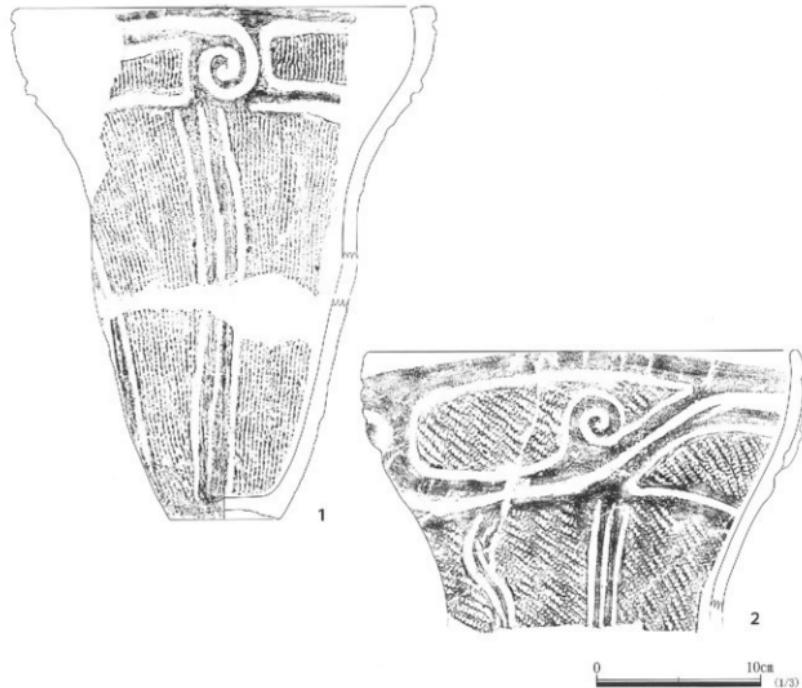


第 68 図 267SK 平面図・断面図

遺物 実測遺物は2点である。

1は、口縁部に沈線を沿わせた隆帯により、渦巻、楕円形の区画が施される。胴部は、2～3組の沈線による懸垂が施され、懸垂文間は磨り消しが行なわれているが、磨り消しは全体的に不十分で繩文が残る。口縁部～胴部ともに地文は撚糸文である。

2は、口縁部に沈線を沿わせた隆帯により、渦巻、楕円形の区画が施される。渦巻は一箇所欠損するが、口縁



第69図 267SK出土遺物

表34 267SK出土 土器観察表

番号	直径 mm	高さ	沿縁	口径 mm	脛高 mm	底径 mm	最大径 mm	部位	文様・表面処理	時期 (形式)	備考(接合関係)
1 267SK	70	25	深縁	(252)	(315)	66	136 ～ 150	口縁部 ～ 胴部	口縁部は沈線を沿わせた隆帯で、渦巻、楕円形の区画が施される。区画内は撚糸文。胴部は2～3本一組みの沈線による懸垂文を施す。地文(擦糸文)。	加曾利型 日式	
2 267SK	70	25	深縁				136 ～ 150	口縁部 ～ 胴部	口縁部は沈線を沿わせた隆帯で、渦巻、楕円形の区画が施される。区画内は撚糸文(摩擦山腹型)。胴部は2～3本一組みの沈線による懸垂文を施し、擦糸文を費り消す。地文糸文(摩擦山腹型)。	加曾利型 日式	渦巻は5単位。

部に5単位で描かれるに推定される。溝巻は楕円形区画の内に配置されているものが2箇所、区画外に配置されるものが3箇所と推定される。

時期 出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。

274SK (第70・71図、表35)

位置 A2区中央部北寄り、AC-28、AD-28グリッドに位置する。

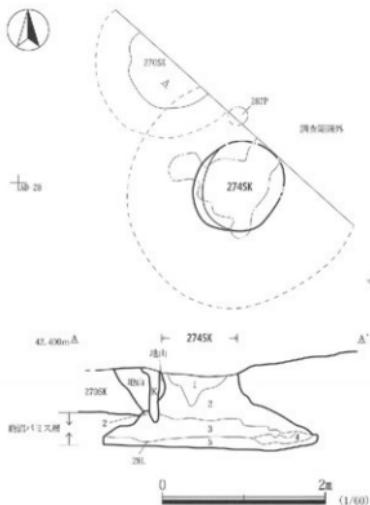
重複関係 北東壁は調査区外へ広がる。270SKの南東壁を僅かに切る。287Pに北壁を切られる。

規模と平面形 残存する開口部は径1.03mの円形、底面は径2.74mの円形で、深さは0.91mである。

壁 壁面は開口部に向かって内側に傾斜する。断面形はフラスコ状を呈する。

底 底面は平坦である。開口部の直下には不定形の硬化面が拡がる。硬化面は開口部直下が最も硬化し、壁面へ向かうほど硬化が弱くなる。規模は長さ0.74~1.21m、幅0.59~1.01mである。

覆土 5層に分層された。第3~5層は、遺構底面袋状に広がる部分に水平に堆積しており意図的に埋土を遺



- 274SK
 1 暗褐色土、ローム粒中、ローム質、粘土粒、炭化物少量含む。
 緩まりあり/粘性あり
 2 黒褐色土、ローム粒少、ローム質、粘土粒、炭化物少、表面バニス
 褐色含む、緩まりやや強/粘性あり
 3 黑褐色土、ローム粒少、ローム質、粘土粒、炭化物中、
 表面バニス少量含む、緩まりあり/粘性あり
 4 暗褐色土、ローム粒、ローム質多、炭化物少、表面バニス報量含む。
 緩まり弱/粘性あり
 5 暗褐色土、ローム粒少、ローム質、炭化物少量含む、緩まりあり/粘性あり

第70図 274SK 平面図・断面図

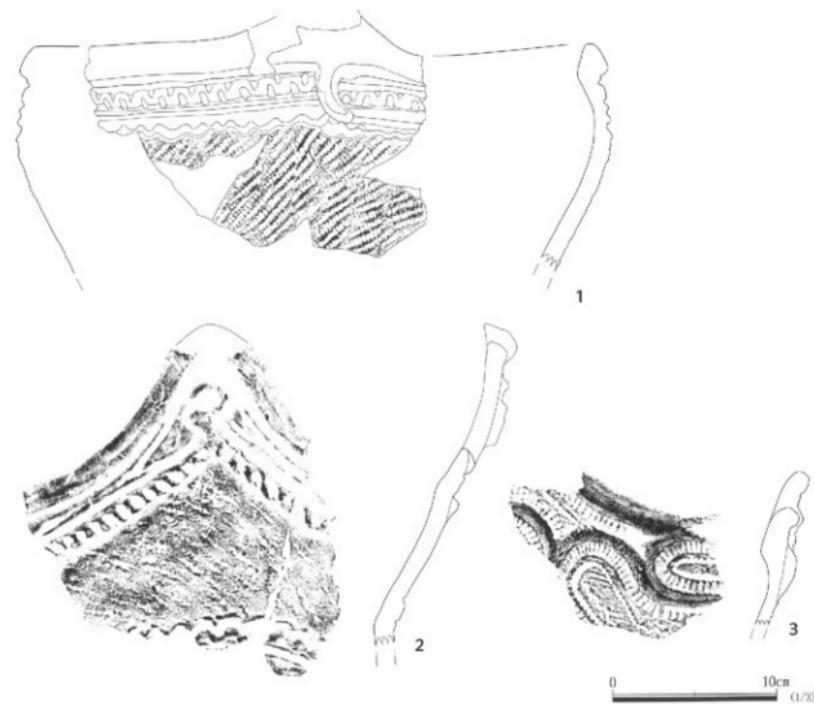
構壁面にまで入れたと推定される。第3層は他の層に比べ焼土・炭化物をやや多く含む。堆積状況から人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼バミス層直下に位置する。

遺物　実測遺物は3点である。

1は、口縁部に交互刺突文が施されいわゆる中峠式土器である。

3は、遺構底面から出土しており、遺構の発掘時に該当する遺物と考えられる。阿玉台IV式土器と考えられるが、文様構成の一部は勝坂式土器に類似する。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第71図 274SK出土遺物

表 35 274SK 出土 土器観察表

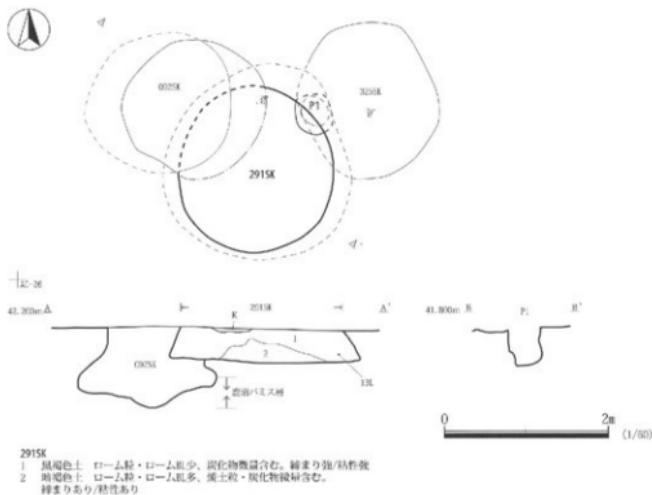
器 号	遺構 No.	層位	形種	口径 (cm)	頂高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	文様・器表面質	時期 (形式)	備考 (接合関係)
1	274SK	覆土	深鉢	φ380	115			口縁	波状口縁(指數不明)、口縁部縦筋貼り付け。口縁部交互割 突文。地文幾文(半周柱羅文)。	中晩式	
2	274SK	覆土	深鉢	φ256	197			口縁	波状口縁(指數不明)、口縁部縦筋、縦筋上には刻突が施さ れる。頭部は沈線が施される。地文幾文(無理)。	阿玉台IV 式	埴土: 金銀母少。
3	274SK	2E	深鉢		94			口縁	波状口縁(指數不明)。口縁部縦筋、縦筋に沿うように角押 文が施される。	阿玉台IV 式	埴土: 金銀母多。

291SK (第 72・73 図、表 36)

位置 A 2 区北西部北側、AB-26 グリッドに位置する。

重複関係 092SK の遺構南東壁を切る。325SK に遺構北東壁を切られる。

規模と平面形 開口部は長径 2.03 m、短径 1.88 m の橢円形、底面は径 2.27 ~ 2.52 m の円形で、深さは 0.42 m である。



第 72 図 291SK 平面図・断面図

壁 壁面は開口部に向い内側に傾斜する。上部は削平されているが断面形は袋状を呈する。

底 底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット 底面北東隅からピット1基を検出した。P1は、長径0.51m、短径0.44mの梢円形で、深さ0.43mである。

覆土 2層に分層された。第2層は、遺構中央部で盛り上がる。第1～2層焼土粒・炭化物の含有状況から人為堆積と考えられる。遺構底面からは遺物が出土している。P1の覆土も黒褐色土を主体としている。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バニス層上に位置する。

遺物 実測遺物は1点である。

1は、遺構底面から出土している。口縁部には隆帯が横位に貼付けられ、下位の隆帯にはキザミが施される。隆帯の間には、上下2段の角押文が施される。胎土に金雲母を多く含む点、角押し文が施文される点から阿玉台IV式土器と判断した。

時期 縄文時代中期中葉と考えられる。



第73図 291SK 出土遺物

表36 291SK 出土 土器観察表

番号	遺構	部位	器種	口径 (cm)	沿高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	文様・器形類似	時期 (形式)	備考(接合関係)
1	291SK	1SL	深井	(270)	(138)			口縁部 ～ 底部	口縁部は角押文により横位文が施され、隆帯が貼付けられる。底部にはキザミが施される。底部は次輪による横位文が施される。縄文縦文(單節乱周文)。	阿玉台IV 式	胎土: 金雲母多。

302SK (第74～77図、表37・38)

位置 A 2区中央部、AF-29、AF 30、AG-29、AG-30 グリッドに位置する。

重複関係 332SK に北壁を切られる。

規模と平面形 残存する開口部は長径2.70m、短径1.98mの梢円形、底面は長径2.70m、短径2.50mの梢円形で、深さは1.12mである。

壁 壁面は開口部に向い内側に傾斜する。断面形は袋状を呈する。

底 底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット 底面南壁際からはピットを1基検出した。P1は、径0.32～0.36mの円形で、深さは0.19mである。

覆土 4層に分層された。第3層は、遺構括れ部分を埋める様に堆積する。第4層は遺構底面袋状に広がる部分に水平に堆積しており意図的に埋上を遺構壁面にまで入れたと推定される。第2層下部、第3層、第4層下部からは遺物が多く出土した。堆積状況から人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バニス層直下に位置する。

遺物 実測遺物は9点である。

1は、第3層下部から出土し、袋状土坑304SK出土遺物と接合する。地文に縄文が施文される。

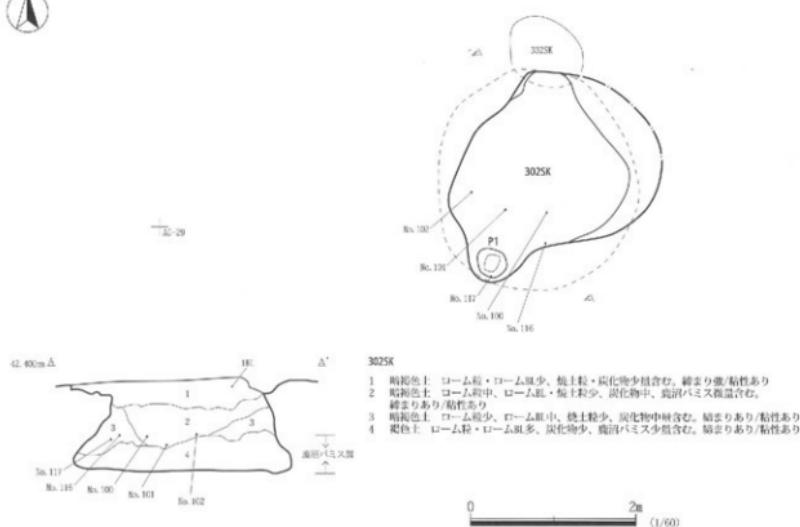
3と7は、第1層から出土している。7は、口縁部に隆帶貼付けによる波文が施される。胸部の立上がりが丸みを帯びる。胎土は、径2～3mmの石英を多く含む。

4は、口縁部に把手が施される。また、口縁部には隆帶貼付けによる十字状の区画が施される。065SK出土遺物3・9・10などの口縁部に貼付けられる隆帶と比較すると4の隆帶は幅が細く厚さが薄い。胸部は半截竹管状工具による弦線が施される。5は、口縁部に橋状の把手が施され、胸部には橋状工具による条線が縦位に施される。8は、無文の鉢である。橋状の把手が2箇所付けられる。把手は一方は上部・下部の2箇所に穿孔が施されるが、もう一方は、上部は穿孔されているが、下部はくぼみが存在するが穿孔はされていない。穿孔・くぼみはいずれも焼成前に行なわれている。1～8の遺物の出土状況から本遺構は、大きく2度の遺物の廃棄が行なわれたと考えられる。

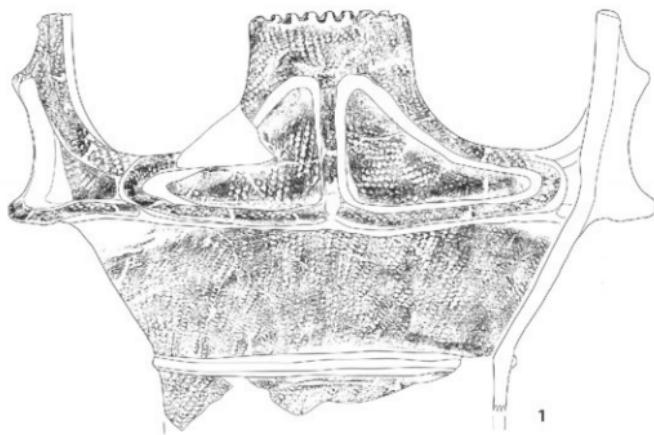
9は砂岩製の敲石である。各突端部分に敲打による器面の剥落とつぶれが認められる。被熱により赤色変化している。

また、図示はしていないが、いわゆる中井式土器の口縁部の破片が1点出土している。

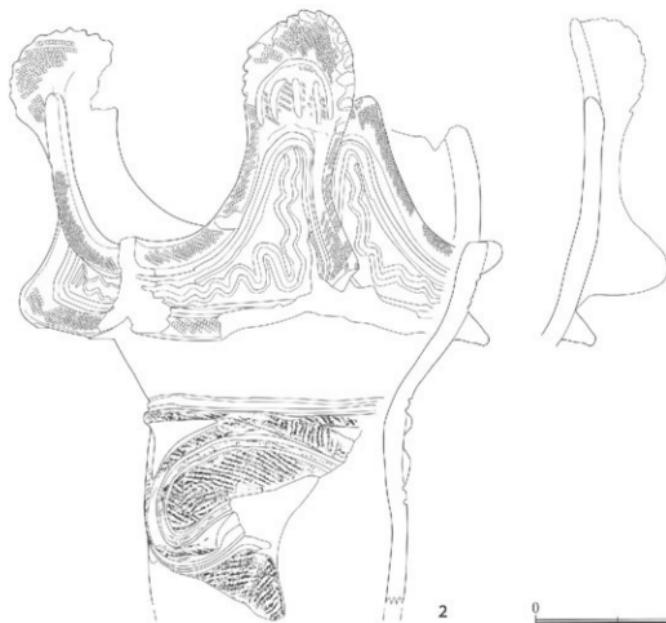
時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第74図 302SK平面図・断面図



1



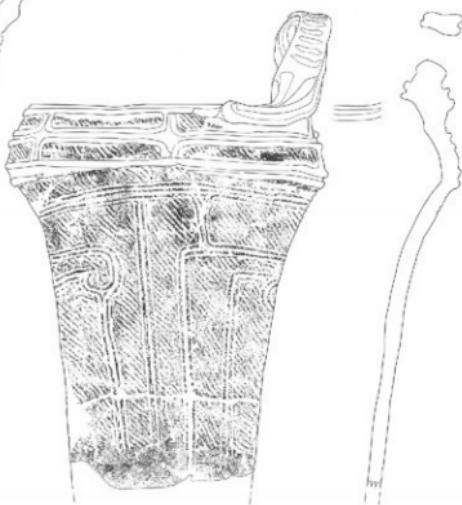
2

0 10cm (1/3)

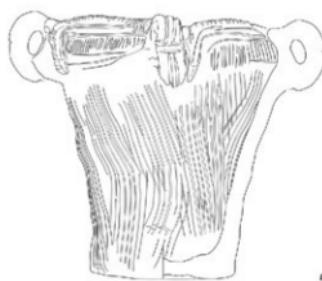
第75図 302SK出土遺物 1



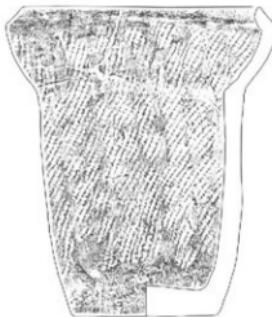
3



4



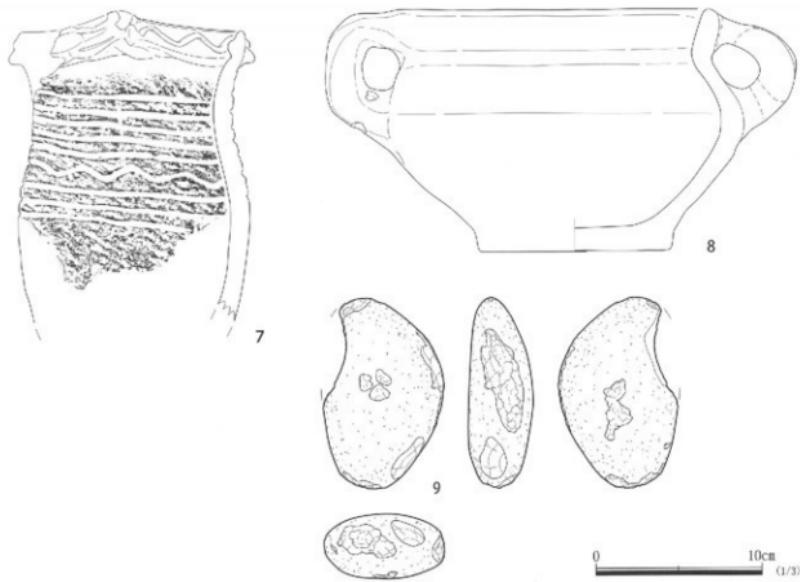
5



6



第76図 302SK出土遺物2



第77図 302SK出土遺物3

表37 302SK出土 土器観察表

番号	遺構 名	調査 位	断面 形	口縁 (cm)	周長 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	文様・表面性状	時期 (B.C.)	備考(接合関係)
1	302SK No.116	深鉢	口縁	350 (347)				波文口縁(4位)。口縁部は横帶による三角形区域が施される。腹部は波文による三角形の施णが側位に施る。	阿玉台IV式	304SK出土遺物と接合 土:金糞母。
2	302SK 3層 一括	深鉢	口縁	270 (362)				波文口縁(3位)。口縁部は沈柵後治された施णが施される。腹部は側位に施す(けむる)。腹壁内に沈柵により波文が施される。断部は側位が健持(けんじ)される。埴文隕文(單脚粗縫型)。	阿玉台IV式	土:金糞母多。
3	302SK 1BL	深鉢	口縁	210 (140)				口縁部は沈柵による横文、波文が施される。腹部は沈柵による横文、懸垂文、波文が施される。埴文隕文(单脚粗縫型)。	加賀利江I式	
4	302SK No.102	深鉢	口縁	165 (283)		196		口縁は斜面肥厚子口型所。把手にはキザヌが施される。口縁部は施す。腹部は波文による横文、懸垂文、波文文、波文、波巻などが施される。埴文隕文(单脚粗縫型)。	加賀利江I式	
5	302SK No.101	深鉢	口縁	154	163	86	<192	口縁部肥厚子口型所。口縁上部から口縁部には斜面を守り、舟形が施される。断部は側位が施される。	加賀利江I式	
6	302SK No.117	深鉢	口縁	142	191	87	<165	口縁上部斜面波文。埴文隕文(单脚粗縫型)。		
7	302SK 1BL	深鉢	口縁	135 (172)		141		口縁部は側位治による波文が施される。断部は上半に沈柵による横文、波文が施される。埴文隕文(单脚粗縫型)。	大木山式 ～88式	
8	302SK No.100	鉢	口縁	200	149	116	285	口縁から側面にかけ、横状肥厚が2段位で施される。無文。		把手は此前に穿孔3箇所、くぼみ2箇所。

表38 302SK出土 石器観察表

番号 遺構 No.	解説	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	鑑定	保存率	特徴	備考
302SK 1EL		器片	20	12	7	1	石英		100%		
9 302SK 横土		燧石	118	73	40	(33)	砂岩		80%	背面中央・片側面に敲打痕・被熱	
302SK 横土		燧石・燧石	108	61	29	385	ホルンフェルス		100%	内面の一部に擦痕 上下端部に敲打痕	
302SK 横土		器片?	31	22	13	6	石英		100%		

304SK (第78・79図、表39・40)

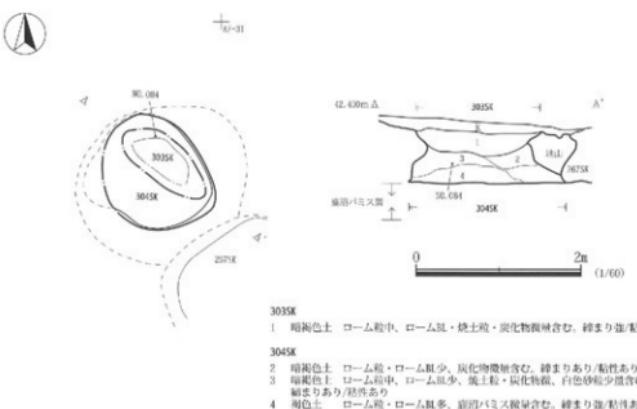
位置 A2区南東部北西寄り、AF-30グリッドに位置する。

重複関係 267SKに南東壁を、303SKに上部を切られる。当初303SKと同一遺構として捉えていたが、第2・3層上部が硬化する点などから別遺構とした。

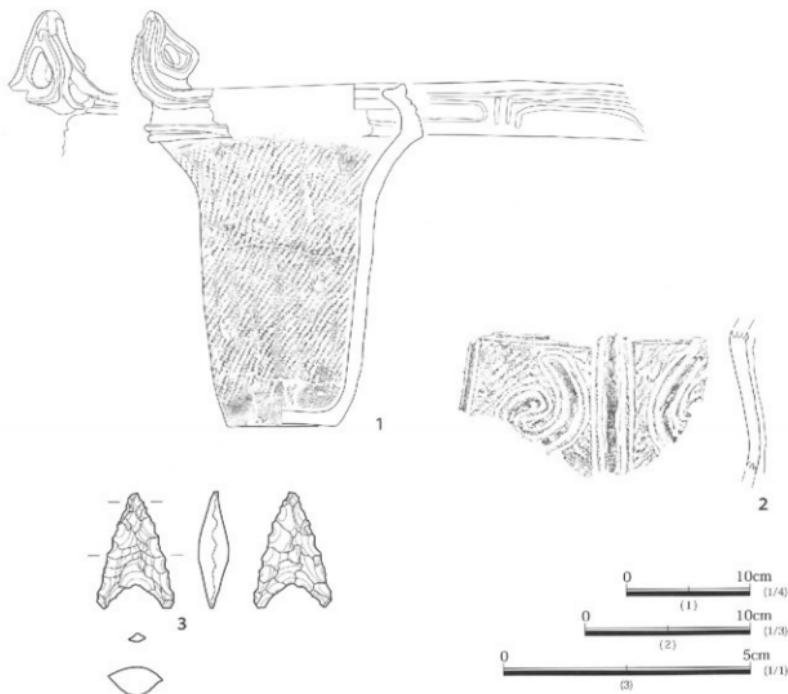
規模と平面形 残存する開口部は長径0.80m、短径0.44mの椭円形、底面は径1.92～2.14mの円形で、深さは0.32mである。

壁 壁面は開口部に向い内側に傾斜する。断面形は上部を削平されているがプラスコ状を呈すると推定される。

底 底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。



第78図 303SK・304SK 平面図・断面図



第79図 304SK出土遺物

表39 304SK出土 土器観察表

番号	遺構 名	層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	部位	文様・器面調査		時期 (形式)	備考 (接合実験)
								文様	器面調査		
1	304SK-Nec.084	深井		(34.0)	9.0	(35.0)	口縁部(手前側面)、口縁部(後面側面)、弦線による動植物文、縹文が施される。地文縦文(手前側面)。底部は網代直角。	加賀利江 式			
2	304SK	覆土	深井	(8.3)			底部は辺縁を轮廓した幾何文、渦巻が施される。地文縦文(手前側面)。	加賀利江 式			

表40 304SK出土 石器観察表

番号	遺構 名	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材	鑿定	磨か率	時期		備考
										初期	中期	
3	304SK	6SL	石器	24	16	6	2	チャート	100%	四基柱基		
	304SK	8SL	峰の祭石	140	90	36	562	砂岩	100%	半切削	周面に深い凹み等	
	304SK	覆土	石器	40	59	18	41	砂岩	100%	半円形	縁辺に二次加工	

覆土 3層に分層された。第3・4層は遺構底面袋状に広がる部分に堆積しており、遺構中央部分がやや盛り上がるが、意図的に埋上し遺構表面にまで入れたと推定される。第3層より遺物が多く出土している。堆積状況から人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼バミス層直上に位置する。

遺物 実測遺物は3点である。

1は、口縁部に把手が施される。口縁部は、把手付近は隆起貼付けにより、把手の向かい側は沈線により文様が施される。

出土遺物に遺構間接合が認められた。阿玉台IV式土器の口縁部が302SK出土遺物と接合した(第75図1)。

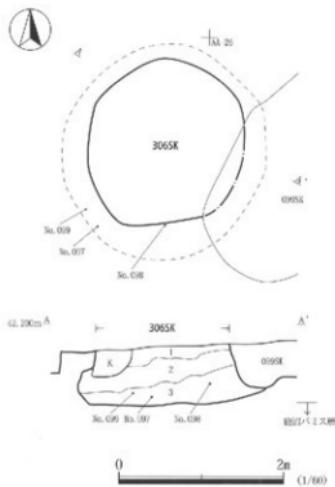
3はチャート製の石礫である。平面形が二等辺三角形を呈し、基部に抉りを有する。石器縁辺は表裏両面からの連続的な調整剥離によって波状に起伏する。石器中央部はやや分厚である。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

306SK(第80・81図、表41)

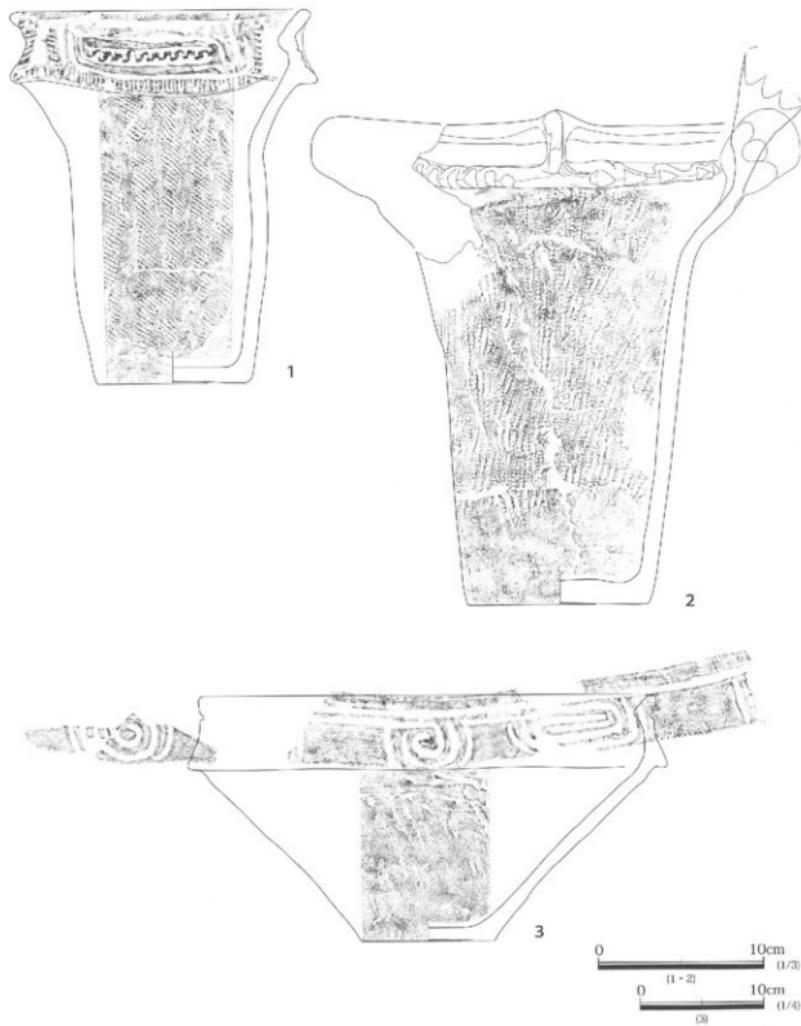
位置 A2区北西部、AA-25、AA-26グリッドに位置する。

重複関係 099SKに南東壁を切られる。



- 306SK
 1 縄文色土 ローム少、ローム風中量含む。跡まりあり/粘性あり
 2 縄文色土 ローム少、ローム風多、炭化物少、鹿沼バミス層量含む。
 3 縄文色土 ローム少、ローム風、炭化物少量含む。
 跡まりあり/粘性あり

第80図 306SK 平面図・断面図



第81図 306SK 出土遺物

規模と平面形 残存する開口部は長径 2.12 m、短径 1.72 m の楕円形、底面は長径 2.61 m、短径 2.39 m の楕円形で、深さは 0.69 m である。

壁 壁面は開口部に向かい低くやや傾斜する。断面形は袋状を呈する。

底 底面は西壁面に向かい低くやや傾斜する。硬化面は確認されなかった。

覆土 3 層に分層された。第 1 ~ 3 層は西側へやや傾斜するがほぼ水平に堆積する。堆積状況、ローム・炭化物の含有状況などから人為堆積と考えられる。第 3 層から多く遺物が出土している。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。造構底面は、鹿沼バミス層直上に位置する。

遺物 実測遺物は 3 点である。

1 は、口縁部に隆帯による区画が施され、区画内には交互刺突文が施されいわゆる中峠式土器である。

2 は、波状口縁である。残存する口縁部から 4 単位と推測される。口縁部には隆帯が巡り隆帯上には、下から押し上げるように指頭圧痕が施される。

時期 出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

表 41 306SK 出土 土器観察表

番号	遺物 No.	層位	器形	口径 (mm)	高さ (mm)	底径 (mm)	最大体 (mm)	部位	文様・軽面調整	時期 (形式)	備考 (複合関係)
1	306SK No.097	浅跡	171	230	92			口縁 ～ 底部	口縁部は沈線を沿わせる隆帯で区画が施される。区画内には交互刺突文が施される。底面にはキザミが施される。縄文彫文(半額凹起位)。	中峠式	
2	306SK No.099	浅跡	(270)	304	110			口縁 ～ 底部	波状口縁 (4段か)。底面削離状況なし。口縁削離部には連続指頭圧痕が施される。竪文彫文(半額凹起位)。		
3	306SK No.098	浅跡	(363)	202	110			口縁 ～ 底部	口縁部は沈線で消音が施される。 体部無文。 底部木葉台有り。		

323SK (第 82・83 図、表 42)

位置 A 2 区南東部南寄り、AH-30 グリッドに位置する。

重複関係 064SK に上部を切られる。064SK と当初同一造構と捉えたが、覆土の混人物の違いや、064SK の底部の覆土が水平に堆積することなどから別造構とした。

規模と平面形 開口部は長径 2.10 m、短径 1.62 m の楕円形、底面は径 2.34 ~ 2.46 m の円形で、深さは 0.37 m である。

壁 壁面は開口部に向かい内側に傾斜する。上部は削平されているが断面形はプラスコ状を呈すると推測される。

底 平坦である。硬化面は確認されなかった。

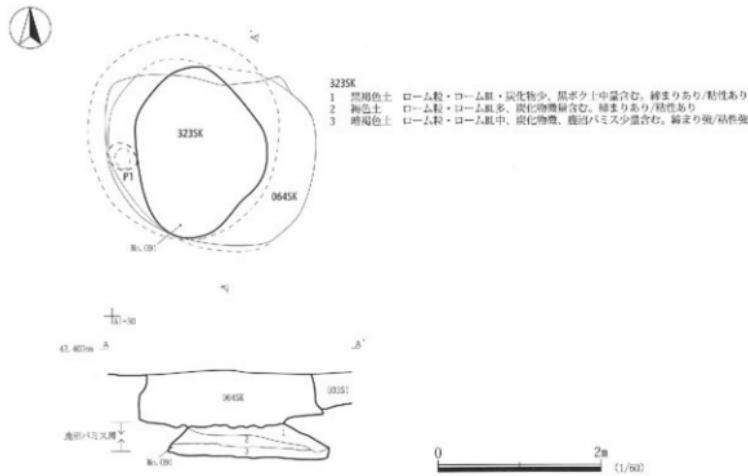
ピット 底面西側からはピットを 1 基検出した。P1 は、径 0.29 ~ 0.38m の円形で、深さは 0.56m である。

覆土 3 層に分層された。第 1 ~ 3 層は、造構底面袋状に広がる部分に水平に堆積しており意図的に埋土を造構壁面にまで入れたと推定される。第 3 層からは遺物が出土している。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。堆積状況などから人為堆積と考えられる。造構底面は、鹿沼バミス層直下に位置する。

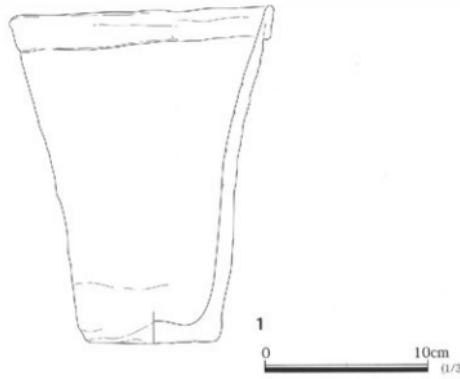
遺物 実測遺物は 1 点である。

1 は、造構底面と壁面の間から出土しており、意図的に廃棄したと推定される。口縁部が折り返されている。胴部は無文だが、縦方向のナデ調整により輪積み痕を消している。

時期 造構の切合などから縄文時代中期中葉と考えられる。



第 82 図 323SK 平面図・断面図



第 83 図 323SK 出土遺物

表 42 323SK 出土 土器観察表

番号	遺構 M.	幅	高さ	縦径 (m)	横高 (m)	直径 (m)	最大径 (m)	部位	文様・添正痕跡	時期 (形式)	備考(複合関係)
1	323SK	Xa.091	深井	1.57	2.38	0.79	—	口無 ～ 肩部	口縁部折り返し。剥離痕。	—	調査方向に調査の面が見られる。

土坑

0565K (第 84・85 図、表 43)

位置 A2 区南東部、AH-31、AI-31 グリッドに位置する。

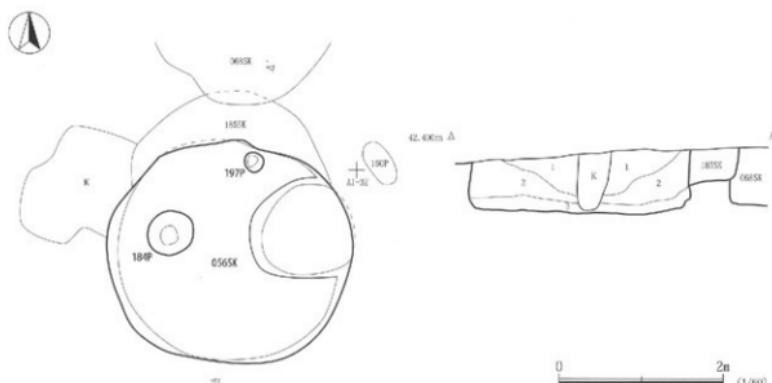
重複関係 185SK の南壁を切る。遺構中央部分は攪乱を受ける。当初 184P・197P を別遺構として捉えていたが、覆土が類似する点などから、本遺構に伴うピットとした。

規模と平面形 開口部は径 2.77 ~ 2.98 m の円形、底面は径 2.70 ~ 2.75 m の円形で、深さは 0.72 m である。

壁 南壁と東壁の一部でややオーバーハングする。

底 底面は細かい凹凸がみられるが、概ね平坦である。また、東側の底面の一部が窪むが、覆土に変化が見られなかった点などから本遺構に伴うものと判断した。

ピット 2 基検出した。184P は径 0.54 ~ 0.56 m の円形、深さは 1.01 m、197P は、径 0.23 ~ 0.24 m の円形、



0565K

1 脊褐色土 ローム少中、ローム粗少、燒土特徴、炭化物少含G。陥まりあり/粘性あり
 2 脊褐色土 ローム粗多、ローム粗少、炭化物微、難溶バシス少含G。
 3 脊褐色土 ローム粗多、ローム粗中、炭化物微、黒ボク土少含G。陥まりあり/粘性あり

第 84 図 0565K 平面図・断面図

深さは 0.42 m である。

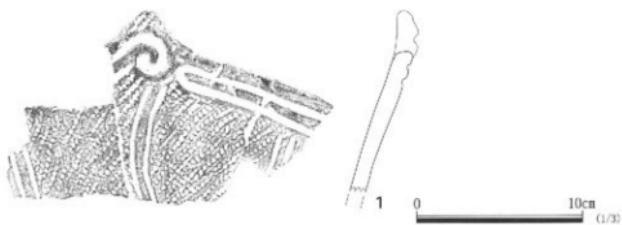
覆土 3 層に分層された。第 1 層は中央部分に向かい傾斜する。第 3 層は遺構底面にほぼ水平に堆積する。第 1 ～ 3 層は堆積状況などから人為堆積と考えられる。

遺物 実測遺物は 1 点である。

1 は、波頂部に沈線による渦巻などが施される。胴部には弧を描く 2 本一組の沈線が施される。沈線間には磨り消しが施される。

図示はしていないが、加曾利 E II もしくは III 式土器の口縁部破片が 8 点出土している。

時期 1 や出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第 85 図 056SK 出土遺物

表 43 056SK 出土 土器観察表

番号	遺構 No.	層位	器種	口径 (cm)	底面 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	文様・表面処理	時期 (形式)	備考 (挿合関係)
1	056SK	覆土	深鉢	(117)				口縁 胴部	波状口縁。口縁部外側に渦巻。上縁部に沙粒が施される。 内縁は 2 本一组の沈線による渦巻文が施される。 底面文様は磨り消し。縄文跳文化 (中野組聚落)。	加曾利 E II もしくは III 式	

060SK (第 86・87 図、表 44)

位置 A 2 区東部中央、AG-30、AG-31、AH-30、AH-31、グリッドに位置する。

重複関係 226SK の北西壁を切る。223SK に南壁上部を切られる。

規模と平面形 開口部は径 1.44 m の円形、底面は長径 1.14 m、短径 0.98 m の梢円形を呈すると推測される。

深さは 0.31 m である。

壁 開口部に向かい緩やかに傾斜し立ち上がる。

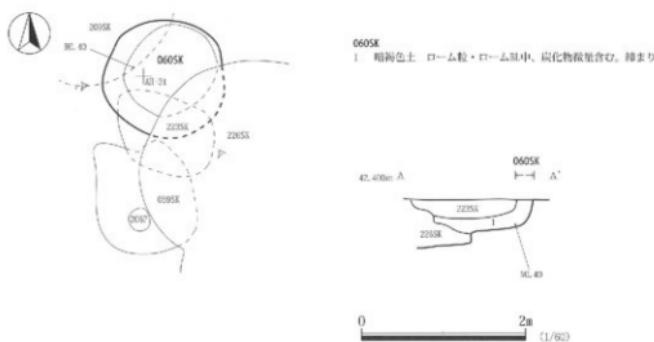
底 底面は壁面に向かい緩やかに立ち上がる。

覆土 単層である。検出した覆土が僅かなため、自然堆積か人為堆積かは不明である。

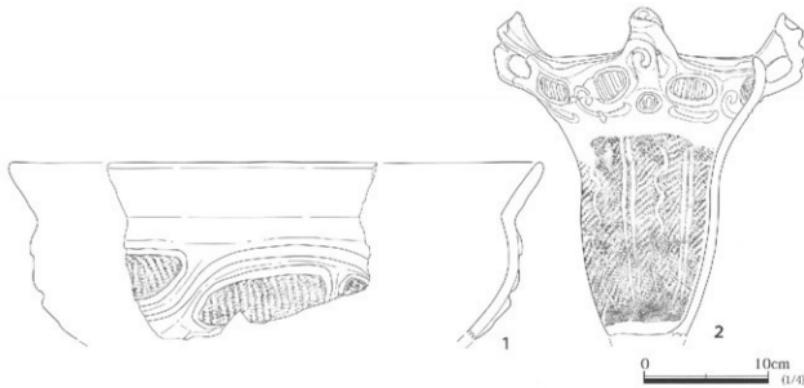
遺物 実測遺物は 2 点である。

2 は、口縁部に円形、梢円形の区画が施され、区画内は沈線が施される。胴部には、懸垂文が施されるが、懸垂文間に磨り消しは見られない。

時期 出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第 86 図 0605K 平面図・断面図



第 87 図 0605K 出土遺物

表44 060SK出土 土器観察表

番号	造形 様式	層位	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	最大厚 (mm)	部材	文様・器面調査	時序 (形式)	備考(接合関係)
1 060SK	IEU	深鉢	(450)	(145)				口縁	口縁内側文様には沈縫を沿わせた跡等により区画が施される。 区画内は幾文(篆形既模様)が施される。	加曾利Ⅱ式 もしくはⅠ式	
2 060SK	3e. 010	深鉢	(170)	(169)		(255)		口縁 ～ 脚部	波状口唇(4回)、波状底面下限横状把手、底部降伏済型。口縁内側に幾文(篆形既模様)による楕円形、円形文、品舌、整文文が施される。 脚部は2本一組の穴飾による類似。 沈縫による波文が施される。 地文幾文(篆形既模様)。	加曾利Ⅱ式	

147SK (第88・89図、表45・46)

位置 A2区北東部隅、AG-33 グリッドに位置する。

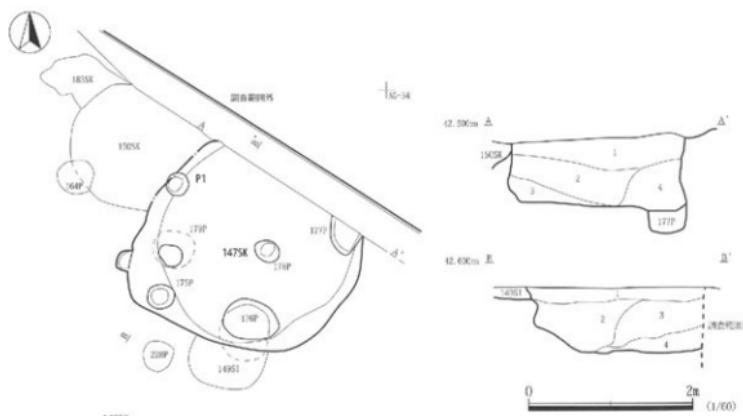
重複関係 北東壁は調査区外へ延びる。149SIの北東部、150SKの南東壁を切る。底面からは175～179Pを検出し、現地では別遺構としたが、検出状況、遺構覆土が類似する点などから同一遺構と推定される。

規模と平面形 確認された開口部は長径2.61m、短径2.14mの楕円形、底面は長径2.31m、短径2.03mの楕円形で、深さは0.76～0.86mである。

壁 南壁以外ほぼ垂直に立ち上がる。

底 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット 6基を検出した。P1・175P・177P～179Pは、長径0.28～0.66m、短径0.24～0.37mの楕円形で、



第88図 147SK 平面図・断面図

深さは0.18～0.61mである。P176は、長径0.68m、短径0.49mの橢円形で、深さは0.98mである。

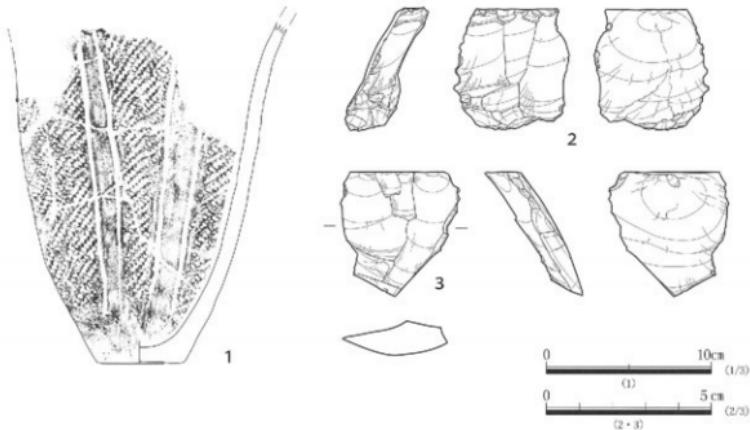
覆土 4層に分層された。第1層はほぼ水平に堆積する。第2層は遺構西から南かけて堆積し、第3・4層は東から北にかけて堆積し、交互に埋土が入れられたと考えられる。堆積状況から、第1～4層は人為堆積層と考えられる。

遺物 実測遺物は3点である。

1は、胸部に沈線による懸垂文が施され、懸垂文間は磨り消しが行なわれる。

2、3はチャート製の二次加工を有する剥片である。2は下端部に腹面側から調整剥離が施されている。両側縁には微小剥離が認められる。3は右側縁を折断したのち、腹面側からの急角度調整を行なっている。左側縁に微小剥離が認められる。

時期 遺構の切り合い、1から縄文時代中期後葉と考えられる。



第89図 147SK出土遺物

表45 147SK出土 土器観察表

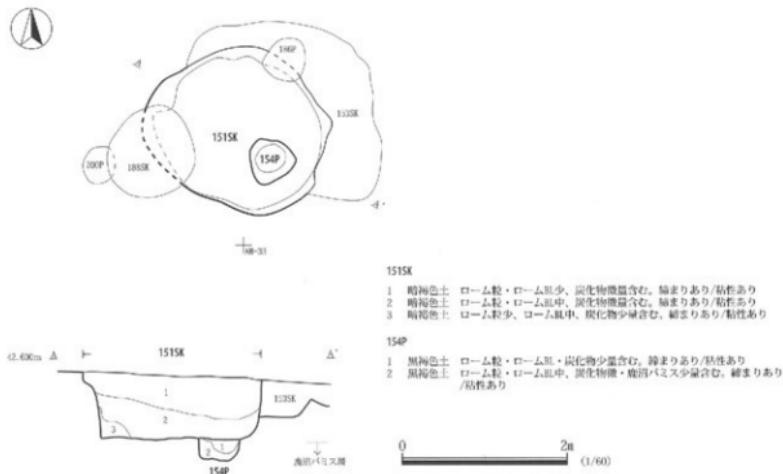
番号	蓋縫 底縫	層位	器種	口径 (cm)	深さ (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	文様・器形調査	時期 (形式)	備考(接合例)
1	147SK	覆土	深鉢	(210)	50			剥離 ～ 底部	懸垂文を施され、懸垂文間を磨り消し。地文縦文《單脚記録》。	加賀利E 三式	

表 46 147SK 出土 石器観察表

番号	遺物名	測位	断面	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	形状	遺存率	特徴	備考
147SK	覆土	微小剥離を有する剖片	(33)	280	7	(1)	チャート			30%	左側縁に微小剥離	
147SK	覆土	微小剥離を有する剖片	(36)	35	7	(12)	チャート			40%	上下端部欠損、両側縁に微小剥離	
2	147SK	覆土	二次加工を有する剖片	38	35	14	20	チャート		100%	下端部に現面から調整削様、内側縁に微小剥離	
147SK	覆土	剖片	47	(42)	13	(26)	チャート			60%	右半部欠損	
147SK	覆土	剖片	(31)	(28)	9	(9)	チャート			40%	大部分欠損	
3	147SK	覆土	二次加工を有する剝離	38	37	11	14	チャート		100%	右側縁に現面から調整削様、左側縁に微小剥離	

151SK (第 90・91 図、表 47)

位置 A 2 区南東部、AG-32、AG-33 グリッドに位置する。



第 90 図 151SK・154P 平面図・断面図

重複関係 153SKの南西壁、186Pの上部、188SKの東壁を切る。底面からは154Pを検出し、現地では別遺構としたが、検出状況などから同一遺構と推定される。

規模と平面形 開口部は長径2.20m、短径：2.08mの円形、底面は長径1.60m、短径1.46mの円形で、深さは0.85mである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

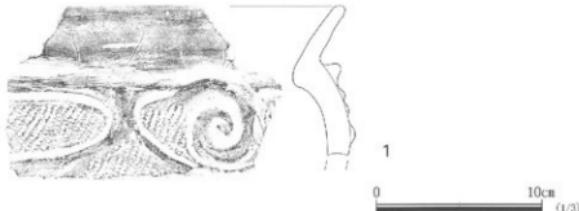
ピット 1基を検出した。径0.55m、深さは0.25mである。

覆土 3層に分層された。第1～2層はほぼ水平に堆積する。第3層と154Pの第1層は他の層に比べ炭化物を多く含む。堆積状況などから人為堆積と考えられる。

遺物 実測遺物は1点である。

1は、口縁無文帯が外反して立ち上がる。012SK出土遺物1と器形、文様などが類似する。

時期 出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第91図 151SK出土遺物

表47 151SK出土 土器観察表

番号	遺構 名	層位	深幅 (m)	口径 (m)	底高 (m)	底径 (m)	最大径 (m)	部位	文様・器形調査	時期 (BP)	備考(接合關係)
1	151SK	覆土	3.0	<32>				口縁～ 腹部	口縁無文帯。口縁部無文帯下は波線を沿った隆起で溝 巻、而内部内側面が飾られる。施文縄文(單繩山腹段)。	加古利江 式	

204SK(第92・93図、表48)

位置 A2区南東部、AG-31グリッドに位置する。

重複関係 032SIに北東壁を切られる。201SKに南東壁を切られる。遺構底面から210Pを検出し、当初別遺構と捉えていたが、覆土が他の底面から検出されたピットの覆土と同一である点などから本遺構に伴うピットとした。

規模と平面形 開口部は径2.35～2.37mの円形、底面は径2.19mの円形で、深さは0.36mである。

壁 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。北側は、032SIに切られ、壁面の立ち上がりは確認できない。

底 底面はほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

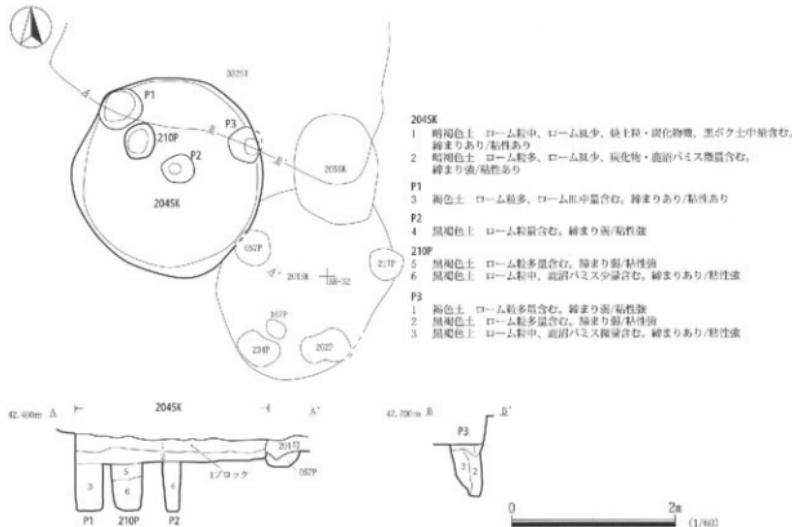
ピット 4基を検出した。P1～3、210Pは、径0.53～0.37mの円形で、深さは0.57～0.61mである。

覆土 ピットを含めて6層に分層された。第1・2層はほぼ水平に堆積する。P3の第1層と210Pの第5層は同一である。堆積状況などから人為堆積と考えられる。

遺物 実測遺物は1点である。

1は、口縁部に沈線を沿わせた縦帶により溝巻、梢円形区画が施される。胸部は2本一組の沈線により懸垂文が施される。懸垂文間には磨り消しは行なわれない。

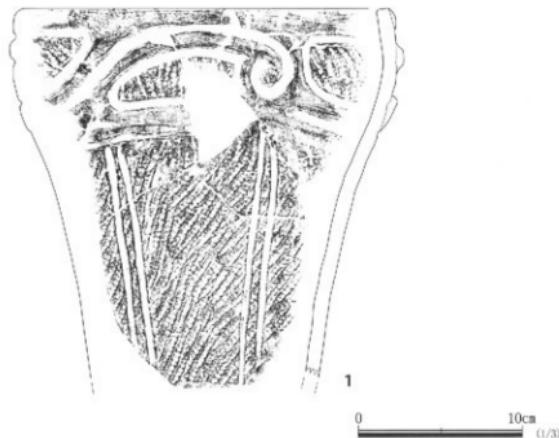
時期 1や出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第92図 204SK 平面図・断面図

表48 204SK出土 土器観察表

番号	造形 底	輪位	縁種	口径 (cm)	周高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	文様・割面調査		時期 (形式)	備考(接合型態)
									口縁 ～ 底部	上縁部は沈線を沿わせた縦帶で凹巻、梢円形区画が施され る。底部は2組の沈線による懸垂文が施される。		
1	204SK	BL	深外	230	(225)	(11)					縫合糸 目式	



第93図 204SK 出土遺物

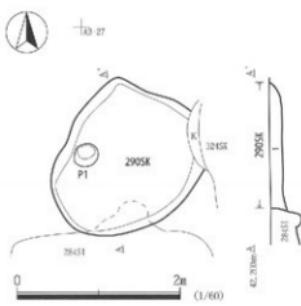
290SK (第94・95図、表49)

位置 A2区北西部、AB-26、AB-27グリッドに位置する。

重複関係 284SIに南東壁を切られる。北東壁に攪乱を受ける。

規模と平面形 開口部は長径1.96m、短径1.63mの楕円形、底面は長径1.81m、短径1.46mの楕円形で、深さは0.13mである。

壁 壁面は緩やかに立ち上がる。



290SK
1. 断面色上：ローM粘・ローモル少、焼土質、炭化物無量含む。
縦まり強/筋性あり

第94図 290SK 平面図・断面図

底 底面はほぼ平坦である。

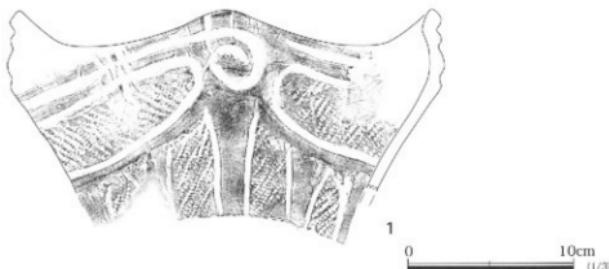
ピット 1基を検出した。P1は、径0.30～0.31mの円形で、深さは0.84mである。

覆土 単層である。検出した覆土が僅かなため、自然堆積か人為堆積かは不明である。

遺物 実測遺物は1点である。

1は、口縁部に隆起による渦巻、梢円形区画が施される。区画内は縄文が施文されるが残存する3区画の内、1区画が縱位に、2区画が横位に施文されている。

時期 出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第95図 290SK 出土遺物

表 49 290SK 出土 土器観察表

番号	造形 基	層位	測線	口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	文様・剖面調整	時期 (形式)	備考(接合関係)
1 290SK	覆土	深耕	252	113				口縁 ～ 削除	波状口縁(4H)。口縁部は波線を沿わせた隆帯で、渦巻、 梢円形区画が施される。腹部は2本一組の伏輪による横筋文 が施され、盤形文間に磨り消し。追文埴文(単指印痕付)。	加賀利作 式	口縫部区画内の縄文(単縦目)は 縦位、縦位共用ある。

325SK (第96・97図、表50)

位置 A2区北西部、AB-26グリッドに位置する。

重複関係 291SKの北東壁を切る。284SIに南東壁上部を切られる。

規模と平面形 残存する開口部は長径1.89m、短径1.61mの梢円形、底面は長径1.71m、短径1.39mの梢円形で、深さは0.45mである。

壁 底面から緩やかに立ち上がる。

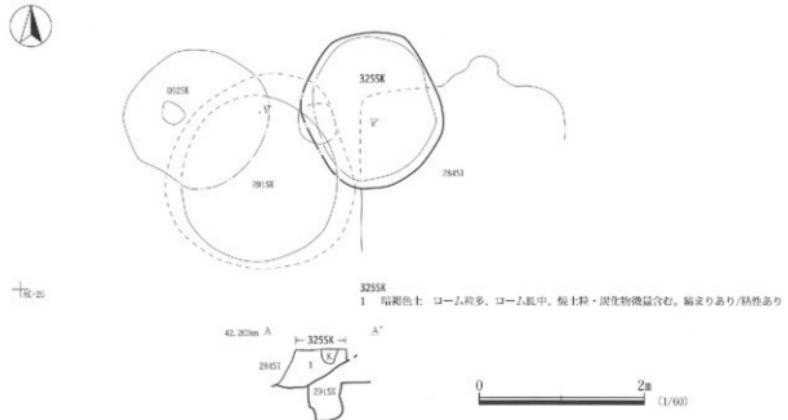
底 一部分のみしか検出しなかったため詳細は不明である。

覆土 単層である。検出した覆土が僅かなため、自然堆積か人為堆積かは不明である。

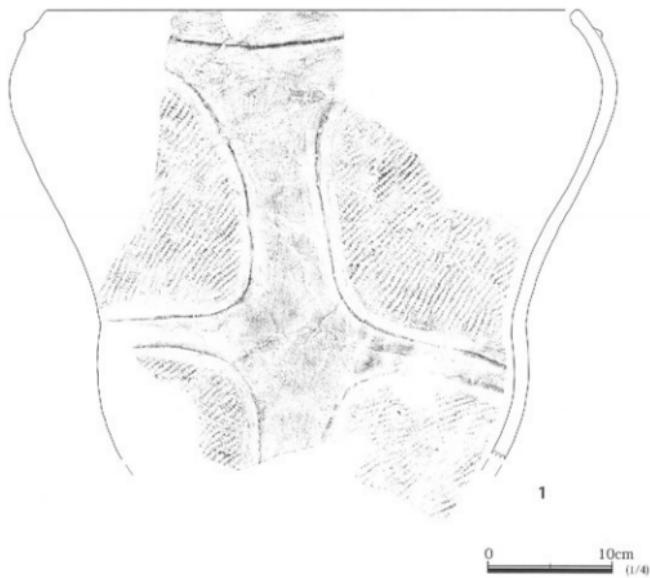
遺物 実測遺物は1点である。

1は、口縁部直下に断面三角状の隆帯が横位に貼付けられる。腹部も同様な隆帯により区画が施される。区画外には磨り消しが施される。

時期 遺構の切合、出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第96図 3255K 平面図・断面図



第97図 3255K 出土物

表 50 325SK 出土 土器観察表

番号	遺構 名	層位	形種	口径 (m)	底高 (m)	底径 (m)	最大深 (m)	剖面	文様・器正圓周	時期 (式)	備考(複合關係)
1	325SK	覆土	深鉢	0.30	0.368	0.312	0.476	口縁 内側に前頭三角状の飾目が切り分けられる。底部は所 面三角状の隆帶により区画され、区内には縦文(縦肋)と 横肋が施され、区向外には擦り落しが施される。	口縁 内側に前頭三角状の飾目が切り分けられる。底部は所 面三角状の隆帶により区画され、区内には縦文(縦肋)と 横肋が施され、区向外には擦り落しが施される。	縄文後 N式	

332SK (第 98・99 図、表 51)

位置 A 2 区南東部北西寄り、AF-29、AF-30 グリッドに位置する。

重複関係 302SK の北壁を切る。

規模と平面形 残存する開口部は長径 0.93 m、短径 0.82 m の梢円形、底面は長径 0.31 m、短径 0.19 m の梢円形で、深さは 1.60 m である。

壁 底面から緩やかに立ち上がり、壁面中程で括れ、再び開口部に向かい立ち上がる。断面形は不定形を呈する。

覆土 3 層に分層された。第 1 ~ 3 層はほぼ水平に堆積する。第 1 層は遺物を多く含む。堆積状況、ローム・

炭化物の含有状況から人為堆積と考えられる。

遺物 実測遺物は 2 点である。

1 は、1 層中部から下部にかけて出土した。器形は、頸部が張り出し、口縁部に向かい内側に傾斜する。

2 は、把手が 2箇所に施され、隆帶による突起が 2箇所施される。把手の文様構成は対称である。

時期 遺構の切合、1・2 や出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



+D-33

332SK

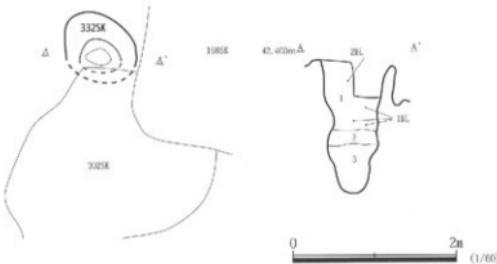
1 和卵色土・ローム较少、ローム粗粒、炭化物中、

鉄鉱バミス少量含む。粘まりあり/粘性あり

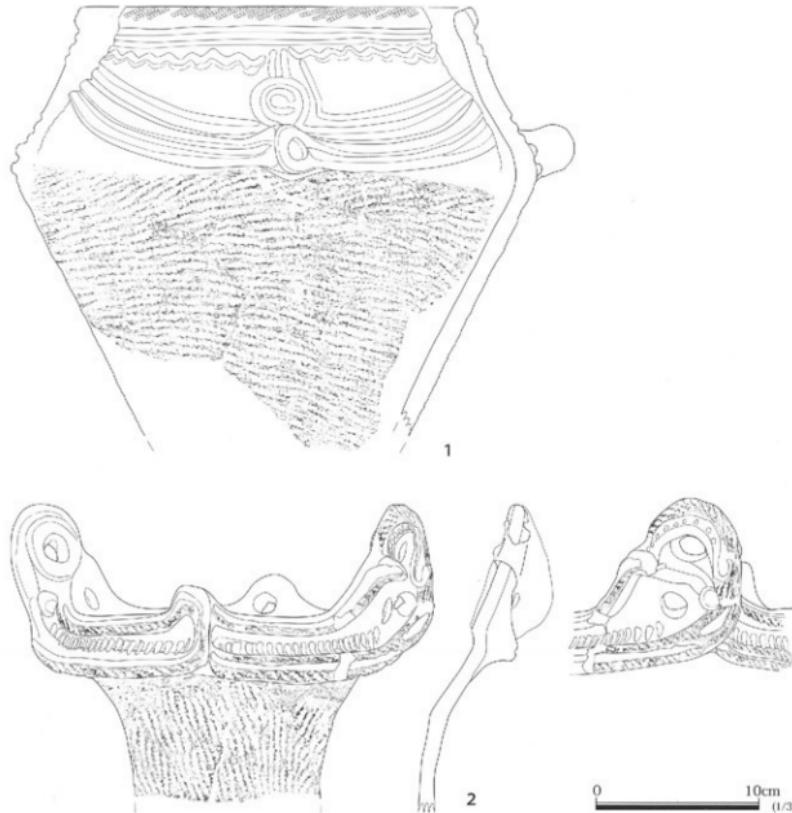
2 黄褐色土・ローム粗・ローム混多、炭化物微細含む。

3 黄褐色土・ローム較多、ローム粗・炭化物少、

鉄鉱バミス中量含む。粘まりあり/粘性あり



第 98 図 332SK 平面図・断面図



第99図 332SK出土遺物

表51 332SK出土 土器觀察表

番号	直径 mm	肩径	底径	口径 mm	高さ mm	底厚 mm	最大厚 mm	部位	文様・縪帯配置	時期 (形式)	参考(接合関係)
1 332SK	18L	深鉢	<16D	(26)				口縁 ～ 測計	口縁上縷部は脚背點付け。縦帯上に縄文(單頭輪縦文)が施 文される。上縷部に芯線による模様文、交叉文等が描かれる。 足文同文。脚部は腹帶點付けによる紀子小輪文が施される。		
2 332SK	26L	深鉢	23D	20D				口縁 ～ 測計	口縁部は把手が2箇所につけられる。口縁は算形點付けによる 区段が施された区段には脚突文が印される。縦帯上には縄文が 施文される(單頭輪)。地交叉文(單頭輪)。	加世利 「L」式	

第3節　その他の遺構の遺物（第100・101図、表52）

ここでは本調査によって出土した石器のうち、各器種において特徴的な遺物を掲載する。なお、觀察表に示すように後世の遺構覆土内や擾乱からの出土遺物も含まれるが、13以外は縄文時代の遺物として扱う。

1はチャート製の石鎌である。平面形は木葉形を呈する。基部はわずかに突き出し、茎を有するように整形されている。

2、3はチャート製の石鎌未製品である。2は原縁面を残す素材を用いて、縁辺全周に調整が施されている。調整剥離はほぼ器面全体に及んでいる。3は両側の長辺に沿って連続的な調整剥離が認められ、二等辺三角形状に整形されている。器面に素材剥片の打痕部を一部残している。

4はメノウ製の石鎌である。小形の製品で木葉形を呈する。石器画面に微細な調整が施されている。先端部に擦痕と思われる器面の荒れが認められる。

5はチャート製の石核である。一部に原縁面を有する。剥離によって形成された平坦面を打面として最終剥離作業を行なっている。

6はホルンフェルス製の打製石斧である。平面形は楔形を呈する。両側縁は調整剥離によって整形されている。刃部は両刃で、研磨によって作出され、刃部には擦痕が認められる。また、両側縁の中央部や基部寄りには剥離のつぶれが認められる。

7は変質ドレライト製の磨製石斧である。定角式とされる規格性が認められる製品である。表裏面と両側面の間に人念な面取り加工が施され、断面は隅丸長方形を呈する。刃部は船刃である。器面に不規則な擦痕、刃縁に微細な刃こぼれが認められる。

8は角閃岩製の磨製石斧である。小形で器厚は薄い。刃部は両刃で、平面形は弧状を呈する。刃部裏面には調整痕と思われる2面の磨痕が残る。刃縁に微細な刃こぼれが認められる。

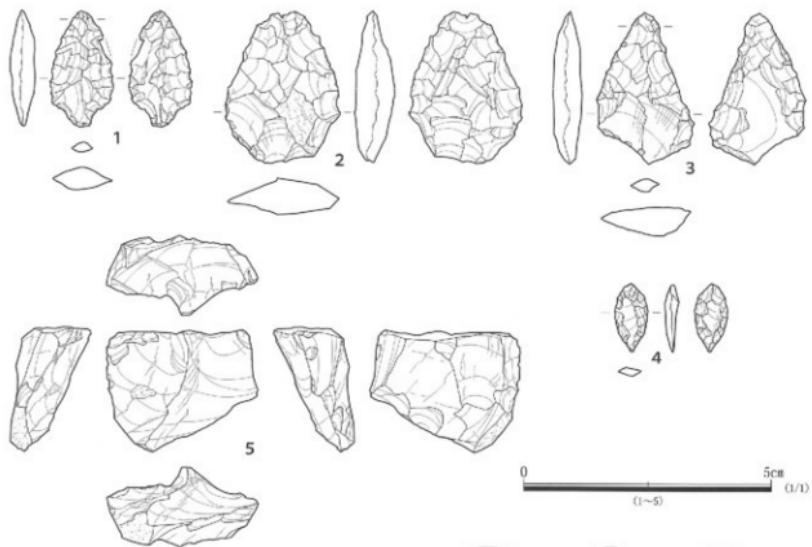
9はホルンフェルス製の磨製石斧である。平面形は楔円形を呈する。素材である扁平な楕円礫の形状を生かすような加工が施され、基部および胴部中央は未調整である。側縁には調整剥離と部分的な研磨加工、刃部には片刃を作り出すよう片面に顕著な研磨加工が施されている。刃縁は丸ノミ状に屈曲する。左側面に微細なつぶれが認められる。

10は粘板岩製の磨製石斧である。平面形は短冊形を呈する。右側面に擦り切り技法による製作の痕跡を残す。刃部は片刃で、刃縁には微細な刃こぼれが確認できる。表面には石器長軸に平行する多数の擦痕、裏面には斜行する擦痕と器面の剥落が認められる。

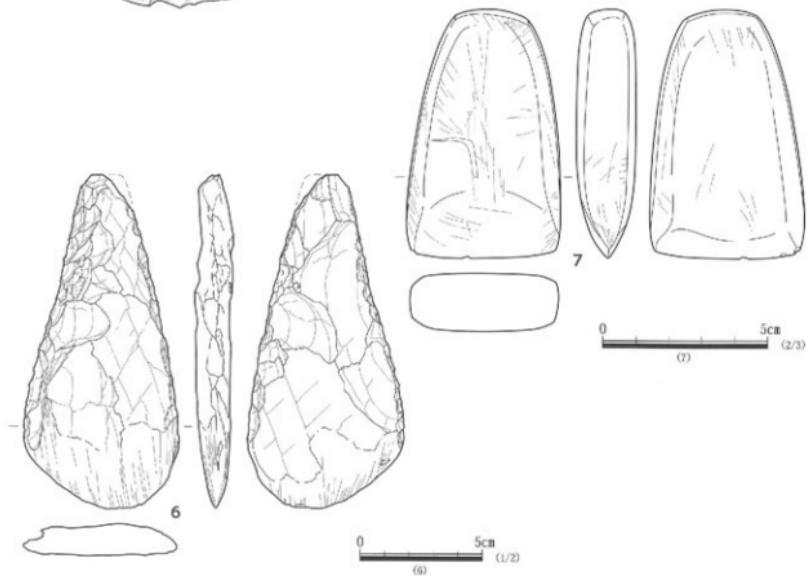
11は安山岩製の磨石・敲石である。平面形は楕円形を呈する。表裏面の大部分に磨痕が残る。敲打痕は表裏面の中央部、右側面および下端部に認められる。

12は砂岩製の敲石である。表面の中央部に敲打痕、その周辺の突端部には微細なつぶれが認められる。下端部と右側面上部には敲打痕が認められ、下端部は器面が剥落している。重量は約2000gを測り、裏面が平坦で安定することから、台石として使用された可能性も考えられる。被熱により赤色変化している。

13は砂岩製の石製品である。器種、鼎属時期は不明である。表面、左右側面に磨痕を残す。裏面は器面が剥落している。右側面には石器長軸に平行する擦痕が認められる。表裏面の各1箇所に凹み部を有し、位置関係から穿孔を意図した加工であると考えられる。

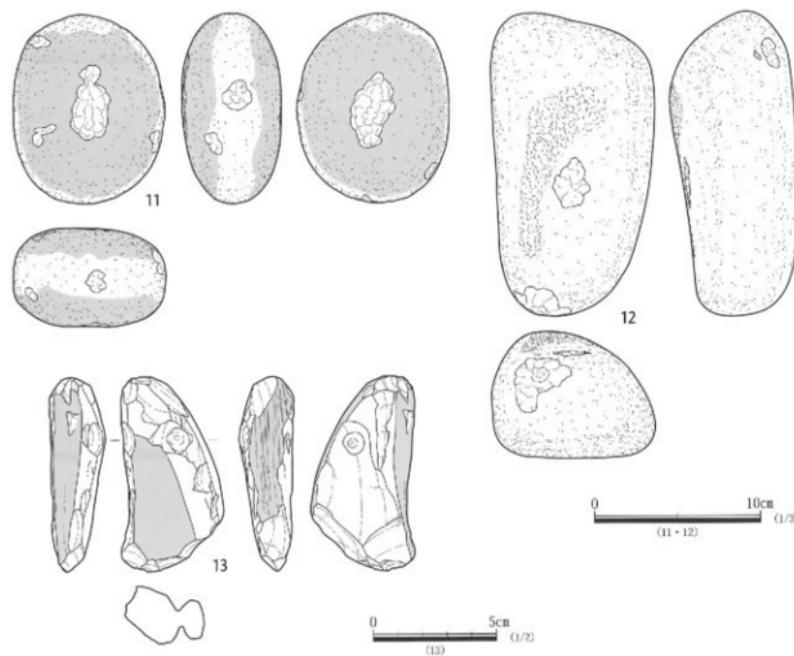
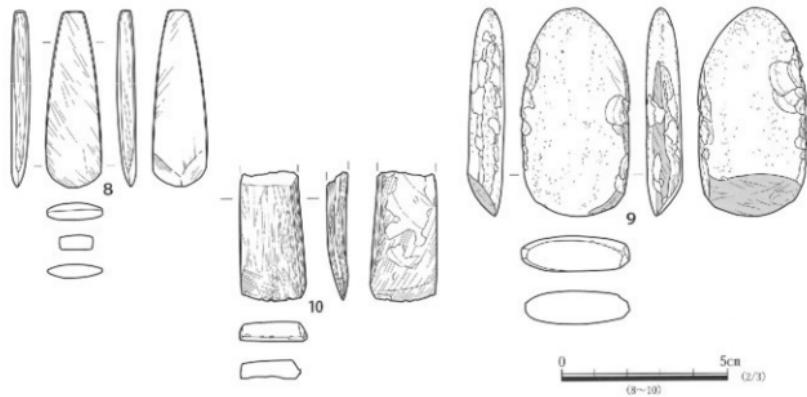


0 5cm (1/1)



0 5cm (2/3)

第100図 その他の遺構の出土遺物 1



第101図 その他の遺構の出土遺物 2

表 52 石器観察表

番号	透視図	局位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	鑑定	保存率	特徴	備考
1	205SK	覆土	石核	24	13	5	1	チャート		100%	凸面有茎	
2	03651	覆土	石器未製品	31	23	8	6	チャート		100%	縁辺に粗い調整	
3	167P	覆土	石器未製品	31	20	6	3	チャート		100%	剥片素材	
4	A1区 縫合面		石核	14	7	3	<1>	メノウ		100%	木彫形	
5	鏡		石核	26	31	17	9	チャート		100%	無縫面あり 不規則な打削転移	
6	327SK	覆土	打剥石斧	137	63	15	(160)	ホルンフェルス		95%	扇形 内刃 刃時に微小剥離	
7	018SK	覆土	打剥石斧	77	48	18	137	蒙眞ドレライト	○	100%	定角式 端刃 刃時に微小剥離	
8	208SK	覆土	磨製石斧	55	17	6	10	角閃岩	○	100%	定角式 端刃 刃時に微小剥離	
9	235SK	覆土	磨製石斧	64	33	11	38	ホルンフェルス		100%	端刃式 刀部側面 斧刃側面に剥離痕及びぶれ	
10	A1区		磨製石斧	(40)	20	6	(10)	粘板岩		70%	短袖形 扇り切り技法 斧刃 剣面に端面に剥離 刃縁に微小剥離 基部欠損	
11	062SK	覆土	磨石・敲石	118	92	61	947	安山岩		100%	内面磨痕 南面中央・片側面 下端部に打削痕	
12	068SK	覆土	敲石	186	100	77	2050	砂岩		100%	片面・下端部・片側面に敲打痕 伴石か 被熱	
13	起区		不明	80	42	23	71	砂岩		100%	器面に墨痕と擦痕 四み部2 寸孔加工か	時期不明

表 53 石器観察表 (写真掲載のみ)

番号	透視図	局位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	鑑定	保存率	特徴	備考
①	発光		石核	22	14	3	1	チャート		100%	アーチ型 端刃斜面	
②	194S1	覆土	石核	22	16	3	<1>	チャート		20%	丸頭丸茎	
③	C401	覆土	石器未製品	29	21	6	4	チャート		100%	矛先・舟形 端刃に剥離跡	
④	発光		石器未製品	26	22	9	4	チャート		100%	舟形 端刃に剥離跡	
⑤	発光		打剥石斧	114	61	28	261	ホルンフェルス	○	100%	端刃式 刃部と上部に剥離跡	
⑥	038C	覆土	研磨	26	40	17	11	チャート		100%	中円形 端刃に微小剥離	
⑦	発光		研磨	57	27	14	27	チャート		100%	圓錐形 端刃に剥離跡	
⑧	255SK	覆土	打剥石斧	(56)	60	23	(120)	ホルンフェルス		20%	舟形から上下顎大根	
⑨	A2X		打剥石斧	(98)	(90)	(77)	(77)	砂岩		100%	船形 打刃部斜面 基部欠損	
⑩	A2P研磨部		打剥石斧	23	35	15	53	尾突起岩	○	100%	船形式 各部位に磨擦跡	
⑪	A2X		打剥石斧	(134)	(89)	(37)	(306)	安山岩	○	80%	船形 打刃欠損	
⑫	037U	覆土	磨製石斧	(87)	(40)	(20)	(660)	砂岩		20%	船形 端刃に剥離跡	
⑬	発光		磨製石斧	(60)	(59)	(50)	(55)	砂岩		70%	丸形式 刃部斜面 端刃・片側面に剥離跡つぶれ	
⑭	034S1	覆土	磨製石斧	(107)	(89)	(74)	(531)	粘板岩		80%	丸形式 大頭丸茎 端刃に剥離跡つぶれ	
⑮	401A直三		磨製石斧	94	45	13	97	内閃岩	○	100%	半内式 刃部・舟形端面に剥離跡つぶれ 刃縁に微小剥離	
⑯	180X	覆土	磨製石斧	57	74	9	17	内閃岩	○	100%	半圓錐形 端刃	
⑰	107S1	覆土	磨製石斧	66	75	7	18	内閃岩		100%	船形 端刃斜面 基部欠損	
⑲	305S1	覆土	手形	170	61	46	452	砂岩		100%	三角柱状外見する 可能に鋸刃と結合部 亂層に衝入	古代?

表 54 石器觀察表（非掲載）

番号	遺跡名	遺物	器種	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材	表面	穿孔	鉋痕	説明	備考
00218	都主	石刀	石刀	76	53	37	138	碧玉	○	10%	上下端に一列斜め穿孔		
00354	1号	打削石斧	石斧	88	62	21	152	ホウシジムラク	△	40%	分離形・上刃欠損		
00704	都主	石刀	石刀	65	50	22	110	ホウシジムラク	○	40%	二部欠損		
01038	都主	石刀	石刀	79	64	38	166	ホウシジムラク		50%	下刃側・芦穂主に傷痕		
01044	都主	石刀	石刀	76	51	39	90	石英		50%	大字少欠損		
01514	都主	石刀	石刀	80	62	3	20	チトロ		60%	下刃少欠損		
01515	都主	石刀	石刀	23	17	4	1	チトロ		100%			
01516	都主	石刀	石刀	30	17	10	12	チトロ		100%	上刃以降側から斜め穿孔・右側面に擦小創痕		
01517	都主	石刀	石刀	26	2	4	<1>	チトロ		100%			
01518	都主	石刀	石刀	16	9	3	<1>	碧玉		100%			
01519	都主	石刀	石刀	100	120	13	22	チトロ		70%	大部少欠損		
01838	都主	石刀	石刀	100	63	35	205	碧玉		70%	片面に斜め穿孔・鋸歯から軽い力		
02102	No.17	打削石斧未調査	石斧	85	50	21	128	碧玉		50%	斜め穿孔・基部に擦小創痕・大字少欠損		
02155	都主	石片	石片	32	25	15	6	石英		100%			
02224	都主	石刀	石刀	25	17	5	3	チトロ		100%	上刃以降側から擦小創痕		
02225	都主	石刀？	石刀？	65	33	20	37	碧玉	○	100%			
02226	都主	石刀？	石刀？	52	17	9	4	チトロ		100%	上刃部欠損・表面側を打凸とする擦凹痕		
02228	都主	石刀	石刀	25	23	8	4	チトロ		100%			
02311	都主	石片	石片	22	14	7	2	チトロ		100%			
02325	都主	打削石器の石片	石片	34	15	5	3	チトロ		100%	心臓部に擦小創痕		
02326	都主	石刀	石刀	127	120	11	60	チトロ		50%	上刃少欠損		
02327	都主	石刀	石刀	128	120	17	33	チトロ		50%	上刃少欠損		
02328	都主	打削石器の石片	石片	50	13	13	5	碧玉		100%	穿孔が位置する箇所と斜め側方に擦痕・吸い込み		
02329	都主	石片	石片	105	55	21	17	チトロ		50%	大部少欠損		
02330	P1	都主	石片	21	12	4	10	石英		100%	左側が少欠損		
02331	都主	打削石器	石片	65	60	37	344	砂岩		100%	片面側・下側面に擦小創痕		
02332	都主	石片	石片	11	10	7	<1>	チトロ		100%			
02333	カツド	西小国山を示す印記	石片	107	121	65	61	チトロ		80%	上部欠損・様定に擦小創痕		
03034	都主	研磨石	研磨石	47	62	24	276	虎玉	○	100%	片面側に擦痕・下刃側面・八割空に斜めに穿孔・底擦		
03035	都主	石片	石片	14	9	5	<1>	チトロ		100%			
03036	都主	打削石斧	石斧	32	22	10	2	チトロ		100%	手縫形・両刃に擦小創痕		
03037	都主	石刀？	石刀？	31	12	7	2	石英		100%			
03038	都主	石片	石片	35	23	10	6	石英	○	100%			
03039	都主	刮削器	刮削器	63	21	8	③	石英		60%	下刃欠損		
03040	都主	刮削器	刮削器	67	62	8	③	石英		60%	三部・右側斜め欠損		
03041	都主	打削石斧	石斧	190	142	1	③	チトロ		100%	対向式か・大部空欠損		
03042	都主	打削石斧	石斧	170	143	12	46	ホウシジムラク		10%	対向式か・大部空欠損		
03043	都主	打削石斧	石斧	59	27	25	44	ホウシジムラク		半削	側刃側を半削・両側面に上端側に擦痕		
03044	都主	石刀	石刀	45	22	19	14	メノウ		100%	側面側あり・半一端から残用		
03051	都主	基石	基石	73	42	22	28	ホウシジムラク	△	100%	三部斜め欠損		
03052	都主	石刀	石刀	30	34	10	4	チトロ		100%	下刃欠損・右側面に細い擦小創痕・芯部分剥離		
03053	都主	石片	石片	18	16	3	<1>	黒曜石		100%			
03054	都主	石片	石片	20	14	6	2	黒曜石		100%			
03055	都主	石片	石片	13	26	15	7	黒曜石		100%	小底斜め打削側		
20001	都主	底小頭形を示す印記	石片	29	75	7	6	チトロ		100%	側面側に擦小創痕		
03056	都主	一次加工を示す印記	石片	25	79	6	2	チトロ		100%	芯部分に片面側から擦痕		
03057	都主	台盤	台盤	113	74	5	③	チトロ		60%	C型底盤 基部の取付は底面・先端側欠損		
03058	都主	石刀	石刀	25	25	6	4	チトロ		100%	千削形・両側斜め側		
03059	都主	石片	石片	25	19	5	2	チトロ		100%	大部少欠損		
03060	都主	石片	石片	63	22	17	③	チトロ		100%			
03061	都主	石片	石片	63	19	6	③	チトロ		100%	大部少欠損		
03062	都主	石片	石片	63	19	6	③	チトロ		100%	大部少欠損		
03063	都主	石片	石片	63	19	6	③	チトロ		100%	大部少欠損		
03064	都主	石片	石片	63	19	6	③	チトロ		100%	大部少欠損		

表 55 石器観察表（非掲載 2）

番号	遺物名	部位	断面	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	石材	用途	追加	特徴		西向
											横	縦	
00051	陶土	網上	網上	74	32	8	5	石英	○	100%			
00051	陶土	丸穴	丸穴	37	72	10	5	チャート		100%			
00051	陶土	網上	網上	030	030	012	20	チャート		10%	上下幅部差違		
00051	陶土	40°	40°	071	201	042	10	チャート		10%	大頭部欠損		
00051	陶土	網上	網上	25	10	6	1	チャート		100%			
00051	陶土	二つ切土を有する丸穴	二つ切土を有する丸穴	38	28	14	10	チャート		100%	右下端斜面 手取面が打削によって生じた凹凸		
00051	陶土	網上	網上	41	220	8	02	チャート		80%	手取面が打削によって生じた凹凸		
00051	陶土	網上	網上	28	120	5	02	チャート		80%	右下端欠損		
00051	陶土	石板	石板	21	22	15	8	石英		100%	手取面が打削によって生じた凹凸		
00051	陶土	丸穴	丸穴	070	180	10	<12>	チャート		10%	上部欠損		
00051	陶土	網上	網上	080	082	05	02	チャート		80%	上部欠損		
00051	陶土	網上	網上	18	15	8	1	石英		100%			
00051	陶土	体小切土を有する網上	体小切土を有する網上	29	19	10	3	チャート		100%	下下端斜面 手取面が打削によって生じた凹凸		
00051	陶土	体小切土を有する網上	体小切土を有する網上	280	210	07	02	チャート		20%	上部欠損部 手取面に体小切土		
00051	陶土	打削端部	打削端部	020	032	17	030	ホルンフェルス	○	90%	小頭部 手取面が打削によって生じた凹凸		
00051	陶土	網上	網上	127	28	6	010	焼成土	○	100%	片面半丸 下端部に斜削面 残端 斧内側付着		
00051	陶土	40°?	40°?	32	28	7	2	チャート		100%			
00051	陶土	網上	網上	18	24	5	1	チャート		100%			
00051	陶土	網上	網上	030	040	7	10	チャート		30%	下部欠損		
00051	陶土	表面苔痕	表面苔痕	050	040	010	080	砂岩		80%	左角部 弧形 手取面に斜削面 下部欠損部 久世原山		
00051	陶土	内芯・蓋石	内芯・蓋石	15	090	26	027	陶器内	○	80%	右端部 上下端部 手取面に斜削面なつされ		
00051	陶土	網上	網上	21	180	7	02	チャート		80%	側面開き 手取面が打削によって生じた凹凸		
00051	陶土	丸穴?	丸穴?	38	24	16	8	石英		100%			
00051	陶土	体小切土を有する網上	体小切土を有する網上	080	080	05	02	チャート		80%	下下端斜面 手取面が打削によって生じた凹凸		
00051	陶土	体小切土を有する網上	体小切土を有する網上	074	19	10	02	チャート		80%	上部欠損 手取面に体小切土		
00051	陶土	40°?	40°?	41	26	11	15	チャート		100%			
00051	陶土	体小切土を有する丸穴	体小切土を有する丸穴	35	70	5	3	チャート		100%	史文化品に迷い毛跡		
00051	陶土	打削端部	打削端部	97	28	18	05	粘土質	○	100%	側面に斜削面から残渣跡		
00051	カマド	横打石器	横打石器	25	20	9	5	チャート		10%	上下端斜面 手取面が打削によって生じた凹凸		
00051	底土	底土	底土	20	25	4	3	チャート		10%			
00051	カマド	平底	平底	41	61	13	71	粘土		100%	右側を凹む 右側部化	右側?	
00051	埋土	埋土	埋土	21	43	10	10	チャート		100%			
00051	埋土	砂質	砂質	23	18	5	<1>	チャート		100%			
00051	埋土	砂質	砂質	7	6	3	<1>	砂岩		100%			
00051	埋土	内側未焼成品	内側未焼成品	29	22	6	4	チャート		100%	飛出に拘る 鋼製測定器		
00051	埋土	埋土・骨髄	埋土・骨髄	-	-	-	-	骨髄		-			埋土骨髄
019-00051	埋土	網上	網上	53	46	21	49	石英		100%	上下端斜面 手取面		
019-00051	埋土	四八形端を有する網上	四八形端を有する網上	020	060	03	017	メノウ		100%	側面盛り ト作欠陥 C側面に體小切土		
019-00051	埋土	40°?	40°?	31	11	6	4	チャート		100%			
019-00051	埋土	網上	網上	040	040	03	011	メノウ		100%	上部欠損		
019-00051	埋土	網上・鐵石	網上・鐵石	90	90	30	080	鉄錆	○	100%	鉄錆 鐵石 手取面に斜削面なつされ 錆跡		
00051	陶土	網上	網上	89	80	42	13	ホルンフェルス		100%	史文化品		
00051	陶土	網上	網上	75	76	16	10	ホルンフェルス	○	100%			
019-00051	埋土	網上	網上	47	36	4	21	チャート		100%	背面に斜削面		
019-00051	埋土	内芯・蓋石	内芯・蓋石	93	78	62	72	石英鉄錆	○	100%	背面鉄錆 下端部に斜削面 錆跡		
019-00051	埋土	体小切土を有する網上	体小切土を有する網上	3	020	5	02	鉄錆・石英		100%	背面鉄錆 手取面に體小切土		
019-00051	埋土	網上	網上	037	37	4	02	チャート		100%	下部欠損		
019-00051	埋土	網上	網上	74	37	6	02	チャート		100%	下部欠損 手取面に體小切土		
019-00051	埋土	二八点端を有する網上	二八点端を有する網上	25	30	10	5	チャート		100%	背面に斜削面 錆跡 残入製品か		
019-00051	埋土	底土	底土	85	39	10	23	粘土質	○	100%	底面が底子となる 上下端部と両側面に擦痕 錆跡		
019-00051	埋土	鉄錆・鉄錆	鉄錆・鉄錆	53	10	13	28	チャート		100%	底面が底子となる 上下端部と両側面に擦痕 錆跡		

表 56 石器観察表（非掲載 3）

番号	遺物名	種類	形状	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	高さ (mm)	材質	寸法	遺物番	特徴	備考
09125	埴土	切削	88	10	24	63	チヤード	108%	表面磨あり 十字型打刃形態			
09252	埴土	削出	19	11	6	7	チヤード	108%				
09554	埴土	削出	139	102	46	95	安山岩	108%	背面中央に削出凹み 末色斜面有			
09554 77	埴土	削出	133	630	30	233	砂岩	60%	背面中央に削出凹み 表面に削出凹み			
102・10251	埴土	削出	17.00	14.0	2.00	12.00	砂岩	70%	背丸式 内側・底面欠損	2		
11353	埴土	削出?	131	49	20	100	ホルンフェルス	○	105%	背丸式 内側・底面欠損	1	
11401	埴土	削出	89	6	97	80	砂岩	9%	背丸式の他 一円形欠損			
1157	埴土	二次成形打刃形態	90	17	15	36	ホルンフェルス	○	105%	背面に削出凹み 打刃形態有		
11755	埴土	削出	23	17	7	3	石英	105%				
14755	埴土	削出	28	19	5	3	石英	105%				
15058	埴土	削出	120	120	7	7	チヤード	30%	上部欠損			
15558	埴土	削出	30	29	11	7	石英	105%				
15858	埴土	削出	96	11	48	888	砂岩	105%	背面中央・片側面に削出			
15958	埴土	削出	63	133	12	100	チヤード	30%	下部欠損有			
16251	埴土	削出?	227	44	15	100	チヤード	50%	表面磨あり			
174・18054	埴土	削出	108	20	10	53	チヤード	35%	表面磨あり			
18054	埴土	削出	24	17	17	3	石英	105%				
18855	埴土	二次成形打刃形態	27	25	5	5	チヤード	105%	背面に削出凹み 打刃形態有			
18855	埴土	削出	123	133	10	12	チヤード	50%	「お」字形			
18951	埴土	毛端	180	14	2	<1>	チヤード	93%	凹凸有り 表丸端・削出欠損			
18951 73	埴土	毛端	60	17	42	<1>	チヤード	28%	大部分欠損			
20508	埴土	削出・縫合	47	14	45	279	砂岩	105%	背面側に縫合 縫合・下部端に削出			
20508	埴土	削出	46	12	7	16	碧玉岩	105%				
20508	埴土	削出	175	602	137	422	下部端部	○	2.0%	側面に削出 縫合		
22598	埴土	削出	104	97	11	21	ホルンフェルス	10%	大頭丸削 砂質に毛端			
22598	埴土	削出	23	113	58	97	碧玉岩	○	105%	片端の一部に毛端・色々削出有り		
22598	埴土	削出	190	122	51	230	ホルンフェルス	○	105%	凹凸有り (山) 10 線状		
23138	埴土	削出・縫合を施す部分	83	19	15	38	碧玉岩	○	105%	側面側に縫合		
23138	埴土	削出・縫合	105	94	10	21	碧玉岩	○	105%	背面側に縫合・毛端		
24138	埴土	削出・縫合	118	110	20	120	ホルンフェルス	○	105%	毛端丸削・縫合・基部に縫合端		
24138	埴土	削出	30	26	17	17	チヤード	105%	不規則な縫合端			
24138	埴土	削出側面を施す部分	22	111	6	11	チヤード	95%	毛干端丸削 側面側に縫合端			
303・30352	埴土	台形	229	16	35	1675	砂岩	105%	肩平分の高台に削出端と四角いつぶれ			
30352	埴土	二次成形打刃形態	43	25	14	9	チヤード	105%	側面側有り 片側面に削出 端部中央側面			
31152	埴土	削出?	32	20	19	14	石英	105%	表面磨あり 今表面不規則			
31152	埴土	削出	56	45	18	60	ホルンフェルス	○	105%	表面に削出端部・縫合端		
31752 72	埴土	削出	27	15	9	3	石英	105%				
33057	埴土	削出	130	130	12	10	粘土質灰岩	27%	大型丸欠損			
33057	埴土	石英	29	32	35	35	チヤード	105%	表面磨あり 不規則打刃形態			
33057	埴土	粘土・鉱物	377	140	630	3800	粘土質灰岩	23%	片端磨耗 端部に削出端			
33058	埴土	削出・縫合	180	173	47	180	粘土質灰岩	○	105%	表面磨耗・片端側に縫合端		
41452	埴土	削出	133	124	5	1	チヤード	20%	上部欠損			
41452	埴土	削出・縫合を施す部分	57	60	9	10	チヤード	105%	側面側に縫合端			
41452	埴土	削出	16	20	7	4	チヤード	105%				
41452	埴土	削出	332	132	130	130	粘土質灰岩	68%	下部欠損			
41452	埴土	削出?	245	81	12	198	ホルンフェルス	○	105%	側面側の大部分に削出		
41452	埴土	削出	119	87	36	531	ホルンフェルス	105%	側面側の大部分に削出			
41452	埴土	削出	620	650	177	60	チヤード	105%	「お」字形			
425	埴土	二次成形打刃形態	96	41	11	11	粘土質灰岩	105%	背面側 端部側に削出なつぶれ			
425	埴土	削出・縫合	132	65	55	86	砂岩	105%	表面磨耗 端部側に削出なつぶれ			
425	埴土	二次成形打刃形態	23	31	8	3	チヤード	105%	表面磨耗・表面から削出端			

表 57 石器観察表（非掲載 4）

番号	遺跡名	房名	種別	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	裏面	台付	端記	出所	特徴	備考
	石区	打抜石器	110	47	34	150	ホルンブッシュ	○	100%	直刃・曲刃と直角に斜めの腹		
	石区	石器	102	55	37	167	ホルンブッシュ		40%	直刃・曲刃と直角に斜めの腹		
	石区	石器	107	45	33	163	アブリート	○	75%	直刃・曲刃と直角に斜めの腹		
	石区	縁の櫛	141	13	8	168	直刃	○	100%	直刃		
	石区	石器	695	50	33	140	直刃	○	70%	直刃に直角打痕		
	石区	縁の櫛	92	47	35	252	チャート		100%	六角形に直角打痕が複数なつぶれ		
A15石器十		石器	45	26	12	13	チャート		100%	直刃あり	直角打痕	
A15石器留置		石器	34	22	8	5	チャート		100%	二重刃石器	直刃に直角から斜めの腹	
A15石器留置		縁小切妻を施す石器	35	30	9	8	チャート		100%	周辺に縁小切妻		
A15石器留置		石器	129	60	11	27	チャート		20%	上部丸錐		
A15石器留置		石器	23	15	10	6	直刃		100%			
A15石器留置		石器	53	35	11	29	ホルンブッシュ	○	100%			
縁石器		石器	35	25	15	7	チャート		100%			
縁石器		石器	177	220	37	12	チャート		30%	上部丸錐		
縁石器		縁小切妻を施す石器	21	14	4	1	直刃		100%	直刃に縁小切妻		
縁石器		縁小切妻を施す石器	47	30	10	20	チャート		100%	直刃に縁小切妻		
縁石器		縁石	133	82	29	505	直刃		100%	下端部丸錐	直刃中に直角	
縁石器		石器	127	68	35	35	チャート		45%	下端部丸錐		
縁石器		石器	110	60	4	11	直刃	○	35%	出島船頭	丸錐部・斜面丸錐	
縁石器		直型丸錐	173	60	25	117	直刃	○	35%	丸錐部	直角打痕	
縁石器		石器	26	20	9	5	チャート		100%	下端部丸錐	直角打痕・斜面丸錐	直角打痕から直角打痕
縁石器		石器	150	220	34	37	直刃		35%	上部丸錐		
縁石器		石器	37	15	8	3	直刃		100%			
縁石器		石器	36	20	15	12	直刃		100%			
縁石器		石器	35	24	10	6	縫隙質		100%			
縁石器		石器	98	20	29	10	直刃		100%	縫隙部と側面の直角打痕	縫隙部	
縁石器		一次加工を施す石器	54	31	10	2	チャート		100%	縫隙部・斜面を打痕とする直角打痕	縫隙部	縫隙部
縁石器		縫隙質	171	23	0.05	0.05	直刃		65%	直角打痕		
縁石器		石器	280	361	33	41	直刃		70%	上・側面丸錐		
縁石器		縫隙を施す直型丸錐	38	2	7	4	チャート		100%	縫隙あり	直角打痕に縫隙	
縁石器		縫隙・縫合	99	60	47	394	ホルンブッシュ	○	100%	直角打痕	縫隙部・斜面を打痕とする直角打痕	
縁石器		石器	231	180	47	35	チャート		30%	丸錐丸錐		
縁石器		石器	280	275	43	47	チャート		45%	丸錐丸錐		
縁石器		直角打痕	25	15	9	30	直刃		100%			

第4節 理化学的分析

笠間市橋爪遺跡における放射性炭素年代

(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

茨城県笠間市橋爪遺跡の測定対象試料は、土坑より出土した土器内の土の中から水洗選別によって採取されたクルミ核片で、001SK出土のNo.001 (IAAA-100437)、065SK出土のNo.123 (IAAA-100438) の合計2点である (表58)。

2 測定の意義

クルミ核片を検出した土坑の廃絶年代および共伴遺物の年代を推定する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・上等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表58に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

3MV タンデム加速器 (NEC Pelletron 9SDH-2) をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表58)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」を注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (OyrBP) として測る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表58に、補正していない値を参考値として表59に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さ

い (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 58 に、補正していない値を参考値として表 59 に示した。

- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の層年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下引桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 59 に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BPJ」という単位で表される)。

6 測定結果

^{14}C 年代は、001SK 出土の No.001 が 4440 ± 30yrBP、065SK 出土の No.123 が 4450 ± 30yrBP と、ほぼ同じ年代を示した。历年較正年代 (1σ , 2σ) では、2 点とも 3100 ~ 3000cal BC 頃の確率が最も高いが、3300 ~ 3200cal BC 頃の確率も低くない。縄文時代中期前葉から中葉頃に相当する年代値である。

炭素含有率はいずれも 70% 前後の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 58

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	δ ^{14}C 補正あり	
					(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-100437	No.001	遺構:001SK	クルミ核片 AAA'	-25.82 ± 0.59	4,440 ± 30	57.55 ± 0.20	
IAAA-100438	No.123	遺構:065SK 層位:4 層	クルミ核片 AAA	-26.57 ± 0.59	4,450 ± 30	57.49 ± 0.20	

[#3658]

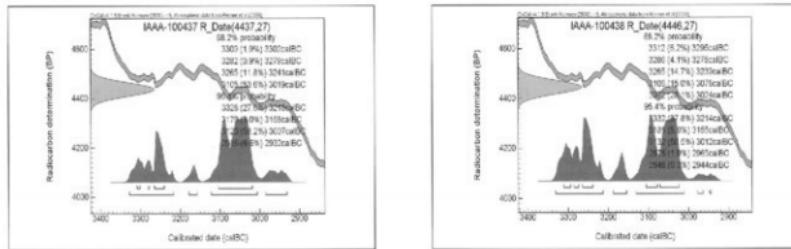
表 59

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		历年較正用(yrBP)	1Δ 历年年代範囲	2Δ 历年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-100437	4,450 ± 30	57.46 ± 0.19	4,437 ± 27	3309calBC - 3302calBC (1.9%)	3328calBC - 3218calBC (27.6%)
				3282calBC - 3279calBC (0.9%)	3179calBC - 3158calBC (3.0%)
				3265calBC - 3241calBC (11.8%)	3123calBC - 3007calBC (58.2%)
				3105calBC - 3019calBC (53.6%)	2986calBC - 2932calBC (6.6%)
IAAA-100438	4,470 ± 30	57.31 ± 0.19	4,446 ± 27	3312calBC - 3295calBC (6.2%)	3332calBC - 3214calBC (37.8%)
				3286calBC - 3275calBC (4.1%)	3188calBC - 3155calBC (5.8%)
				3265calBC - 3239calBC (14.7%)	3132calBC - 3012calBC (50.5%)
				3106calBC - 3078calBC (15.0%)	2978calBC - 2965calBC (1.0%)
				3072calBC - 3024calBC (28.1%)	2948calBC - 2944calBC (0.3%)

[参考値]

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150



【参考】曆年較正年代グラフ

【補註】065SK 第4層から出土した土器No.123より検出したクルミ核片中から無作為に抽出した資料2点を、異なる遺構から出土した資料として測定を委託した。その結果、ほぼ同様の測定結果を得たことから、測定精度については一定の信頼性を認めることができよう（岡安光彦）。

第5節 縄文時代まとめ

今回の調査では、縄文時代に該当する遺構が、A1区から41基、A2区から191基、D区から3基、総計235基を検出した。遺構の内訳は、住居3軒、土坑153基、ピット79基である。土坑では、袋状土坑（註1）46基を検出した。

出土遺物は、阿玉台Ib式、II式、IV式、加曾利E I～IV式の土器などで縄文時代中期前葉から後葉の上器を中心である。その中でも加曾利E I式上器、加曾利E II・III式上器が多く出土している。

袋状土坑は、阿玉台IV式や加曾利E I式の土器を出土するものが多く、土坑の形状も袋状を呈するもの、プラスコ状（註2）を呈するもの、ピットを伴うものなど様々であった。

1. 本調査地点における遺構時期の設定

本調査地点検出の遺構を出土遺物の検出状況などから、同時期（一括）と捉えることのできる遺物を多く含む遺構を指標とし、遺物の様相などからⅠ期～Ⅶ期に区分した。

本調査地点の土器の分類に関する参考文献を参照した。本調査地点における遺物、遺構の時期を以下のように捉えた（註3）。また、遺構の形状も時期区分の判断基準とした。

Ⅰ期（第102図）：指標遺構は006SIである。阿玉台I b式土器がみられる。遺構は、006SI基しか確認されていない。住居床面から口縁部から頸部にかけ逆S字形に隆帯が伸びる深鉢が出土した。（註4）

Ⅱ期（第103図）：指標遺構は230SK・302SKである。阿玉台IV式上器、大木8a～8b式の上器がみられる。阿玉台IV式土器の中でも、口縁部が波状口縁となるものを多く含む遺構をⅡ期とした。

Ⅲ期（第104図）：指標遺構は156SK・190SKである。阿玉台IV式土器を主体とする。中峰式土器を共伴する。阿玉台IV式上器の口縁が波状ではなく隆帯貼付けによる装飾、把手などが施されるものを多く含む遺構をⅢ期とした。

Ⅳ期（第105図）：指標遺構は064SK・065SKである。加曾利E I式の土器が主体的に見られる。中峰式土器、大木8b式の土器を共伴する。加曾利E I式の上器は、口縁部に隆帯による、クランク文・横位波文などが描かれるものが多く見られる。また、胴部には、単節の縄文を地文に沈線による懸垂文や渦巻などが描かれる土器が見られる。沈線は半截竹管状工具による。

Ⅴ期（第106図）：指標遺構は012SK・054SKである。加曾利E II式、加曾利E III式の上器が見られる。加曾利E II式の土器を伴い、加曾利E III式の上器の胴部の沈線間の幅が狭く磨り消しがはっきりとしているのが少ないものを含む遺構をⅤ期とした。

Ⅵ期（第106図）：指標遺構は134SKである。加曾利E III式の土器の胴部の沈線間の幅が広く、加曾利E III式土器が主体的に見られる遺構をⅥ期とした。

Ⅶ期（第107図）：指標遺構は325SKである。加曾利E IV式の土器が見られる。口縁部から胴部にかけ頸部の括れが緩やかで、磨り消し文の幅が広く、胴部は断面三角状の隆帯によるX画が行なわれている。調査区内で検出された遺構数は2基である。

2. 各時期の遺構の分布状況（第102～107図）

Ⅰ期：A1区の南壁際より住居跡1軒（006SI）のみを検出した。しかし、138SK（袋状土坑）などからも同時期の遺物を出土しており、周囲に同時期の遺構が存在する可能性は高い。

Ⅱ期：遺物をやや多く含む袋状土坑203SK、230SK、302SKが、A2区中央北から南東にかけて10～13mの間隔（註5）で弧を描いて並ぶ。

Ⅲ期：底面からほぼ完形の遺物を多く含み断面形はプラスコ状を呈する156SK、159SK、190SKがA2区東

側に4~6m程の間隔で北西から南東にかけて並ぶ。またA1区の東側、156SKより20m程南東に138SKが位置する。138SKも、同様にフラスコ状を呈し遺構底面よりほぼ完形の遺物が出土している。

IV期：A2区西側から南東にかけ袋状土坑が確認された。袋状上坑の中でも065SKからは多量の遺物が出土し、良好な一括資料を得た。住居跡は275SIがIII~IV期に該当し、III期では、大規模な袋状土坑は住居跡の南東側に位置するが、IV期では、住居跡の西側と東側に3~12m程の間隔で袋状土坑が位置する。

V期：調査区内で最も多くの遺構が確認された時期である。A2区東側からA1区西側にかけて遺構が集中する。大型の袋状土坑は特にA2区東側の南北方向に集中する。住居跡は149SIが該当し、袋状土坑の東側に位置する。

VI期：V期とほぼ同じ位置に遺構が配置されるが、壁面がオーバーハングするいわゆる袋状を呈する遺構は確認されなかった。遺構数もV期より少ない。

VII期：A2区西の北側から2基上坑が確認されたのみである。土坑の規模は底径1.50~1.70m程である。

本調査地点は、A1区からA2区にかけて南北方向に緩やかに傾斜し、各時期を通して住居跡は3軒のみしか検出されず、本調査地点は集落内において、主に上坑が構築される場所にあたると推測される。

3. 本調査地点検出の袋状土坑について（第108図（註6）、表60）

調査区より検出した上坑の傾向としては、II期からV期にかけて、上坑のなかでもいわゆる袋状土坑（註1）が数多く構築される傾向が看取できた。全時期を通じて検出された袋状土坑は46基であり、II~IV基に該当するものが多く、II~IV期で検出した袋状上坑は28基である。その中でもII~IV期では、いわゆるフランコ状「フランコa」、「フランコb」を呈するものが多く、21基みられる。V期では、フランコ状を呈するものは1基のみである。

各時期のいわゆる袋状土坑に関して詳細を述べる。II・III期においては、いわゆる袋状土坑の中では、「フランコa」、「フランコb」、「袋状b」に該当するものだけがみられる。袋状土坑の法量は、II・III期においては底径1.89~3.56m、基底部の標高は40.95~41.81mを測る。袋状土坑の底径の平均は2.60mである。遺構底面は鹿沼バニッシュ直上を遺構底面とするものが多い。しかし、III期に該当する袋状土坑の中で156SK、159SK、190SKは、形状は「フランコa」を呈し、底径は3.20~3.56m、基底部の標高は40.95~41.33mを測り他の袋状土坑と比べ規模が大きい。

IV期においては、II・III期では確認されなかった袋状を呈しピットを伴わない「袋状a」が見られる。いわゆる袋状土坑の法量は底径は1.58~3.21m、基底部の標高は40.47~41.49mを測る。袋状土坑の底径の平均は2.29mである。フランコ状を呈する「フランコa」においてII・III期に比べやや小さい法量のものも見られる。065SKは底径3.21mを測り、他の袋状土坑に比べ規模が大きい。

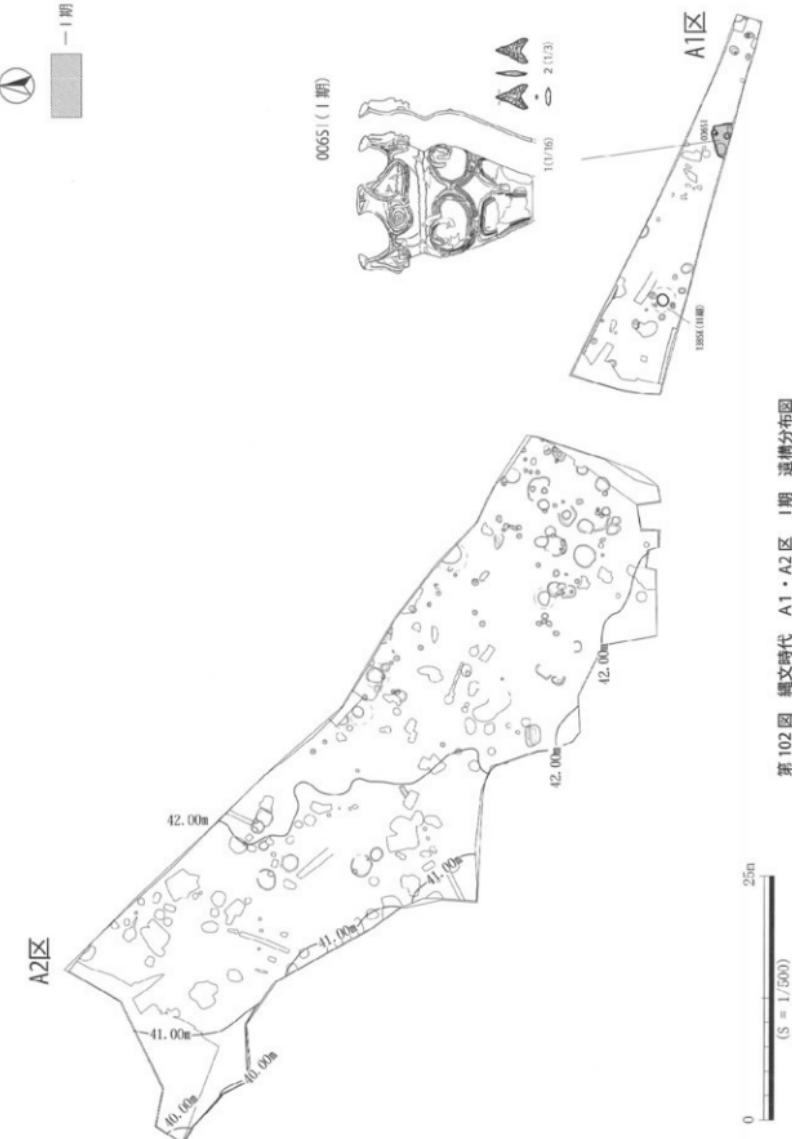
V期においては、いわゆる袋状土坑の中で括れ部分を持たない「袋状c」の形状を呈するものが見られる。また、フランコ状を呈する袋状土坑は、「フランコa」が1基見られるのみである。検出した遺構の6割は壁面がオーバーハングしない土坑である。袋状土坑の法量は、底径1.32~3.44m、基底部の標高は40.81~41.73mを測る。袋状土坑の底径の平均は2.17mである。

VI期においては、いわゆる袋状土坑は確認されず、壁面がオーバーハングしない、平面形が円形や橢円形を呈する土坑のみが確認された。遺構の法量の幅も広くばらつきが見られる。

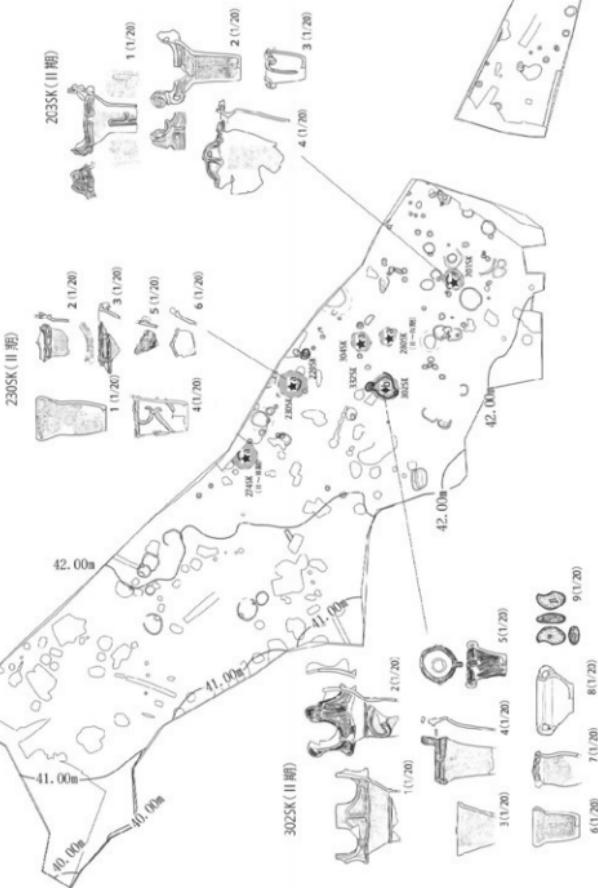
本調査地点では、II・III期においては、ピットを伴わないフランコ状を呈する「フランコa」が主体を成し、袋状を呈する袋状土坑ではピットを伴うもの「袋状b」が主である。IV期においては、ピットを伴わないフランコ状を呈する「フランコa」が土坑の多くを占めるが、フランコ状を呈するものでピットを伴う「フランコb」、袋状を呈しピットを伴わないもの「袋状a」なども見られる。V期以降では、IV期まで主体を成していたフランコ状を呈する袋状土坑が減少し、壁面がオーバーハングしない土坑が主体となる。

検出したいわゆる袋状土坑は、時期、断面形、法量による差異が見られ、上坑の形状に偏りがみられることがから、各時期において一定の制約が働き、形状などが類似する袋状土坑が本調査地点では、構築されたと推測

第102図 繩文時代 A1・A2区 1期 遺構分布図



A2区



0 25m
(S = 1/500)

第103図 繩文時代 A1・A2区 II期 遺構分布図

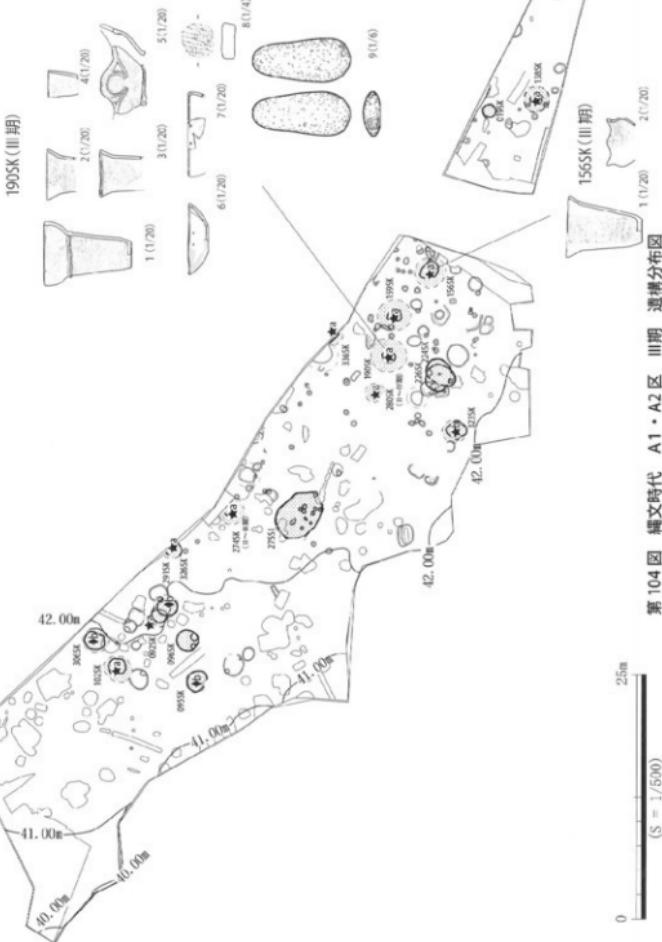
Ⓐ

— II期

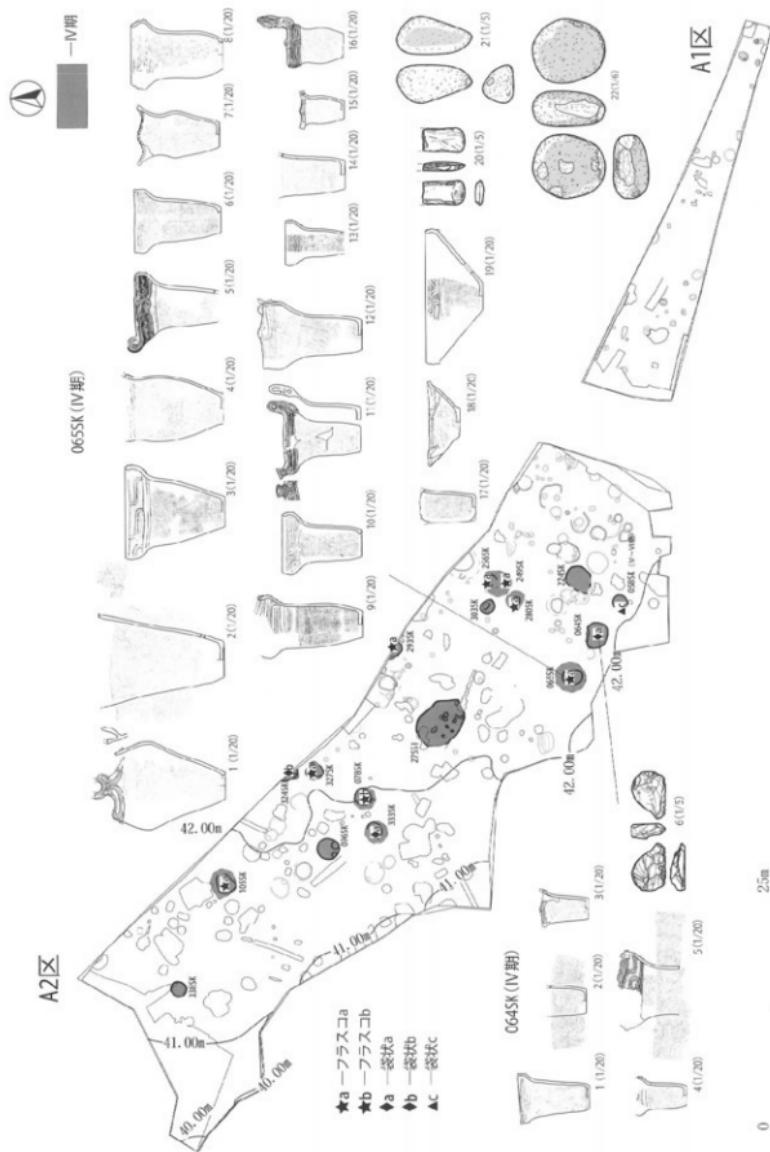
★a — フラスコa
◆b — 瓶形b

A2区

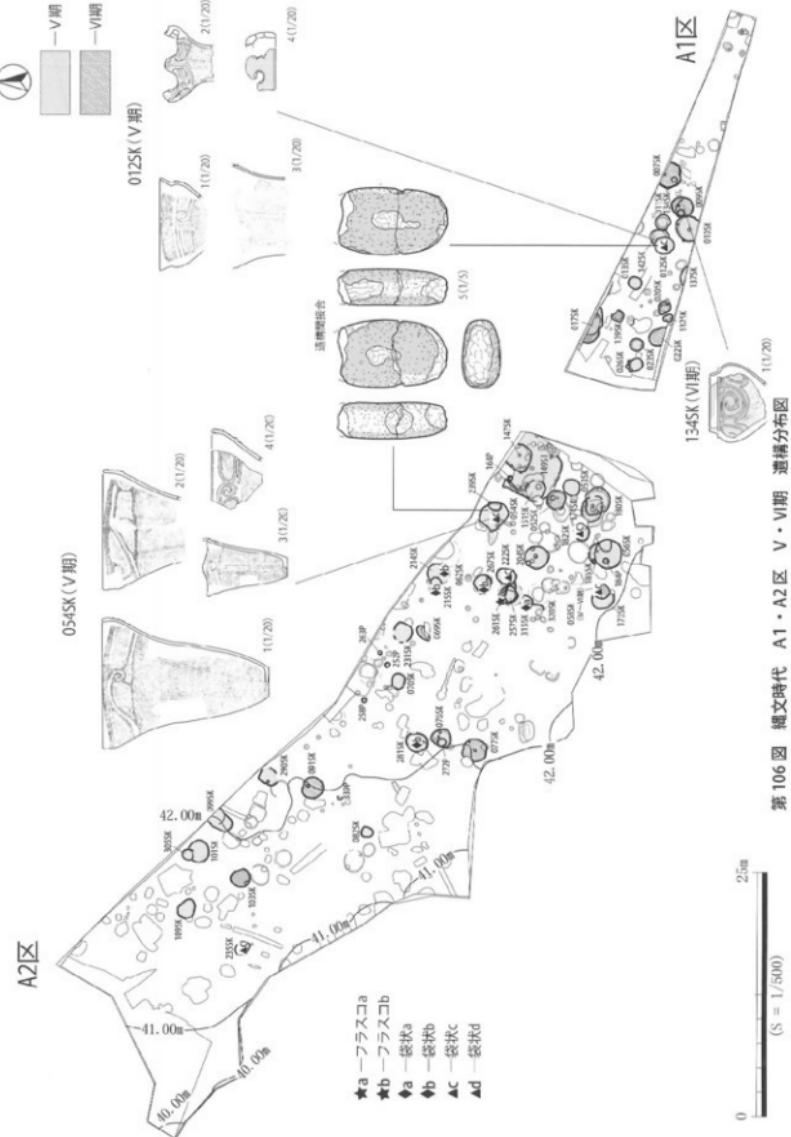
- ★a - フラスニa
- ★b - フラスニb
- ◆b - 帆状b



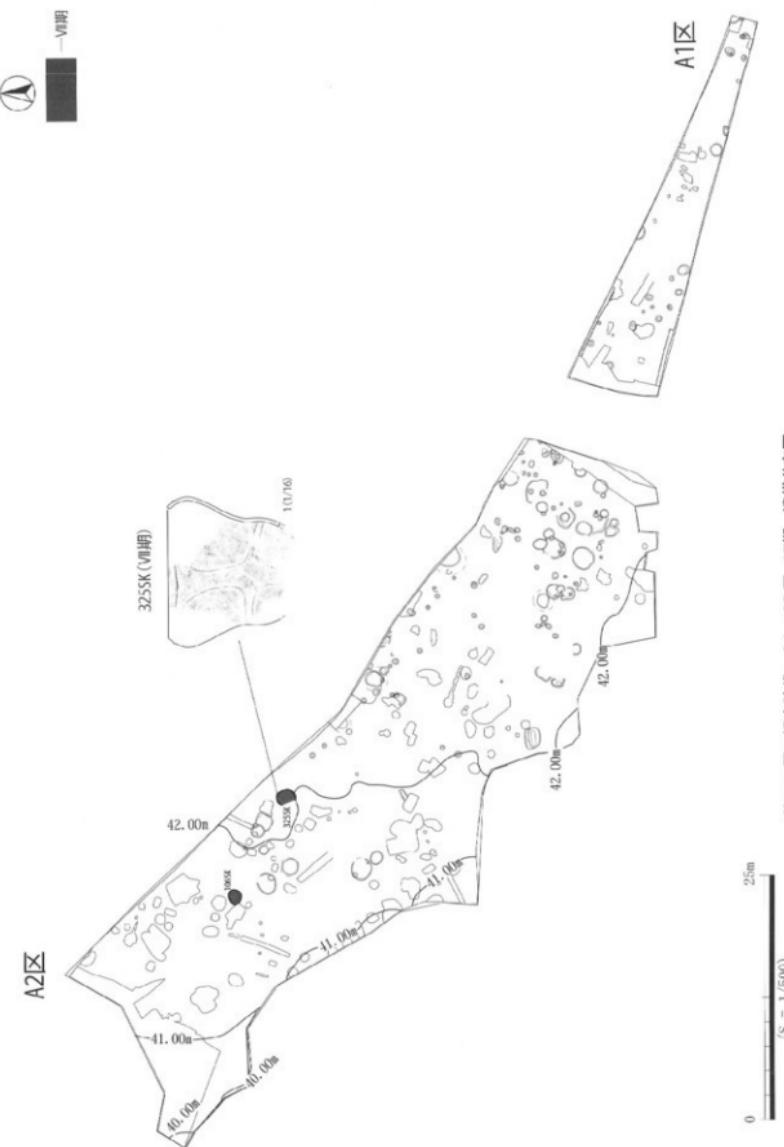
A2区



A2区



第107図 繩文時代 A1・A2区 VIII期 遺構分布図



される。

また、本調査地点から検出した袋状土坑には、覆土、遺物の出土状況などにいくつかの特徴が見られたので以下に記述する。

A. 遺構底面に硬化面が形成される袋状土坑

遺構底面に硬化面が形成される袋状土坑は4基（065SK：IV期・156SK：III期・230SK：II期・274SK：II～III期）検出した。硬化面はいずれも開口部直下に形成され、円形や不定形を呈する。065SK、156SK、230SK、274SKは底面の規模が2.70～3.20mでフ拉斯コ状を呈し、底面にはピットを伴わない。230SKからは、多量の焼土・礫を検出していることなどから、出入りの際や、遺構内での作業時に硬化面が形成されたと推測される。

065SKからは、上部、下部の2枚の硬化面を検出した。上部の硬化面からは復元して器形のわかる加曾利E1式を中心とした土器が18個体出土した。

B. 覆土に焼土を多く含む層を持つ袋状土坑

覆土に、焼土を多く含む層を検出した袋状土坑は8基（058SK：IV～VI期・065SK：IV期・105SK：IV期・159SK：III期・190SK：III期・230SK：II期・274SK：II～III期・293SK：IV期）である。覆土下層に焼土層を含む袋状土坑は4基（105SK・159SK・190SK・230SK）である。230SK（II期）は、遺構底部に焼土と径1～5cmの被熱した礫を集中して検出した。礫は磨耗した円礫が殆どであり、河原などから採取されたものと推測される。円礫の中にはチャートなど石器の材料となるものも含まれている。焼土集中箇所の下部は被熱による硬化などは確認されず、焼土及び礫は外部から持ち込まれたと推定される。

065SK（IV期）からも上部硬化面の直上から遺物を多く含んだ焼土層を検出した。

C. 遺物を多く伴う袋状土坑

袋状土坑のなかには、復元して器形のわかる遺物、口縁部から頸部を水平に欠いた深鉢（註7）を多く含む土坑が多く見られた。その中でも、a. 遺構底面から遺物を多く出土するもの、b. 遺構底面及び袋状土坑の括れの部分より遺物を多く出土するものが見られた。

a. 遺構底面から遺物を多く出土するものは、8基（064SK：IV期・065SK：IV期・102SK：III期・190SK：III期・256SK：IV期・274SK：II～III期・306SK：III期・323SK：III期）確認された。遺物は、平均すると復元して器形のわかるもの約3個体、口縁部から頸部を水平に欠いた深鉢約1個体が出土している。

b. 遺構の底面及び括れの部分より遺物を多く出土するものは、6基（138SK：III期・156SK：III期・203SK：II期・230SK：II期・302SK：II期・304SK：II期）確認された。遺構内の括れ部分より出土した遺物は平均すると、復元して器形のわかるもの約2個体、口縁部から頸部を水平に欠いた深鉢約1個体である。底面から出土したものは合わせて、復元して器形のわかるもの1個体、口縁部から頸部を水平に欠いた深鉢2個体であり、括れ部分の方からより多くの完形に近い土器が出土した。156SK、230SK、304SKは底面より礫を検出した。304SKは、白色粘土を遺構底面より検出した。遺構の時期はII期が多い。

D. 粘土を検出した袋状土坑

遺構底面、出土遺物内から粘土を検出した遺構は2基（190SK：III期・304SK：II期）確認された。304SKは、遺構底面より白色粘土塊を2点合計210g（乾燥重量）検出した。190SKは、遺構底面より出土した土器の器内の上を水洗選別した際に黄白色粘土145g（乾燥重量）を検出した。どちらの粘土も白～黄白色を呈し砂や礫などの混入物は見られない。両者とも外部から搬入された可能性が高い。

本調査地点から検出したいわゆる袋状土坑は、時期・形態による差異が認められた。本調査地点から南西へ

1.3km 程離れた、新善光寺跡（註8）からも縄文中期に位置づけられる袋状土坑 17 基を検出している。新善光寺跡から検出した袋状土坑の法量を分析すると（註9）、底径は 1.60 ~ 2.70 m の範囲を示す。袋状土坑の底径の平均は 2.22 m である。新善光寺跡検出の袋状土坑の断面形はフ拉斯コ状を呈しピットは伴わない「フ拉斯コ a」に分類される。新善光寺跡の袋状土坑より出土している遺物は、阿玉台Ⅲ式上器が主体であり、本調査地点のⅠ期とⅡ期の間に置づけられると推定され、遺構の法量は本調査地点の「フ拉斯コ a」やⅡ・Ⅲ期の袋状土坑と類似した範囲を示す。

本調査地点から検出した袋状土坑の底面は、鹿沼バミス層直上もしくは直下に位置するものが多く、ほぼ同様な自然堆積層を持つ新善光寺跡から検出した袋状土坑も遺構底面は鹿沼バミス層の直上に位置し、鹿沼バミス層を意識して掘削が行われたと考えられる（註10）。その目的については、土壤の回収のため、鹿沼バミス層に含まれる水分による上坑内の調温のため、掘削深度の一つの目安としたためなど、複数の理由が考えられるが、現時点では判断が難しい。いずれにしても鹿沼バミス層を意識して掘削が行われた可能性が高い。

また、新善光寺跡第 22 号土坑からは覆土中層より石棒が出土しており、「集落内において祭祀的な行為を行なわれていたことをうかがわせるものである。」（2006 財団法人茨城県教育財團：註8）と指摘されている。本調査地点の袋状土坑 138SK（Ⅲ期・フ拉斯コ a）からも石棒が覆土の中層より正位で出土しており、集落内での祭祀的な行為との関連が考えられる。

本調査地点からは、同時期と推定される袋状土坑を多く検出し、集落内での袋状土坑を構築する位置がある程度決まっていたのではないかと推測される。また、袋状土坑の断面形や法量などから、時期的な特色も看取された。さらに、袋状土坑には、覆土、遺物の出土状況などから様々な用途が想定しうる。065SK に関しては、硬化面を 2 枚検出し、硬化面直上に遺物を多く含む同様な袋状土坑は、調査区内では他に確認されず、本調査地点内でも特殊な用途を持っていた可能性が高い（石井）。

註1：榎本伸也氏は、「袋状土坑・フ拉斯コ土坑について『平面形が円形もしくは角円形を呈し、周囲部最も成形の力が大きい土清を広く「袋状土坑」と呼ぶことにする。袋状土坑のなかでも、底部が円錐形もしくは扁平状を呈してしまっており、全体の形状が『三脚フ拉斯コ』状のものを「フ拉斯コ状土坑」と呼ぶ。（中略）『フ拉斯コ状土坑』は「袋状土坑」の一種となる。」（榎本 2007）としており本文書も以上の解説に沿る。さらにもここでは、底部がオーバーハングする袋状土坑を、底部から袋状・フ拉斯コ状の 2 つに分類し、前者、ゼットの付加からさらに分類した。

註2：フ拉斯コ状を呈する袋状土坑（フ拉斯コ a、フ拉斯コ b）は断面形で鹿沼の底辺からの立ち上がりが 20 ~ 60 度以内、両口部の平行で階級、また傾斜が概ね平坦であるものを、トボが認識されている場合は前述の「トボ」が付記される遺構をフ拉斯コ状と判断した。

註3：1 区から検出した鹿沼時代の遺構は、出土遺物を小分けため縄文時代の実証が不明のため今回の検討からは除外した。

註4：阿玉台Ⅲ式上器、が 1600 年より 1 点出土しているが、出土證明の運送状況も悪く詳細が不明のため、Ⅰ期とⅡ期の間に時期区分としては入れなかった。

註5：遺構の判斷は、遺跡の周辺部における sondage を用いた。

註6：『調査地図から検出した袋状土坑は上部を削除されているものが多いため、底面を用いて』P108 を作成した。

註7：段階から選択にかけては、既存しているが、白線から弧線を引いて水平に次いでいるものを見た。

註8：財団法人 茨城県教育財團、2006 「新井谷地区・穴守地区・主野地区・大佛地区跡改修改良工事地内歴史文化財調査報告書」、茨城県教育財團作成報告 第 256 編

註9：遺構の底面については、新善光寺跡の調査を読む。

註10：佐原洋子にて指出して「いざれがトコム型を櫛山口、ハーフロード型を左近・左近・鹿沼バミス層を底面としている点で共通している。硬いロー・ムーンで屈曲し、もう一度鹿沼バミス層で屈曲面を作ることは、他の骨盤を手早く判別した特徴」と指摘している。

参考文献

梅若照郎他 1988 「北霞東加賀利・武士舟構式」『鶴文土器大辞典 3 中刷』 小林進一 小学館

小林進一 1988 「鶴文土器大辞典 2 中刷 1」 小学館

榎本伸也 2007 「茨城県における袋状土坑群の発見」『考古学の復興』一九四号「鹿沼生産者会記念論文集』

榎本伸也 2007 『鹿沼地区の袋状土坑群の発見』『考古学の復興』二九五号「農業生産の技術』 - 同成社

黒川博晴 1993 「茨城県の鶴文土器時代のフ拉斯コ状・トボについて」『研究ノート』乙四部法人茨城県教育財團

石岡市教育委員会 1973 「石岡市東大堀田遺跡第一・第二次調査報告書」

茨城県立歴史博物館 2006 「茨城県立歴史資料館第 9 茨城の古文土器」茨城県立歴史博物館

人気文庫出版編集部 2000 「大山」『絶対野原登場編集部報告書』アンビックス様が丘・ユータクン・アスムに伴う復元調査（鶴文土器編）河内山垣蔵文化財調査報告書 第 3 集 楠木 信尚・内山和也

財団法人茨城県教育財團 2002 「笠後泊 1・上段」茨城県教育財團文化財調査報告書第 188 号

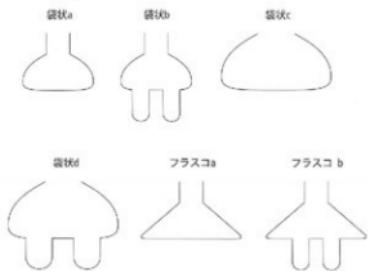
財団法人茨城県教育財團 2002 「笠後泊 2・下段」茨城県教育財團文化財調査報告書第 188 号

財団法人茨城県教育財團 2005 「笠後泊 2・やさしさのまち「桜の里」」茨城県教育財團文化財調査報告書第 240 号

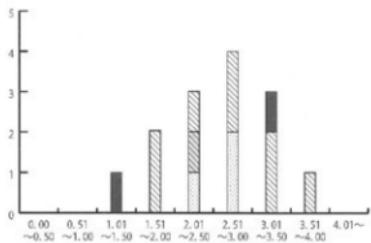
財団法人茨城県教育財團 2005 「只須溝跡 2・やさしさのまち「桜の里」」茨城県教育財團文化財調査報告書第 240 号

財団法人茨城県教育財團 1980 「加賀鹿野完美調査報告書」日立市文化財調査報告書第 7 号、日立市教育委員会

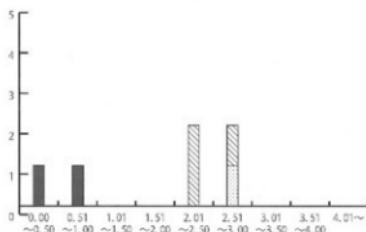
大河エンジニアリング株式会社 2004 「茨城県東部支所・古河市立図書館」「火戸ヒルズカントリークラブ沿岸工事」に伴う茨城県文化財調査報告書第 1 号、穴戸西郷ゴルフ俱楽部



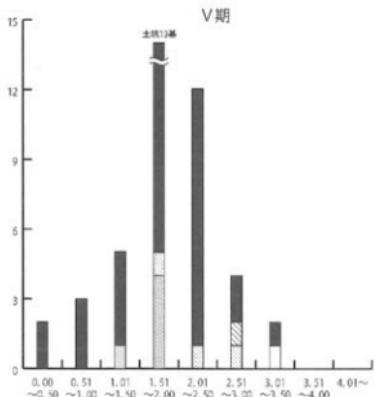
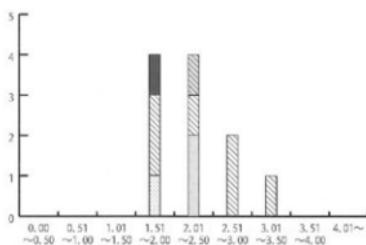
III期



II期

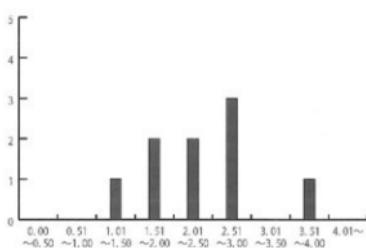


IV期



V期

VI期



第108図 繩文時代 II～VI期 遺構底面法量

表 60 袋状土坑一覧表

番号	開口部 年	表面 年	直角開口 年	深度 年	断面	斜上斜下 年	壁厚 年	底面 年	底面形状 年	底面 年	出土遺物 年	地質 年	地質 年	地層 年	標号	位置 年
05458	1.91	1.64	1.96	1.65	41.73	0.84	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	V	純泥	多孔瓦製	山中遺物05458と重複	73-27	
05458	3.77	3.34	3.44	3.04	1.16	1.30	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	V	粘土	陶片	77-105		
05558	1.82	1.32	1.96	1.36	41.41	0.86	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	N-V	燒土	破片	78-31		
05558	1.82	1.32	2.73	2.66	41.36	0.91	砂質土	無	直下	加曾利式・幕式	V	燒土	破片	58-93		
06458	2.49	2.02	3.50	2.23	41.46	0.67	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	N	灰土	瓦砾・陶器片T70752	79-98		
06558	1.98	1.72	3.21	3.06	40.47	1.52	ラスコ	砂質土	直上	加曾利式・幕式	N	純泥	瓦砾・陶器片T70752	47-380		
07058	1.89	1.66	2.29	2.26	41.21	0.74	ラスコ	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	瓦砾・陶器片T70752	47-380		
07058	2.04	1.95	2.17	2.07	41.27	1.00	ラスコ	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	瓦砾	48-39		
07058	1.90	1.66	1.76	1.77	41.29	0.47	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	瓦砾	49-41		
07058	1.22	1.85	7.37	2.05	41.17	0.62	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	瓦砾	50-42		
07058	1.62	1.67	2.00	2.00	41.36	0.49	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	瓦砾	50-73		
10258	1.83	1.77	2.92	2.56	41.31	0.70	ラスコ	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	瓦砾	79-31		
10558	1.92	1.90	2.77	2.61	41.23	0.77	ラスコ	下層土	直上	加曾利式・幕式	N	灰土	瓦砾	29-48		
13858	1.10	1.18	2.74	2.59	41.25	1.10	ラスコ	無	直下	瓦砾	N	0.1mの 瓦砾層	瓦砾	13-21		
13858	2.07	1.48	3.26	3.04	41.33	0.84	ラスコ	有	中	河内式・心型式	N	0.1mの 瓦砾層	瓦砾	13-32		
15958	1.28	1.16	3.30	3.15	41.10	1.25	ラスコ	下層土	西下	瓦砾合方式・加曾利式	N	瓦砾	瓦砾	25		
18258	1.52	1.14	1.80	1.56	41.29	1.03	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	V	燒土	燒土	55-104		
18358	1.16	1.16	0.98	0.92	41.52	0.92	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	燒土	21		
19058	1.31	1.15	3.56	3.48	40.36	6.98	ラスコ	下層土	無	瓦砾合方式・加曾利式	N	灰土	瓦砾・瓦砾層	29-26		
20158	1.15	1.26	2.29	2.05	41.45	0.76	ラスコ	無	直上	瓦砾合方式・加曾利式	N	0.1mの 瓦砾層	瓦砾	31-48		
20758	2.31	1.38	3.70	(3.10)	41.22	1.05	ラスコ	無	中	瓦砾合方式・加曾利式	N	瓦砾	瓦砾	36		
20958	1.40	1.12	2.20	2.14	41.31	0.92	ラスコ	無	直上	瓦砾合方式・加曾利式	N	瓦砾	瓦砾	36		
22258	1.49	1.40	2.00	1.90	41.36	0.89	砂質土	無	中	加曾利式・幕式	V	瓦砾	瓦砾	28-69		
23058	1.14	1.19	3.00	2.76	41.04	1.38	ラスコ	下層土	奇	瓦砾合方式・加曾利式	N	灰土	瓦砾・瓦砾層	29-26		
23558	1.64	1.38	1.72	1.17	40.85	0.63	砂質土	無	直下	瓦砾合方式・加曾利式	N	0.1mの 瓦砾層	瓦砾	49-46		
24558	0.98	0.96	2.63	2.58	40.91	1.37	ラスコ	無	直下	加曾利式・幕式	V	燒土	燒土	39-48		
26058	1.17	1.17	1.75	1.79	41.40	0.94	ラスコ	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	燒土	53		
26158	1.77	1.75	2.28	2.34	41.06	0.77	ラスコ	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	燒土	21-31		
26558	1.36	1.38	2.58	(2.77)	41.10	0.90	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	燒土	53-66		
26758	1.80	1.70	2.00	1.90	41.41	0.86	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	燒土	53-62		
27058	1.12	0.80	1.75	(2.51)	41.47	0.67	ラスコ	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	燒土	32-53		
27458	1.03	1.03	2.74	2.74	41.14	0.81	ラスコ	下層土	奇	瓦砾合方式・作型式	N	瓦砾	瓦砾	27-31		
28658	0.81	0.76	1.95	1.42	41.07	1.40	ラスコ	無	中	瓦砾合方式・作型式	N	燒土	瓦砾	42-55		
28158	2.32	1.92	2.16	1.78	41.36	0.74	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	燒土	37-76		
29158	2.03	1.86	2.32	2.27	41.59	0.43	砂質土	無	直上	瓦砾合方式・幕式	N	燒土	燒土	38-70		
29258	1.53	0.57	2.05	(0.70)	41.45	0.90	ラスコ	下層土	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	燒土	33		
30258	2.70	1.08	2.09	2.90	41.13	1.12	砂質土	無	直下	阿木村式・作型式・ 人木村式・幕式	N	瓦砾	瓦砾	39-70		
30558	0.80	0.44	2.14	1.82	41.06	0.32	ラスコ	無	直上	阿木村式・作型式	N	瓦砾	瓦砾	23-34		
30958	2.12	1.72	2.62	2.39	41.18	0.80	砂質土	無	直上	阿木村式・作型式	N	燒土	燒土	48-7		
31558	1.41	1.50	1.32	(1.10)	41.47	0.53	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	V	燒土	破片	49-94		
32058	2.16	1.62	2.65	2.28	41.05	1.32	ラスコ	無	直上	阿木村式・作型式	N	燒土	燒土	28-45		
32458	1.36	0.57	1.94	(0.57)	41.36	0.88	砂質土	無	直上	加曾利式・幕式	N	燒土	燒土	48-67		
32558	1.34	1.23	1.94	(1.11)	41.30	0.89	ラスコ	無	直上	阿木村式・作型式	N	燒土	燒土	49-41		
32758	1.75	0.87	2.27	2.15	40.97	0.85	砂質土	無	中	加曾利式・幕式	N	燒土	燒土	48-12		
33258	-	1.09	0.70	(0.70)	41.26	1.11	ラスコ	無	中	阿木村式	N	燒土	燒土	40-60		

橋爪遺跡出土の石器について

(1) 概要

本調査において石器は 292 点出土した。この内、縄文時代の遺構から出土したものは 150 点である。後世の遺構内や確認面などから出土したものは 142 点を数えるが、使用石材や器種などから判断すると、ほぼすべてが縄文時代に帰属する石器であると考えられる(註 1)。器種の内訳は(表 61)、石材の内訳は(表 62)に示した。(表 61)に示すように、剥片の出土数が最も多く、磨石・敲石類と磨製石斧がそれに続く。石材として数量が最も多いのはチャートで、石礫や攝器、剥片などの剥片石器に多用されている。次いで砂岩、ホルンフェルスが多く、磨石・敲石類や磨製石斧に供されている。

表 61 石器 器種別出土表

器種	点数	器種	点数
石鎌	8	打刃石斧	12
石鎌形製品	9	磨製石斧	20
石錐	1	特製石斧製品	1
圓形石錐	1	磨製石剣頭	3
スクレーパー	7	磨石	10
石核	9	敲石	17
石核?	4	磨石・敲石	22
剥片	67	敲石・臼石	1
次元上を有する剥片	16	石皿	1
幾小彫刻を有する剥片	27	台石	3
剥片?	1	運の風呂	4
研片	1	石棒	1
		不明	10
計	187	計	105

表 62 石器 石材別出土表

源地	点数	源地	点数
アライト	1	石英斑岩	4
安山岩	15	閃長岩	2
花崗岩	4	多孔質安山岩	2
ガラス質風化火山岩	1	チャート	121
斑紋貝岩	3	角閃石	4
白雲石	1	ディサイト	1
黒色貝岩	1	粘板岩	12
鬼形石	8	金剛ドラライト	1
細粒安山岩	1	ホルンフェルス	29
夢石	32	メノウ	7
敲粒岩	6	西紋岩	3
石英	29	隕石	2

本遺跡の縄文時代の遺構は、土器型式から阿玉台～加曾利 E 式期に位置づけられる。これを踏まえた上で、石器についての時期的位置づけを試みるため、石錐と磨製石斧に着目したい。本調査において縄文時代の遺構から出土した石錐は 3 点、磨製石斧は 10 点である。石錐はこのうち 2 点が円基の無茎錐であり、磨製石斧は 6 点が定角式である。点数は少なく資料的制約が大きいものの、これらの遺物の特徴を積極的に解釈するなら縄文時代中期後葉の特徴として捉えられ、土器型式の時期的位置づけとの矛盾はない。

次に右器と出土遺構との関連について述べたい。本遺跡では、遺構内からの石器の出土量は多いとは言えず、遺構内への石器の埋納あるいは一括焼棄などが推察されるような資料は確認できなかった。

出土量が最も多いのは 065SK で 13 点である。主に粘板岩製の剥片や安山岩製の磨石・敲石類が出土している。一遺構内の石器組成に傾向が認められるのは 138SK、147SK である。138SK からは石棒、石皿、台石、蜂の巣石など比較的大形で重量のある石器がまとまって出土しており、石器ではないが重量 7500 g の花崗岩の角礫も出土している。また、熱を受けた痕跡が認められる右器が多い。147SK からはチャート製の剥片が 6 点出土し、大きさ・重量にやや齊一性が看取される。ただし、それぞれがやや色調の異なるチャートを用いたものであり、接合関係はない。

(2) 器種概観

本調査において出土した石器については、資料的制約から石器群としての解釈を行なうことは不適であるため、以下では出土石器において特徴的な器種を個別にとりあげ、橋爪遺跡の石器について概観したい。なお、前述のとおり出土石器の約半数は縄文時代の遺構に伴わない資料であるが、以下便宜的に一括で扱う。

・石鏃 石鏃は総数で 8 点出土した。基部が内湾し、茎を持たないものが主体である。器長 24 ~ 19 mm、幅 16 ~ 13 mm に収束する。石材は攪乱から出土した黒色頁岩製を除くと、すべてチャート製である。また、石鏃未製品は 9 点出土しており、石材はチャート製で占められる。未製品の中には粗調整段階と考えられる資料も含まれる。それらの剥離面の観察から、石鏃の製作に剥片素材を用いたと考えられる。周縁部全体あるいは長軸辺から連續的に調整剥離を施し、素材剥片の厚みを減じつつ製品の形状に近づけていく製作工程が推察される。本遺跡においてはチャート製の石核、剥片、碎片が一定量出土しており、石鏃製作が行われていた可能性を充分に示しているが、石器製作跡などの遺構は認められないため、本遺跡内で石器製作が行なわれたのか、持ち込まれて廃棄されたのかは不明である。

・磨石・敲石類 出土点数は 50 点を数える。磨痕、敲打痕については、両者を共に有する資料が最も多く、本文中（第 44 図 22、第 101 図 11）が典型例として挙げられる。概ね扁平な楕円礫の形状を呈し、主に面積の広い面に磨痕が認められ、その面の中央部に敲打による裏面のつぶれや剥落を有するものである。これらの共通した特徴は、使用法や加工対象に関係すると考えられるが、大きさや重量には齊一性がうかがえなかった。また、その他の特徴としては、磨石・敲石類の約半数において破損や熱被が認められ、使用や廃棄に関連した痕跡である可能性を指摘できる。植物質食料加工において対の関係と考えられる石皿については、1 点のみ出土している（第 18 図 5）。

・磨製石斧 本遺跡の磨製石斧は定角式磨製石斧が主体である。これらは胴部の断面形が隅丸長方形、もしくは四辺が外湾する長方形を呈し、刃部は両刃である。石材は妙岩、ホルンフェルス、蛇紋岩などが供される。総数 20 点中、石器の一部を破損するものは 14 点を数え、刃部の欠損もしくは刃縁に微小剥離が認められる資料が多い。これらは使用に伴う欠損によって著しく機能を損なったために廃棄された可能性も考えられるが、対象資料数が少なく判断としない。

特記事項として 018SK 山上上の磨製石斧が挙げられる。変質ドレライト製で、基部から胴部にかけて石器側面に丁寧な面取り加工が施された製品である。本調査出土の石器においてはこの 1 点のみが変質ドレライト製であり、入念な加工による整形が他の製品と比較して異質であることから搬入品の可能性が考えられる。その供給地としては、新潟県北部の奥三面遺跡周辺地域が候補として挙げられる（註 2）（望月）。

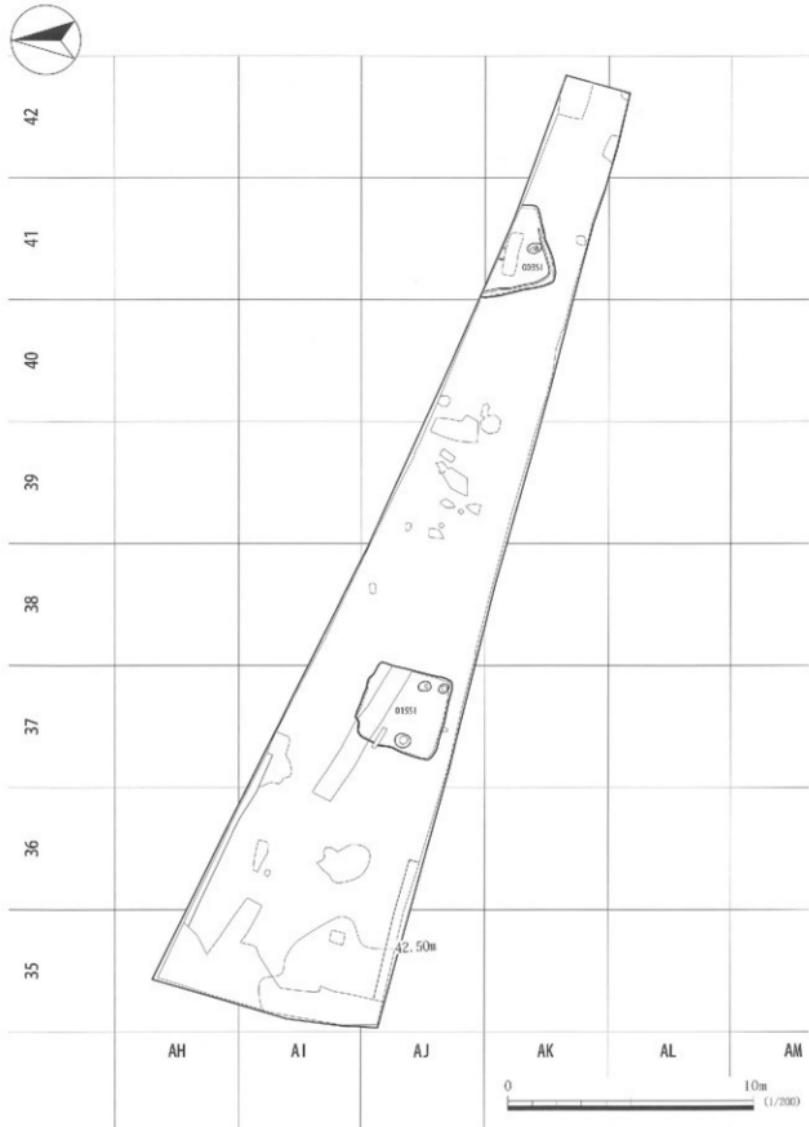
註 1：绳文時代の大形土坑などの遺跡内から河原礫のような円錐や、熱被した礫が一定量出土しており、人为的に道路内に持ち込まれたと考えられるが、石器もしくは石器部品として認められないため、本報告においては扱わない。

註 2：柴田敏氏の御教示による。変質ドレライトは從来、海綿岩として報告されている例が多い資料である。松本市和清水貝塚出土石器などを対象に岩相結果と比重測定による产地推定が試みられている。茨城県域における様例の増加を期待したい。

参考文献

柴田敏 2010 「岩柱から見た松戸市内の磨製石斧について」『松戸市立博物館紀要』第 17 号 松戸市立博物館

内野元ほか 1996 『笠岡市西川遺跡の研究－縄文時代における石器の製作と流通に関する研究－』筑波大学歴史・人類学系



第109図 弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代 A1区全体図



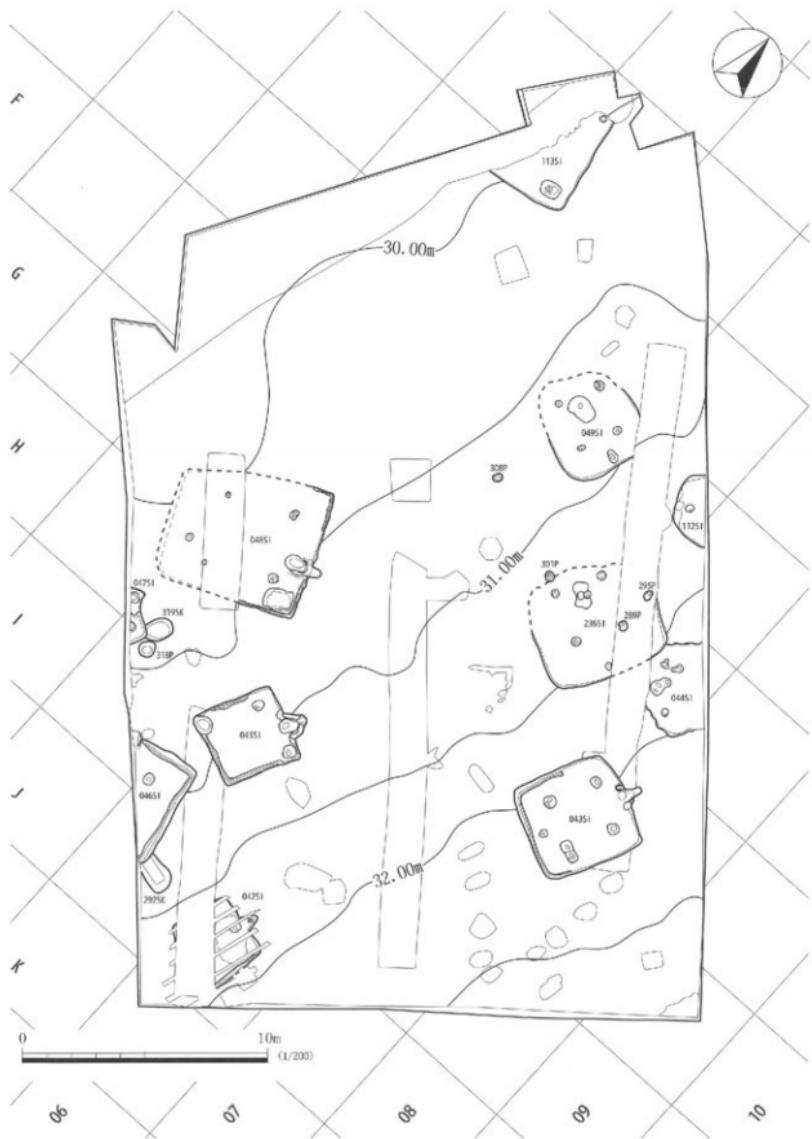
第110図 弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代 A2区全体図1



第111図 弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代 A2区全体図2



第 112 図 弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代 A2 区全体図 3



第113図 弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代 D区全体図

第5章 弥生時代の遺構と遺物

第1節 D区

049SI (第114・115図、表63)

位置 D区北部、D-5、E-5、E-6グリッドに位置する。住居西端部は削平を受けており、住居北東隅は試掘坑によって失われている。

規模と平面形 残存部で長軸3.70m、短軸3.20m、平面形は隅丸方形を呈する。

主軸方向 N-23° - Eである。

壁 残存する壁高は0.19mで、壁は外傾して立ち上がる。住居北西側の立ち上がりは削平を受け、不明確である。

床 平坦で、住居中央部および炉の周間に硬化が認められる。

ピット 5基検出された。P1～P4は、長径0.28～0.46m、短径0.21～0.39mで概ね円形を呈し、深さ0.26～0.40mで、それぞれの位置から主柱穴と考えられる。P5は南東壁付近から検出し、長径0.58m、短径0.37mの楕円形、深さ0.32mを測る。炉と南東壁との位置関係から出入口施設に伴うピットと考えられる。

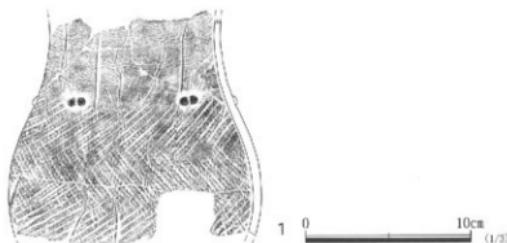
炉 中央部西寄りに位置し、長径1.12m、短径0.74mの不整楕円形を呈する。炉床は赤変・硬化が認められる。被熱角礫1点を炉面から検出した。

覆土 6層からなり、第1層がレンズ状に堆積し、第3・5層に初期流入土が認められることから、自然堆積と推察される。

遺物 実測遺物は1点である。

1は住居覆土から出土した、弥生土器の甕である。試掘坑出土遺物と接合した。外面の頸部は附加条二種（附加1条）の縄文が羽状に施文されている。頸部は横走波状文がなされ、7本の柳状施工工具で施文がなされている。また頸部と胴部の境目にボタン状の突起が2つを1セットにして6セット廻っている。十王台式土器に比定できる。

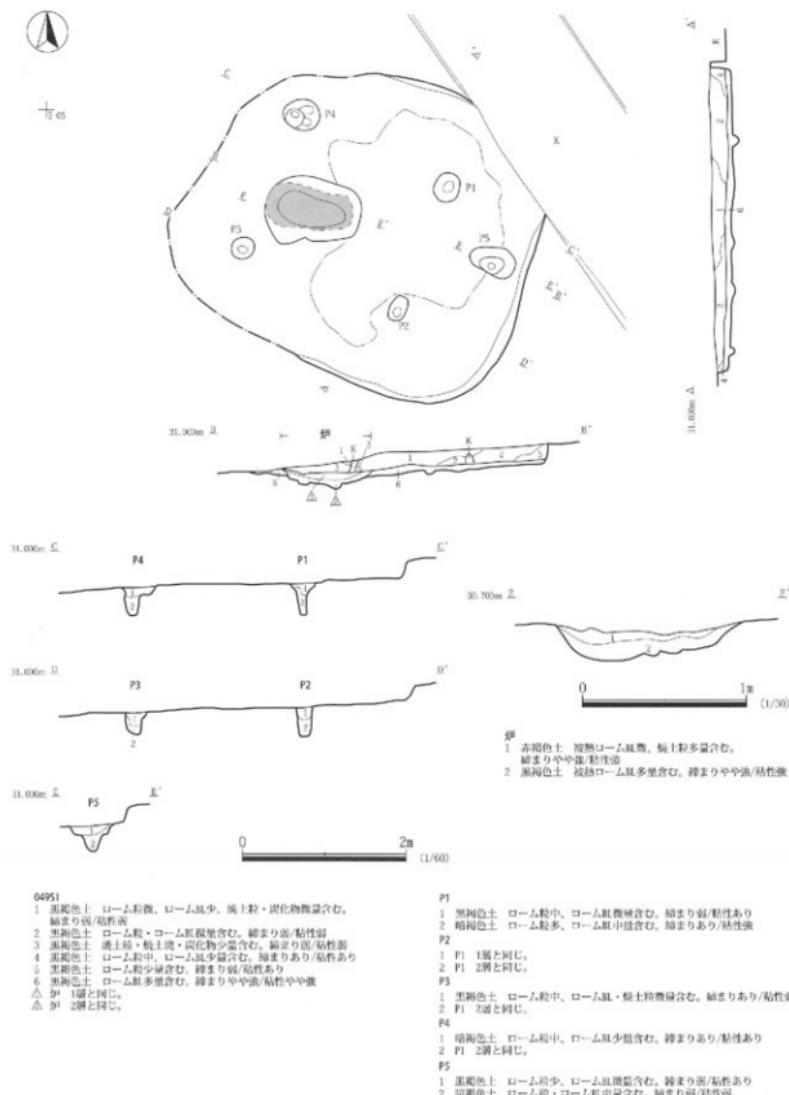
時期 出土遺物などから弥生時代終末期と考えられる。



第114図 049SI出土遺物

表63 049SI出土 土器観察表

番号	直径 mm	底位	器種	種別	長径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	底人柱 (cm)	副位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1 049SI	360	底土	甕	土解器	<133				底部 ～ 胴部	不明	外面部斜面加須彌(羽状加須), 内面ハラナゲ、横走波状文(7本), ボタン状突起(2箇セットが6箇位)。	雲母	褐色	普通	弥生時代 終末期	十王台式、試掘坑出土遺物と接合。



第115図 0495I 平面図・断面図

236SI (第 116 ~ 118 図、表 64)

位置 D 区東部、F-6、F-7、G-6、G-7 グリッドに位置する。遺構の北半部は試掘坑によって、西半部は削平によって失われている。

規模と平面形 残存部で長軸 4.96 m、短軸 4.36 m を測り、平面形は隅丸正方形を呈する。

主軸方向 N 30° E である。

壁 残存する壁高は 0.10 ~ 0.28 m で、緩やかに外傾して立ち上がる。

床 平坦で、住居中央部を中心化が認められる。

ピット 6 基検出された。289P は、236SI に帰属するピットとして扱った。P1 ~ 3 は、長軸 0.30 ~ 0.39 m、短軸 0.34 ~ 0.37 m で、概ね円形を呈し、深さ 0.37 ~ 0.44 m である。289P は長軸 0.38 m、短軸 0.28 m で不整形である。上部を試掘坑に切られているが、残存する深さは 0.57 m である。それぞれの位置から P1 ~ 3、289P は主柱穴と考えられる。P4 は長軸 0.31 m、短軸 0.22 m で、円形を呈し、深さ 0.34 m を測る。炉と南東壁との位置関係から出入口施設に伴うピットと考えられる。P5 は長軸 0.28 m、短軸 0.27 m で、円形を呈し、深さ 0.37 m を測る。炉を切っており、住居覆土が P5 の上に堆積していることから、236SI に帰属すると考えた。

炉 住居中央部西寄りに位置し、長径 1.30 m、短径 0.50 m の不整梢円形を呈する。炉床は赤変・硬化が認められる。被熱角礫 1 点を炉面から検出した。

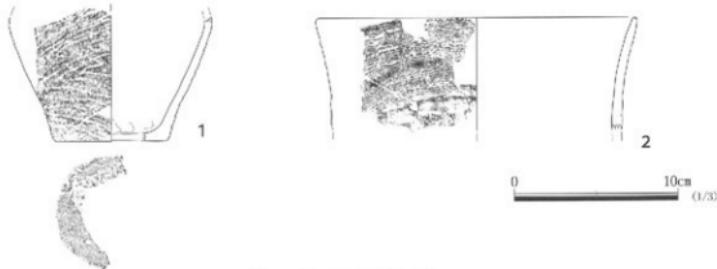
覆土 8 層からなり、第 1・2 層がレンズ状に堆積し、第 4 層に初期流入土が認められることから、自然堆積であると推察される。

遺物 実測遺物は 2 点である。

1 は住居覆土から出土した、弥生土器の甕である。外面頸部は附加条 1 種（附加 1 条）に繩文が施文され、被熱している。内面の調整は無い。底部には布目痕がある。胎土に雲母を含んでおり、色調は灰白色である。十王台式土器に比定できる。

2 は炉から出土した、弥生土器の甕である。外面頸部に縦にスリット施文がなされ、横走波状文は 5 本の櫛状施工工具でなされている。口唇部も施文があり、内面はナデを施す。十王台式土器に比定できる。

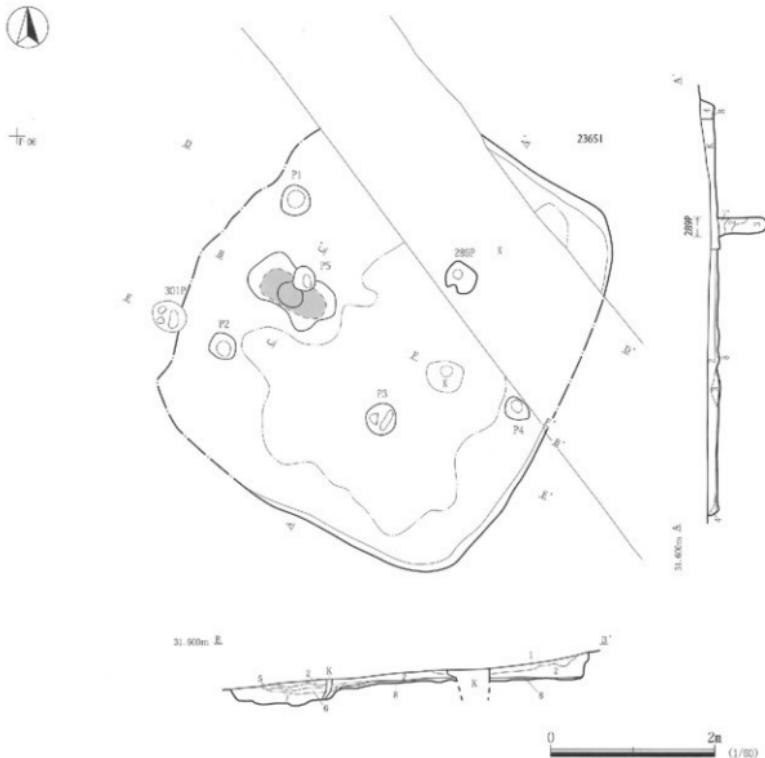
時期 出土遺物などから弥生時代終末期と考えられる。



第 116 図 236SI 出土遺物

表 64 236SI 出土 土器観察表

番号	遺構 記号	部位	沿継	幅別	口徑 (m)	脚高 (m)	底浮 (m)	最大厚 (m)	部位	遺 存 率	手法・文様の特徴	胎土	色調	洗成	時期	備考
1	236SI	覆土	裏	土師器	0.77	0.68	0.12	~	脚部 ~ 底浮	不明	背面斜面加厚一部剥離(火候)、 内面調整なし、外壁被熱、底部布目痕。	雲母	灰白色	やや 不良	弥生時代 終末期	十王台式
2	236SI	炉	裏	土師器	0.90	0.00			口縁部 ~ 底浮	不明	内面、スリット施文、内面ヘラナデ、 口輪波状文。	小石	難辨色	難	弥生時代 終末期	十王台式



- 236SI**
- 1 黒褐色土 ローム粒微量含む。縮まり弱/粘性弱
 - 2 黑褐色土 ローム粒少、ローム粗粒。薄土層・炭化物微量含む。縮まりあり/粘性弱
 - 3 黑褐色土 ローム粒中、ローム粗多量含む。縮まりあり/粘性弱
 - 4 黑褐色土 ローム粗少、ローム粗多量含む。縮まり弱/粘性弱
 - 5 黑褐色土 ローム粗少、ローム粗多量含む。縮まり弱/粘性弱
 - 6 赤褐色土 熟熱ローム粗微、粘土粒多、炭化物微量含む。縮まり強/粘性弱
 - 7 褐色土 ローム粗多量含む。縮まりやや強/粘性弱
 - 8 黄褐色土 ローム粗多量含む。縮まりやや強/粘性強

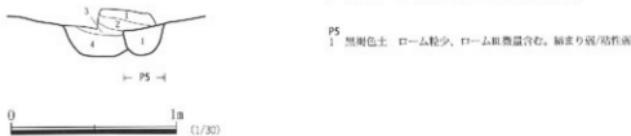
- 286P**
- 1 黑褐色土 ローム粒中、ローム粗少、薄土層・炭化物微量含む。縮まり弱/粘性弱
 - 2 褐褐色土 ローム粗多、ローム粗中、薄土層・炭化物微量含む。縮まり強/粘性弱
 - 3 黑褐色土 ローム粗多量含む。縮まり強/粘性強

第 117 図 236SI 平面図・断面図

31.60m S.



1 黒褐色土 ローム粒少、粘土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性弱
 2 黒褐色土 ローム粒中、粘土粒少量含む。締まり強/粘性あり
 3 赤褐色土 硫化ローム混じ、粘土粒多。炭化物微量含む。締まり強/粘性あり
 4 褐色土 ローム粒多量含む。締まりあり/粘性強



31.60m W. P1 289P W'



31.90m E. P2 P3 W'



31.60m E. P4 E'



0 2m (1/60)

P1
 1 褐褐色土 ローム粒多、ローム粗少量含む。締まり強/粘性あり
 2 黒褐色土 ローム粒多、ローム粗中量含む。締まりあり/粘性あり
 3 褐褐色土 ローム粗多量含む。締まりあり/粘性強

P2
 1 P1 1箇に同じ。
 2 P1 2箇に同じ。
 3 P1 3箇に同じ。

P3
 1 褐褐色土 ローム粒少量含む。締まりあり/粘性あり
 2 褐褐色土 ローム粒中、ローム粗少量含む。締まりあり/粘性強

P4
 1 褐褐色土 ローム粒微量、ローム粗少量含む。締まりあり/粘性あり
 2 P1 3箇に同じ。

第118図 236SI 平面図・断面図

第2節 弥生時代まとめ

台地の下部に相当するD区で弥生時代後期十王台式に位置付けられる住居跡を2軒検出した。住居間の距離は3mほどあり、それぞれ住居西側に地床炉を設け、赤色硬化面の直上から炉石が出土している。

出土遺物は、十王台式土器の裏であり、049SI出土遺物と236SI出土遺物は接合することなどから、同一時期に廃絶された可能性が高い（清水）。

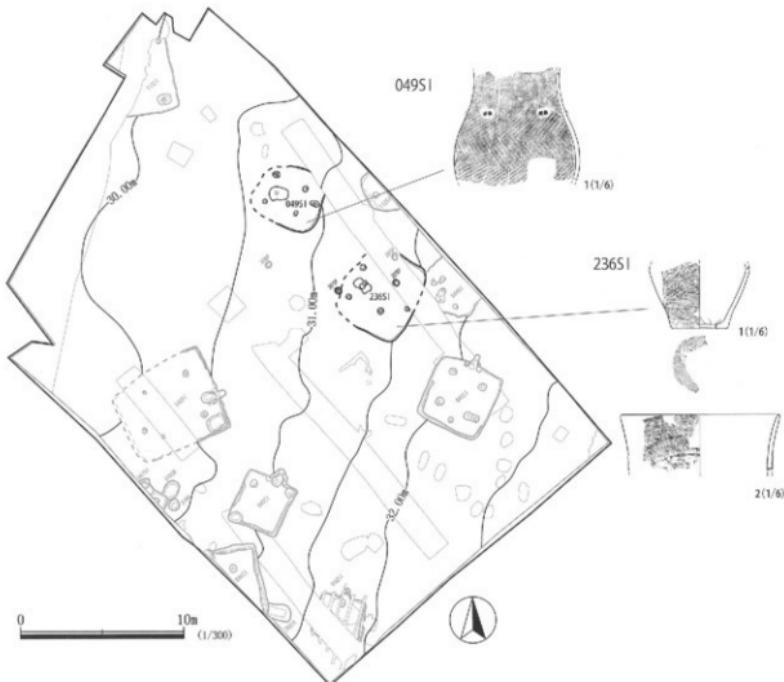
引用・参考文献

坂島一生 2008 「十王台式期における異系土器文化圏との交流—飯沼前川遺跡における十三台式土器と棒式土器の出土例から—」『領域の研究—阿久津久先生誕辰記念論集—』阿久津久先生誕辰記念事業実行委員会

財団法人茨城県教育財団 弥生時代研究班 1991 「茨城後削弥生式土器年輪の検討（Ⅰ）十王台式土器について」弥生時代研究班『研究ノート』創刊号 財団法人茨城県教育財団

財団法人茨城県教育財団 弥生時代研究班 1992 「茨城後削弥生式土器年輪の検討（Ⅱ）十王台式土器について」弥生時代研究班『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団

財団法人茨城県教育財団 弥生時代研究班 1993 「茨城後削弥生式土器年輪の検討（Ⅲ）十王台式土器について」弥生時代研究班『研究ノート』3号 財団法人茨城県教育財団



第119図 弥生時代 D区 遺構分布図

第6章 古墳時代の遺構と遺物

第1節 A1区

015SI (第 120・121、表 65)

位置 A1 [中央西部、AI-37、AJ-37 グリッドに位置する。

重複関係 012SK 南西壁、016SK 北壁、135P 上部を切る。

規模と平面形 長軸 3.41 m、短軸 3.33 m、平面形は隅丸方形を呈する。

主軸方向 N-17°-E である。

壁 残存する壁高は 0.11 m で、壁はほぼ直立している。

床 平坦で住居中央部に硬化が認められる。床溝は確認されなかった。

ピット 3 基検出された。P1～3 は長径 0.43～0.65 m、短径 0.34～0.56 m の梢円形を呈し、深さは 0.10～0.34 m である。性格は不明である。

炉 確認されなかった。

覆土 8 層からなり、覆土全層にロームブロック・炭化粒子・焼土粒子が含まれ、不規則に堆積し、また、第 8 層が水平堆積としていることから、人為堆積と考えられる。硬化面を住居中央から西側にかけ検出した。

遺物 実測遺物は土師器 7 点である。

1 は、住居南側の床面から出土した、土師器高环の坏部である。脚部が粘土接合部で欠損している。外面及び口唇部の内面が赤彩されている。外側調整はヘラミガキがなされ、一部被熱している。また内面調整は横方向にヘラナデされている。3(壺)の底部の下に被さる状態で出土した。古墳時代前期に位置付けられる。

2 は、住居西側の床面から出土した、土師器の器台である。外面とともに赤彩されている。外面及び器受部の調整は横方向に丁寧なヘラミガキである。脚部内部の調整は刷毛目がなされており、円形透孔は 3 箇所ある。外面横方向のミガキは、一般に畿内系の精製土器にみられる特徴である。口縁部を丁寧に打ち欠き、その後打ち欠いた部分を研磨している。古墳時代前期に属すと判断できる。

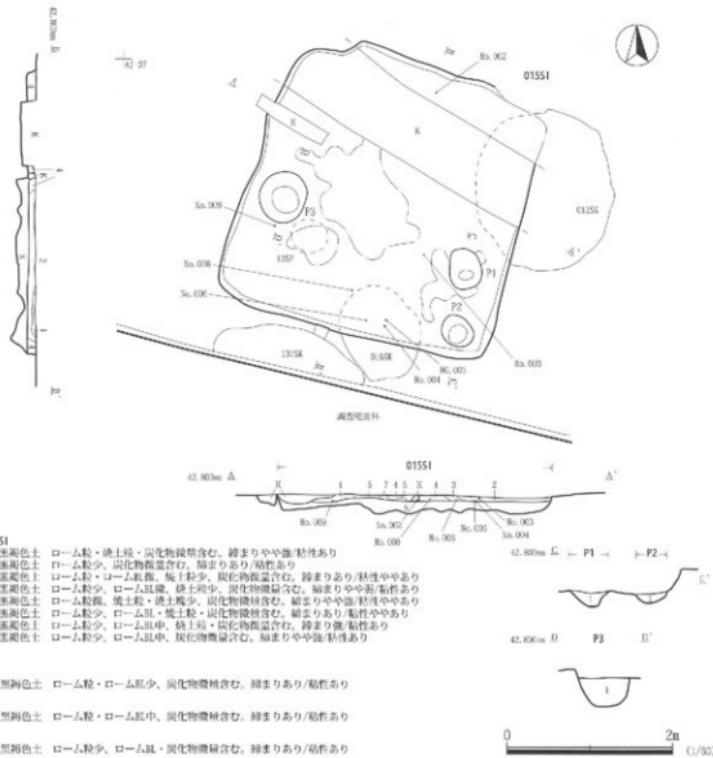
3 は、住居南側の床面から出土した、土師器の壺である。口縁部を欠損している。残存部の形状は球状を呈す。外面調整は、胴部上位は刷毛目が、胴部下位は縱方向にヘラケズリがなされている。内・外面にはススが付着している。内面調整は、頸部は刷毛目、胴部は横方向にヘラナデがなされている。形状から古墳時代前期中葉以降に位置づけられる。

4 は、住居東側の床面から出土した、土師器の台付壺である。外面調整は、口縁部から脚台部にかけて縱方向にヘラナデを行い、ススが付着している。内面調整は、胴部に横方向にヘラナデを行い、一部ススが付着している。脚台部の内面は縱方向にヘラケズリ、底部底面はヘラケズリで調整している。古墳時代前期に位置づけられる。

5 は、住居南側の床面から出土した壺である。胴部は算盤状を呈し完存している。橋爪遺跡で出土した壺のなかで最大である。外面及び残存している頸部内面まで赤彩がなされていることから、口縁部も赤彩がなされていたと考えられる。外側調整は、胴部上位はヘラミガキ、胴部下位は横方向にヘラナデがなされている。頸部がかなりそぼまっている。口縁部を丁寧に打ち欠き、部分的に摩耗が認められる。古墳時代前期に位置づけられる。

6 は、住居南側の床面から出土した、小型精製器種の小型壺である。外面及び頸部内面も赤彩がなされている。外側調整は全面にヘラミガキを行っている。内面調整は、胴部上半部に横方向にヘラナデが、胴部下半部にはヘラミガキがなされ、ススが付着している。半円状の胴部で頸部が広がっていることから、口縁部はかなり大きかったと推測される。口縁部を丁寧に打ち欠き、その後研磨している。古墳時代前期中葉以降に位置づけられる。

7 は、住居南側の覆土から出土した、小型精製壺種の壺である。外面及び頸部内面は赤彩されている。外側調整は、全面にヘラミガキがなされている。胴部内面は横方向にヘラナデがなされている。口縁部を丁寧に打ち欠き、その後研磨している。古墳時代前期中葉以降に位置づけられる。



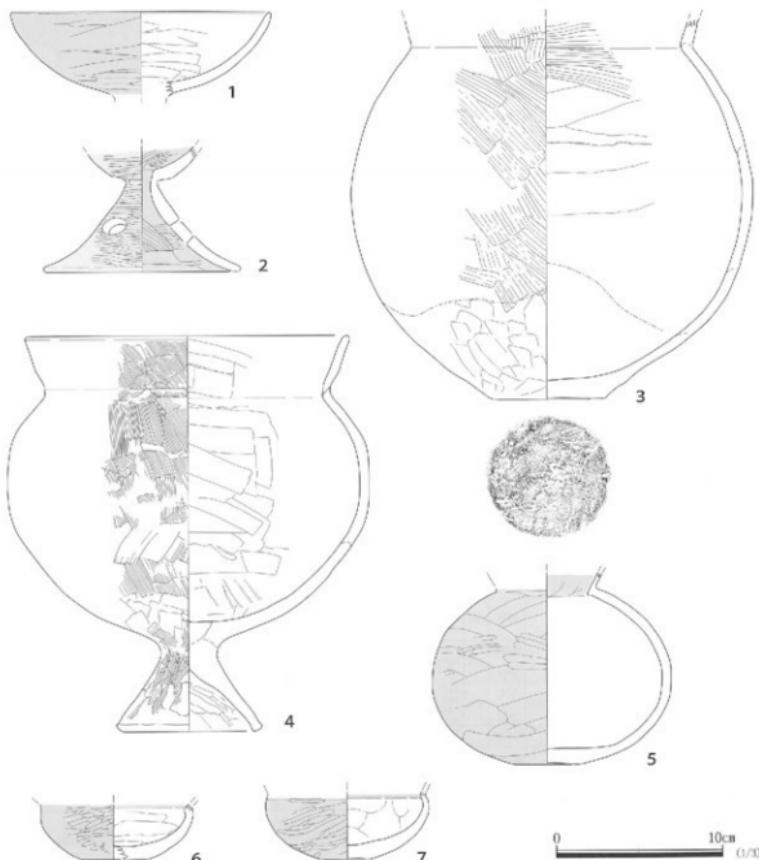
第120図 015SI 平面図・断面図

表 65 015SI 出土 土器觀察表

番号	遺跡名	層位	種別	口径(cm)	底面(cm)	芯面(cm)	壁面(cm)	部位	率合率	手法・文様の特徴			釉土	色調	焼成	時期	備考
										手法	文様	特徴					
1	01551	30.000	环状	土罐	158	553		环部	50%	外表面直、口部内凹の形 外側ハラミ子目、内側ハラミテマ(微)、 外縁一部断続。	白色 小石	褐色	烧成	古墳時代 前期	环部分のみ。鉢底が粘土合板で欠損。		
2	01551	30.009	腰台	土罐	-G7-	118		腰部裏 腹部	50%	外表面内凹形、外縁へと少々丸み。 内側ハラミ子目どうし、内側ハラミテマ(微)、 腰部内側部凹曲。	白色 小石	褐色	烧成	古墳時代 前中期	欠損部に補修打痕あり。		
3	01551	30.004	甌	土罐	(254)	70	<245>	腹部 底部	40%	直筒三脚甌。 底部下部ハラミ目(微)、 口部内凹の形、外側ハラミテマ(微)、 内側ハラミ子目(微)。	白色 小石	褐色	烧成	古墳時代 前中期中盤	残存部の形状は甌状を呈す。		
4	01551	30.003	台付甌	土罐	(198)	243	80	220	70%	内側底部ハラミテマ(微)、 内側底部ハラミ子目(微)、 底部内側ハラミテマ(微)、 内側底部ハラミ子目(微)、 内側底部ハラミテマ(微)、 内側底部ハラミ子目(微)。	黑色 小石	褐色	烧成	古墳時代 前中期			
5	01551	30.002	甌	土罐	(118)	35	116	腹部 底部	50%	円筒形、内側底部ハラミ子目(微)。 外側底部内側ハラミテマ(微)、 外側底部内側ハラミ子目(微)。	白色 小石	褐色	烧成	古墳時代 前中期	外側部に転打痕あり。 残存部は甌状を呈す。		
6	01551	30.006	小型甌	土罐	(35)	40	93	腹部 底部	50%	内側底部、内側底部底面 内側底部ハラミ子目(微)、内側底部ハラミテマ(微)、 内側底部ハラミテマ(微)。	白色 小石	褐色	烧成	古墳時代 前中期中盤	欠損部に転打痕あり。 小型積層構造としての甌。		
7	01551	30.008	小型甌	土罐	41	26	99	腹部 底部	50%	内側底部、内側底部底面 内側底部ハラミ子目(微)、内側底部ハラミテマ(微)。	黑色 小石	褐色	烧成	古墳時代 前中期	欠損部に打痕あり。 小型積層構造としての甌。		

器台、壇、小型壺は、口縁部を意図的かつ丁寧に叩いて欠損させられていた。また器台は脚部を欠損していた。この行為に伴う土器片は住居内から発見されていないことから、住居の外で打ち欠き、その後住居に廃棄されたと考えられる。遺物はすべて床面直上より出土している。1、3、4、6、7は住居南側からまとめて出土しており、2は住居西側、4は住居東側から出土しているが、住居上部は削平されているため、台付壺など大型の土器は部分的に欠損していた。

時期 出土遺物から、「新善光寺跡・穴戸城跡」においてのⅡ期目に相当する。古墳時代前期中葉に比定される。



第121図 0155I出土遺物

第2節 A2区

040SI (第122図)

位置 A2区北西部、AB-23、AB-24、AC-24 グリッドに位置する。

規模と平面形 住居上部は全体的に削平されており、残存する規模は長軸 5.70m、短軸 5.00m を測り、平面形は隅丸方形と推測される。

主軸方向 N-13° -W である。

壁 残存する壁高は 0.10 ~ 0.20m で、壁は床面から緩やかに立ち上がる。南西部は削平を受けているため、立ち上がりは不明瞭である。

床 ほぼ平坦で、硬化面、周溝は確認されなかった。

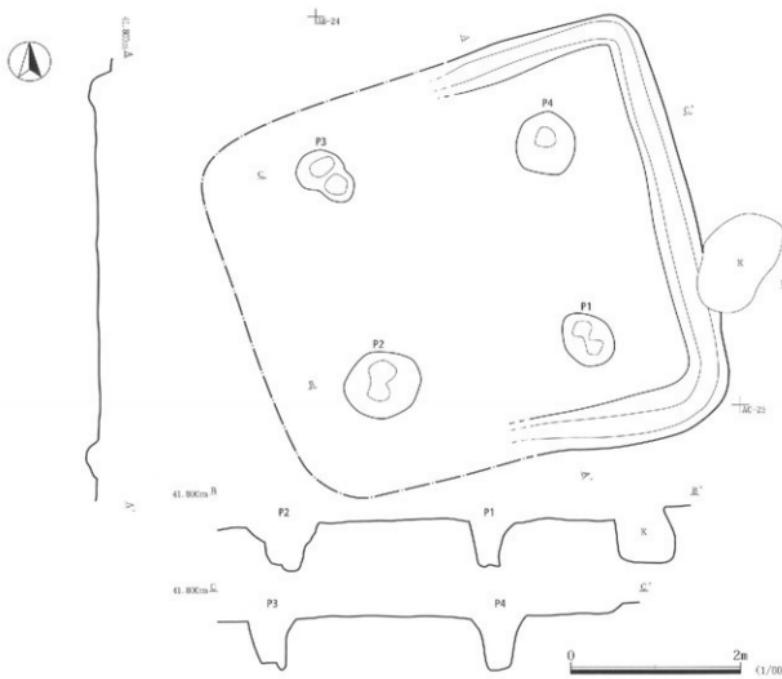
ピット 4 基検出した。P1 ~ 4 は径 0.56 ~ 0.80m で、平面形は円形を呈し、深さは 0.52 ~ 0.66 m を測る。

カマド 確認されなかった。

覆土 明確な覆土は確認されなかった。

遺物 図示してはいないが、甕の底部付近と思われる破片が出土している。外面調整は縦方向にヘラケズリを行い、被熱している。内面は横向方向にヘラナダで調整している。胎土に白色粒、極微量の雲母を含んでいる。

時期 出土遺物が少なく詳細は不明である。古墳時代以降の住居跡と考えられる。



第122図 040SI 平面図・断面図

第3節 古墳時代まとめ

A1区で住居1軒が検出された。床面から焼土を検出し、炉またはカマドがあったと推測されるが、攪乱を受けしており、住居主軸は不明である。住居床面から検出した器台は器受部を、小型壺は口縁部を丁寧に打ち欠き、研磨されているのが特徴である。古墳時代前期中葉、「新善光寺跡・穴戸城跡」のⅡ期に相当する（註1）（清水）。

註1：稻田義弘氏・内山敏行氏講義による。

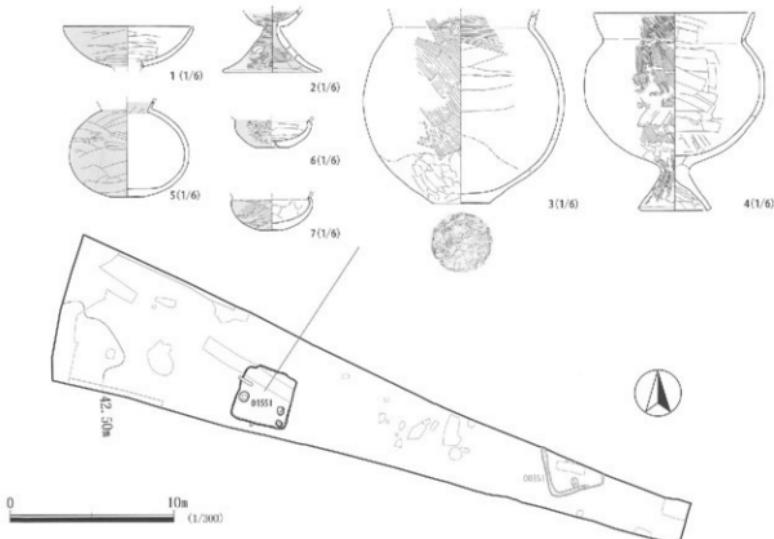
引用・参考文献

浅井哲也 2003 「茨城県における古墳時代前期の上器」『領域の研究』一阿久津久先生還暦記念論集一。阿久津久先生還暦記念事業実行委員会

稲村宣行 1992 「茨城県南部における丸高式土器について」『研究ノート2号』財团法人茨城県教育財団

稲村宣行・土生昭治・白石真里 1995 「茨城における5世紀の器物」『東国土器研究第4号』東国土器研究会

茨城県教育財團文化財調査報告第256集「新善光寺跡・穴戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県水戸市事務局 財團法人茨城県教育財団 2006



第123図 古墳時代 A1区 遺構分布図

第7章 奈良・平安時代の遺構と遺物

第1節 A1区

003SI (第124・125図、表66)

位置 A1区東部、AJ-41、AK-41グリッドに位置する。

規模と平面形 北部は調査区外に延伸しているため、全長は不明であるが、検出した規模は長軸1.08m、短軸0.81mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。

主軸方向 N-14°Wである。

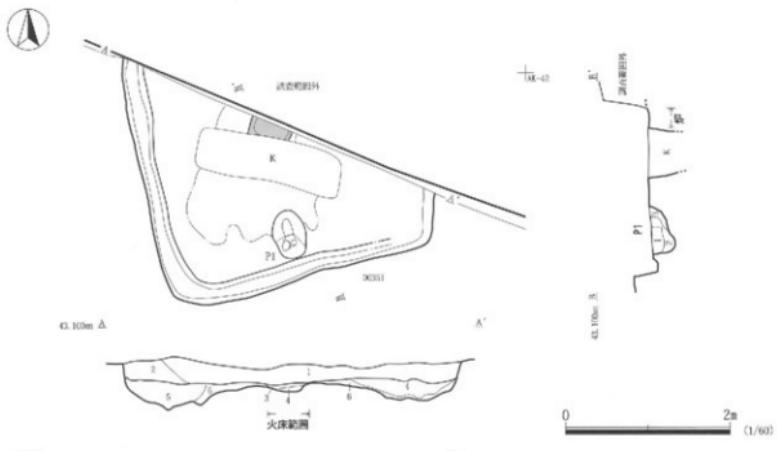
壁 残存する壁高は0.32～0.18mで、壁はほぼ直立している。

床 平坦で住居中央部に硬化が認められる。周溝は住居西半部壁際に沿って巡り、0.06mの深さを測る。

ピット 1基検出した。P1は長軸0.58m、短軸0.40mの楕円形を呈し、深さは0.26mである。

炉 住居中央より炉を検出した。検出した規模は、長軸0.51m、短軸0.16mである。火床面は被熱による硬化が認められる。

覆土 6層からなり、第1・2層はローム上が混入する黒褐色土を主体とし人為堆積と考えられる。第3～6層が掘り方の埋土である。



- 003SI
 1 黑褐色土 ローム粒少、ローム粒・粘土粒・炭化物微量含む。縮まりあり/粘性あり
 2 黑褐色土 ローム粒・ローム少、砂・土・炭化物微量含む。縮まりあり/粘性あり
 3 黑褐色土 粘口一ム粗粒、土・砂多量含む。縮まり強/粘性強
 4 黄褐色土 ローム粒・ローム粒多量含む。縮まり強/粘性強
 5 黑褐色土 ローム粒中、ローム粒少量含む。縮まり弱/粘性強
 6 細色土 ローム粒多量含む。縮まり強/粘性強

- P1
 1 黑褐色土 ローム粒・ローム粒少、炭化物微量含む。
 縮まりあり/粘性あり
 2 黑褐色土 ローム粒少量含む。縮まりあり/粘性あり
 3 黑褐色土 ローム粒中、ローム底・炭化物微量含む。
 縮まりやや弱/粘性あり

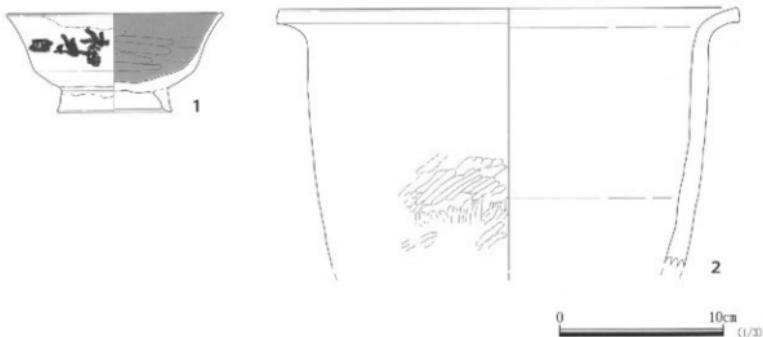
第124図 003SI 平面図・断面図

遺物 実測遺物は2点である。

1は、土師器の高台付环である。外面調整は回転ヘラケズリがなされ、口縁の外面一部にススが付着している。内面調整は黒色処理がなされヘラミガキされている。体部は外反しており、薄手である。貼り付け高台であり、体部立ち上がりよりも内側に高台が付いている。外面胴部に横位で墨書きされ「神刀自」と読める。9世紀第3四半期に比定できる。

2は、須恵器の瓶である。外面調整は平行タタキをしたのち、横に向かってナデがなされているため、胴部上半ではタタキの痕跡がほぼ消えている。9世紀前葉以降に比定できる。

時期 出土遺物から、9世紀前葉から9世紀中葉頃と考えられる。



第125図 0035I出土遺物

表66 0035I出土 土器観察表

番号	遺構 ID.	調査 部位	形種	種別	口径 (cm)	腹高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	施土	色調	施威	時期	参考
1	0035I	圓孔 一孔	高台 付环	土師器	120	61	48	50	口縁部 ～ 高台	50%	外側調整付内側墨書き「神刀自」、 外側調整下部外底ヘラケズリ、 内面ヘラミガキ、内面施瓦处理。	白雲母	褐色	普通	9世纪 第3四半期	貼り付け高台。
2	0035I	覆土	瓶	須恵器	282	160			口縫部 ～ 8.21	20%	外面平行タタキ、 内面ナデ(横)。	白色粘 小石	褐褐色	普通	9世纪 第4四半期 以降	

第2節 A2区

031SI (第126・127図、表67)

位置 A2区南東部、AH-31、AH-32グリッドに位置する。

規模と平面 長軸3.31m、短軸2.89mを測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向 N20°-Eである。

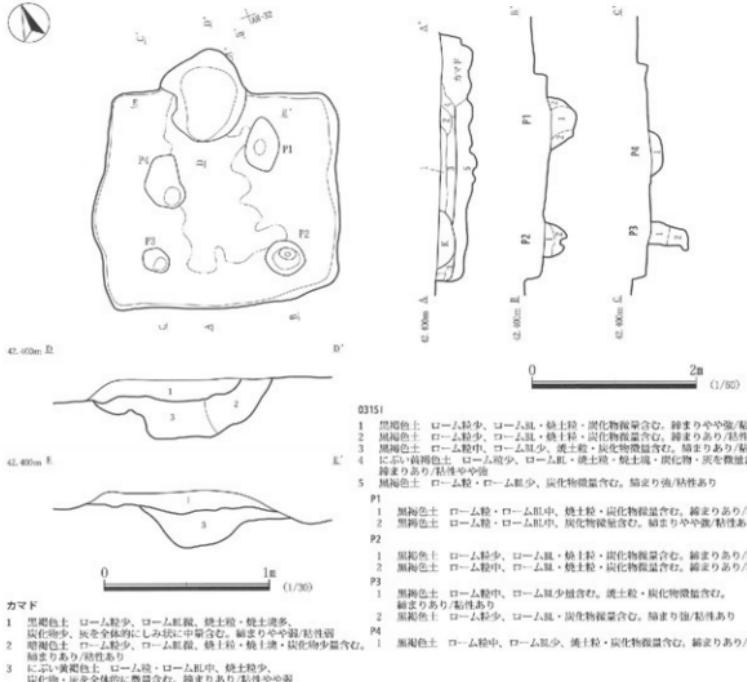
壁 残存する壁高は0.20～0.25mで、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床 ほぼ平坦地、カマド南西部から住居中央部を中心して硬化が認められる。周溝は確認されなかった。

ピット 4基検出した。P1～2、4は、長径0.46～0.75m、短径0.42～0.40mの楕円形を呈し、深さは0.15～0.28mである。P3は長径0.34m、短径0.28mの楕円形を呈し、深さは0.23mである。P1～P4はその位置から主柱穴と考えられる。

カマド 北壁中央部や西側に付設されている。遺存状態は悪く、袖部と火床は確認されなかった。規模は煙道部から焚口部まで1.11m、壁外への掘り込みは0.47mである。カマド部分は住居主体部より先行して埋められている。

覆土 5層からなり、第1・2層が水平堆積を呈しており、人為堆積と考えられる。第5層上部が硬化する。

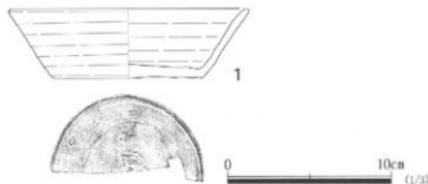


第126図 031SI 平面図・断面図

遺物 実測遺物は1点である。

1は、住居覆土から出土した、須恵器の壺である。外面調整は、胴部下位に回転ヘラケズリがなされる。底部は回転ヘラケズリがなされ、若干スヌが付着している。断面は箱型を呈し、器壁は外反気味に開く。底部の大きさと比べ、口縁の大きさはそれほど大きくない。内面にスヌが付着している。8世紀第3～4四半期に比定できる。

時期 出土遺物から8世紀中葉から8世紀後葉と考えられる。



第127図 0315I 出土遺物

表67 0315I 出土 土器観察表

番号	遺構	層位	面積	機能	口径	器高	底径	最大幅	部位	残存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時間	備考
1 0315I	覆土	环	須恵器	146	43	50	~	口縁部 ~ 底部	50%	外底輪郭下位口縁ヘラケズリ、 底部内側ヘラケズリ、 内面・底面に若干スヌ付着。	白色粘土	灰色	普通	8世紀 第3四半期		

0325I（第128・129図、表68）

位置 A2区南東部、AF-31、AG-31、AG-32グリッドに位置する。

規模と平面形 長軸3.92m、短軸3.61mを測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向 N30°Eである。

壁 残存する壁高は0.22～0.38mで、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床 ほぼ平坦である。南西部から北部、北東部に周溝を確認した。

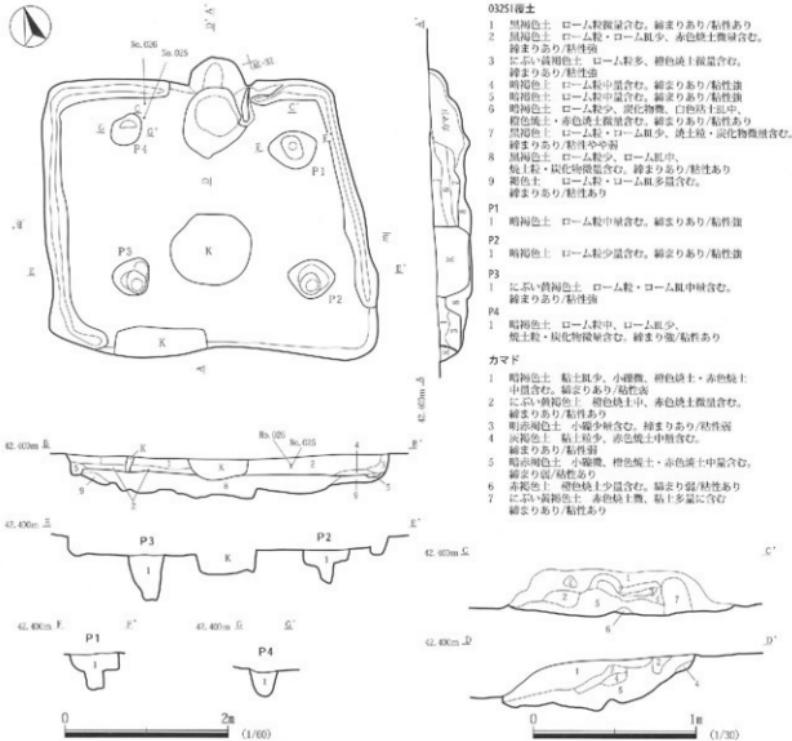
ピット 4基検出した。P1～4は、径0.44～0.60mで概ね円形を呈す。深さは0.42～0.55mである。P1～4はその位置から主柱穴と考えられる。

カマド 北壁中央部に付設されており、明確な火床は確認されなかった。規模は煙道部から焚口部まで1.16m、壁外への掘り込みは0.32mである。

覆土 9層からなり、レンズ状堆積と初期流入土の堆積状況から、自然堆積と考えられる。第8層は掘り方の埋土である。

遺物 実測遺物は2点である。1、2は隣接して出土した。

1は、カマド西側の住居覆土から出土した、土器壺の壺または碗と見られる。ほぼ完形に近い。3段の輪積み痕があり、外面調整はナデを行っている。胴部下端は手持ちで横方向にヘラケズリ調整されている。内面調整は、横方向に丁寧なヘラナデがされており、黒色処理がされている。底部には木葉痕があり、外面には若干スヌが付着している。外面の調整具合から粗製土器とも考えられる。内面は丁寧に調整されて黒色処理されていることから、内面を重視していたようである。形状から9世紀第1四半期以降と判断した。



第128図 032SI 平面図・断面図



0 10cm (1/2)

第129図 032SI 出土遺物

表 68 032SI 出土 土器観察表

品 号	遺 跡 No.	層 位	基 高	幅 別	口 径 (mm)	底 高 (mm)	底 径 (mm)	底 部 厚 さ (mm)	部 位	残 存 率	手 法・文 様の特 徴	胎 土	色 調	燒 成	時 期	備 考
1	032SI	0.025 または 8cm	上 師 器	95	87	70	106	口縁部 ～ 底部	50%	輪形内窓、外正ナデ、 内側斜線ト空きタケツリ(下鉢ち・軸)、卫视神 小窓(ハツカミ)、周囲木葉模 様(スギモモガサ)、外曲面土人村付属。	小石 解剖内	普通	9世紀 第1回中期 以降	粗製土器 外面部ナデの可能性あり。 被燒		
2	032SI	0.026	小型 罐	上 師 器	100	111	97D	122	口縁部 底部	65%	内面ナデ 内面ト底ハラケツリ(下鉢ち・軸)、 内面ハラケツリ付、周囲木葉模 様(スギモモガサ)、白ナゲ、 内面自然處理。	白石 小石	褐色	普通	9世紀 第1回中期 以降	

2 は、カマド西側の住居覆土から出土した、土師器の小型甕である。外面調整は、胴部上半部に横方向にナデがなされ、胴部下半部は横方向に手持ちでヘラケズリがなされている。内面調整は、横方向にヘラナデされ、黒色処理されている。底部は木葉痕があり、木葉痕の上部にヘラナデがされている。頸部と口縁部までの距離が短く、口唇部の摘み出しあはない。また胴部の張りも弱い。形状から、9世紀第1四半期以降のものである。

時期 出土遺物から9世紀前葉と考えられる。

033SI (第 130 ~ 132 図、表 69・70)

位置 A2 1/4 南東部、AG-29、AG-30、AH-29、AH-30 グリッドに位置する。

重複関係 114SI の南西角を切る。

規模と平面形 長軸 5.40m、短軸 5.15m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向 N-5° ·W である。

壁 残存する壁高は 0.10 ~ 0.20 m で、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床 硬化面を 2 枚検出した。第 3 層上部より黒褐色土を主体とする硬化面を、その下部の第 5・6 層上部よりロームを主体とする硬化面を検出した。床面の貼り直し等が行なわれた可能性がある。上部の硬化面はカマド西側から南壁にかけて確認されほぼ平坦である。下部の硬化面は住居内に全体的に拡がるように検出されほぼ平坦である。周溝は上部の硬化面検出時には確認されなかったが、下部の硬化面検出時に西壁から南壁にかけて確認された（第 4 層）。

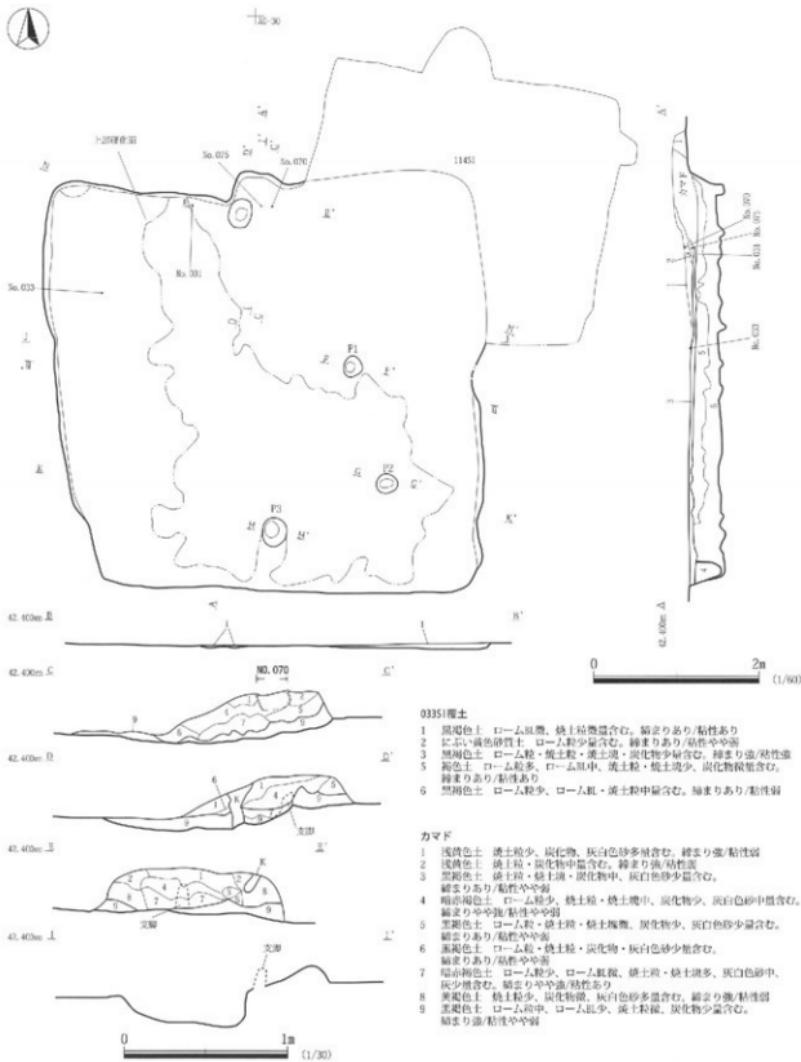
ピット 8 基検出した。P1・2・4・6 は径 0.26 ~ 0.53 m で、平面形は円形を呈し、深さは 0.18 ~ 0.64 m である。P3・5・7・8 は長径 0.25 ~ 0.43 m で、短径 0.16 ~ 0.36 m で、楕円形を呈し、深さは 0.13 ~ 0.36 m である。ピットは上下の硬化面検出時に検出したが、上部の硬化面は黒色土を主体としており下部の硬化面で検出したピットが上部の硬化面に属する可能性もある。P2・4・5・8 はその位置から主柱穴と考えられる。P3 は、カマドと南壁との位置関係から出入口施設に伴うピットと考えられる。上部の硬化面に伴うピットなのか、上下両方の硬化面に伴うピットなのかは不明である。

カマド 上部の硬化面に伴うと推定されるカマドを廃絶した際の埋め土を検出した。下部の硬化面に属するカマドは確認されなかった。明確な火床範囲は確認されなかったが、支脚を検出した。支脚はカマドの掘り込みのほぼ中央から出土し、No.075 出土遺物として取り上げた。カマドは北壁中央部に付設されており、煙道部が調査区範囲外へ延伸すると推定される。検出した規模は、壁外への掘り込み 0.33 m である。

覆土 6 層からなり、第 3 層上部、第 5・6 層上部に硬化面が形成される。第 5・6 層が掘り方の埋土である。覆土が薄く自然堆積か人為堆積かは不明である。

遺物 実測遺物は 5 点である。

1 は、カマド東側の住居覆土から出土している、十師器の杯で、ほぼ完形に近い。全面に赤彩がなされている。外面調整は横方向にヘラミガキがなされ、丁寧に細かく磨かれている。底部は手持ちのヘラケズリで調整され、底部の器厚がかなり薄く、丸底気味である。口縁部と体部の境に継がある。内面はナデが行なわれ、胎土に金雲母が含まれている。

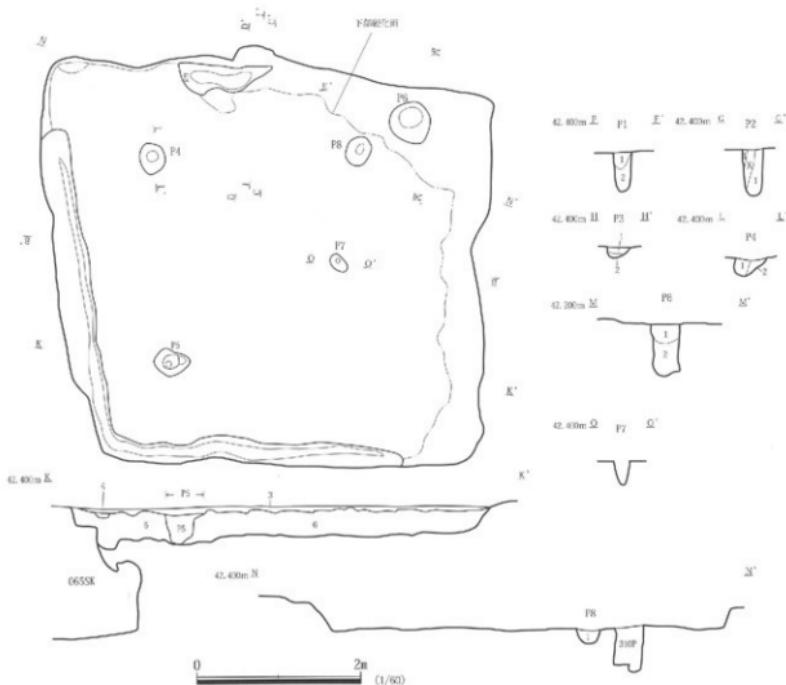


第 130 図 0335I 上部硬化面平面図・断面図



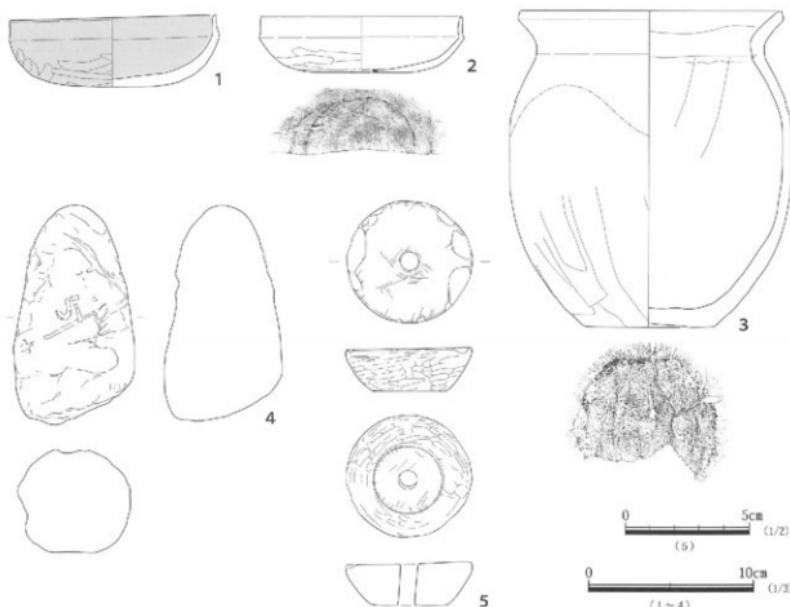
16-20

+16-31



- P1
1 黒褐色土 ローム粒少、ローム粗・炭化物微、黒ゴク少量含む。締まり強/粘性あり
2 黒褐色土 ローム粒中、ローム粒少、炭化物微、黒ゴク少量含む。締まり強/粘性あり
- P2
1 黒褐色土 ローム粒・ローム混、黒ゴク少量含む。締まりあり/粘性あり
- P3
1 黒褐色土 ローム粒少、ローム粗・炭化物微、黒ゴク少量含む。締まりあり/粘性あり
2 黒褐色土 ローム粒中、ローム粒少、炭化物微、黒ゴク少量含む。締まり強/粘性あり
- P4
1 黒褐色土 ローム粒中、ローム粗・炭化物微、黒ゴク少量含む。締まり強/粘性あり
2 黒褐色土 ローム粒多、ローム粗少、焼土微弱含む。締まり弱/粘性あり
- P5
1 黒褐色土 ローム粒少、ローム粗少、炭化物微量含む。締まり弱/粘性あり
- P6
1 黒褐色土 ローム粒中、ローム粗少、炭化物微弱含む。黒土鉄鉱含む。締まりあり/粘性やや弱
2 黒褐色土 ローム粒少、ローム粗少、炭化物微量含む。締まり弱/粘性やや弱
- P8
1 黑褐色土 ローム粒中、ローム粗少、洗土粒・燒土鉄鉱混含む。締まりあり/粘性あり

第131図 033SI 下部硬化面平面図・断面図



第 132 図 033SI 出土遺物

表 69 033SI 出土 土器観察表

番号	遺構	層位	器種	縁割	口径 (mm)	深長 (mm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	油土	色調	焼成	時期	備考
1 033SI N.0.031	環	土師器	123	45		127			口縁部 底部	95%	少墨手形、外腹ヘラミタシ(模)。 内底に凹部、腹部ヘラケズリ(手押)。	黒褐色	褐色	普通	7世紀 第1～第4 四半期	圓底器底溝間 古くとも6世紀後半。 外腹ヘラミタシ手押。
2 033SI 覆土	环	土師器	122	35	120				口縁部 底部	50%	裏面一部剥、内底剥離から底溝 ヘラケズリ。(手押・絞)。	小石	赤褐色	普通	7世紀 第3～第4 四半期	油懸器底溝前 古くとも6世紀後半。丸底気味。
3 033SI N.0.075	小型鏡	上鉢器	158	196	82				口縁部 ～ 底部	50%	内底手押手形。 内底下半部ヘラケズリ(模)。 内底剥離ヘラケズリ(模)。 底部分ヘラケズリ(模)。外底スス付着。	白黒母	赤褐色	普通	6世紀後半 まで付る。	外底ススは模の一帯強いてる所の下 で付る。
4 033SI N.0.075	支脚	土製品	素地	(135)						50%	非常にくびれみなどが見られるが 規則性が薄しく入浴的なものとは不規。	褐色				カマドから出土。素地に黒霧開を含む。

表 70 033SI 出土 石製品観察表

番号	遺構	層位	器種	縁割	上部 厚さ (mm)	下部 厚さ (mm)	孔径 (mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	油土	色調	焼成	時期	備考
1 033SI N.0.033	紡錘半石製品	51	17.5	28	7.5				100%	下部を19孔している。 縫かいしまが半 下位と側面の縫に通。	堅岩				形状は厚台形。

2は、住居覆上から出土した、土師器の环である。外面調整は、胴部から底部にかけて手持ちで横方向にヘラケズりがなされており、丸底気味である。また口縁部と体部の境に稜が残っている。内面はナデが施される。内外面に若干ススが付着している。

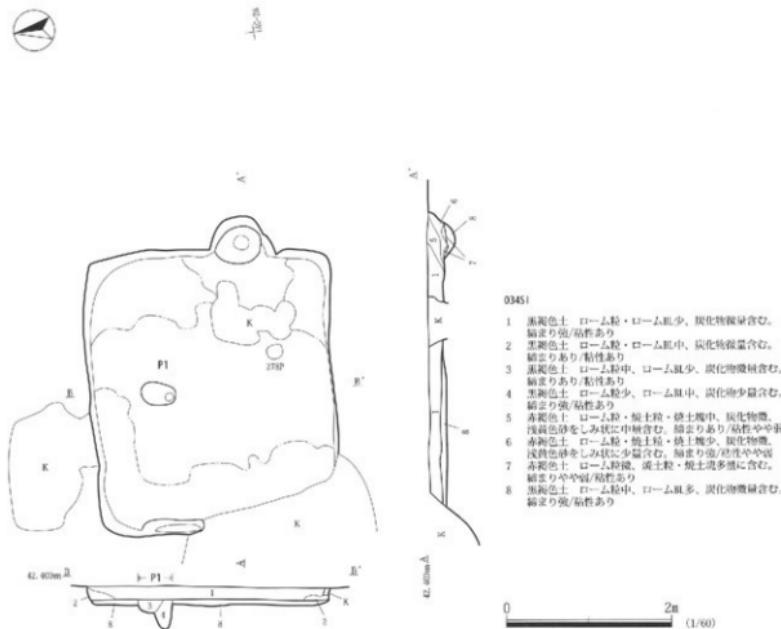
1及び2は、丸底気味であること、口縁に稜を持つことから、須恵器流通以前のものと見られ、古くても6世紀後半、6世紀第3四半期から第4四半期と考えられる。

3は、カマドの焼土上位の砂を多く含む灰白色の層から出土した、土師器の小型甕である。橋爪遺跡で出土した小型甕の中でも大型の部類になる。外面は、胴部上半部を横方向にナデ、胴部下半部を縱方向にヘラケズリをしている。調整の順番は上半部のヘラナデを行ってから、下半部のヘラケズリを行っているものとみられる。内面調整は、口縁部を横方向にヘラナデされ、内面胴部を縱にヘラナデがなされる。底部はヘラナデがなされている。外面のススは胴部の最張部分より下に付着している。口唇部の摘み出しじゃなく、胴部はやや張っている。胎土に白雲母を含んでいる。9世紀前後に比定される。

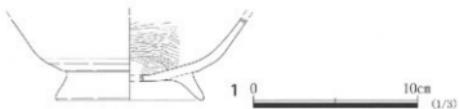
4は、カマドから出土した支脚である。外面の風化が著しく調整等は不明である。素地に黒雲母を含んでいる。

5は、住居西北角から出土した紡錘車で、泥岩製である。横位で出土した。形状は厚台形で、下面から穿孔している。側面には細かいミガキがあり、下面と側面の境に溝がある。

時期 1・2は流れ込みと見られ、年代を推定するものは小型甕しかない。また、114SIを切っていることから、8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。



第133図 03451平面図・断面図



第 134 図 034SI 出土遺物

表 71 034SI 出土 土器観察表

番号 No.	器種	基盤	幅員	口径	底面	底径	最大径	部位	遺存率	手法・文様の特徴	施上	色調	焼成	時期	備考
1 034SI カマド	高台付壺	土器底	(50)	87				側部 ～ 高台	20%	外曲ヘラナデ(側)、内曲ヘラミガキ。底部モウラケズ。高台「ハ」の字状。内面スス村若。	小口	赤褐色	普通	10世紀代	貼り付け高台 内曲ヘラミガキ削かい。

034SI (第 133・134 図、表 71)

位置 A2 区南東部やや中央寄り、AF-28、AF-29、AG-29 グリッドに位置する。

重複関係 住居西側は攪乱により切られている。

規模と平面形 長軸 3.94m、短軸 3.08m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向 N 95° -E である。

壁 残存する壁高は 0.24m で、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈する。

床 ほぼ平坦で住居中央部に硬化面が認められる。住居南西部に一部周溝が認められたが、明確には確認できなかった。

ピット 1 基検出した。P1 は長径 0.38m、短径 0.26m で、概ね楕円形を呈し、深さは 0.38 m である。

カマド 東壁やや南側に付設されており、火床面を検出した。火床面は床面とほぼ同じ高さで、平坦である。火床面は被熱による硬化が認められる。規模は煙道部から焚口部まで 0.68m、壁外への掘り込みは 0.44 m である。

覆土 8 層からなり、第 1 層がレンズ状に堆積し、第 2・5・6 層に初期流入土が認められることから自然堆積と考えられる。第 8 層が握り方の埋土である。

遺物 実測遺物は 1 点である。

1 はカマドから出土した土師器の高台付壺である。外面調整は横方向にヘラナデがなされ、内面調整は細かいヘラミガキがされている。底部は回転ヘラケズりがなされ、高台は「ハ」の字状に大きく開く。高台が大きいことから 9 世紀末より新しいと考えられ、10 世紀代に比定される。

時期 出土遺物から 10 世紀以降と考えられる。

035SI (第 135・136 図、表 72)

位置 A2 区中央部、AE-26、AE-27、AF-26、AF-27 グリッドに位置する。

重複関係 281SK 西壁を切る。北東壁を攪乱に切られる。

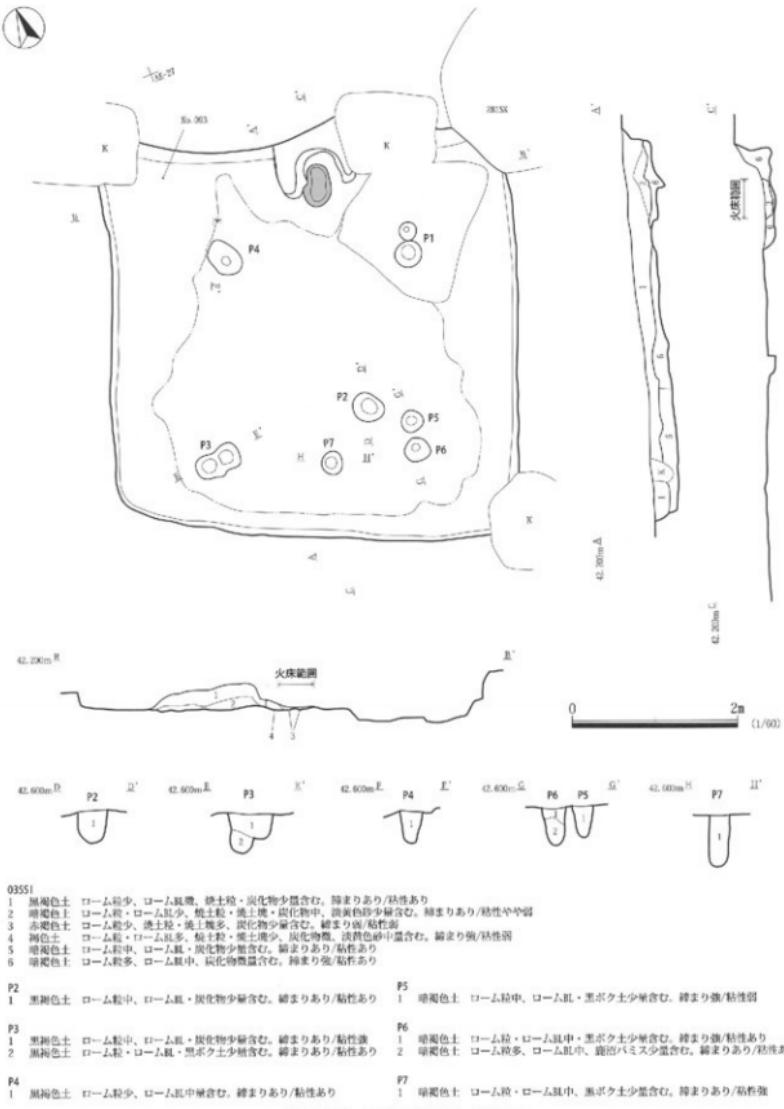
規模と平面形 長軸 6.42m、短軸 6.35m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向 N 20° -E である。

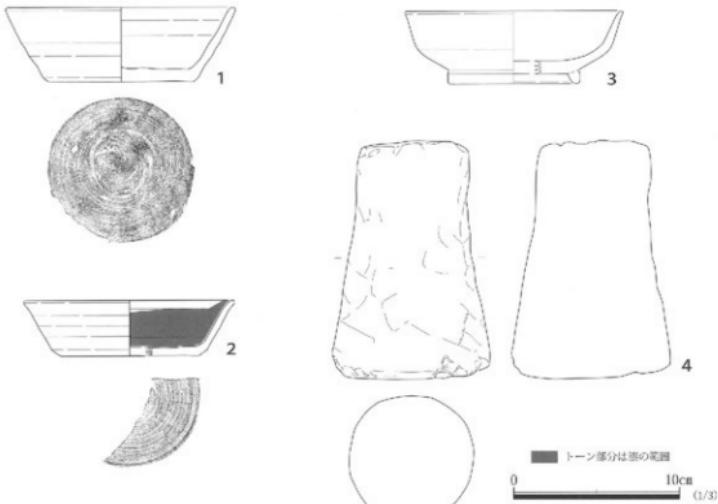
壁 残存する壁高は 0.11 ~ 0.28m で、壁は床面からほぼ直角に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床 ほぼ平坦で、硬化面は住居中央部に確認された。周溝は確認されなかった。

ピット 7 基検出した。P1 は攪乱内から検出したが、位置などから 035SI に伴うピットと判断した。P2、5 ~ 7 は径 0.26 ~ 0.38m で、平面形は概ね円形を呈し、深さは 0.36 ~ 0.62 m である。P3 は長径 0.62 m、短径 0.26 m、深さ 0.5 m の楕円形で、底面は 2 段になる。P1・5・6・3・4 はその位置から主柱穴と考えられる。



第 135 図 035SI 平面図・断面図



第136図 0355I出土遺物

表72 0355I出土 土器観察表

番号	遺構 名	層位	器種	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	最大厚 (cm)	部位	遺 存 率	手法・文様の特徴	土色	色調	洗成	時期	備考
1	0355I	掘り方	环	須恵器	140	45	95		口縁部 底部	30%	火床回転ヘラケズリ、底部磨平。	小石	黄褐色	普通	8世紀 第3四半期	
2	0355I	覆土	环	須恵器	170	35	80		口縁部 底部	40%	外周部下端面ヘラケズリ、内面 火床面磨平ヘラケズリ、内面 一次洗成あり。	小石	灰黑色	普通	8世紀 中葉	漆を内面に薄く塗っている。 8世紀第2四半期の漆(森々木氏御教示)
3	0355I	覆土	高台 付环	須恵器	120	45	70		口縁部 ~ 高台	40%	底部回転ヘラケズリ。	小石	黄褐色	普通	8世紀 中葉	貼り付け高台 高台低い。
4	0355I 30.055	支脚	土製品	上部厚 65	高さ 147	下部厚 95				90%	内窓(熱窓) 底部は上部より厚が大きい。	小石	灰黄色			

P1・3・4は、底面が複数存在し、P5・6も近接することなどから住居が複数回の建替えが行なわれたと推測される。

カマド 北壁や東側に付設されており、上部を櫛型に切られるが、火床面を検出した。火床面は北壁ラインよりもやや南に位置し、床面とほぼ同じ高さである。袖部の内壁及び火床面は被熱による硬化が認められる。検出した規模は煙道部から焚口部まで 0.82m、壁外への掘り込みは 0.26 m である。

覆土 6 層となるが、覆土が薄く自然堆積か人為堆積かは不明である。第 5 層以下が掘り方の埋土である。
遺物 実測遺物は 4 点である。

1 は、住居掘り方の埋土から出土した、須恵器の环である。底部は回転ヘラケズリされ、扁平である。断面は箱型であり、器壁は外反している。器厚は薄い。底径は小さいが器高が高いことから、8世紀代3四半期に比定される。

2は、住居覆土から出土した、須恵器の环である。外面体部下端に回転ヘラケズリを行っている。内面にナデを行っている。内面に薄く黒漆が塗ってある。底部は回転ヘラケズリである。断面は箱型を呈し、器壁は外反気味で、口縁部でさらに外反している。形状から8世紀中葉（8世紀第2四半期）に比定される。

3は、住居覆土から出土した、高台付环である。底部は回転ヘラケズリがなされて、扁平である。高台は低く、环部の体部立ち上がりのところについている。8世紀中葉（8世紀第2四半期から第3四半期）に比定される。

4は、住居北西壁付近の床面から出土した、支脚である。形状は円筒状だが、底部が広がるため鼓形である。底面は上面よりも径が大きい。

時期 出土遺物から8世紀中葉頃と考えられる。

03651 (第137・138図、表73・74)

位置 A2区中央部北側、AB-27、AC-27、AC-28グリッドに位置する。

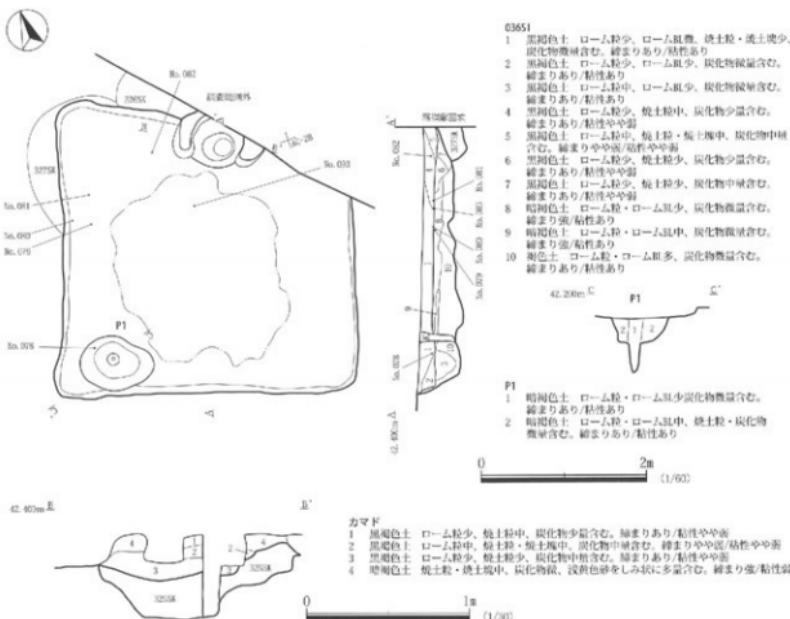
規模と平面形 残存する規模は長軸3.58m、短軸3.54mを測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向 N20°・Eである。

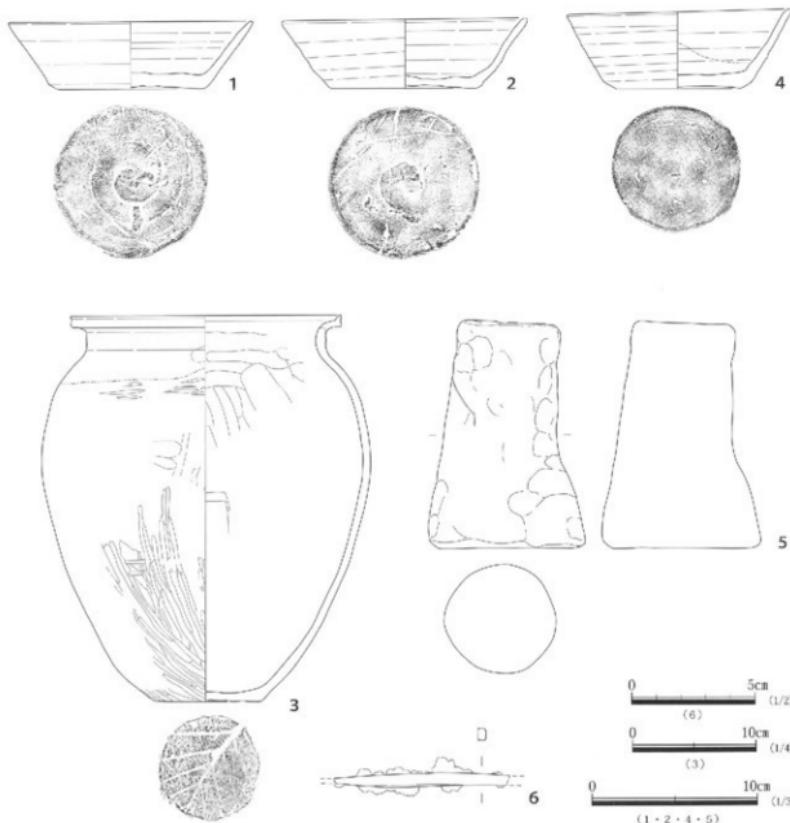
壁 残存する壁高は0.16～0.22mで、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱型を呈す。

床 ほぼ平坦で、硬化面はカマド南側から住居中央部にかけて確認された。周溝は確認されなかった。

ピット 住居南西側から1基検出した。P1は長径1.06m、短径0.76mで、平面形は梢円形を呈し、深さは



第137図 03651平面図・断面図



第138図 0365I出土遺物

0.66 mである。

カマド 北壁中火部に付設されており、煙道部は調査区範囲外へ延伸する。検出した規模は焚口部の0.54 mである。カマド部1層は、カマド廃棄の際に堆積した層と推定されるが、平面的にみると西側へ流れて堆積しており、その中より杯が1つ出土した(No.082: 第138図2)。

覆土 10層からなり、第1層がレンズ状に堆積し、第2層に初期流入土が認められることから自然堆積と考えられる。第4・5層がカマドの廃棄に伴う堆積で、第6・7層がカマドの掘り方である。

遺物 実測遺物は6点である。

1は、住居西側覆土から逆位で出土した、土師器の壺である。外面体部下端にヘラケズリがなされている。底

表73 036SI出土 土器観察表

番号	遺物No.	部位	器種	種別	口径 (cm)	厚さ (cm)	底厚 (cm)	最大径 (cm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	036SI 03.079	杯	土器	口縁部	14.8	41	90	-	口縁部	60%	外面回転下地へラケズり、 底面回転へラケズり。	黒雲母 小石	褐色	褐通	9世紀代	底部回転へラケズり粗い
2	036SI 03.082	杯	土器	口縁部	15.0	43	90	-	口縁部 底部	70%	底面回転へラケズり、 外面回転。	白雲母 小石	褐色	褐通	9世紀代	底部回転へラケズり粗い
3	036SI 03.078	甕	土器	口縁部	21.7	31.8	86	C266	口縁部 底部	70%	外面下地へラミガキ(窓)、内面へラ マナデ(子持)、外側に高輪、スヌード 型、外側無地。	黒雲母 小石	赤褐色	小石 不良	9世紀代	
4	036SI 03.081	杯	鐵製品	口縁部	13.6	43	70	-	口縁部 底部	100%	外面回転下地へラケズり、 底面回転へラケズり。 丸玉スクリュ、口部歪みあり。	小石	淡黄色	やや 不良	8世紀 第3～第4 四半期	高い焼きムラ。木葉下涼
5	036SI 03.083	支脚	土器	口縁部	5.8	141	74.8	-	-	100%	円筒形だが鼓形をしている、 底面は上面より径が大きい。	赤褐色				

表74 036SI出土 鉄製品観察表

番号	遺物 No.	部位	器種	種別	厚さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
6	036SI 03.080	不明	鉄製品	3.5	5.0	71.0	-	不明	断面長方形。						鏡の前のもの。円。

部は回転ヘラケズリが行われているが、調整は粗い。胎土に黒雲母が混入している。形状から9世紀代と思われる。

2は、カマド西側住居覆土の、焼土・砂を周囲よりやや多く検出した場所から正位で出土した、土師器の杯である。外面が被熱しており、断面まで炭化している。底部は粗い回転ヘラケズリがなされ、底部は大きい。器壁は、底部から体部中央までは内湾し、体部中央から口縁までは外反している。そのため、口縁部がかなり開いている印象を受ける。胎土に白雲母を混入している。形状から9世紀代と見られる。

3は、住居南西隅から出土した、土師器の甕である。外面には付着物があり、被熱しススが付着しているため、表面を確認できる部分が少ない。外面下半は縱方向へラミガキを行っている。内面はヘラマナデで調整されている。底部は木葉痕が残存している。丁寧な調整により器厚はやや薄手で、頸部クビレから口縁までの反りが強い。口唇部に摘み出しがある。焼成はやや不良で、胎土に黒雲母を含んでいる。形状から9世紀代と見られる。

4は、住居西側覆土から正位で出土した、須恵器の杯で、光形である。口クロナデの際の調整が粗く、口縁に歪みがある。外面体部下端にヘラケズリがなされている。内面にススが付着している。底部は回転ヘラケズリで調整されている。焼成はやや悪く、黒い焼きムラがある。器壁は口縁まで直線的に立ち上がる。8世紀第3四半期から第4四半期の木葉下窯跡群の製品と比定できる。

5は、カマド南側床面から出土した、支脚である。円筒形だが、底面は上面より径が大きいため鼓形をしている。

6は、住居西側壁付近から出土している。器種は不明である。付近からは第138図1、2が出土している。断面は長方形で、中央部が一番太く、両先端になるほど細くなっている。外面には鉄錆が付着しており、木材などの付着物は見られない。鏡の折る前のもの、もしくは門と考えられる。

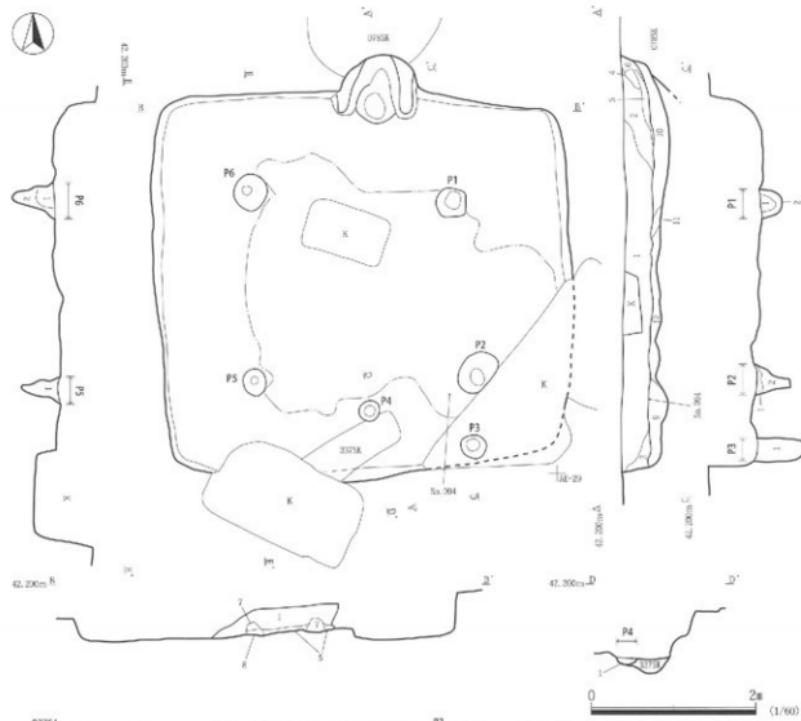
時期 出上遺物から8世紀後葉から9世紀前葉頃と考えられる。

0375I (第 139・140 図、表 75)

位置 A2 区中央部、AD-26、AD-27 グリッドに位置する。

規模と平面形 長軸 6.97m、短軸 6.47m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向 N 1° W である。



0375I

- 1 黒褐色土 ローム段・ローム質・焼土粒・炭化物少量含む。縫まりあり/粘性強
 - 2 黑褐色土 ローム段・ローム質・焼土粒・炭化物少量含む。縫まりあり/粘性強
 - 3 黑褐色土 ローム段・ローム質・焼土粒・炭化物少量含む。縫まりあり/粘性強
 - 4 黑褐色土 烧土粒・薄土段・炭化物少量含む。縫まりあり/粘性強
 - 5 黑褐色土 烧土粒多量含む。縫まりあり/粘性中
 - 6 黑褐色土 ローム段質・燒土粒微量含む。縫まりあり/粘性中
 - 7 に点印 黑褐色土 ローム段質・粘土粒多量に含む。縫まりあり/粘性強
 - 8 焼土粒中、炭化物、粘土粒少量含む。縫まりあり/粘性強
 - 9 焼土粒土 ローム段・ローム段中含む。縫まりあり/粘性強
 - 10 黑褐色土 ローム段・燒土粒・燒土段中、炭化物少、塵泥バミス少量含む。縫まりあり/粘性強
 - 11 に点印 黑褐色土 ローム段・ローム粒少、焼土粒・焼土塊中、炭化物少、塵泥バミス少量含む。縫まりあり/粘性強
 - 12 黑褐色土 ローム段中・ローム段多量含む。縫まりあり/粘性強
-
- P1 1 黒褐色土 ローム段・ローム質・塵泥バミス少量含む。縫まりあり/粘性弱
 - 2 黑褐色土 ローム段・ローム質少、炭化物・塵泥バミス微量含む。縫まり弱/粘性弱
-
- P2 1 黑褐色土 ローム段・ローム質少、塵泥バミス微量含む。縫まり弱/粘性弱
-
- P3 1 黑褐色土 ローム段中、ローム質少、炭化物・塵泥バミス微量含む。縫まり弱/粘性弱
-
- P4 1 黑褐色土 ローム段中・ローム段中、炭化物微、塵泥バミス少量含む。縫まり弱/粘性弱
-
- P5 1 黑褐色土 ローム段少、ローム段中、炭化物微、塵泥バミス少量含む。縫まり弱/粘性弱
-
- P6 1 黑褐色土 ローム段・ローム段中、炭化物微、塵泥バミス少量含む。縫まり弱/粘性弱
 - 2 黑褐色土 ローム段中・ローム段、炭化物・塵泥バミス少量含む。縫まり弱/粘性弱

第 139 図 0375I 平面図・断面図

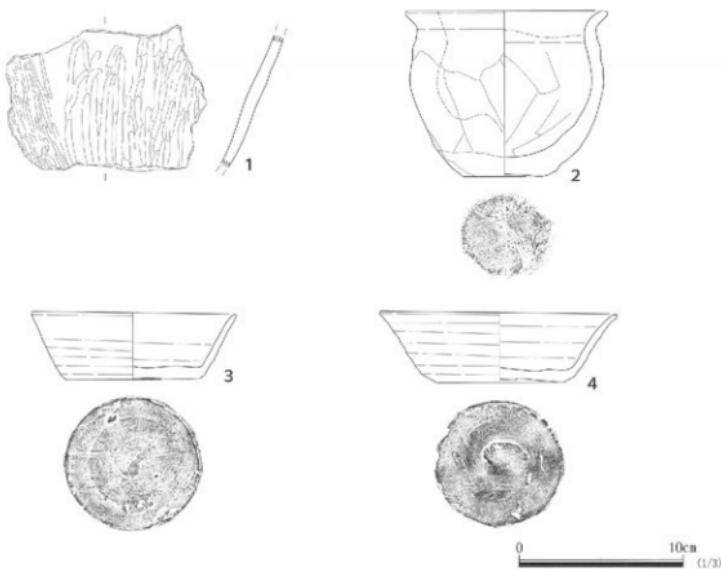
壁 残存する壁高は 0.35 ~ 0.48m で、壁は床面からほぼ直立し、断面形は箱形を呈す。

床 ほぼ平坦で、硬化面は住居中央部から南東部にかけて確認された。周溝は確認されなかった。

ピット 挖方検出時に 6 基検出した。P1 ~ 6 は径 0.22 ~ 0.48 m で、平面形は概ね円形を呈し、深さは 0.24 ~ 0.58 m である。底面の断面形は箱形を呈す。P1・2・5・6 はその位置から主柱穴と考えられる。P4 はその位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

カマド 北壁中央部に付設されている。規模は煙道部から焚口部まで 0.86m、壁外への掘り込みは 0.44 m である。

覆土 12 層からなり、第 1 層がレンズ状に堆積し、第 2 ~ 6 層が初期流入土と認められることから自然堆積と考えられる。カマド部分は、均一に焼土粒・炭化物などが混入する点などから人為堆積と考えられる。



第 140 図 037SI 出土遺物

表 75 037SI 出土 土器観察表

番号	遺構 名	部位	器種	種別	口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	造 作率	手法・文様の特徴	新土	色調	焼成	時期	備考
1	037SI カマド	床	土器基		(60)				側部	2.5%	外葉ヘラカリ(縦)、内葉ナラ。	口縁厚 小石	赤褐色	難燃	8世紀60年代	
2	037SI 36.094	小型器	土器基	口縁部	102	30	(110)		口縁部 一部	1.5%	内葉葉上半部～中央部ヘラカリ(縦)、外葉葉内側部ヘラカリ(横)、内葉葉外側部ヘラカリ(横)、内葉葉内側部ヘラカリ(縦)、外葉葉内側部ヘラカリ(縦)、内葉葉外側部ヘラカリ(縦)。	口縁厚 小石	赤褐色	難燃	8世紀60年代	内葉葉識、圓孔(口縁部から腹部の一部)有り、内葉葉外側部(茎)に焼付記述ナシ、外葉葉内側部(茎)に焼付記述ナシ。
3	037SI	覆土	环	洗槽部	134	42	82		二輪部 一部	3%	外葉葉ヘラカリ(縦)、丁字形に並みあり、底面真平。	小石	青褐色	若燃	8世紀	洗槽部
4	037SI	覆土	环	洗槽部	144	44	78		二輪部 一部	3%	外葉葉底下端部輪ヘラカリ(縦)、底面ヘラカリ(横)。	小石	青褐色	若燃	8世紀後葉	

遺物 実測遺物は4点である。

1は、カマド覆土から出土した、土師器壺の胸部破片である。外面は縦方向にヘラミガキで調整され、内面はナデ調整されている。胎土に白雲母が混入している。破片のため、時期は不明である。

2は、P2西側より出土した、土師器の小型壺で、ほぼ完形に近い。外面調整は、胴部上半部から中央部にかけて縦方向にヘラナデが、中央部から下半部にかけては手持ちで横方向にヘラケズリがなされる。しかし中央部から下半部のヘラケズリの間に引きずられた小石の跡が、明確に残存する。外面には若干ススが付着している。内面調整は、口縁付近は横方向にヘラナデ、胴部は縦方向にヘラミガキのように丁寧なヘラナデがなされ、内部全体にススが付着している。内面の調整が丁寧なこと、内部全体にススが付着していることから、黒色処理を意識しているものと思われる。底部は木葉痕がある。外縁部から中心部に向かって手持ちヘラナデがなされている。口唇部の摘み出しは無く、器厚は厚い。胎土に白雲母を含む。

3は、住居覆土から出土した、須忠器の壺である。内外面の調整はなく、底部の調整は回転ヘラケズリで扁平である。口縁に丕みがある。器壁は外反気味で、器壁は薄い。8世紀第3四半期に比定できる。

4は、住居覆土から出土した、須忠器の壺である。外面胴部下端に回転ヘラケズリがなされている。底部は手持ちのヘラケズリで調整している。器壁は外反気味であり、器厚は薄い。8世紀後葉に比定できる。

時期 山上遺物から8世紀中葉から8世紀後葉と考えられる。

038SI (第141・142図、表76)

位置 A2区中央部、AC-25、AC-26、AD-25、AD-26グリッドに位置する。

規模と平面形 長軸5.46m、短軸4.70mを測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向 N-21°Wである。

壁 残存する壁高は0.30～0.40mで、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床 ほぼ平坦で、硬化面はカマド南部から住居中央部にかけて確認された。周溝は確認されなかった。

ピット 挖り方検出時に3基検出した。P1～3は径0.28～0.56mで、平面形は概ね円形を呈し、深さは0.15～0.38mである。

カマド 北西壁中央に付設されているが、北東壁中央部からも掘り込みが検出され、粘土や焼土を集中して検出したことなどからカマドが存在したと推定される。北東壁中央部のカマドは、遺構の表土に切られており、カマドのつくり替えの前段階のものと考えられる。北西壁中央の新しいカマドは、上部を搅乱に切られており、明確な堆積は確認できなかったが、火床面と思われる範囲を検出した。規模は煙道部から焚口部まで0.70m、壁外への掘り込みは0.40mである。

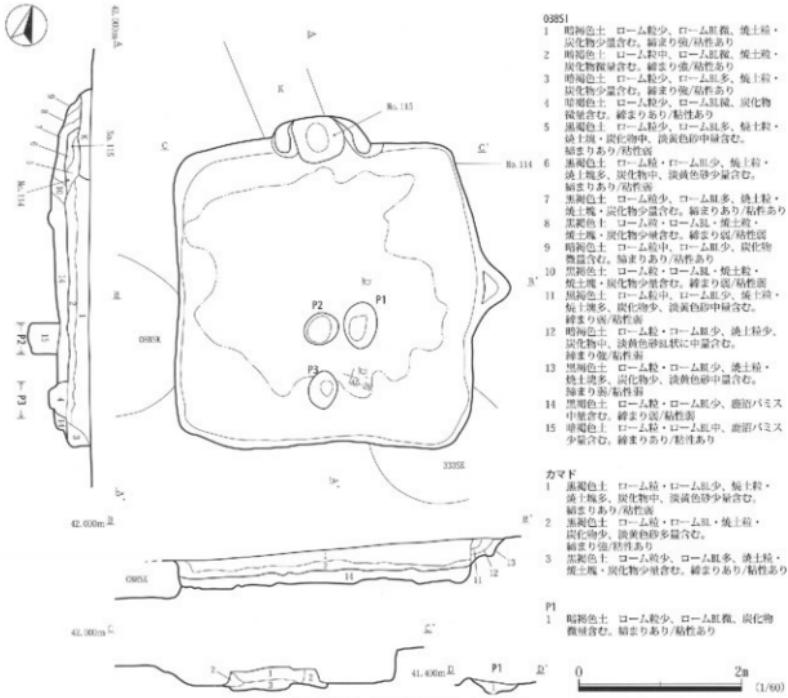
覆土 15層からなり、第1・2層がレンズ状に堆積し、第3・5～9層に初期流入土が認められることから自然堆積と考えられる。カマド部分は、焼上粒・炭化物が均一に混入する点などから人為堆積と考えられる。第7～10層、第14層が掘り方の埋土である。

遺物 実測遺物は2点である。

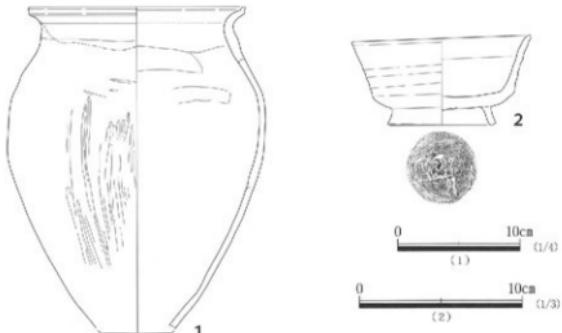
1は、カマドのソデの焼土が集中する部分から出土した、土師器の壺である。外面調整は、中央部は縦方向にヘラミガキがなされている。外面は若干被熱している。内面調整は横方向にヘラナデがなされている。當陸型壺

表76 038SI出土 土器観察表

番号	遺跡名	層位	器種	種別	口径	最高	底径	胎土	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	成形	時期	備考
1	038SI NO.115	痕	土師器	壺	200	(285)	248	口縁部 ～ 内側半周	10%	外山中段引ヘラミタガ半(周)、 内側引(周)、 内側ヘタナデ(周)、外正反T処理、 内側ヘタナデ(周)。	白質陶器	暗褐色	削造	8世紀後葉	カマドのそでの土が集中する部分から出土。	
2	038SI NO.114	高台 側坪	須忠器	壺	110	55	65	口縁部 高台	95%	須忠器(ヘラケズリ、 洗剥ヘタナデを一例)。	小石	褐灰	削造	8世紀 8世紀中期 8世紀 8世紀中期	取り分け窯口、 住居北壁の床面付近から、高台を盛につけるようにして出土。	



第141図 038SI 平面図・断面図



第142図 038SI出土遺物

の特徴である口唇部の摘み出しがある。頸部のクビレは弱めで胴部の張りは弱く、器厚は薄い。胎土に白雲母が含まれている。8世紀後葉に比定できる。

2は、住居北東壁の床面付近から、高台を壁につけるようにして出土した、須恵器の高台付坏である。ほぼ完形に近い。坏部は箱形に近い。底部は回転ヘラケズリで調整されている。高台は高めで体部立ち上がりよりも内側についており、「ハ」の字についている。また底部に「-」がハラ書きされている。8世紀第4四半期から9世紀第1四半期に比定できる。

時期 出土遺物から8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。

0395I (第143・144図、表77)

位置 A2区中央部や北西寄り、AC-24、AC-25、AD-24、AD-25グリッドに位置する。

重複関係 住居中央は攪乱に切られる。095SKの南壁を切る。

規模と平面形 長軸4.28m、短軸3.85mを測り、平面形は隅丸方形である。

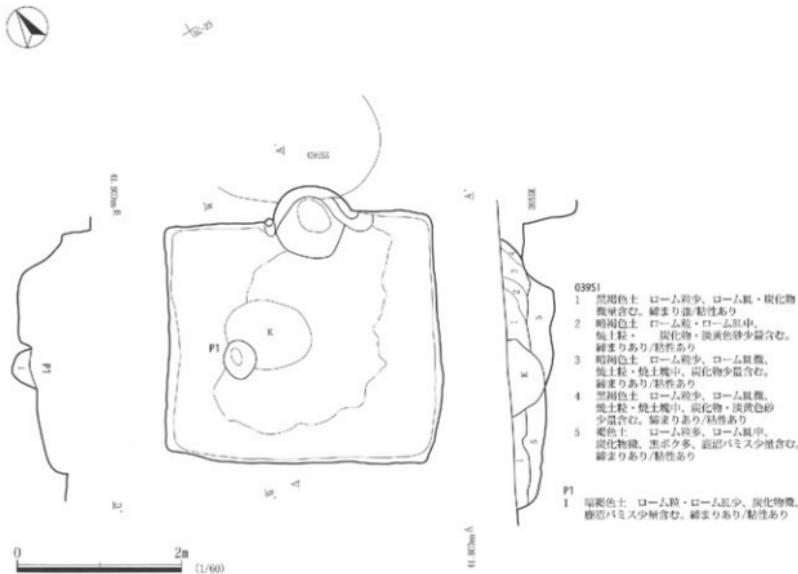
主軸方向 N-35°-Eである。

壁 残存する壁高は0.15～0.30mで、壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床 ほぼ平坦で、硬化面はカマド南部から住居中央部にかけて確認された。周溝は確認されなかった。

ピット 硬化面上からは検出しなかったが、掘り方から1基検出した。

カマド 北壁中央部や東側に付設されている。カマド袖部が東西カマド脇に僅かに残るのみであった。カマド中央部からは糞の底部が伏せた状態で出土した。伏せた糞の内部からは2cm～3cm程の被熱した円礫が出土し



第143図 0395I 平面図・断面図



第144図 039SI出土遺物

表77 039SI出土 土器観察表

番号	遺物 名	部位	器種	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部数	調査率	手法・文様の特徴	土色	焼成	時期	備考
1	039SI カマド	高台付灰	須恵器	140	59	43.0	30.0	30.0	1	100%	口縁部 高台	青灰色	普通	8世紀中葉	貼り付け高台。

た。カマドの規模は煙道部から焚口部まで 0.44m、壁外への掘り込みは 0.32 m である。

覆土 5 層からなるが、確認された覆土は薄く人為堆積層か自然堆積層かは不明である。第 5 層は掘り方の埋土である。

遺物 実測遺物は 1 点である。

1 は、カマドから出土した、須恵器の高台付灰である。完形に近い。底部は回転ヘラケズリで調整されている。貼り付け高台である。高台は「ハ」の字状を呈し、体部立ち上がりよりも内側に接着している。器壁は外反し、器厚は薄い。8 世紀中葉以降に比定される。

時期 出土遺物から 8 世紀中葉から 8 世紀後葉と考えられる。

114SI (第 145・146 図、表 78)

位置 A2 区東部中央、AG-30 グリッドに位置する。

重複関係 209SK 北西壁、315SK 上部、320SK 北壁を切る。南西角を 033SI に切られる。

規模と平面形 長軸 3.76m、短軸 3.70m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向 N-7° -E である。

壁 残存する壁高は 0.48 ~ 0.68 m で、壁は床面からほぼ直立し、断面形は箱形を呈す。

床 ほぼ平坦で、硬化面は住居北西部から住居中央部にかけて確認された。周溝は確認されなかった。

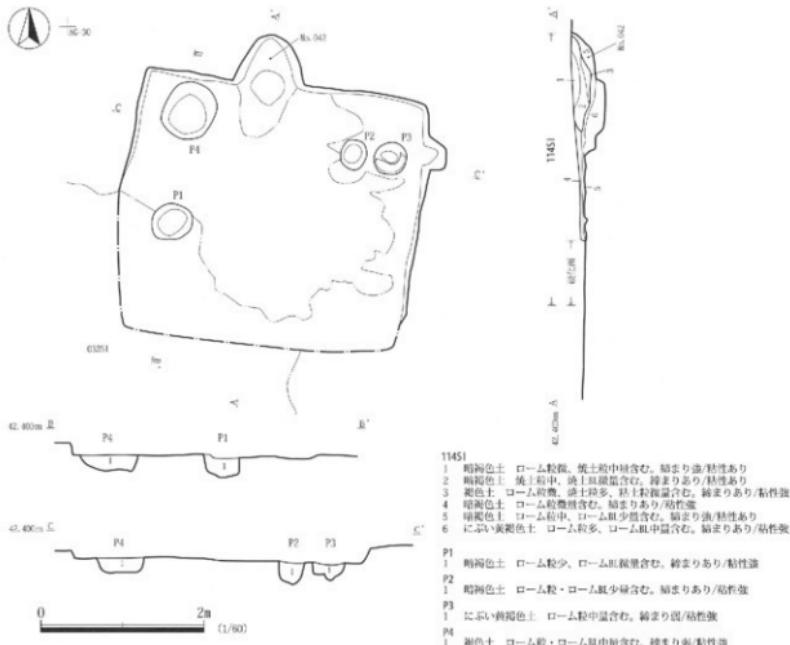
ピット 4 基検出した。P1 ~ 4 は径 0.34 ~ 0.64 m、平面形は概ね円形を呈し、深さは 0.18 ~ 0.22 m である。断面形は U 字形を呈す。P1・4 はその位置から主柱穴と考えられる。P2・3 は性格不明である。

カマド 北壁中央部や西よりに付設されている。規模は煙道部から焚口部まで 0.97m、最大幅 0.87m、壁外への掘り込みは 0.59 m である。火床面は北壁ライン上に位置し、床面からやや下がる皿状である。火床面は火熱を受け硬化している。

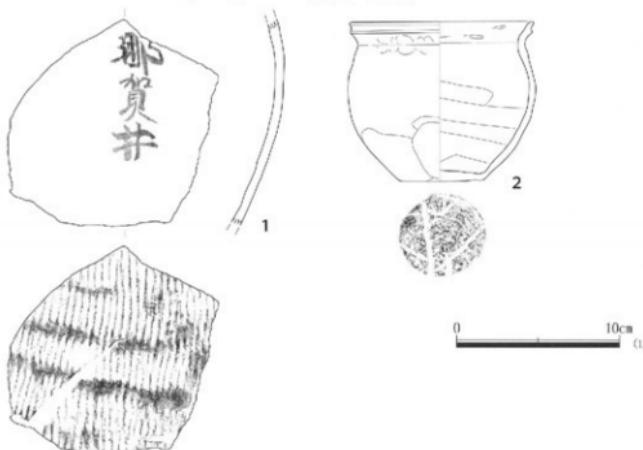
覆土 6 層からなり、上部はほとんど削平されており、遺存状態は不良であった。第 5・6 層は掘り方の埋土である。遺物 実測遺物は 2 点である。

1 は、住居覆土から出土した、土師器甕の胴部の破片である。外面調整は平行タキを施す。内面調整はヘラナデを施している。また内面にススが付着している。焼成はやや不良である。外面正位に墨書きが認められ「那賀井口」と読める。「那賀」と古代那賀郡の関係は不明である。破片のため、時期は比定できない。

2 は、カマドから逆位で出土した、土師器の小型甕である。完形に近い。外面は、口縁部から胴部中央部までの範囲を、横方向にナデが見られる。胴部下半部は、横方向に手持ちでヘラケズリ調整している。内面調整は横



第145図 114Si 平面図・断面図



第146図 114SI出土遺物

表 78 114SI 出土 土器観察表

番号	遺構 名	部位	基盤	縁剥	口径 (cm)	底面 (cm)	底幅 (cm)	最大幅 (cm)	部位	遺存 状	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	114SI	櫛七 兼	土師器	(127)					腹部	115	外山豪山著『立派な口』、内山平行テラコ、内山横テラコ、内山スリット。内山火付器。	小石	褐色	少少 不良		
2	114SI 10.042	小型要土師器	(110)	99	51	116	口縁部 ～ 底部	90%	縁剥が強く、外側は「立派な口」、内側は「立派な横」、内山火付器、口縁部に「つまみ」があり、内山テラコ、芯部火候良、外側熱熱、内壁強烈有り。	白雲母 白色	褐色	少少 芯	8世紀 第2～第3 四半期	カマドから遺物で出土。 被熱の跡が外壁に残る。		

方向にヘラナデを行っており、所々に輪積み痕が確認できる。口唇部の摘み出しは丁寧な作りをしている。底部は木葉痕がある。胎土に白雲母を含んでいる。調整を丁寧に行っており、薄手である。また外面は被熱しているため、艶くなっている。形状から8世紀第2四半期から第3四半期と比定した。

時期 出土遺物から8世紀中葉から8世紀後葉と考えられる。

198SI (第147・148図、表79)

位置 A2区中央部東寄り、AF-30グリッドに位置する。

規模と平面形 確認された規模は長軸4.72m、短軸4.09mを測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向 N-10°-Eである。

壁 残存する壁高は0.72mで、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱型を呈す。

床 硬化面は住居中央部に広範囲にわたって確認された。硬化面北東端は硬化範囲が盛り上がっており、その下位からは縄文時代のピットを検出した。縄文のピットにより床面が軟弱な箇所を強化したと推測される。周溝はほぼ全周するが、北壁カマドの東側は確認されなかった。

ピット 5基検出した。P1、3～5は径0.30～0.40m、平面形はおおむね橢円形を呈し、深さは0.1～0.2mである。P2は径0.68mである。P1～4はその位置から主柱穴と考えられる。

カマド 北壁やや東側に付設されている。規模は煙道部から焚口部まで0.92m、最大幅0.47m、壁外への掘り込みは0.74mである。火床面は確認されなかった。

覆土 9層となる。第5・6層はP5の覆土である。第1層はほぼ水平に堆積する。第2～4層は南側へ重なるように堆積し、北側から埋土が入れられたと考えられる。第6・7層は掘り方の埋土である。堆積状況から人為堆積と考えられる。

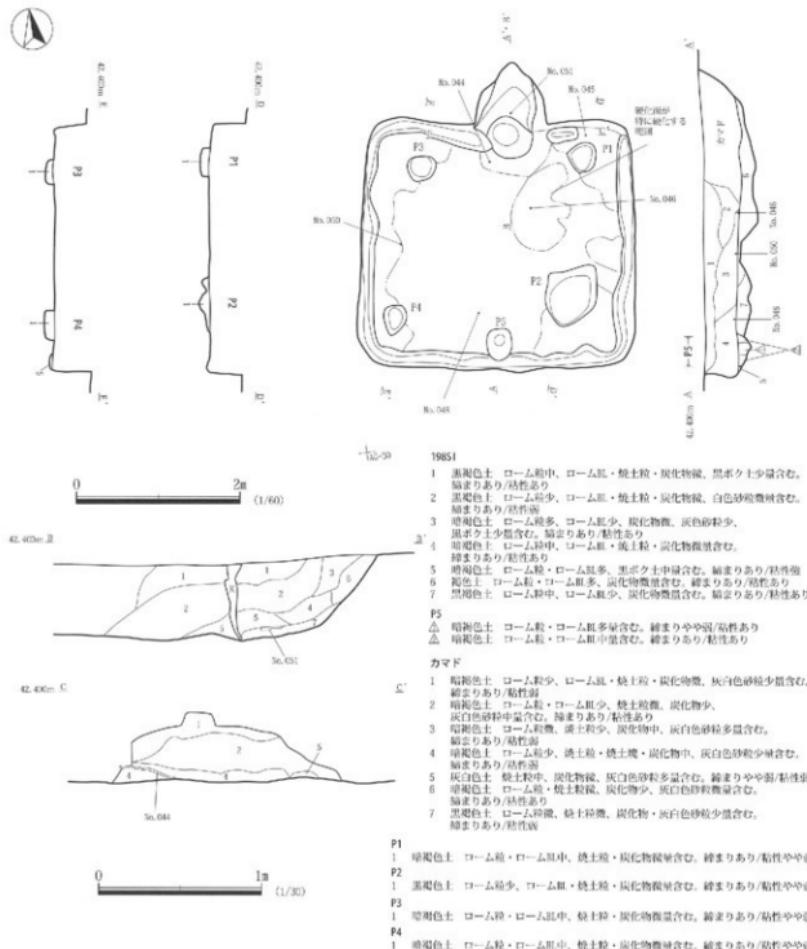
遺物 実測遺物は7点である。

1は、カマド西の床面から出土した、十師器表である。口縁部分は壁面に張り付くようにして出土した。外面調整は、胴部下部は縱方向にヘラミガキを行っている。外面にはススが付着している。内面は横方向にヘラナデを行っており、薄手である。形状は胴部の張りがやや弱く、頸部のくびれも緩やかである。また口唇部の摘み出し部分は大を向き、立ち上がっている。胎土に白雲母を含んでいる。8世紀後半に比定できる。

2は、カマド西の床面から出土した、土師器表である。口縁部分は壁面に張り付くようにして出土した。外面調整は、胴部下部に縱方向にヘラミガキを行なっている。内面はナデが行なわれる。器厚は薄手である。外面、内面ともにススが付着している。口唇部の摘み出しがある。胴部の張りは弱いが、一番張っている箇所から下にススが付着していることから、カマドに設置し使用されていた可能性がある。頸部のくびれはやや弱い。8世紀後半に比定できる。なお、1と2は重なり合って出土している。

3は、住居中央部付近の床面から出土した、土師器表である。外面調整は、胴部下端は手持ちで縱方向にヘラケズリを行っている。被熱している。内面は横方向にヘラナデで調整している。底部は手持ちヘラナデ調整である。胎土に白雲母を含んでいる。

4は、住居北東壁面近くから逆位で出土した、須恵器の壺で、先形に近い。体部下端に回転ヘラケズリを行っている。内面全面にスヌが付着していることから、黒色処理が剥落した可能性がある。底部は回転ヘラナデで調整している。断面は箱型を呈し、体部が直線的に立ち上がって、器高が高い。形状から8世紀後半から9世紀初頭のものと思われる。

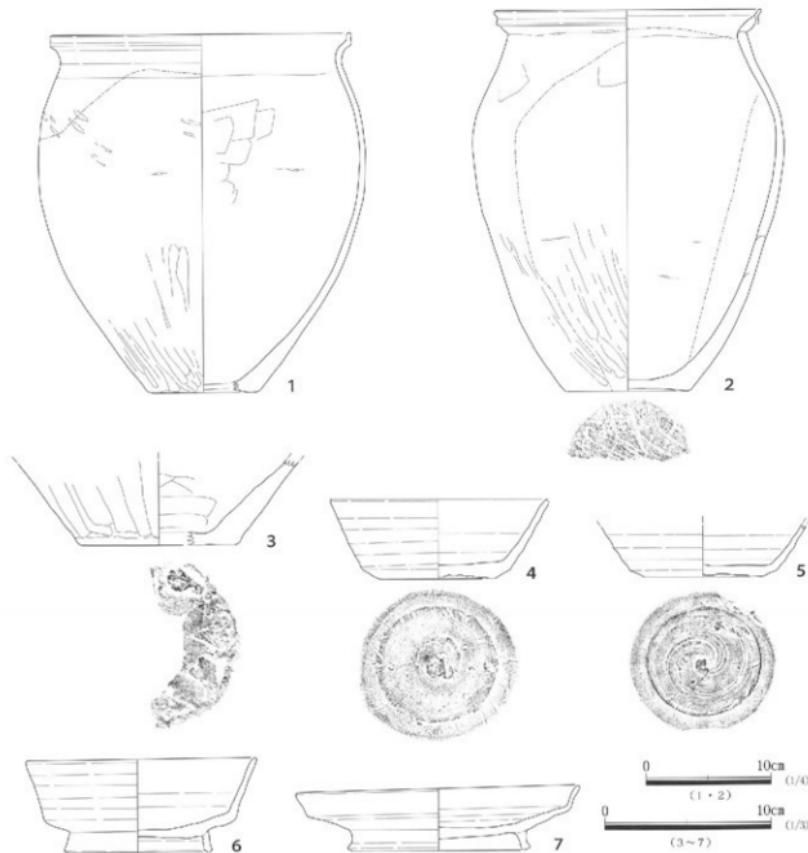


第147図 1985I平面図・断面図

5は、カマド内から出土した、須恵器の环である。外面体部下端はヘラケズリを行っている。底部の調整は回転ヘラケズリである。器壁は外反し、器厚は薄い。8世紀中葉と比定できる。

6は、住居南側の床面直上より出土した、須恵器の高台付环である。完形に近い。外面上位の調整はなく、外面体部下端をヘラケズリで調整を行っている。内面の調整はなく、底部は回転ヘラケズリで調整し、平坦気味である。高台はやや「ハ」の字状に開き、体部立ち上がりよりも内側に高台が付く。8世紀中葉から後葉と判断した。

7は、住居西側の床面から正位で出土した、須恵器の高台付盤である。完形に近い。底部は回転ヘラナデで調整している。口縁部に自然釉がかかっている。高台は「ハ」の字状についている。形状から8世紀第3四半期以



第148図 1985I出土遺物

表 79 1985I 出土 土器観察表

番号	遺物 No.	層位	指標	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考	
1	1985I 10.044	床	土師器	216	300	(90) - (27)	-	-	口縁部	6%	内面下部へラミギザ(縦)、内面側面へナナ子(縦)、内面スリット状。	白磁母	赤褐色	普通	WRC後半	カマド西の床面直上から出土。カマドの手前から貼るようにはめ出された。	
2	1985I 10.044	床	土師器	216	318	(100) - (25)	-	-	口縁部	50%	内面下部へラミギザ(縦)、内面側面へナナ子(縦)、内面スリット状。	白色粘	赤褐色	普通	WRC後半	カマド西の床面直上から出土。カマドの手前から貼るようにはめ出された。	
3	1985I 10.046	床	土師器	-	56	95	-	-	側面下部 ～ 高部	10%	内山腹部へラケグリ(手持ち・縦)、内面へラミギザ(縦)、底部へラッパ(手持ち)、造詣木彫り。	白磁母	小石	赤褐色	普通	WRC中期	住居中央部付近の床面直上より出土。
4	1985I 10.045	床	須恵器	173	51	70	-	-	口縁部	95%	内面側面へラケグリ(手持ち)、内面側面へナナ子(縦)、内面土面上にスリット状。	小石	赤褐色	普通	WRC後半	カマドに向かい東側の壁面近くより追加で出土。	
5	1985I 10.051	床	須恵器	133	70	-	-	-	側面	30%	内面側面下部へラケグリ、底部へラッパ。	小石	赤褐色	普通	WRC中期		
6	1985I 10.048	高台 付帯	須恵器	141	58	85	-	-	口縁部	90%	内面側面下部へラケグリ、底部へラッパ。	小石	赤褐色	普通	WRC中期	貼り付け高台。	
7	1985I 10.050	高台 付帯	須恵器	171	41	103	-	-	口縁部	90%	内面側面へラナナ子、二重輪形(想定)。	小石	赤褐色	普通	WRC後半	貼り付け高台。 住居西側の床面直上から正位で出土。	

降と比定できる。

1・2・5はカマド付近から出土している。

時期 出土遺物から8世紀中葉から8世紀後葉と考えられる。

284SI (第149・150図、表80)

位置 A2区中央部、北側調査区壁面近くにある。AB-26、AB-27グリッドに位置する。

重複関係 290SK 南壁を切る。

規模と平面形 確認された規模は、長軸3.68m、短軸3.59mを測り、平面形は倒丸方形である。

主軸方向 N-3° -Eである。

壁 残存する壁高は0.30mで、壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床 硬化面はほぼ床面全体に確認された。周溝は東壁から南壁にかけて確認され、西壁にも確認できたが途切れがちである。

ピット 2基検出した。P1は径0.28m、平面形は円形を呈し、深さは0.09mである。P2は掘り方から検出したピットで、径0.22m、平面形は円形を呈し、深さは0.20mである。

カマド 北壁や東寄りに付設されている。規模は煙道部から焚口部まで0.55m、最大幅0.34m、壁外への掘り込みは0.38mである。火床面は確認されなかった。

覆土 9層からなり、第1層がレンズ状に堆積し、第4層に初期流入土が認められることから自然堆積と考えられる。第5・6層がカマドの廃棄に伴う堆積で、第7～9層が(カマド部分の)掘り方の埋土である。

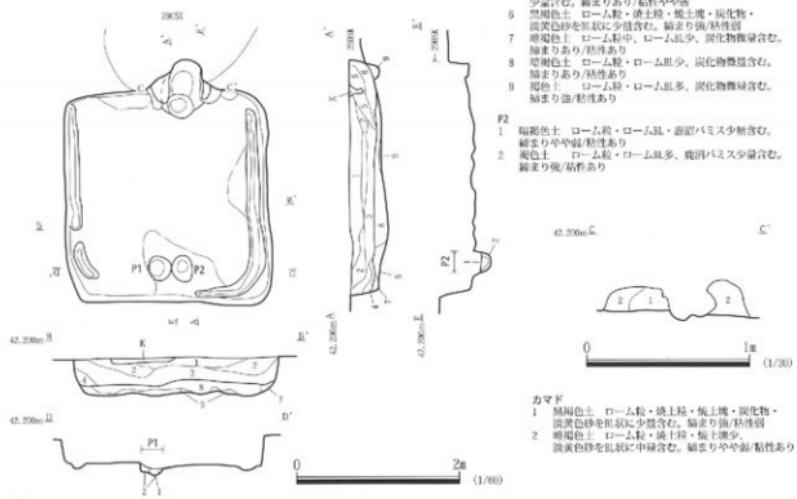
遺物 実測遺物は1点である。

1は、カマドから出土した、須恵器の环である。底部を手持ちのヘラケグリで調整していく、中火がやや窪んでおり、ケグリの残滓があるため、粗雑な印象を与える。底部と体部の境がはっきりせずに緩やかに立ち上がる。器壁はやや外反気味で、器厚は薄めである。9世紀前葉と思われる。

時期 出土遺物から9世紀前葉と考えられる。

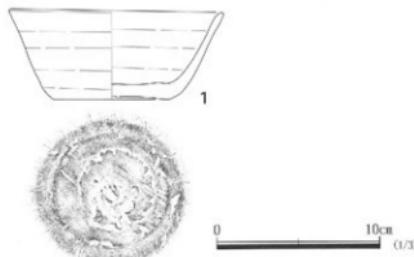


+M-27



- P1**
- 1 墓園色土 ローム粒少、炭化物微量含む。輪まりあり/粘性あり
 - 2 墓園色土 ローム粒少、ローム粘中、炭化物微量含む。輪まりあり/粘性あり

第149図 284SI 平面図・断面図



第150図 284SI 出土遺物

表80 284SI出土 土器観察表

番号	遺期 30.	層位	器種	種別	口径 (cm)	深さ (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	堆 分 率	手法・文様の特徴	胎土	色調	質感	時期	備考
1	284SI カマド	环	陶器	132	56	70			口縁部 ～ 底部	80%	底部ハシケズリ(手持ち)。	小石	赤灰	滑透	世紀前半	底部の調整剤跡。底部と体部の堆がはっきりせず腰や中に立ち上がる。

第3節 D区

042SI (第151・152図、表81)

位置 D区南部、J-6 グリッドに位置する。遺構南半部は試掘坑により失われている。

規模と平面形 規模は残存部で長軸 2.72m、短軸 2.18m を測り、平面形は正方形を呈すると推定される。

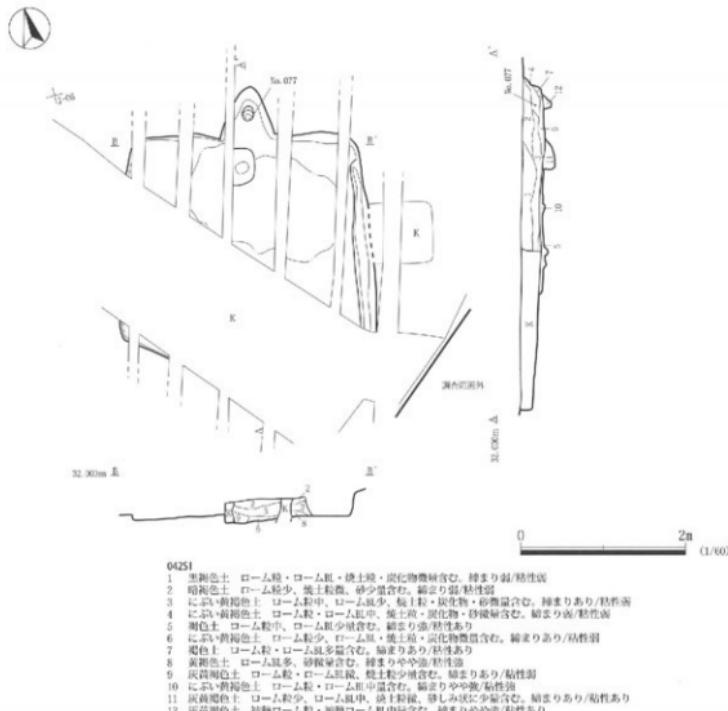
主軸方向 N-10° -E である。

壁 残存する壁高は 0.08 ~ 0.28m で、壁はほぼ直立する。

床 床面は平坦で、カマド南側を中心に硬化が認められる。周溝は住居東壁に沿って、0.09 ~ 0.03m の深さを測る。

ピット 検出しなかった。

カマド 北壁中央部に付設されており、袖部と火床は検出しなかった。煙道部の壁外への掘り込みは 0.61 m である。

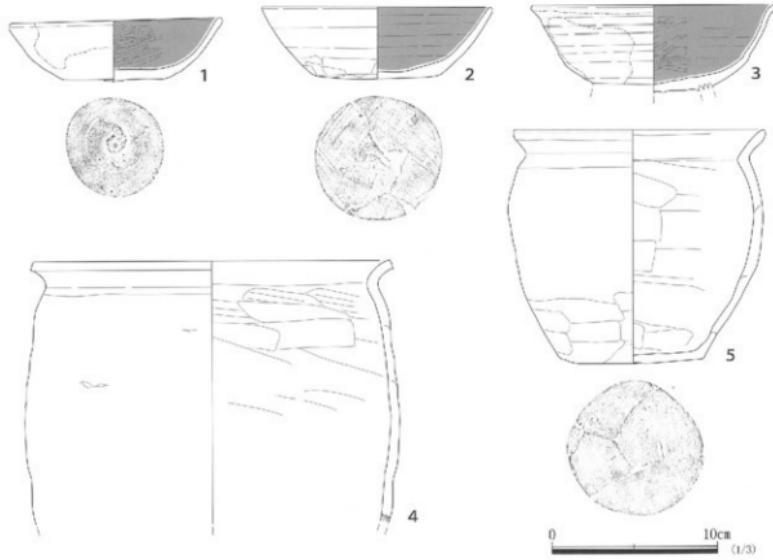


第151図 042SI 平面図・断面図

覆土 12層からなり、ローム土が混入する黒・暗褐色土が主体である。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第10・11・12層は掘り方の埋土である。

遺物 実測遺物は5点である。

1は、カマドから出土した、土師器の壺である。スグが付着している。また、被熱しており、断面も炭化している。器壁はやや薄手で、内面はヘラミガキがなされ、黒色処理されている。底部は回転ヘラケズリで調整されている。胎土に黒雲母を含んでいる。形状から10世紀前半と考えられる。



第152図 0425I 出土遺物

表81 0425I出土 土器観察表

番号	遺構 ID.	層位	器種	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	蓋大径 (cm)	部位	遺 存 率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	0425I	カマド	壺	土師壺	135	30	60		口縁部 ～ 底部	70%	内面ヘラミガキ、被熱斑駆除。 スグアタマゲ付着。外側丸刃削ぎ、内面削れ跡。 底部ヘラケズリ。	黒雲母	褐色	普通	9世紀末	被熱部分は断面まで炭化する。
2	0425I	カマド	壺	土師壺	140	45	77		口縁部 ～ 底部	95%	内面丸刃削ぎ、ヘラタゲ(横)。 内面ヘラミガキ。 底部ヘラケズリ(手挽き)、内面削れ跡。	黒雲母	褐色	普通	9世紀末	逆位で出土。
3	0425I	カマド	高台 付耳	土師壺	155	≤50			口縁部 ～ 底部	70%	内面ヘラミガキ。 スグアタマゲ付着。外側丸刃削ぎ～ 丸刃削り付着。内面削れ跡。	黒雲母	褐色	普通	9世紀後半 ～10世紀	須恵器構造か。壺部は大型。 高台は人為的に欠く。定位で出土。
4	0425I	カマド	甕	土師甕	220(162)			(228)	口縁部 ～ 底部	20%	丸刃削ぎ跡。 内面ヘラタゲ(横)。 内面スグ付着。内面削れ跡。	白雲母	褐色	不良	9世紀代	
5	0425I.00.077	小型壺	土師壺	(152)	144	(80)	(155)		口縁部 ～ 底部	80%	底部、外壁削下(一部ヘラケズリ (手挽き・鉋)。 内面ヘラタゲ(横)。 底部ヘラケズリ(手挽き)。 内面スグ付着。	白雲母	褐色	普通	9世紀代	壺部は丁ぎ方にいくらいナメている。 カマドから出土汎上。

2は、カマドから逆位で出土した、土師器の坏である。ほぼ完形に近い。外面体部下端を横方向にヘラナデで調整している。内面はヘラミガキがなされ、器厚は薄手で、黒色処理されている。また、見込みがへこんでいる。底部は手持ちでヘラナデを行っている。器高は高めで、器壁は内湾している。胎土に黒雲母を含んでいる。形状から10世紀前半と見られる。

3は、カマドから逆位で出土した、土師器の高台付坏である。器厚は薄い。外面胴部には調整が無く、口唇部から胴部にかけてススが付着している。内面はヘラミガキがなされ、黒色処理されている。また内面見込みはへこんでいる。底部は回転ヘラケズリで調整されて、扁平である。坏部は大型で、器壁は内湾気味である。人為了に高台部を欠損している。形状から9世紀後半から末期のものである。

4は、カマドから出土した、土師器の底である。外面の調整は粗雑である。口唇部は刷毛目で調整されて、口唇の摘み出しじゃなく、また外面にススが付着している。内面は横方向にヘラナデ調整されている。胴部の張りは無く、寸胴型をしている。頭部のくびれはやや弱い。胎土に白雲母を含んでいる。形状から9世紀代と判断した。

5は、カマドから出土した、土師器の小型蓋である。外面には、吹き寄せの痕跡がある。全体的に被熟しており、破損している頭部の断面内部まで被熟して黒く変色している。口縁部の摘み出しそうく、胴部の張りも弱い。内面は横方向にヘラナデを行っており、内部の口縁にススが付着している。底面は手持ちでヘラケズリがなされており、ミガキに近いほどナデている。9世紀代と判断した。

1・2・3・5はカマド祭祀に使用されたものであり、すべて逆位で出土した。1は3の上から正位で出土したが、破片が狭い範囲で散在しており原位置は保っていない。2は3の下から逆位で出土しており、原位置を保っている。3は1の下から逆位で出土しており、原位置を保っている。5は一番下から逆位で出土しており、原位置を保っている。以上をまとめると、5を伏せた上に3、2があり、1がその上から出土したということになる。

時期 出土遺物から、9世紀後葉から10世紀前葉と考えられる。

043SI (第153～155図、表82)

位置 D区南東部、G-7、G-8、H-7、H-8グリッドに位置する。

規模と平面形 長軸4.80m、短軸4.42mを測り、平面形は正方形を呈する。

主軸方向 N-24°-Eである。

壁 残存する壁高は0.28～0.36mで、壁はほぼ直立する。

床 平坦で、住居中央部とカマドの南側を中心に硬化が認められる。周溝は住居南半部壁際に沿って、0.07～0.03mの深さを測る。

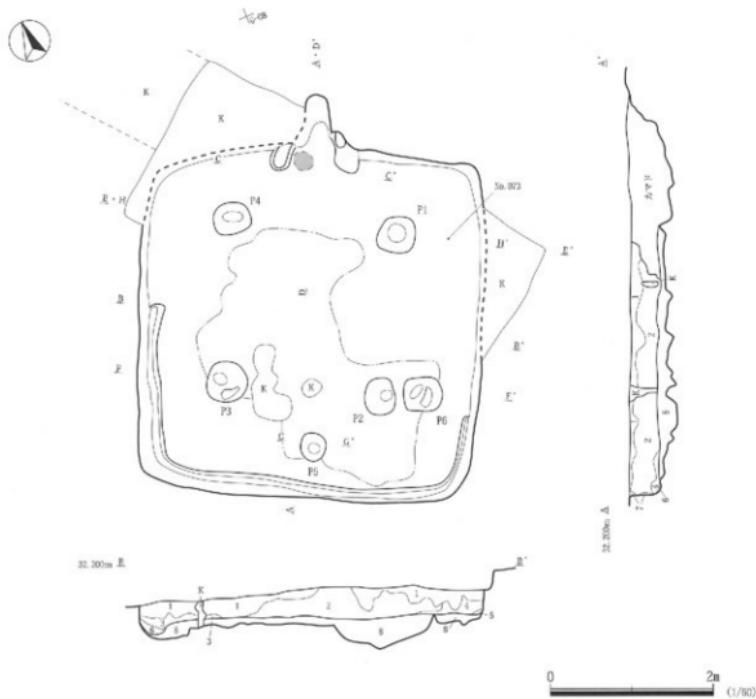
ピット 6基検出した。P1～P4、P6は、径0.50～0.40mの円形を呈し、深さは0.38～0.58mである。P1～P4はその位置から主柱穴と考えられ、P6はP2に付随する副柱穴の可能性がある。P5は径0.34mの円形を呈し、深さは0.14mである。P5は、カマドと南壁との位置関係から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

カマド 北壁中央部に付設されており、東側袖部は遺存しているが、住居北西部の搅乱によって西側袖部の大部は失われている。袖部は砂混じりの粘土で構築されている。規模は煙道部から焚口部まで0.94m、最大幅0.64m、壁外への掘り込みは0.60mである。火床面は北壁ラインよりもやや南に位置し、床面とほぼ同じ高さで、皿状である。袖部の内壁及び火床面は被熱による硬化が認められる。

覆土 8層からなり、第2層がレンズ状に堆積し、第3～5層に初期流入上が認められることから自然堆積と考えられる。6層は周溝の覆土である。カマド付近の覆土には散漫に砂や粘土が含まれることから、住居廃棄後から埋没の過程において、カマドの一部が崩壊したと推察される。第8層が掘り方の埋土である。

遺物 実測遺物は3点ある。

1は住居北東部の床面から正位で出土した土師器甕で、ほぼ完形に近い。外面の調整は、口縁部から上半部にかけて縦方向にヘラナデをし、胴部下位を横方向にヘラケズリをした後、中火部から下位にかけてヘラミガキを縦方向に行っている。表面には付着物がある。内面は横方向にヘラナデを行っている。底部は木葉痕があるが、



- 0435I
- 1 周囲地土 ローム粘少、ローム灰・粘土質・透水性微弱含む。縮まり灰/粘性弱
 - 2 黄褐色土 ローム粘少、ローム灰・透水性微弱含む。縮まり灰/粘性弱
 - 3 黄褐色土 ローム粘少、ローム灰少、透水性微弱含む。縮まり灰/粘性弱
 - 4 黄褐色土 ローム粘少、ローム灰中量含む。縮まり弱/粘性弱
 - 5 灰色土 ローム粘少、ローム灰中量含む。縮まりやや強/粘性弱
 - 6 褐褐色土 ローム粘少、ローム灰中量含む。縮まりやや強/粘性弱
 - 7 灰褐色土 ローム粘少、ローム灰多量含む。縮まり強/粘性弱
 - 8 灰褐色土 ローム粘少、ローム灰多量含む。縮まりやや強/粘性強

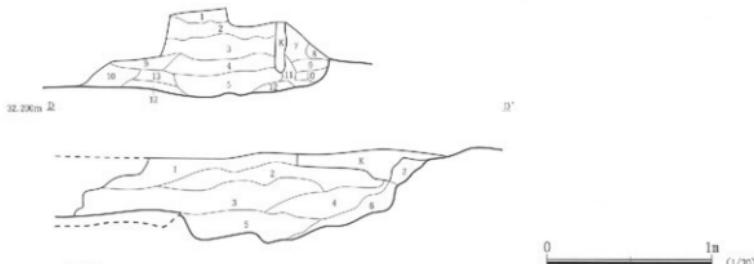
第 153 図 0435I 平面図・断面図

底部外縁部で回転ヘラナデを行っているため、中央部にのみ木葉痕が確認できる。頸部から口縁部までが強く外反し、胴部の張りは強い。口縁部の摘み出しがある。外面のススは、胴部の一番張った部分の下のみで、上半部から口縁部にはススは付着していない。このことからカマドに設置して使用されていた可能性がある。胎土に白雲母を含んでいる。8世紀代と比定される。

2は、住居覆土から出土した、土師器壺である。外面調整は、胴部上半部は横方向にヘラナデ、胴部中央部は

32,200m 未

E'



カマド

- 1 黒褐色土 ローム質、粘土粒、炭化物微、砂少少量含む。締まり固/粘性弱
- 2 深褐色土 ローム質、粘土粒、粘土塊少、炭化物・粘土粒、砂少少量含む。締まり固/粘性弱
- 3 深褐色土 ローム質、粘土粒、炭化物微、砂少少量含む。締まり固/粘性弱
- 4 赤褐色土 ローム粒少、粘土粒、炭土塊中、炭化物・砂微量含む。締まり固/粘性弱
- 5 に赤褐色土 ローム砂少、粘土粒、砂微量含む。締まりやや強/粘性強
- 6 黄褐色土 ローム砂少、粘土粒、砂微量含む。締まり強/粘性強
- 7 黄褐色土 ローム粒少、粘土砂含む。締まり強/粘性強
- 8 黄褐色土 ローム砂少、粘土砂含む。締まり強/粘性強
- 9 灰褐色土 ローム粒少、炭化物・砂微量含む。締まり強/粘性弱
- 10 灰褐色土 ローム質、ローム質、粘土粒、砂微量含む。締まりあり/粘性弱
- 11 に灰褐色土 ローム粒少、ローム砂中、粘土砂混含む。締まりあり/粘性強
- 12 に灰褐色土 ローム粒少、ローム砂多、粘土砂・砂微量含む。締まり強/粘性強
- 13 に灰褐色土 ローム質、ローム砂中、粘土粒、砂塊・炭化物微量含む。締まりあり/粘性強

32,400m 上

P1

K

E'

32,400m 上

G'

P5

P3

P2-4 → P6 →

P4

H'

0

2m (1/60)

32,100m H

P2-4 → P1 →

H'

P1

- 1 黒褐色土 ローム粒少、粘土粒、砂微量含む。締まり固/粘性弱
- 2 深褐色土 ローム絆強、ローム質、粘土粒、粘土塊少、粘土・炭化物微、砂微量含む。締まりあり/粘性弱
- 3 黑褐色土 ローム粒少、ローム粒・ローム粒微量含む。締まりやや強/粘性弱

P2

- 1 黑褐色土 ローム粒・ローム粒微量含む。締まり固/粘性弱
- 2 深褐色土 ローム粒多、ローム粒・ローム粒微量含む。締まりやや強/粘性弱

P3

- 1 黑褐色土 ローム粒・ローム粒、粘土粒、砂微量含む。締まり固/粘性弱
- 2 深褐色土 ローム粒少、ローム粒微量含む。締まり固/粘性弱
- 3 黑褐色土 ローム粒少、ローム粒・ローム粒中量含む。締まり固/粘性弱

P4

- 1 黑褐色土 ローム質、粘土粒、砂微量含む。締まり固/粘性弱
- 2 深褐色土 ローム粒少、ローム粒微量含む。締まり固/粘性弱
- 3 黑褐色土 ローム粒・ローム粒、砂微量含む。締まり固/粘性弱

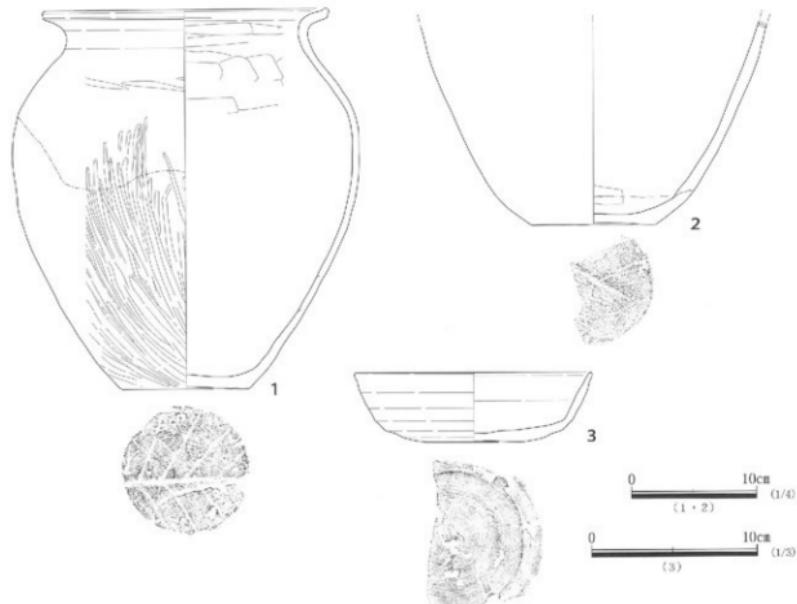
- 1 黑褐色土 ローム粒少、ローム粒微量含む。締まり固/粘性弱
- 2 深褐色土 ローム粒強、ローム粒少微量含む。締まりやや強/粘性強

P5

- 1 黑褐色土 ローム粒・ローム粒、粘土粒、砂微量含む。締まり固/粘性弱
- 2 深褐色土 ローム粒少、ローム粒SL微量含む。締まりあり/粘性弱
- 3 黑褐色土 ローム粒中・ローム粒少微量含む。締まりやや強/粘性強

- 4 に赤褐色土 ローム粒少、ローム粒多微量含む。締まりやや強/粘性強

第154図 043SI 平面図・断面図



第 155 図 0435I 出土遺物

表 82 0435I 出土 土器観察表

番号	遺構 30	層位	形態	種別	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	部位	調 査 率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	0435I-30.073	表	土加藤	233	277	103	312	口縁部 ～ 底部	95%	内面輪郭(内側～上半部ヘラナデ)、外 面輪郭(内側～下半部ヘラナデ)、外 面下部(内側～下半部ヘラナデ)、外 面(内側～下半部ヘラナデ)、内面裏面(内側 ～ヘラナデ)、底面木葉痕、底面不規則 ヘラナデ、背面頭部粘土付着、外面 スカリ。	白雲母 (複数)、 赤褐色 (複数)	白色 (複数)	普通	8世紀台	住居内北東床面上から正位で出土。	
2	0435I	覆土	表	土加藤	(164)300				剥離部 ～ 底部	5%	内面(内側～ヘラナデ)、外面(内 側～ヘラナデ)、外表面(内側～半部 ヘラナデ)リ手付ち、外、内面剥離(内側 ～ヘラナデ)、内面裏面(内側 ～ヘラナデ)、底面木葉痕、底面不規則 (手付ち)、外側剥離あり(自然)、 底部スカリ。	白雲母 小石	赤褐色	普通	8世紀台	
3	0435I	覆土	表	直壺形	144	43	60		口縁部 ～ 底部	30%	直面斜板ヘラケズリ。	小石	青灰色	普通	8世紀 第1四半期	

ヘラミガキ、胴部下部は手持ちで横方向にヘラケズリがなされている。外面は付着物があり被熱している。内面調整は、胴部から底部まで横方向にヘラナデされている。内面は、ススが付着している。底部は木葉痕があり、外縁部を手持ちヘラナデで行っているため、中央部にのみ木葉痕が確認できる。胎土に白雲母を含んでいる。

3 は、住居覆土から出土した、須恵器の壺である。底部は回転ヘラケズリを行っているが、やや丸底気味である。8世紀第1四半期に比定できる。

時期 出土遺物から、8世紀前葉と考えられる。

045SI (第 156 ~ 159 図、表 83・84)

位置 D 区南部、H-5、I-5 グリッドに位置する。

規模と平面形 規模は長軸 4.10 m、短軸 3.19 m、平面形は正方形を呈する。

主軸方向 N-24°-E である。

壁 残存する壁高は 0.34 ~ 0.08 m で、壁はほぼ直立している。

床 平坦で住居中央部に硬化が認められる。周溝は住居南半部壁際に沿って、0.10 ~ 0.04m の深さを測る。

ピット 3 基検出した。P1 は径 0.57 m の円形を呈し、深さは 0.10 m である。P2 は長径 0.96 m、短軸 0.67 m の橢円形を呈し、深さは 0.44 m である。他のピットに比べ大形で住居南西隅に位置し、性格は不明である。P3 は径 0.45 m の円形を呈し、深さは 0.3 m である。

カマド 北壁中央部のやや東よりに付設されており、両袖部が遺存する。袖部は砂を含む粘土で構築されている。規模は煙道部から焚口部まで 0.70 m、最大幅 0.68 m、壁外への掘り込みは 0.72 m である。火床面は北壁ラインよりやや北に位置し、床面とはほぼ同じ高さで、平坦である。袖部の内壁及び火床面は被熱による硬化が認められる。支脚（第 159 図 7）はカマド中央よりもや西側で、両側袖部内壁に近接して出土した。中央部から出土していないことから、東側袖部にも支脚があった可能性がある。

覆土 17 層からなり、ローム土が混入する黒褐色土を主体とする。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。カマド付近の土層堆積は住居中央方向に傾斜しており、散漫に砂や粘土が含まれることから、住居廃棄後から埋没の過程において、カマドの一部が崩壊したと推察される。

遺物 実測遺物は 8 点である。

1 は、住居覆土から出土した、土師器環である。外面口縁部に若干ススが付着する。胸部下位に墨書きがあるが、一部だけで判別は不能である。内面は、丁寧にヘラミガキがなされ、黒色処理されている。底部は手持ちでヘラケズリ調整されていて、扁平である。器壁はやや内清氣味である。胎上に黒雲母を含む。形状から 9 世紀後半から 10 世紀前半に比定できる。

2 は、カマドから出土した、土師器環である。口縁部にススが付着している。また胸部に墨書きがあり、「口井」と読める。内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。底部は手持ちでヘラケズリ調整されていて、やや扁平気味である。器壁はやや外反している。形状から 9 世紀後半から 10 世紀前半に比定できる。

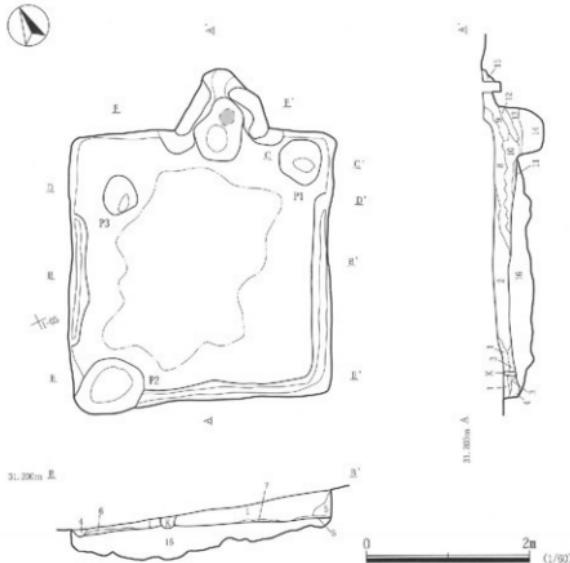
3 は、住居南東部壁付近の床面上から出土した、土師器の环である。体部下端にヘラケズリ調整されている。また外面はススが付着している。内面はヘラミガキがなされ、黒色処理されている。底部は回転ヘラケズリで調整され、扁平である。器壁は、体部は内済し、口縁部は外反している。胎土は白雲母を含む。形状から 9 世紀後半から 10 世紀前半に比定できる。

4 は、カマドから出土した、須恵器環である。内外面に調整は無い。内外面の上位は白色、内外面の下位は青灰色を呈す。底部の調整はヘラケズリである。また金雲母が多く含まれている。新治窯産の様相に近く、県南の窯と予想され、9 世紀後半に比定できる。

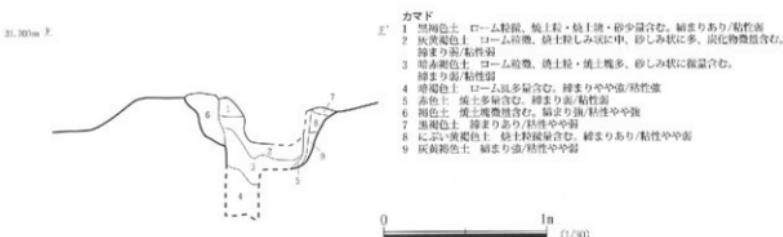
5 は、カマドのソデの補強材として使用されていた、土師器の裏の破片である。口縁部から胸部までが残存しており、保護するようにソデに密着した状態で、正位で出土した。外面の調整は、上半部はナデを行っている。外面にはススが付着しており、被熱している。内面は横方向にヘラナデがなされており、薄手である。常盤型裏だが、胸部の張りは弱く、口唇部の摘み出しは犬をむいている。胎上に黒雲母を含んでいる。8 世紀代に比定できる。

6 は、住居覆土から逆位で出土した、須恵器の大型環である。頭部から胸部までののみで遺存率は不明である。頸部の径が 0.46 m であることからかなり大形であったと推測される。外面の頸部には波状文があり、棒状工具で 2 本 1 組で引かれたものと思われる。外面には自然釉がかかっている。木葉下窯産と推測される。9 世紀第 2 四半期から 9 世紀後葉と判断した。

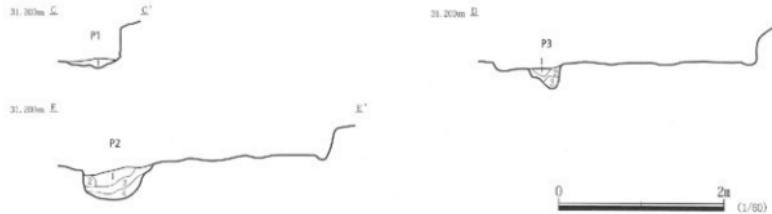
7 は、カマド内部、北西側のソデ付近から出土した支脚で、原位置を保っている。中心部に方形の孔が穿たれ



- 0455I**
- 暗褐色土 ローム量少、ローム粗粒、燒土粒、燒土塊、燒灰狀に少部分含む。綈まり弱/粘性あり
 - 黒褐色土 ローム量少、ローム粗粒混含む。綈まり弱/粘性弱
 - 深褐色土 ローム量少、燒土粒混含む。綈まり弱/粘性あり
 - 褐色土 ローム量少、燒土粒多量含む。綈まり強/粘性弱
 - 暗褐色土 ローム量少、ローム粗粒含む。綈まり弱/粘性あり
 - 褐色土 ローム粒、ローム粗粒混含む。綈まりやや強/粘性強
 - 黒褐色土 ローム粒、ローム粗粒混含む。綈まりやや強/粘性強
 - 灰褐色褐色土 ローム量少、ローム粗、燒土粒、燒土塊、燒土巨粒に。炭化物線、砂しみ状に多部分含む。綈まりやや強/粘性あり
 - 黑褐色土 ローム粗粒、燒土塊、砂少量含む。綈まり弱/粘性弱
 - 深褐色土 ローム量少、ローム粗粒、綈しみ状に少部分含む。綈まり弱/粘性弱
 - 灰褐色土 ローム粗粒、燒土粒、綈しみ状に少部分含む。綈まり弱/粘性弱
 - 褐色土 ローム粗粒、燒土粒、綈しみ状に少部分含む。綈まり弱/粘性弱
 - 暗褐色土 ローム粗粒含む。綈まり弱/粘性弱
 - 褐色土 ローム粒微細含む。綈まり弱/粘性弱
 - 黑褐色土 ローム粗粒多量含む。綈まり強/粘性強



第 156 図 0455I 平面図・断面図



P1

1 黒褐色土 ローム粒少、ローム混・泥土粒・炭化物微量含む。縮まりあり/粘性あり

P2

1 黒褐色土 ローム粒・ローム混・粘土質少量含む。縮まりあり/粘性あり

2 順褐色土 ローム粒多、ローム混少含む。縮まりあり/粘性あり

3 黒褐色土 ローム粒、ローム混豊、粘土少。砂礫粒含む。縮まり弱/粘性あり

4 黒褐色土 ローム粒、ローム混少含むG。縮まりやや強/粘性あり

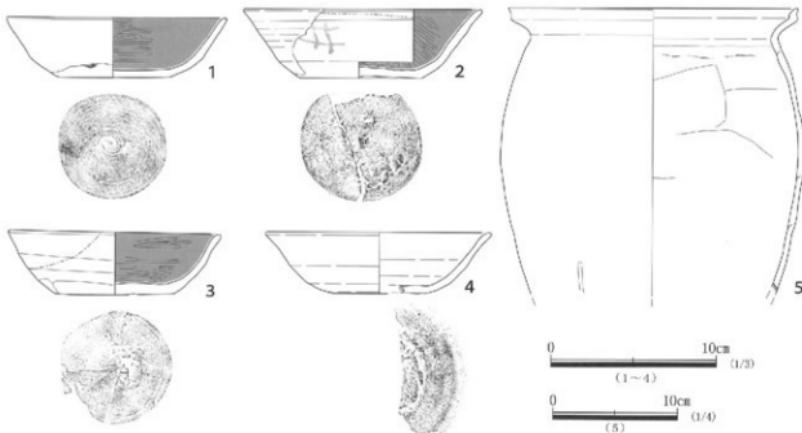
P3

1 黒褐色土 ローム粒中、段少含む。縮まりやや強/粘性あり

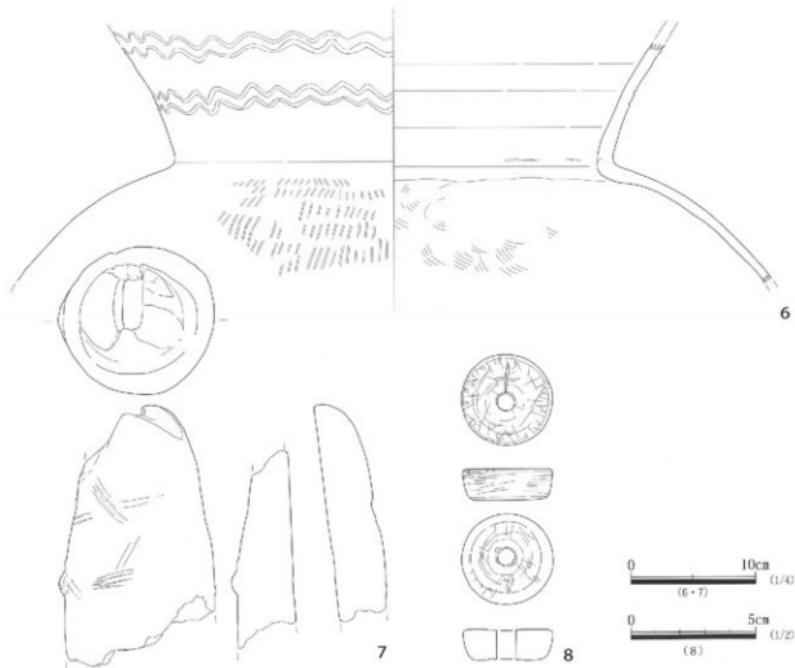
2 黒褐色土 ローム粒、ローム混中含む。縮まりあり/粘性あり

3 喀褐色土 ローム粒多含む。縮まりやや強/粘性あり

第157図 045SI 平面図・断面図



第158図 045SI 出土遺物



第159図 045SI出土遺物

表83 045SI出土 土器観察表

番号	器種 記號	層位	遺物	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	遺存状 況	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1 045SI	壺土	环	土師器	134	37	66			口縁部 ～ 底部	20%	外面側面に施設有り。内面側面に縦溝、外底に横溝？ スカリ跡、施釉無し。	黒褐色 小石	黄褐色	鉢済	9世紀後半 10世紀 前期	
2 045SI	カマド	环	土師器	145	43	74			口縁部 ～ 底部		外表面施青磁「川井」。 内面に「タミガキ」、底面に「ケズリ」。 内底に施釉無し。	小石	褐色	鉢済	9世紀後半 10世紀 中期	
3 045SI	床面	环	土師器	130	40	72			口縁部 ～ 底部	60%	外表面側面へラクゼリ。 内面へ「タミガキ」、底面側面へラクゼリ。 内底に施釉無し、外底にスカリ跡。	白褐色 小石	黄褐色	鉢済	9世紀後半 10世紀 中期	住居南東部壁付近の床面から延びて出土。
4 045SI	カマド	环	瓦窯器	130	38	(60)			口縁部 ～ 底部	30%	外表面に豊多し、底面へケズリ。 内面側面に縦溝、内外底に横溝。	黒褐色 小石	褐色	や少 不良	9世紀後半 10世紀	屋内窓の空。新窯空の想目に近い。 調査多い。
5 045SI	カマド	壺	土師器	236	235	(247)			口縁部 ～ 底部	40%	外表面に横溝、内面へタナギ(櫛)。 内底に施釉無し。	黒褐色 小石	黄褐色	鉢済	8世紀代か 9世紀	カマドソダを保護するようにして出土。
6 045SI	壺土	大型壺	瓦窯器	<192	(610)				腹部 ～ 底部	不明	外表面施陶文(2本)、外側側面 横溝。	白色粘 小石	褐色	鉢済	9世紀 中期	頭形の波文次は棒状工具で別々に ひいた。木葉下窓底。進位で出土。
7 045SI	支脚	支撑	土製品	高さ (214)	(127)			60%	中心部に方眼の孔が穿たれる。	黒褐色					カマド内部北西側のソゾ付近から出土。 原位置を保っている。	

表 84 045SI 出土 石製品観察表

登録 号	遺物 名	層位	器種	規則	上部 径 (mm)	厚さ (mm)	下部 径 (mm)	孔径 (mm)	部位	遺存 状	寸法・文様の特徴	船上	色調	焼成	時期	備考
8 045SI	覆土 防護用 石製品	38	8	13				10mm	上面に「マ」の刻み、上面に使用感 あり。上面の中央の穴を中心にして、調 りはついている。	滑石					形状は厚台形。	

る。表面に工具痕がある。全体的に砂質であり、素地に黒雲母を含んでいる。

8は、精査時に出土した、紡錘車である。石材は滑石で、形状は厚台形である。上面に「+」の刻みがある。上面および下面の中央の穴を中心にして磨り減った使用痕が確認できる。

時期 出土遺物から、9世紀中葉以降と考えられる。

048SI (第 160 ~ 162 図、表 85)

位置 D 区北西部、G-3、G-4、H-3、H-4 グリッドに位置する。

規模と平面形 住居跡の西半分が破壊されており、正確な規模は不明であるが、長軸 5.96 m、短軸 5.48 m ほどの方形と推定される。

主軸方向 N - 67° - E である。

壁 残存する壁高は 0.07 ~ 0.40 m で、壁は床面からほぼ直角に立ち上がる。

床 東壁から約 2.6 m、南壁から約 5.4 m まで確認できた。北側に壁周溝を検出した。

ピット 6 基検出した。P1 は径 0.42 m、深さは 0.75 m である。P2 は床面が攪乱によって存在しないため確認面からの計測に留めた、径 0.25 m、深さは 0.59 m である。P3 についても床面が存在しないため確認面からの計測に留めた、径 0.25 m、深さは 0.24 m である。P4 は径 0.40 m、深さ 0.52 m である。P1 ~ P4 はその位置やほぼ等間隔に配置されていることから柱穴と考えられる。

P5 は一般的に貯蔵穴とされているもので、長軸 1.14 m、短軸 0.84 m で長方形を呈し、深さは 0.57 m である。P6 は床面が存在しないため確認面からの計測で、径 0.24 m の円形を呈し、深さは 0.30 m で、住居出入り施設痕と考えられる。

カマド 東壁に付設されており、上部が耕作の影響を受けて切られる。焚口部についても明確ではないが、焚口と判断した所より支脚が検出された。床が熱を受けて赤化し、硬化が認められた。

覆土 6 層からなり、上部はほとんど存在していない。第 5・6 層は掘り方の埋土である。

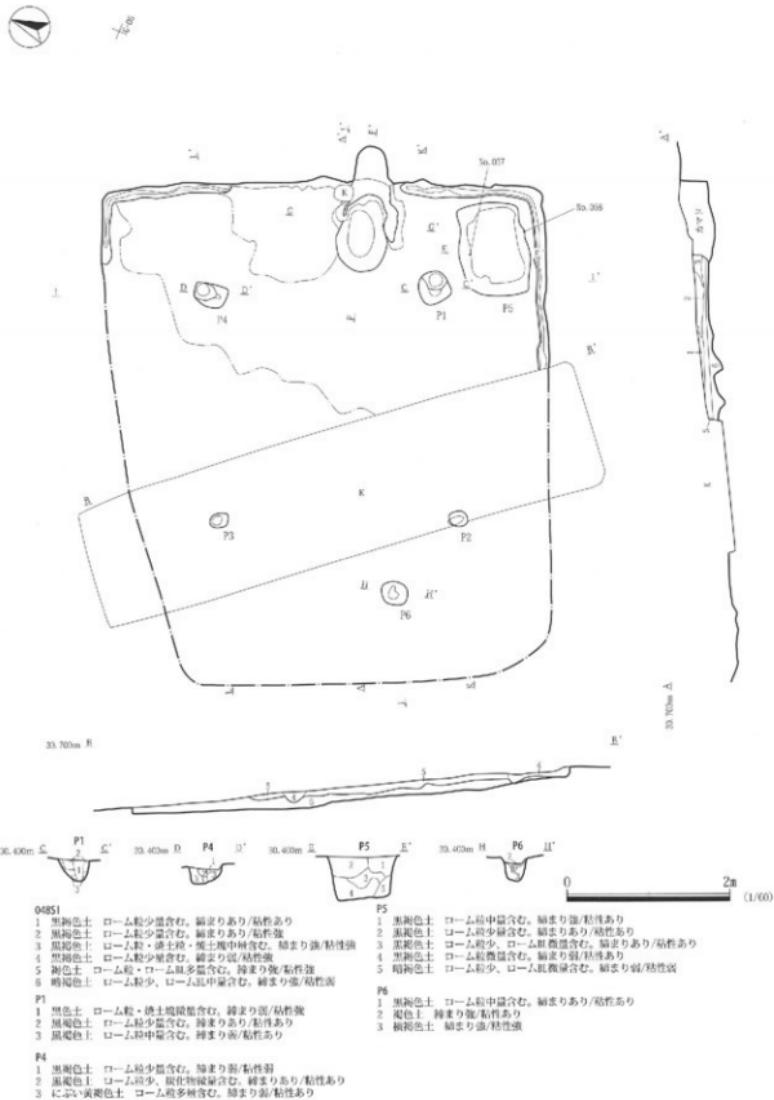
遺物 実測遺物は 5 点である。

1 (No. 57) は P5 (貯蔵穴) から出土した、土師器環である。底部及び底辺部を欠く。口縁部は外反し、体部との境には稜がある。整形は外面口縁部がヘラ磨きで、光沢がある。外面体部はヘラ横なでによる。器面には内外ともベンガラの塗彩が施されて赤褐色を呈している。土器の断面は暗褐色であり、焼成はよい。内部はヘラ磨き。口縁部ではヘラ横なで、体部はタテにヘラ磨き痕が見られる。胎土は精緻であり、ほとんど異物の混入はない。

2 はカマドの西側から出土した、土師器の壺形土器である。胴下部を欠く。口縁部は外反し、くびれ部付近まで布による整形痕が残る。胴部の整形は指なでによる。色調は褐色を呈し、焼成はよい。胎土は精緻であるが砂粒子を含む。

3 (No. 58) は P5 と南壁の間から出土した、土師器の壺形土器である。口縁部を欠く。胴部の整形は指なでによる。底辺部の整形はケズリおよび指頭による。内部は整形痕が確認できないほど火熱により溶融が剥落している。底部は磨耗し、赤褐色を呈している。胎土は砂粒子を含む。

4 はカマドの北側から出土した、土師器の壺形土器である。口縁部を欠く。底辺部は指圧による整形の痕跡が見られる。外側は火熱によって所々剥落している。底部の整形はヘラが用いられヘラ・カットの跡がある。胎土は細かい石片が混入している。



第 160 図 048SI 平面図・断面図

30.60m E

L'



30.60m E

L'



0 10 (1/30)

カマド

- 1 黒褐色土、ローム粒・透土粒・粘土少量含む。練まり弱/粘性弱
- 2 にごい褐色色土、透土粒中量含む。練まり弱/粘性弱
- 3 黒褐色土、透土粒・粘土少量含む。練まり弱/粘性弱
- 4 黄褐色色土、練まり強/粘性弱
- 5 黑褐色土、ローム粒・透土粒・粘土少量含む。練まり弱/粘性強
- 6 黑褐色土、ローム粒少、ローム粒中量含む。練まり弱/粘性弱
- 7 にごい褐色色土、ローム粒・透土粒・粘土少量含む。練まり弱/粘性弱

30.60m L

P4

P1

P5

L'



30.60m L

P6

K

L'



30.60m K

P2

K

P1

K'



30.60m L

K

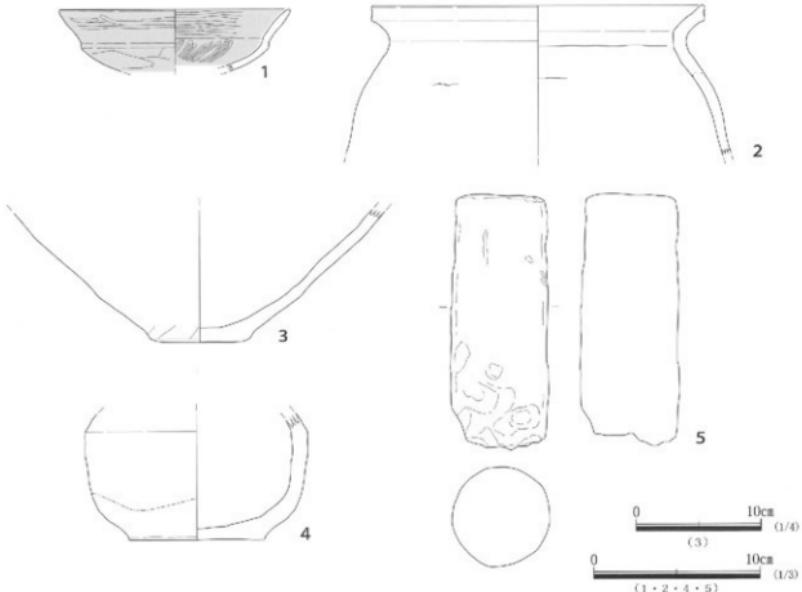
P3

P4

L'

0 20 (1/60)

第161図 04851平面図・断面図



第162図 048SI出土遺物

表85 048SI出土 土器観察表

番号	遺構 No.	層位	断面	種別	口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	部位	直 曲 半	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	048SI-00.57	坪	上斜面	C140	0.80				口縁部 ～ 底部	30%	内面赤茶、外側口縁部ヘタリ(柱なし)、 外茎体側ヘタリ(底)、外沿口縁部 と底部の辺に残、内面口縁部ヘタリ、 内底ヘタリ(柱なし)、底部ヘタリ(柱なし)。	白質褐	赤褐色	良		
2	048SI-カマド	焼	上斜面	G20	0.00				口縁部 ～ 底部	20%	内面上半部ヘタリ(柱なし)、口縁部踏み出し、 内底ナメ(柱なし)、 脚部脚引跡なし。	黒質褐	赤褐色	普通		
3	048SI-00.58	焼	上斜面	(100)	80				外底 中央部 ～ 底部	20%	外底中央部ヘタリ(柱なし)、外茎体側 下端ヘタリケシリ(柱なし)。	白質褐	赤褐色	普通		内面付着物あり。 住居圧延斑床面。
4	048SI-カマド小型甕	土鍋類		G10	0.00	136			外部 ～ 底部	20%	外底上部ヘタリ(柱なし)、内底ナメ(柱なし)、 外底下部人字形。	白質褐 小石	同褐色	普通		小石(白色)多量に混入。
5	048SI-カマド支脚	支脚	土製品	60	高2 157					100%	脚頭江痕あり、 上端部平坦。	白質褐 小石	同褐色	普通		謎脚丁卯。

5はカマド支脚である。形状は円柱状を呈する。整形は全体指を押し付けるようにして整えている。上端はきちんと整形され平である。全体的に熱を受けており、レンガ状に赤化している。

時期 出土遺物から、8世紀代と考えられる。

第4節 奈良・平安時代まとめ

奈良・平安時代の竪穴式住居跡および、土坑を検出した。掘立柱建物跡、溝跡は検出されなかった。

■遺構について

奈良・平安時代 17 基、時期不明 7 基の、あわせて 24 基の遺構が検出された。大半が住居跡である（表 86）。台地上部の A1、A2 区、下部の D 区において竪穴式住居 17 軒を検出した。住居主軸は多少東西に傾いているが、おおむね北東中央部にカマドを持つ住居を中心としている。以下、住居跡を 3 期に分けた。

(1) I 期（8世紀前葉～8世紀中葉）

調査地点において竪穴式住居が建て始められる時期である。D 区の 043SI、A2 区の 035SI の 2 軒が相当し、主軸は北東になる。どちらもカマド部分に擾乱を受け、遺存状態は良くない。035SI から火床面を検出している。

(2) II 期（8世紀中葉～9世紀前葉）

台地上である A1 区・A2 区に集中して 12 軒検出されている。住居跡数、遺物出土量の増加から、何らかの漸期がこの時期にあったことがわかった。住居の規模に時期差は無いようである。主軸は 8 軒が東に傾いている。

(3) III 期（9世紀前葉～10世紀前葉）

住居が少なくなる。D 区で 2 軒、A2 区で 1 軒検出した。主軸は D 区の住居は北東に傾いており、A2 区の 034SI は東壁にカマドをもつ。10 世紀前葉以降と考えられる（註 1）。これ以降の住居は検出していない。

表 86 奈良・平安時代遺構一覧表

時代区分	時期	件名	地区	長軸方位	時代区分	時期	件名	地区	長軸方位
8世紀前葉	I 期	043SI	D	N-10° ~ E	9世紀前葉以降	II 期	032SI	A 2	N-30° ~ E
8世紀中葉		035SI	A 2	N-20° ~ E	9世紀前葉以降		281SI	A 2	N 3° ~ E
8世紀後葉～後葉		037SI	A 2	N-1° ~ W	9世紀中葉以降		045SI	D	N-24° ~ E
8世紀中葉～後葉		186SI	A 2	N-10° ~ E	9世紀後葉以降		046SI	D	N-10° ~ E
8世紀前葉～後葉		031SI	A 2	N-20° ~ E	10世紀前葉以降		034SI	A 2	N-95° ~ E
8世紀中葉～後葉		036SI	A 2	N-35° ~ F	時刻不明		040SI	A 2	不明
8世紀中葉～後葉		114SI	A 2	N-7° ~ E	時刻不明		044SI	D	不明
8世紀中葉～9世紀前葉		038SI	A 1	N-14° ~ W	時刻不明		046SI	D	北西
8世紀後葉以降		038SI	A 2	N-21° ~ W	時刻不明		047SI	D	不明
8世紀代		048SI	D	N-66° ~ E	時刻不明		112SI	D	不明
8世紀後葉～9世紀前葉		037SI	A 2	N-0° ~ F	時刻不明		113SI	D	不明
8世紀後葉～9世紀前葉		036SI	A 2	N-20° ~ E	時刻不明		030SI	A 2	不明

■出土遺物について

1. 時期ごとの遺物について

上記の 3 期について記述する。

I 期の遺物では、043SI の覆土から須恵器環が出土している。底部が丸底気味であり、木炭下窯産の初期と考えられる。また 035SI の覆土から内面に薄く漆を喰っている須恵器环が出土している。

II 期の遺物では、198SI の床面から多数の遺物が出土している。カマド西側から常陸型甕が 2 点出土した。033SI からは、カマドから支脚が、住居覆土から側面をヘラミガキのように細かく磨いた泥岩製の紡錘車が出土した。036SI から焼きムラのため色調が淡黄色の須恵器环が、また、用途不明の金属製品が出土した。038SI から底部に「一」のヘラ記号をもつ須恵器高台付环が出土した。114SI から墨書き器表破片が出土し「那賀井口」と読める。

本調査区では、8 世紀中葉から後葉までは須恵器が主体となっている。一方、8 世紀後葉から 9 世紀前葉にかけ

けては土師器が主体となり、常陸型甕も多数出土しており、小型甕・高台付盤も存在する。

Ⅲ期の遺物では、003SI から墨書き土師器高台付甕が出土し「神刀自」と読める。045SI からは、「井口」と墨書きされた土師器甕と、墨書きの一部が残存している土師器甕、上面に「+」の線刻がある滑石製紡錘車が出土した。甕・高台付甕は土師器のみとなり、内面を黒色処理している。

2. 出土遺物の产地について

須恵器の产地は「胎土の分類」(註 2) から推測して、新治窯の特徴である白雲母が混入していないこと、木葉下窯の特徴である白色粒を胎土に含んでいること、また地理的にも木葉下窯のほうが近い(調査地点から約 10km) ことなどから、新治窯産よりも木葉下窯産の製品が占める可能性が高い(註 3)。ただし、045SI から新治窯産とみられる須恵器甕が出土しており、新治窯からの供給もあったとみられる。土師器甕、高台付甕は胎土から判別できず、产地は不明である。

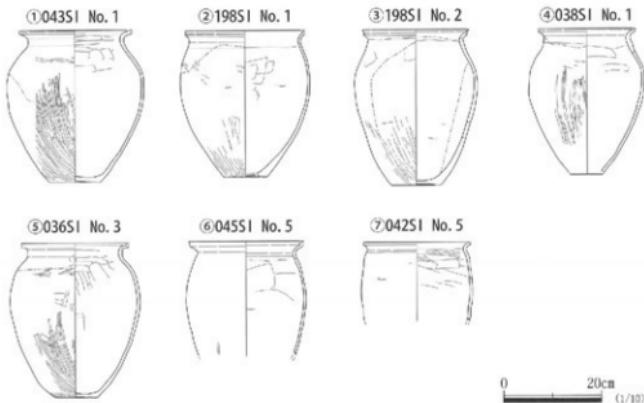
045SI 須恵器の大型甕は頸部沈線波状文から、木葉下窯産の特徴(註 4)を持つ。

(1) 常陸型甕の傾向

本調査地点から土師器甕が 18 点出土している。この中から常陸型甕で、口縁部から胴部または底部まで残存している 7 点を、時期ごとに観察した。観察方法は、「常陸型甕の形態変化の傾向」(註 5) を参考にし、胴部の張りを強いものから弱いものへと順番に並べた(図 163)。

胴部の張りについて、①～⑤の最大幅は胴部にある。⑥は口縁部と胴部はほぼ同じ幅で、⑦は完全に寸胴形であり、形の崩れが目立つ。口縁部の作り方は、摘み出しが弱いものから、丁寧に作り上げているものへ、さらに口縁部を丸く仕上げるものへ、という変化がみられた。頸部のクビレは、時期および雲母からみた产地には差異はない。口縁部の作成の精密さと頸部のクビレは、関係が薄いようである。

常陸型甕は胎土に白雲母が混入しているものが多数あり、新治窯付近で作成されたと考えられる。若干数は胎



第 163 図 橋爪遺跡出土 常陸型甕

土に黒雲母を含んでいるので、新治窯以外の在地窯産の土師器甕も供給されていたと見られる。

(2) 小型甕の傾向

いわゆる常陸型甕よりも法量が小さいもの、口径 100 ~ 150 mm、器高 100 ~ 200 mm、底径 50 ~ 86 mm を測る甕を小型甕とした。住居の時期区分に基づいて配列した(図 164)。

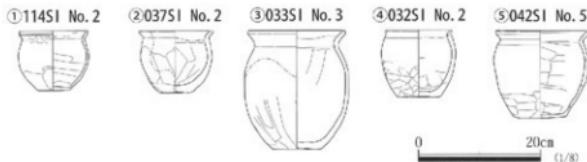
①が最小で、②からやや大きくなり、③と⑤は他の小型甕と比べても大きい。口縁部の作りは、①は丁寧に仕上げ、②と④は少し摘み上げた後に丸く仕上げ、③と⑤は頸部から直線的に伸びる。①は口縁部の作り方から常陸型甕を模倣している。②以降は作り方を省略されたのか口縁部が簡素になっている。全時期を通して口縁部の幅と頸部の張りの幅は、ほぼ同じである。頸部のクビレはいずれも緩やかである。器厚は①、③、⑤は薄く、②、④はやや厚めである。外面胴部はいずれもヘラナデ・ヘラケズリで調整されている。

すべて白雲母が混入していることから、新治窯付近で作成され、本調査地点に供給されたと考えられる。

3. 遺物のまとめ

土師器甕と須恵器甕が大半を占め、土師器甕がこれに続く。土師器または須恵器の坏蓋は出土していない。

8世紀中葉～後葉までは須恵器甕が主流で、8世紀後葉から9世紀前葉は土師器甕が大部分を占め、9世紀中葉以降は土師器甕しか出土しないことを確認できた。これは木葉下窯、新治窯の操業が終了した為であろう。また、内面が黒色処理された土師器の坏・高台付坏が9世紀前葉から増える。墨書き器は4点あり、そのうち内面黒色処理されている土師器の坏・高台付坏は3点ある。



第 164 図 橋爪遺跡出土 小型甕

■小結

住居は8世紀前葉から増え始め、8世紀中葉から9世紀前葉にかけて最盛期を向かえ、その後減少し、10世紀中葉以後の遺構は確認できない(清水)。

註 1: 10世紀前葉と思われる 0348 だけ東カマドであるが、「研究ノート「創刊号」」(茨城県内における奈良・平安時代の土器①)〔財團法人茨城県教育振興会 1991〕によると、「住居跡の内面焼窓における、窓の設置する位置が北側から東壁へと移動する時期が VII 期(10世紀前葉)に集中し、VII 期以降はほとんどが東窓になっていく(西井 信吾 1991)。」とある。のことから 0348 は 10世紀の平均的な住居であることが住居形態からも分かった。

註 2: 「鏡良被考古 31」「武田遺跡群における平安時代土須恵甕・小皿編年」(小林義則 2000)による

註 3: 本調査地点の付近では、須恵器生産を行っていた老闆窯と大窯(調査地点から 5km)がある。今回観察した結果では判別できなかったが、出土遺物の中には、岩間窯または大窯窯の遺物も含んでいる可能性がある。

註 4: 「(中略) 水戸市立博物館所蔵の木葉下窯跡削面流上 2 号窯跡出土資料に、鍋頭吹抜状文甕を 2 件検出するものと 3 件旗す甕が存在していることを確認していることと、旗す甕吹抜状文の出土遺跡の多くが古代式窯跡の中に所在していることを考え合わせると、鍋頭吹抜次文の多くは木葉下窯跡前章であると思われる。」(佐々木義則 2001)

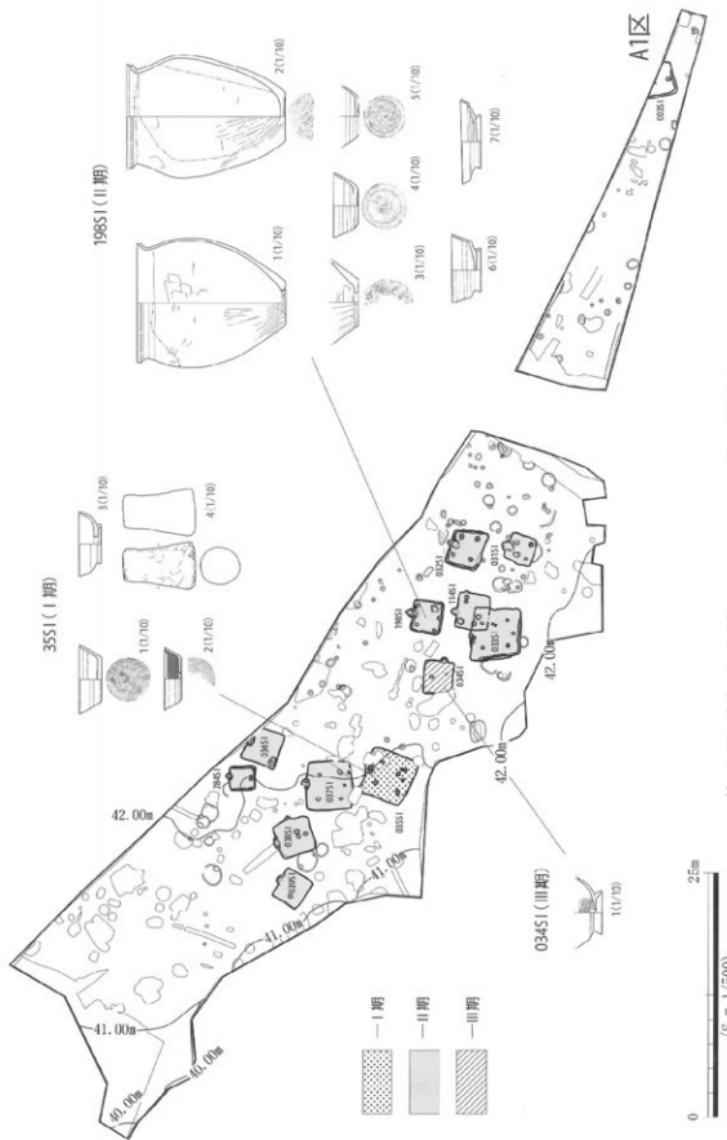
註 5: 「淡路考古 No.29」「常陸型甕の生産と流通 -奈良時代以前の堆積-」(佐々木義則 2007) = 「ここでは大きな形態変化の傾向のみを述べてみたい。常陸型甕

が定型化される 6 世紀後半ごろには、扉部が軒型を有する形態の窓（小窓）が主体となるが、7 世紀前半には扉が張る形態の窓（中窓）の出現を見る。ただし廻廊部他の窓も 7 世紀後半までは存続する。形態が大きく変化するのは 8 世紀第 4 四半期ごろであり、なで肩形態の窓（小窓）も増えてくる。なお、窓枠構成のところで述べたように 8 世紀前半には寸胴型を有する窓が一定頻度められることが注目されよう。

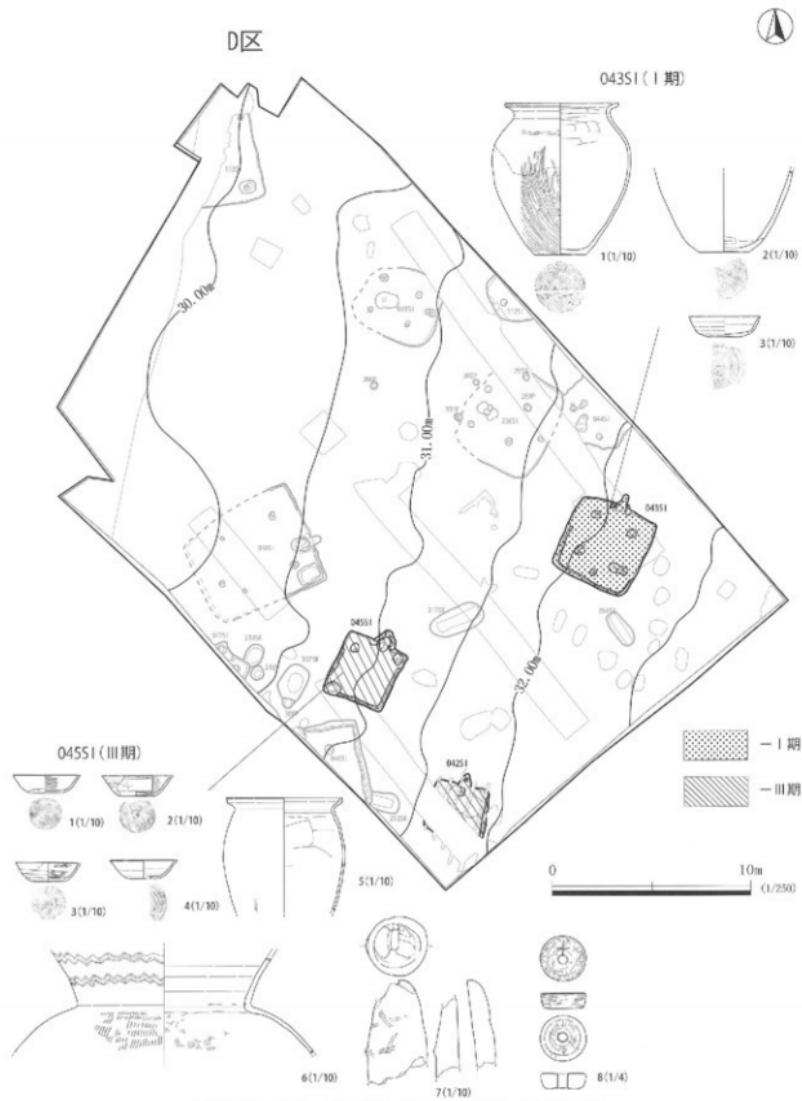
引用・参考文献

- 赤井博之・佐々木義則 2006 「茨城県における須弥器の流れ 一供養具を中心とした須弥器の内面装飾による地域分布と今後の課題」『要旨』第 28 号 1 著者考古同人会
- 赤井博之・佐々木義則 2006 「茨城県における須弥器の流れ 供養具を中心に」『古代式庭園の復元技術と地域社会』埼玉考古学会
- 渡辺何也 1991 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（1）『研究ノート』創刊号』財団法人茨城県教育財團
- 渡辺何也 1992 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（1）『研究ノート』創刊号』財団法人茨城県教育財團
- 吉木仁昌 2007 「道に伏せさせられた土器」『筑波』川井正一・高橋弘道・佐藤正好先生還暦記念事業実行委員会川井正一 1983 「筑波県における八、九世紀の須弥器について」木暮下立跡・鹿の C 地層で』シンポジウム資料 房總における奈良・平安時代の土器・史跡個人・市立市川考古博物館
- 黒澤利俊 1983 「墓園における奈良・平安時代の土器について」『シンポジウム資料 墓園における奈良・平安時代の土器』史跡個人・市立市川考古博物館
- 佐々木義則 1992 「筑波北部における伽藍土器の胎様構成」『要旨』第 14 号 著者考古同人会
- 佐々木義則 1995 「木葉下墓跡新杯 AI の変化について—棺蓋地における形態と調査技術の様相—」『要旨』第 17 号 著者考古同人会
- 佐々木義則 1996 「前田麻糸新杯 AII の変化について—棺蓋地の様相—」『要旨』第 18 号 著者考古同人会
- 佐々木義則 1997 「木葉下墓跡内の須弥千牛座 奈良時代前半を中心に」『要旨』第 19 号 著者考古同人会
- 佐々木義則 1999 「筑波山北下部における上部器物の型式変遷」『要旨』第 21 号 著者考古同人会
- 佐々木義則 2000 「歴史的環境 一奈良・平安時代一』『武田山清掃隊・奈良・平安時代親 ひたちなか市教育委員会・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 佐々木義則 2001 「茨城県における 8・9 世紀の須弥器概観」『要旨』第 23 号
- 佐々木義則 2002 「茨城県の須弥器遺跡」第 6 回須弥器研究懇親会資料
- 佐々木義則 2007 「茨城県における奈良・平安時代研究の現状、『考古学の深層 一筑波聖天先生還暦記念論文集』」瓦次聖天先生還暦記念論文集開会
- 佐々木義則 2007 「宮殿生活の生と死道 一奈良時代以前の構造」『要旨』第 29 号 著者考古同人会
- 佐々木義則 2009 「近世酒器における平安時代土器容器・小皿編」『要旨』第 31 号 著者考古同人会
- 中村哲也 2003 「常陸型窓 以前一柳川流域における古石器時代地形学的窓型的検討」『筑波の研究』阿久津久先生還暦記念論集 阿久津久先生還暦記念論文委員会
- 渡辺・1997 「第 4 回関東地方の土器生産 一上野生産における二つの施設構造—」『古代の十箇所千座と焼成遺跡』実験研究会 真陽社
- 渡邊大・2010 「古代の附着土器上部に関する見え書き 一前田馬場中の集落の事例を中心に」『奈和』第 47 号 著者考古同人会
- 『土器・須弥器の知識』玉川信雄・小寺井信著 考古学シリーズ 17 東京大学 1991
- 財団法人茨城県教育財團 奈良・平安時代研究会 1991 「8 世紀～9 世紀前半の施設構成について」『研究ノート』創刊号 財団法人茨城県教育財團
- 財団法人茨城県教育財團 奈良・平安時代研究会 1992 「9 世紀後半の施設構成とその割合について」『研究ノート』2 号 財団法人茨城県教育財團 1992
- 財団法人茨城県教育財團 奈良・平安時代研究会 1993 「10 世紀の施設構成とその割合について」『研究ノート』3 号 財団法人茨城県教育財團
- 茨城県教育財團文化財調査報告第 150 集『北茨城自動車道（反原～水原）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書』守山透玲・東平路・坂ノ上原町 日本道路公团東京第一建設局 財団法人茨城県教育財團 1990
- 茨城県教育財團文化財調査報告第 241 集『七宮後遺跡 3 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』下巻 茨城県 財団法人茨城県教育財團 2005

A2区



第165図 奈良・平安時代 A1・A2区 I~III期 遺構分布図



第166図 奈良・平安時代 D区 I~III期 造構分布図

表 87 検出構造一覧表 1

構造番号	調査区	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	川土属性	時期	切り合い	備考	
001SK	A1	AB-42	円形	U字形	0.70	0.67	0.54		縄文中期	旧:005SK		
005SK	A1	AB-42	不定形	U字形	0.80	0.70	0.45		縄文中期	新:005SK		
005J	A1	AB-31	圓柱形	輪形	1.98	0.61	0.32		古墳	古墳		
004J												
007SK	A1	AB-42	円形	U字形	0.40	0.24	0.47		縄文時代	新:007SK		
006SK	A1	AB-40	圓柱形	輪形	3.17	2.18	0.20		縄文中期	旧:007SK		
007SK	A1	AB-39	円形	輪形	2.68	1.86	0.30		加賀利直上	縄文V期		
008												
009SK	A1	AB-38	圓柱形	輪形	2.28	2.00	0.38		加賀利直上	縄文V期	010SKとの切り合いは不明	
010SK	A1	AB-38	円形	輪形	2.48	2.48	0.62		加賀利直上	縄文V期	009SKとの切り合いは不明	
011SK	A1	AB-38	円形	U字形	1.81	1.48	0.32		加賀利直上	縄文V期	新:14SK	
012SK	A1	AB-38	圓柱形	袋底状	1.96	1.65	0.84		加賀利直上	縄文V期	新:015SK+14SK	
013SK	A1	AB-37	円形	輪形	1.36	1.27	0.39		加賀利直上	縄文V期	縄文中期	
014SK	A1	AB-36	円形	輪形	1.46	0.54	0.52		加賀利直上	縄文V期		
015SK	A1	AB-37	圓柱形	輪形	3.41	3.33	0.11		古墳時代初期	旧:012SK+016SK+13SK		
016SK	A1	AB-38	圓柱形	輪形	1.09	0.95	0.44		加賀利直上	縄文V期	新:015SK+13SK	
017SK	A1	AB-38	圓柱形	輪形	3.89	0.62	0.72		加賀利直上	縄文V期	新:015SK+13SK	
018SK	A1	AB-38	圓柱形	輪形	0.47	0.43	0.31		加賀利直上	縄文V期	新:17SK	
019SK	A1	AB-38	圓柱形	輪形	1.77	0.36	0.53		加賀利直上	縄文V期	新:13SK	
020SK	A1	AB-36	圓形	U字形	1.38	1.22	0.79		加賀利直上	縄文V期	旧:16SK	
021												
022SK	A1	AB-36	端円形	輪形	1.59	1.80	0.56		加賀利直上	縄文V期		
023SK	A1	AB-33	円形	U字形	1.29	1.24	0.28		加賀利直上	縄文V期		
024SK	A1	AB-33	円形	U字形	0.19	0.51	0.50		縄文時代			
025												
026SK	A1	AB-35	圓柱形	輪形	1.71	1.23	0.46		加賀利直上	縄文V期		
027SK	A1	AB-39	圓形	輪形	1.26	1.15	0.60		縄文時代	新:006SK		
028SK	A1	AB-40	圓形	輪形	0.73	0.44	0.10		阿瓦台	006SKと同一遺構		
029												
030SK	A2	AB-31	圓柱形	輪形	2.12	1.66	0.23		古墳時代後半			
031SK	A2	AB-31	圓柱形	輪形	2.31	1.69	0.25		古代日朝	旧:182SK+217SK+201SK+202SK		
032SK	A2	AB-31	圓柱形	輪形	3.92	3.61	0.38		古代日朝	旧:190SK		
033SK	A2	AB-30	圓柱形	輪形	2.10	1.15	0.20		古代日朝	旧:009SK+114SK+329SK+331SK		
034SK	A2	AB-29	圓柱形	輪形	3.94	3.06	0.24		古代日朝			
035SK	A2	AB-27	圓柱形	輪形	6.42	6.35	0.28		古代日朝	旧:201SK		
036SK	A2	AB-27	圓柱形	輪形	3.58	3.54	0.22		古代日朝	旧:326SK+327SK		
037SK	A2	AB-25	圓柱形	輪形	6.97	6.47	0.48		古代日朝	旧:376SK+333SK		
038SK	A2	AB-25	圓柱形	輪形	5.46	4.70	0.40		古代日朝	旧:085SK		
039SK	A2	AC-24	圓柱形	輪形	4.28	3.85	0.30		古代日朝	旧:095SK		
040SK	A2	AB-24	圓柱形	輪形	5.70	5.00	0.20		古墳時代後期			
041												
041SK	D	AB-31	正方形	輪形	2.72	2.18	0.28		古代中期			
042SK	D	AB-31	正方形	輪形	4.69	4.42	0.36		古代中期			
043SK	D	AB-31	正方形	輪形	3.59	(2.00)	0.40		古代中期			
044SK	D	AB-31	正方形	輪形	4.10	3.19	0.34		古代中期			
045SK	D	AB-31	正方形	輪形	(4.39)	(2.00)	0.54		古代中期			
047SK	B	AB-4	不規	不規	(2.32)	(0.41)	0.59		古代中期			
048SK	D	AB-4	不規	不規	5.96	5.48	0.49		古代中期			
049SK	B	B-5	圓柱形	輪形	3.70	3.29	0.19		子王台	発生地代終末期		
050												
051SK	A2	AB-31	円形	輪形	1.48	0.91	0.38		縄文時代	旧:155SK+160SK+170SK		
052SK	A2	AB-32	円形	輪形	2.38	2.44	0.56		縄文V期	旧:162SK+163SK		
053SK	A2	AB-33	円形	輪形	1.77	1.64	0.42		加賀利直上	152SKとの切り合ひは不明		
054SK	A2	AB-32	円形	袋底状	3.44	3.04	1.30		加賀利直上	新:159SK 旧:248SK		
055												
056SK	A2	AB-31	円形	輪形	2.75	2.70	0.72		加賀利直上	旧:185SK	184P-187を付す	
057												
058SK	A2	AB-33	円形	袋底状	1.56	1.56	0.96		縄文時代	旧:177SK		
059SK	A2	AB-32	円形	袋底状	1.58	(1.22)	0.65		縄文時代	227SKとの切り合ひは不明		
060SK	A2	AB-32	円形	袋底状	1.14	0.96	0.31		縄文時代	旧:209SK+226SK 新:223SK		
061												
062SK	A2	AB-31	円形	袋底状	2.73	2.66	0.94		加賀利直上	旧:186SK 新:214SK 214SKを付す		
063												
064SK	A2	AB-30	円形	袋底状	2.50	2.20	0.67		加賀利直上	中輪 縄文IV期	旧:132SK	
065SK	A2	AB-29	円形	袋底状	3.21	3.06	1.52		加賀利直上	中輪 縄文IV期	新:093SK 旧:328SK+331SK	
066												
067												
068SK	A2	AB-31	円形	U字形	2.20	2.07	0.72		縄文時代	新:185SK		
069SK	A2	AB-31	円形	U字形	1.75	0.75	0.59		縄文V期			
070SK	A2	AB-21	端円形	輪形	2.06	1.96	0.22		加賀利直上	縄文V期	旧:071SK	
071SK	A2	AB-21	端円形	輪形	1.33	1.14	0.49		縄文V期	新:070SK		
072												
073SK	A2	AB-28	圓柱形	輪形	2.47	1.93	0.88		縄文時代			
074												
075SK	A2	AB-27	円形	輪形	1.97	1.51	0.46		加賀利直上	縄文V期	177P-178Pを付す	
077SK	A2	AB-27	円形	輪形	2.51	2.22	0.47		加賀利直上	縄文V期		
078SK	A2	AB-26	円形	フラスコ	2.20	2.20	0.74		加賀利直上	縄文V期	新:031SK+339P	
079												
080												
081												
082SK	A2	AB-25	端円形	輪形	1.17	1.04	0.49		加賀利直上	縄文V期		
083												

表 88 検出構造一覧表 2

遺物番号	調査区	グリッド	平面形	系面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	時期	切り合い	備考
084											欠番
085SK	A2	AB-25	円形	楕形	1.35	1.07	0.43		縄文時代		
086											欠番
087											欠番
088SK	A2	AB-25	円形	楕形	2.68	2.40	0.50		縄文時代	新:0385I	
089											欠番
090											欠番
091SK	A2	AC-26	円形	楕形	2.27	1.92	0.28	加賀利正Ⅲ	縄文時代	新:291SK	
092SK	A2	AB-26	円形	フラスコ	2.17	2.07	1.00	加賀利正Ⅰ	縄文時代	新:285SK	
093SK	A2	AB-26	円形	球状	1.76	(1.37)	0.47	加賀利正Ⅱ	縄文時代	旧:306SK	
094											欠番
095SK	A2	AC-25	円形	空軸孔	2.32	2.09	0.40	阿木利正Ⅳ~ 加賀利正Ⅰ	縄文中期	新:0395I	
096SK	A2	AC-25	円形	箱形	2.22	2.12	0.38	加賀利正Ⅰ	縄文中期	旧:1055K	
097SK	A2	AB-25	円形	扇形	2.00	2.00	0.49	加賀利正Ⅰ	縄文時代	新:1055K	
098SK	A2	AB-25	円形	扇形	(0.91)	0.92	0.52		縄文時代		
099SK	A2	AB-26	円形	不規則	(2.30)	1.75	0.45	加賀利正Ⅱ~Ⅲ	縄文中期	旧:306SK	
100											欠番
101SK	A2	Z-25	円形	扇形	2.22	(1.75)	0.23	阿木利正Ⅳ~ 加賀利正Ⅰ	縄文中期	旧:1055K 新:306SK	
102SK	A2	AA-25	円形	フラスコ	2.98	2.56	0.70	阿木利正Ⅳ~ 加賀利正Ⅰ	縄文中期	新:1055K	
103SK	A2	AA-24	円形	円形	1.97	(1.62)	0.33	加賀利正Ⅱ~Ⅲ	縄文中期	旧:1055K	
104SK	A2	AB-25	円形	円形	2.12	1.82	0.22	加賀利正Ⅱ	縄文時代	新:1055K	
105SK	A2	Z-25	不定形	フラスコ	2.77	2.61	0.77	加賀利正Ⅱ~中鉄	縄文中期	新:306SK	
106SK	A2	AA-24	円形	円形	1.51	1.22	0.61	加賀利正Ⅳ	縄文中期		
107											
108											欠番
109SK	A2	Z-24	円形	I字形	2.07	1.85	0.38	加賀利正Ⅱ~中鉄	縄文中期	旧:1055K 新:306SK	
110											欠番
111											欠番
112SI	B	E-6	不明	不明	(2.97)	(1.17)	0.45				
113SI	B	C-4	方形	扇形	(4.46)	(1.55)	0.36				
114SI	A2	AG-30	楕丸形	楕形	3.76	3.70	0.68		古代青銅	旧:2065A・2755B・3130B・3205A 新:0355I	
115											欠番
116											欠番
117P	A1	AB-41	不定形	円形	0.58	0.45	0.68	加賀利正Ⅰ	縄文中期		
118											欠番
119P	A1	AB-42	円形	円形	0.45	0.36	0.40		縄文中期	新:120P	
120P	A1	AB-42	不定形	円形	0.78	0.54	0.14		縄文時代	旧:119P	
121											
122											欠番
123											欠番
124											欠番
125											欠番
126											欠番
127											欠番
128											欠番
129											欠番
130P	A1	AI-36	楕円形	I字形	0.27	0.25	0.09		縄文時代	新:017SK	
131SK	A1	AI-36	楕円形	I字形	0.67	0.56	0.26		縄文時代	屋外付帯か	
132SK	A1	AI-36	楕円形	I字形	1.01	0.81	0.31	加賀利正Ⅱ~Ⅲ	縄文中期	屋外付帯か	
133SK	A1	AI-36	楕円形	I字形	0.95	0.62	0.47	加賀利正Ⅲ	縄文時代		
134SK	A1	AI-36	楕円形	楕状	0.89	0.75	0.84	加賀利正Ⅲ	縄文中期	0095Aの付帯施設	
135P	A1	AI-37	円形	I字形	0.45	0.34	0.14	加賀利正Ⅰ	縄文中期	新:0195I	
136SK	A1	AI-38	円形	I字形	0.66	0.58	0.62	加賀利正Ⅱ	縄文中期	新:2015SK	
137SK	A1	AI-37	楕円形	円形	1.68	0.43	0.56	加賀利正Ⅱ~中鉄	縄文中期	新:2015SK	
138SK	A1	AI-39	円形	フラスコ	2.74	2.50	1.10	同上付帯Ⅱ	縄文中期	新:1615P	
139P	A1	AI-39	楕丸形	I字形	1.24	1.11	0.31	加賀利正Ⅱ~中鉄	縄文中期	旧:3095E	
140											
141SK	A1	AI-37	円形	II字形	0.72	0.59	0.21		縄文時代	屋外付帯か	
142SK	A1	AI-38	円形	II字形	2.32	(1.12)	0.46	加賀利正Ⅱ~中鉄	縄文中期	旧:2015SK・017SK	
143SK	A1	AI-37	不定形	不定形	0.63	0.14	0.39		縄文時代	新:144P	
144P	A1	AI-37	円形	II字形	0.28	0.62	0.33	加賀利正Ⅰ	縄文時代	旧:143SK	
145P	A1	AI-36	楕円形	I字形	0.62	0.37	0.95	加賀利正Ⅰ	縄文時代	新:0205SK	
146											
147SK	A2	AG-33	楕円形	楕形	2.31	2.03	0.86	加賀利正Ⅱ~中鉄	縄文中期	旧:1495I・1505K	178~179号を割り切る
148P	A1	AI-36	円形	II字形	0.24	0.21	0.10		縄文時代		
149SI	A2	AG-33	楕丸形	楕形	5.37	5.06	0.28	加賀利正Ⅱ~中鉄	縄文中期	山169底 周1150-1168-1174-1175-120P	
150SK	A2	AG-33	楕円形	逆V形	1.62	1.49	0.74	加賀利正Ⅰ	縄文中期	旧:1495I 新:1475K	
151SK	A2	AG-32	円形	楕形	1.60	1.16	0.85	加賀利正Ⅱ~中鉄	縄文中期	旧:1495I・1505K・160P・180SK	154Pを付帯する
152SK	A2	AG-33	不定形	II字形	2.46	0.89	0.60		縄文時代		
153SK	A2	AG-33	不明	楕形	2.46	0.88	0.45	加賀利正Ⅰ	縄文時代	旧:1495I 新:1515K	
154P	A2	AG-33	楕円形	II字形	0.52	0.49	0.27		縄文時代	新:2051SK	
155P	A2	AG-33	円形	II字形	0.15	0.49	0.98	加賀利正Ⅰ	縄文時代	新:1495I	
156SK	A2	AG-33	円形	フラスコ	3.20	3.04	0.84	阿王右衛門・中鉄	縄文中期		
157											
158											054SKと同一遺構

表 89 検出構造一覧表 3

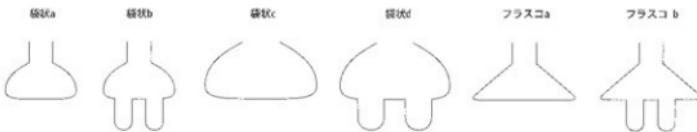
遺構番号	調査区	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	時期	切り合い	備考
1595K	A2	AG-32	円形	フラスコ	3.30	3.18	1.25	阿玉台型・ 加曾利型	縄文中期	新:054SK	
160P	A2	AH-32	円形	丁字形	0.36	0.23	1.02	阿玉台型			欠番
161P											
162P	A2	AH-32	円形	丁字形	0.40	0.37	0.50	加曾利型		新:052SK	
163P	A2	AH-32	円形	丁字形	0.25	0.23	0.24		縄文時代	新:053SK	
164P	A2	AH-33	円形	丁字形	0.45	0.44	0.80	加曾利Ⅱ・Ⅲ	成文V・Ⅳ期		
165P	A2	AI-36	円形	丁字形	0.41	0.30	0.92		縄文時代	旧:138SK	
166P											欠番
167P	A2	AH-34	円形	丁字形	0.32	0.21	0.32		縄文時代		
168SK	A2	AI-32	楕円形	丁字形	1.60	1.28	0.34	加曾利型		旧:124SK・182SK	
169P	A2	AI-33	円形	丁字形	0.52	0.52	0.52		縄文時代	新:051SK	
170P	A2	AI-33	円形	丁字形	0.27	0.25	0.72		縄文時代	旧:051SK	
171SK	A2	AI-32	楕円形	丁字形	0.85	0.62	0.32		縄文時代		
172SK	A2	AI-32	楕円形	丁字形	1.36	1.32	0.38		縄文時代		
173SK	A2	AI-30	楕円形	丁字形	2.22	1.63	0.60	加曾利Ⅱ	縄文中期	新:056SK	
174SK	A2	AH-32	楕円形	逆丁形	(2.82)	(2.00)	0.60	加曾利Ⅱ・Ⅲ	縄文Ⅱ期	新:168SK・旧:180SK	北山の山古墳群
175P	A2	AG-33	円形	丁字形	0.34	0.32	0.20		縄文時代	新:052SK	1475Pの付番
176SK	A2	AG-33	円形	丁字形	0.69	0.48	0.00		縄文時代		ノ
177P	A2	AG-33	円形	丁字形	0.40	0.30	0.24		縄文時代		ノ
178P	A2	AG-33	円形	丁字形	0.32	0.24	0.51		縄文時代		ノ
179P	A2	AG-33	円形	楕状	0.69	0.45	0.24		縄文時代		ノ
180SK	A2	AI-32	楕円形	逆丁形	3.61	2.55	0.80	加曾利Ⅱ・Ⅲ	縄文Ⅱ期	新:174SK	195Pを付番する
181SK	A2	AH-33	楕円形	逆丁形	1.15	0.87	0.76		縄文時代		
182SK	A2	AH-32	楕円形	袋足	1.80	1.56	1.09	加曾利Ⅱ	縄文Ⅱ期	新:031SK・168SK	
183SK	A2	AK-33	不規形	丁字形	0.66	0.63	0.45		縄文Ⅱ期		
184P	A2	AI-31	円形	丁字形	0.54	0.53	1.02	加曾利Ⅱ・Ⅲ	縄文Ⅱ期	新:068SK	付番する
185SK	A2	AH-31	楕円形	袋足	2.76	0.81	0.46	加曾利Ⅱ・Ⅲ	縄文Ⅱ期	旧:068SK・新:056SK	
186P	A2	AG-33	円形	丁字形	0.54	0.48	1.13		縄文時代	新:151SK	
187SK	A2	AH-32	楕円形	袋足	1.87	1.45	0.44		縄文Ⅱ期		
188SK	A2	AG-32	椭円形	袋足	1.11	0.98	0.92		縄文時代	新:151SK・200P	
189P	A2	AG-32	円形	丁字形	0.48	0.47	1.18		縄文時代		
190SK	A2	AG-31	円形	フランコ	3.96	3.45	0.90	阿玉台型・ 加曾利Ⅱ	縄文中期	新:032SK	
191P	A2	AH-32	円形	丁字形	0.92	0.90	0.75		縄文時代		
192P	A2	AH-32	椭円形	丁字形	0.63	0.57	1.52		縄文時代	053SKとの切り分けは不明	
193SK	A2	AI-32	円形	袋足	0.80	0.74	0.22	加曾利Ⅱ			
194P											欠番
195P	A2	AI-33	円形	丁字形	0.68	0.62	0.32		縄文時代		180SKの付番削除
196P	A2	AG-32	円形	丁字形	0.46	0.41	0.66		縄文時代		
197P	A2	AH-31	円形	丁字形	0.25	0.21	0.42		縄文時代		056SKに付番する
198P	A2	AI-30	楕円形	丁字形	4.72	4.09	0.72	古代Ⅰ期	日:246P・247P・302SK・303SK		
199P	A2	AG-34	円形	丁字形	0.30	0.15	0.30		縄文時代	日:188SK	
200P	A2	AG-32	丁字形	円形	0.65	0.58	0.60		縄文時代	日:188SK	
201SK	A2	AG-31	円形	袋足	(2.44)	(1.84)	0.28	加曾利Ⅱ	新:104SK 新:200P・209P・0115I		
202P	A2	AG-31	円形	袋足	0.59	0.32	0.69		縄文時代	新:033SK 旧:205SK・206SK	
203SK	A2	AG-32	楕円形	フランコ	2.20	2.05	0.76	阿玉台型・ 加曾利Ⅱ	縄文中期	新:207P・031SK	
204SK	A2	AG-31	円形	袋足	2.19	2.19	0.36	加曾利Ⅱ・Ⅲ	縄文Ⅱ期	新:203SK	210Pを付番する
205SK	A2	AG-32	円形	袋足	1.21	1.06	0.40		縄文Ⅱ期	新:203SK	
206P	A2	AG-30	不規形	丁字形	0.78	0.21	0.30		縄文時代		
207SK	A2	AI-31	円形	フランコ	3.31	(2.14)	1.65		縄文Ⅱ期	日:208SK 新:136SK	
208SK	A2	AE-31	不明	小明	(0.54)	(0.46)	0.80		縄文Ⅱ期	新:025SK・207SK・214SK	
209SK	A2	AG-30	椭円形	フランコ	2.29	1.49	0.62		縄文Ⅱ期	新:114SK・0005SK 旧:315SK	204SKの付番削除
210P	A2	AI-31	円形	丁字形	0.40	0.37	0.09		縄文時代		
211P	A2	AE-32	円形	丁字形	0.28	0.25	0.51		縄文時代		
212P	A2	AG-32	円形	丁字形	0.42	0.36	0.42		縄文時代		
213P	A2	AE-31	円形	丁字形	0.29	0.26	0.52		縄文時代		
214SK	A2	AI-31	円形	丁字形	1.85	(1.31)	0.71	加曾利Ⅱ・Ⅲ	縄文Ⅱ期	日:062SK・208SK	
215SK	A2	AE-31	円形	袋足	1.24	0.96	1.23	加曾利Ⅱ・Ⅲ	縄文Ⅱ期	新:029SK	052SKの付番削除
216SK	A2	AG-32	椭円形	袋足	1.06	(0.92)	0.36		縄文時代		
217P	A2	AG-32	円形	丁字形	0.42	0.38	0.71		縄文時代		
218SK	A2	AG-32	椭円形	袋足	1.49	1.36	0.45		縄文時代		
219P	A2	AG-30	円形	丁字形	0.40	0.32	1.22		縄文時代		
220P	A2	AG-30	円形	袋足	0.35	0.33	1.62	阿玉台型	縄文Ⅱ期		
221SK	A2	AG-32	不規形	袋足	(1.32)	(0.51)			縄文時代		
222SK	A2	AG-31	椭円形	袋足	2.00	1.60	0.68	加曾利Ⅱ・Ⅲ	縄文Ⅱ期	新:257SK・261SK 004SK・005SK 04-474	
223SK	A2	AG-31	不明	丁字形	(1.34)	(0.91)	0.29		縄文時代	新:069SK	
224SK	A2	AI-31	円形	袋足	(2.68)	(2.26)	0.40	加曾利Ⅱ	縄文Ⅱ期	日:126SK	
225P	A2	AG-34	円形	丁字形	0.26	0.17	0.71		縄文時代	日:229SK	
226SK	A2	AG-31	円形	袋足	3.17	2.71	0.7	阿玉台型	縄文Ⅱ期	新:060SK 新:224SK・225SK・227P	
227P	A2	AI-31	円形	丁字形	0.60	0.55	0.47		縄文時代	日:126SK	
228P	A2	AG-32	円形	丁字形	0.38	0.37	0.42		縄文時代	日:149SK	
229P	A2	AG-32	円形	丁字形	0.54	0.49	0.85		縄文時代		
230SK	A2	AG-30	円形	フランコ	3.00	2.75	1.36	阿玉台型	縄文Ⅱ期	日:231SK	
231SK	A2	AG-30	不規形	丁字形	2.09	1.12	1.36	加曾利Ⅱ・Ⅲ	縄文Ⅱ期	新:030SK	
232											欠番
233P	A2	AF-29	円形	丁字形	0.49	0.41	0.48		縄文時代		054SKと同一遺構
234P	A2	AG-31	円形	丁字形	0.54	0.41	1.34		縄文時代		

表 90 案出遺構一覧表 4

遺構番号	調査区	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	時期	切り合い	備考
Z355K	A2	AA-23	円形	袋状	1.72	1.17	0.67	加賀利Ⅰ	縄文V期		
Z365I	B	F-6	圓丸方形	箱形	4.96	4.36	0.28	-	土台	弥生時代終末期	268P付帯する
Z37P	A2	AG-32	楕円形	円筒形	1.02	0.15	0.17	-	土台	弥生時代	旧:240P
Z38SK	A2	AF-32	不定形	不定形	1.23	0.75	0.68	-	土台	縄文時代	
Z39SK											矢薙655Kと同一
Z40SK	A2	AG-32	円形	箱形	0.61	0.38	0.24	-	-	縄文時代	新:287P 旧:342P
241											矢薙
242P	A2	AG-32	円形	L字形	0.78	0.15	0.22	-	-	縄文時代	新:240SK
243											矢薙
244											矢薙
245P	A2	AB-31	円形	丁字形	0.44	0.39	0.59	-	-	縄文時代	
246P	A2	AF-30	円形	丁字形	0.49	0.38	0.62	-	-	縄文時代	新:198S
247P	A2	AF-30	円形	丁字形	0.55	0.48	0.58	-	-	縄文中期	新:198S
248SK	A2	AF-32	圓丸方形	箱形	1.58	0.94	1.12	-	-	縄文時代	新:0545A
249SK	A2	AF-31	円形	ラスコ ₂	2.63	2.50	1.32	加賀利Ⅰ・中Ⅲ	縄文IV期	新:256SK・261SK・269P	
250											矢薙
251SK	A2	AF-31	円形	L字形	0.63	0.56	0.26	-	-	縄文中期	
252SK	A2	AF-29	円形	L字形	0.53	0.46	0.67	加賀利Ⅱ・中Ⅲ	縄文V期		
253P	A2	AD-29	円形	L字形	0.54	0.50	1.44	加賀利Ⅱ	縄文時代		
254P	A2	AD-29	円形	丁字形	0.33	0.30	0.30	-	-	縄文時代	
255SK	A2	AD-29	円形	丁字形	0.89	0.75	0.83	-	-	縄文時代	
256SK	A2	AF-31	円形	ラスコ ₂	1.75	1.70	0.84	加賀利Ⅰ	縄文五期	旧:249SK 新:269P	
257SK	A2	AF-30	円形	丁字形	1.82	1.74	0.59	加賀利Ⅰ・中Ⅲ	縄文中期	新:1145I 旧:1222SK・261SK	
258	A2	AF-28	円形	L字形	0.52	0.47	0.14	加賀利Ⅱ・中Ⅲ	縄文V期		
259											矢薙
260P	A2	AF-29	円形	丁字形	0.65	0.47	0.82	-	-	縄文時代	旧:265SK
261SK	A2	AF-30	円形	ラスコ ₂	2.58	2.34	0.71	加賀利Ⅱ・中Ⅲ	縄文V期	旧:222SK・280SK 新:257SK	
262P	A2	AF-28	円形	丁字形	0.45	0.32	0.68	-	-	縄文V期	
263P	A2	AF-29	円形	丁字形	0.38	0.37	0.63	加賀利Ⅱ・中Ⅲ	縄文V期		
264P	A2	AF-28	円形	丁字形	0.47	0.42	0.68	-	-	縄文時代	
265SK	A2	AF-29	円形	袋状	2.58	(1.77)	0.90	-	-	縄文中期	新:260P
266P	A2	AF-28	円形	L字形	0.42	0.31	0.53	-	-	縄文時代	
267SK	A2	AF-31	円形	袋状	2.00	1.90	0.88	加賀利Ⅱ・中Ⅲ	縄文V期	旧:249SK・280SK・301SK	
268											303SK・304SKとし たため 矢薙
269P	A2	AF-31	円形	丁字形	1.12	0.51	0.92	-	-	縄文時代	旧:249SK・256SK
270SK	A2	AC-28	円形	ラスコ ₂	1.75	(1.25)	0.67	-	-	縄文中期	新:271SK
271											矢薙
272P	A2	AF-27	円形	L字形	0.97	0.75	0.92	加賀利Ⅱ・中Ⅲ	縄文V期		
273SK	A2	AF-27	円形	L字形	0.59	0.40	1.41	-	-	縄文時代	
274SK	A2	AF-28	円形	ラスコ ₂	2.71	2.74	0.91	阿五台Ⅳ・中Ⅲ	縄文Ⅲ・Ⅳ期	新:287P 旧:1270SK	
275SK	A2	AF-28	楕円形	箱形	5.40	3.51	0.24	阿五台Ⅳ・中Ⅲ	縄文Ⅲ・Ⅳ期	新:281SK	
276											矢薙
277P	A2	AF-27	円形	L字形	6.45	4.37	1.32	-	-	縄文時代	076SK付帯後段
278P	A2	AF-29	円形	L字形	0.22	0.17	0.38	-	-	縄文時代	
279P	A2	AF-30	円形	L字形	0.72	0.49	1.04	-	-	縄文時代	
280SK	A2	AF-30	円形	ラスコ ₂	1.95	(1.42)	1.14	阿玉有Ⅳ・ 加賀利Ⅱ	縄文Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期	新:261SK・267SK	
281SK	A2	AF-27	円形	袋状	2.16	1.78	0.74	加賀利Ⅱ・中Ⅲ	縄文Ⅲ・Ⅳ期	旧:275SK 新:303SK	
282											矢薙 260Pと同一
283P	A2	AF-29	円形	丁字形	0.35	(0.20)	0.80	-	-	縄文時代	
284SK	A2	AC-27	圓丸方形	箱形	3.68	3.59	0.30	-	-	古代Ⅱ期	旧:290SK・305SK
285SK	A2	AF-26	円形	丁字形	1.32	1.31	0.51	-	-	縄文時代	旧:305SK
286P	A2	AF-31	円形	丁字形	0.447	0.37	0.41	-	-	縄文時代	
287T	A2	AF-28	円形	丁字形	0.49	0.30	0.07	-	-	縄文時代	旧:274SK
288P	A2	AF-29	円形	丁字形	0.65	0.47	1.57	-	-	縄文時代	
289P	B	E-7	不定形	丁字形	0.38	0.27	0.58	-	-	秀吉井川河床末期	2365I付帯後段
290SK	A2	AF-27	楕円形	丁字形	1.81	1.46	0.13	加賀利Ⅱ・中Ⅲ	縄文V期	新:284SK	
291SK	A2	AF-26	円形	袋状	2.52	2.27	0.42	阿玉有Ⅳ	縄文中期	新:325SK 日:1025K	
292SK	B	E-5	円形	丁字形	1.42	(0.84)	0.76	-	-	縄文時代	新:0466S
293SK	A2	AF-29	楕円形	ラスコ ₂	2.05	(0.71)	0.90	加賀利Ⅱ	縄文中期	新:297I	
294SK	B	E-8	楕円形	丁字形	0.43	0.29	0.35	-	-	縄文時代	
295P	B	E-7	円形	丁字形	0.43	0.29	0.35	-	-	時期不明	
296											矢薙
297SK	A2	AF-30	円形	丁字形	1.24	(0.58)	0.71	-	-	縄文時代	旧:293SK
298SK	A2	AF-30	円形	丁字形	0.77	0.51	1.15	-	-	縄文時代	
299P	A2	AF-26	円形	袋状	0.42	0.37	0.24	-	-	縄文時代	
300P	B	E-6	円形	丁字形	0.29	0.22	0.38	-	-	時期不明	
301P	B	E-6	円形	丁字形	0.48	0.35	0.12	-	-	時期不明	
302SK	A2	AF-29	楕円形	袋状	2.70	2.50	1.12	調査前Ⅱ・中Ⅲ 二重井	縄文Ⅲ期	新:1985I・332SK	
303SK	A2	AF-30	円形	丁字形	1.52	1.21	0.36	加賀利Ⅱ	縄文Ⅳ期	旧:304SK・新:1985I	
304SK	A2	AF-30	円形	ラスコ ₂	2.14	1.92	0.32	阿玉有Ⅳ	縄文Ⅲ期	新:267SK・303SK	
305SK	A2	Z-25	円形	箱形	1.17	0.81	0.23	加賀利Ⅱ・下Ⅲ	縄文V期	旧:1015K	
306SK	A2	M-25	円形	袋状	2.61	2.39	0.69	阿玉有Ⅳ・中Ⅲ	縄文中期	旧:2095SK	
307SK	B	I-4	楕円形	丁字形	1.80	0.12	0.46	-	-	時期不明	旧:306SK
308P	B	I-5	円形	丁字形	0.40	0.30	0.30	-	-	時期不明	
309P	B	I-4	円形	丁字形	0.48	0.47	0.16	-	-	時期不明	新:307SK
310P	A2	AF-30	円形	丁字形	0.54	0.36	0.51	-	-	縄文時代	
311P	A2	AF-30	不定形	丁字形	0.48	0.41	0.41	-	-	縄文時代	

表 91 検出造構一覧表 5

造構番号	測定区	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	時期	切り合い	備考
312P	A2	AG-30	円形	U字形	0.62	0.51	0.45		縄文中期		
313P	A2	AG-30	円形	U字形	0.62	0.51	1.55	加賀利Ⅱ	縄文時代		
314P	A2	AH-30	円形	U字形	0.56	0.39	1.53		縄文時代		
315SK	A2	AG-30	円形	袋状a	1.32	(1.19)	0.57	加賀利Ⅱ・Ⅲ	縄文V期	新:11451・2095K・3205K	矢器
316											
317SK	B	H-6	橢円形	U字形	2.80	1.21	1.10		縄文時代		
318P	D	1-4	橢円形	U字形	0.70	0.62	0.27		縄文中期		
319SK	D	H-4	橢円形	U字形	1.22	0.86	0.28		縄文中期	旧:10475I	
320SK	A2	AG-30	不明	楕形	1.82	(0.42)	0.25	加賀利Ⅱ・Ⅲ	縄文V期	新:11451・旧:315SK	
321P	A2	AC-27	円形	U字形	0.45	0.44	0.71		縄文時代		
322P	A2	AC-27	円形	U字形	0.38	0.37	0.42		縄文時代		
323SK	A2	AH-30	円形	フラスコb	2.95	2.34	0.37	阿玉台IV	縄文中期	新:9645K	
324SK	A2	AB-27	円形	袋状a	1.94	(0.57)	0.88	加賀利Ⅰ	縄文V期		
325SK	A2	AB-26	橢円形	U字形	1.71	1.39	0.45	加賀利IV	縄文V期	旧:291SK, 新:2845I	
326SK	A2	AB-27	円形	フラスコa	1.94	(1.11)	0.19	阿玉台IV	縄文中期	新:10265I・3275K	
327SK	A2	AB-27	円形	フラスコa	1.58	1.42	0.56	加賀利Ⅰ	縄文V期	旧:326SK, 新:0365I	
328SK	A2	AH-29	橢円形	U字形	1.22	(0.76)	0.31	阿玉台Ⅲ	縄文中期	新:1065SK	屋外立か
329SK	A2	AH-29	円形	U字形	1.08	(0.74)	0.32		縄文時代	新:0335K	屋外立か
330P	A2				0.37	0.33	0.31				
331SK	A2	AG-29	不定形	U字形	1.67	(1.37)	0.35	阿玉台Ⅳ	縄文中期	新:0355K・0655J	屋外伊カ
332SK	A2	AF-29	橢円形	不定形	0.31	0.19	1.60		縄文中期	旧:1025K	
333SK	A2	AD-26	円形	袋状a	2.27	2.15	0.85	加賀利Ⅱ	縄文V期	新:0385I	
334											
335P	A2	AA-23	円形	U字形	0.25	0.23	0.45		縄文V期		
336SK	A2	AA-22	不明	フラスコa	1.89	(0.73)	1.11	阿玉台IV	縄文中期	旧:1025I	
337SK	A2	Ab-26	椭方形	椭形	(1.16)	0.47	0.32		縄文V期	新:1035I	
338SK	A2	7-23	円形	椭形	1.55	1.45	0.35	加賀利Ⅰ	縄文V期		
339P	A2	M-26	円形	U字形	0.37	(0.37)	0.51	加賀利Ⅱ	縄文V期	旧:0785K	



造構凡例図

報告書抄録

ふりがな	はしづめいせき						
書名	橋爪遺跡						
調査名	道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	石井たま子 清水真澄 望月大輔 加藤 忠 伊藤千洋 森本 崇 岡安光彦						
編集機関	テイケイトレード株式会社						
住所地	〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町1-1-16 テイケイトレード新宿ビル8F TEL 03-5155-0391						
発行年月日	2010年9月30日						
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
はしづめいせき 橋爪遺跡	いばらきけんかさまし 茨城県笠間市 はしづめ 795番 2 ほか 橋爪 795番 2 ほか	08321	046	36°20'11" 140°17'41"	2009.11.16 2010.02.27	2,454m ²	道路改良工事 に伴う遺跡の 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺物	主な遺物	特記事項		
橋爪遺跡	散布地 (包蔵地)	縄文時代	住居 土坑 ピット	3軒 153基 79基	縄文土器・石器	縄文中期の袋状土坑を多数 検出し、とくに065SKからは、 加曾利I式土器が大量に出土した。	
		弥生時代 古墳時代	住居	2軒	弥生土器		
	奈良・平安時代	住居	1軒	土師器			
		住居	24軒	土師器・須恵器・石製品ほか			
要約	縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代の住居跡・土坑等を検出した。縄文時代は阿玉台式土器・加曾利I式土器など中期の遺物が主に出土し、特に阿玉台IV式土器・加曾利I式土器を伴う袋状土坑が多く出土した。袋状土坑065SKからは硬化面を2枚検出し、上部の硬化面直上よりほぼ完形の土器が17個体出土した。弥生時代では後期後半に位置づけられる十王台式土器を伴う住居2軒を検出した。古墳時代では、古墳時代前期中葉に位置づけられる住居跡を1軒検出した。器台、壺、甕などが床面より出土した。奈良・平安時代では、主に8世紀前葉から10世紀前葉にかけての住居跡を12軒検出した。住居跡からは、土師器環・須恵器環・常陸形壺などが出土している。						



現場調査チーム



遺跡体験教室
佐城小学校六年生



フラスコ状土坑の調査
(065SK)

写真図版2



A1区調査区全景（東から）



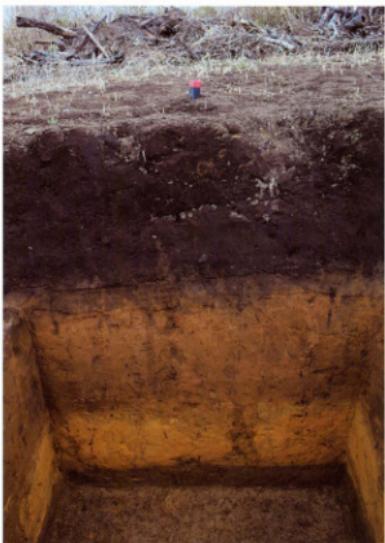
A2区基本層序（南から）



A2区調査区全景（東から）



D区 049SI・236SI（西から）



D区基本層序（南から）



D区調査区全景（西から）

写真図版4



006SI 遺物 No. 001 出土状況（東から）



006SI 床面検出（南から）



010SK 床面検出（北から）



054SK 遺物出土状況（北東から）



012SK 遺物出土状況（南から）



056SK 断面（東から）



058SK 焼土層上部遺物出土状況（南から）



060SK 遺物 No.040 出土状況（北から）

写真図版6



064SK 遺物出土状況（南東から）



065SK 上部硬化面検出状況（北東から）



065SK 断面（南から）



065SK 遺物 No.133 出土状況（南から）



065SK 硬化面遺物出土状況1（南西から）



065SK 出土遺物（出土位置復元）

写真図版8



065SK 硬化面遺物出土状況 2 (東から)



078SK 完掘 (南東から)



095SK 遺物出土状況 (東から)



102SK 遺物出土状況 (北西から)



105SK 完掘 (南から)



134SK 遺物 No.019 出土状況（東から）



138SK 断面（南西から）



138SK 遺物 No.018 出土状況（西から）



138SK 遺物 No.022 出土状況（西から）



138SK 石棒出土状況（南から）



149SI 床面検出（南東から）

写真図版 10



151SK 完掘（北西から）



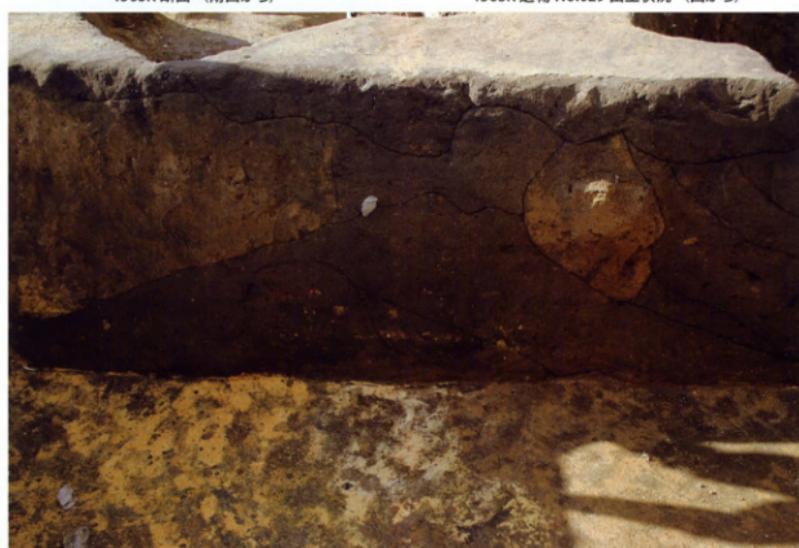
156SK 完掘（南西から）



156SK 断面（南西から）



156SK 遺物 No.029 出土状況（西から）



159SK 断面（南東から）



190SK 断面 (北から)



190SK 遺物 No.041 出土状況 (北から)



190SK 遺物 No.039 出土状況 (北西から)

写真図版 12





230SK 焼土・礫集中部検出状況（南から）



230SK 遺構底面礫出土状況（南から）

写真図版 14



230SK 焼土・礫集中部 磚



230SK 焼土・礫集中部 焼土



249SK 断面（南西から）



256SK 遺物 No.068 出土状況（南東から）



275SI 遺物床面（北東から）



275SI 遺物 No.074 出土状況（西から）



275SI 炉棊出状況（北から）



291SK 遺物 1BL 出土状況（南西から）



302SK 断面（北東から）



302SK 遺物 No.101 出土状況（東から）



302SK 遺物 No.102 出土状況（東から）



302SK 2・3層下部遺物出土状況（北東から）



304SK 白色粘土出土状況（南から）



304SK 遺物 No.084 出土状況（南から）



306SK 遺物 No.097(左)・No.099(右) 出土状況（北から）



323SK 遺物 No.091 出土状況（東から）



064SK・323SK 遺物出土状況（南東から）



049SI 完掘 (北から)



236SI 完掘 (北から)



015SI 遺物出土状況（南から）



015SI 遺物 No.002 出土状況（南から）



015SI 遺物 No.003 出土状況（南から）



015SI 遺物 No.009 出土状況（北から）

写真図版 20



003SI 床面検出 (北東から)



031SI 床面検出 (南西から)



032SI 床面検出 (南西から)



033SI 上部硬化面検出状況 (南東から)



033SI 下部硬化面検出状況 (南から)



033SI 支脚出土状況 (東から)



034SI 床面検出 (南から)



035SI 床面検出 (南東から)



036SI 床面検出（南西から）



037SI 床面検出（東から）



038SI 床面検出（南から）



039SI 床面検出（南西から）



042SI 床面検出（東から）

写真図版 22



042SI カマド遺物出土状況 2 (南西から)



042SI カマド遺物出土状況 1 (南西から)



043SI 床面検出 (南西から)



043SI 遺物 No.073 出土状況 (東から)



043SI カマド完掘 (南から)



045SI 床面検出（南西から）



045SI カマド周囲出土状況（南西から）



048SI 床面検出（西から）



048SI カマド完掘（南西から）



114SI 床面検出（南から）

写真図版 24



1985I 床面検出（南から）



1985I 遺物出土状況（南から）

1985I カマド周囲遺物出土状況（南から）



2845I 遺物出土状況（南から）



写真図版 26



064SK-2



064SK-3



064SK-5



065SK-1



065SK-2



065SK-4



065SK 集合写真



065SK-5



065SK-6



0655K-7



0655K-8



0655K-9



0655K-10



065SK-11



065SK-12



065SK-13



065SK-14



065SK-15



065SK-16



065SK-18



065SK-17



078SK-4



102SK-2



134SK-1



138SK-1



156SK-1



190SK-1



190SK-4



190SK-6



190SK 集合写真



203SK - 1



203SK - 2





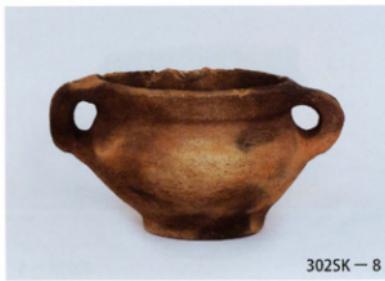
302SK 集合写真



302SK-6



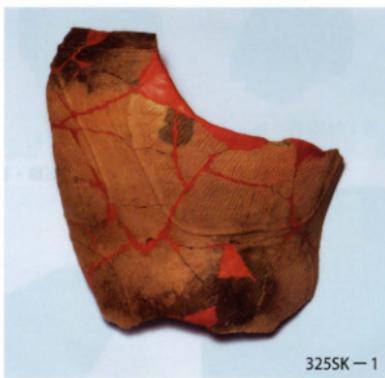
302SK-7



302SK-8



304SK-1



写真図版 36



石鏃・石鎚未成品

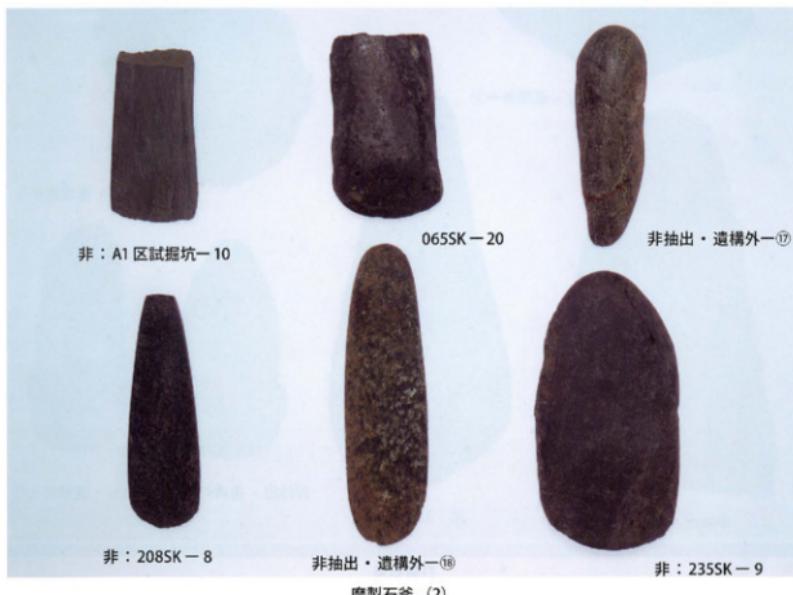


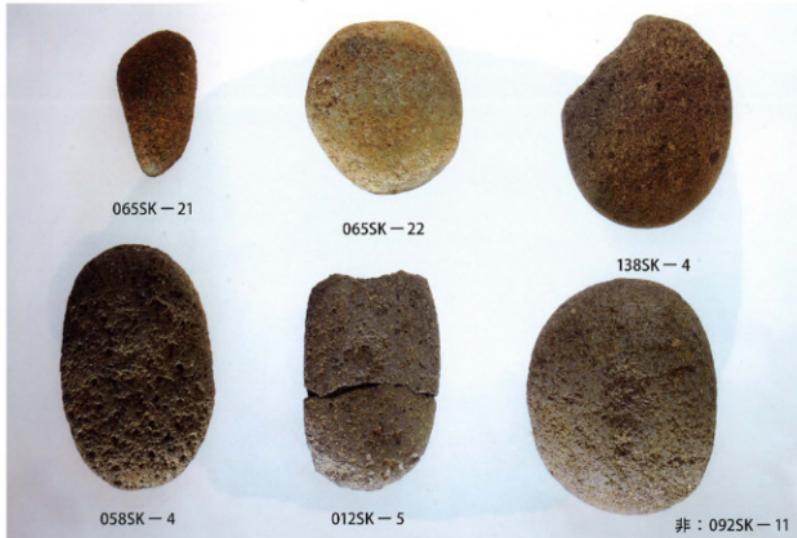
搔器・削器



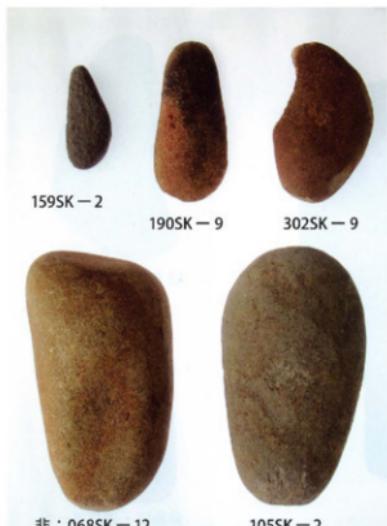
2次加工を有する剥片







磨石・敲石類 (1)



磨石・敲石類 (2)



石皿



138SK-6

蜂の巣石



138SK-7

石棒



A2区調査区一括-13

非抽出・遺構外-¹⁹

不明



049SI-1



236SI-1



236SI-2



015SI-1



015SI-2



015SI-4



015SI-3

写真図版 42



015SI-5



015SI-6



015SI-7



003SI-1



003SI-2



031SI-1



032SI-1



032SI-2



033SI-1



033SI-2



033SI-3



033SI-5



034SI-1



035SI-1



035SI-2



035SI-3



035SI-4



036SI-1





039SI-1



042SI-1



042SI-2



042SI-3



043SI-5



043SI-3



043SI-1



045SI-1



045SI-2



045SI-3

写真图版 46



045SI-4



045SI-5



045SI-6



045SI-8



045SI-8
侧面



047SI-1



114SI-1



114SI-2



198SI-1



198SI-2



198SI-6



198SI-7



198SI-4



284SI-1

茨城県笠間市

橋爪遺跡

道路改良工事に伴う発掘の実績調査報告書一

2010年9月30日

編集 テイケイトレード株式会社
東京都新宿区歌舞伎町 1-1-16
テイケイトレード新宿ビル 8F
TEL 03-5155-0391

発行 等間市教育委員会
茨城県笠間市石井717番地
TEL 0296-77-1101

印刷 能登印刷株式会社
石川県金沢市武藏町 7-10
TEL 076-233-2550

Hashizume site

- Excavation Report -



2010

Board of Education, Kasama City

Teikeitrade Co., Ltd.